果樹園 一五五号 昭和四十四年一月一日発行 （毎月一回一日発行） 池田市石橋三丁目六ノ五 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価四十円 送料二十円

果樹園

第155号

伊東静雄研究 小高根二郎
歌訪時代の蓮田先生 今井信雄
様式について 浅野晃
秋 福地邦樹
風 欽美堂正義
スマトラ記 田中克己
秋 荻本家義
ゆめみごこちの群像(二) 山田俊幸
夏の終り 伊東静雄
ランダイ(四) 森宮城賢亮
山荘詩評 吉本青司

伊東静雄研究

小高根二郎

一、負いめある生い立ち

1

東は有明海、西に大村湾、南には千々石湾を控え、ちょうど長崎の喉元を扼した地点である諫早に、詩人・伊東静雄が生れたのは明治三十九年（一九〇六）も押し詰った十二月十日であった。

冬とはいえ南国のことであるから、干拓で遙か向うに追いやられた有明海は、瑠璃の帯となって輝やきながら、右手に蜿蜒な雲仙を浮かべていたであろう。その陶酔をはばむかのように、なだらかではあるが峻々とした多良岳の稜線は、なにか負いめを迫る……といったあんばいに、こっそり背後に佇んでいたに相違ない。まこと、伊東が諫早に生を享けたということは、この地が生んだ二番目の詩人としての負いめを運命付けられたことになる。

一番目の詩人は三十八才の若さで昨三十八年五月に死んだばかりの野口寒燿である。彼は儒者であった父松陽につかれられて上京し、若くして漢詩人としての令名を高めたばかりでなく、漢詩でもってする創作月評でその奇才を謳われた。鴎外の「舞姫」評や子規との論戦はあまりに有名である。ところが不幸にもハンセン氏病のおかすところとなり、晩年には「百花瘤」を編集していたが、五月十一日の早暁に急死したのである。しかもその死因に嫌疑がかかり、埋葬数ヶ月を出ずして、墓があばかれて検屍の悲運に遭遇したのであった。（昭和四十年「文学」十月号、中村忠行「正岡子規と野口寒燿」）

この先達の悲運の負い目を継いで静雄は生れたわけである。惣吉・ハツの四男、父三十九才、母三十一才の時の子である。ところで惣吉は榎並乙吉の長男でありながら伊東家の養子に入った人である。ハツはまた内田笙吉の長女であって伊東家に嫁いできた人である。したがって静雄に流れているのは、榎並・内田両家の血であって、伊東家のそれではない。

もともと伊東家はなにを本業としていたか、又どんな血筋の家柄であったかはつまびらかではない。「九州の侠客めいた仕事をしていた」（『蒙古襲来』『静雄詩集』解説）とだけ静雄は桑原武夫や、その他二三の者に語っているだけである。試みに戸籍抄本によって伊東家の系譜をしらべてみると、次のようになる。

静雄の曽祖父に当る伊東市太夫は、太夫という名前からしていわくありげである。大宮海によれば、太夫とは五位の唐名、あるいは神官の下僚、又は楽楽・歌舞伎役者・浄瑠璃語り等の長、最高位の遊女、宇治山田の旅館……とある。平民であるから五位ではない。市の太夫であるから神官でもあるまい。芸能

伊東市太夫―千代吉（養子（伊東八助四男）　文政5・8・15　明治27・8・14）
　―惣吉（養子（榎並乙吉長男）　明治1・5・25　昭和7・2・12）
　―ハツ（内田筆助長女）　明治9・7・15　昭和11・2・25）
　　―英一　明治27・7・14　昭和3・9・27
　　―ミキ　明治30・9・26
　　―潤三　明治35・4・8　大正6・8・15
　　―岩蔵　明治38・2・14　明治39・1・30
　　―静雄　明治39・12・10　昭和28・3・12
　　―リツ　明治42・10・3
　　―寿恵男　明治45・4・9

界の長であったかとも想像されるが、市太夫という語感から、静雄がいう「侠客めいた」人柄が一番ぴたりとくる。ただし空想をいでない。

市太夫の後を襲った祖父千代吉は、伊東八助の四男であるから、養子とはいえ同族の血を継いだことになる。

この千代吉の後を父惣吉は榎並家から養子に入って継いだのである。実家の家業は畜産業である。惣吉は若い頃は花柳界の近くの魚ん棚（たな）（魚市場）の魚屋の店員を勤めた。後に実家の家業につながる豚の仲買業をして資産をつくった。その後綿糸の小売商へ転業をした。伝えられる人柄は、酒はあるていどたしなんだが、穏和で実直な好人物であったという。静雄の詩「病院患者の歌」に、

友人といふものは　あれは　私の生きてゐる亡父だ
あそこには計画だけがあって
訓練が缺けてゐた

という比喩があるが、それは計画はあったが訓練を缺いていた惣吉の二度の転職の事情を物語るものであるかもしれない。又、詩「私は強ひられる――」には

そして死んだ父よ　空中の何処で
噴き上げられる泉の水は
区別された一滴になるのか
私と一緒に眺めよ
孤高な思索を私に伝へた人！

という表現がある。静雄は自分の孤高な思索を父譲りであると表明している。前述した、計画だけあって訓練を缺いているという惣吉の短所は、これを裏返せば、当初のおもわくを意固地にひとり守りぬく、いわゆる孤高という長所であったかもしれぬ。

母ハツは駄菓子商・内田筆助の長女で、十八才のときに惣吉に嫁いできたのである。静雄の小・中学時代の学友であった陣ノ内宜夫（現早稲田大学教授）は、次のように伝えている。

「伊東静雄の生家とわたくしのそれとは、這松（ひやあまつした）下と上の馬場で、近道するに二丁とは離れていなかった。小学校の時はよく遊びに往ったり来たりした。伊東のお母さんは聡明なやさしいひとであつた。伊東の母方の人々には頭のよい人が多い。わたしは伊東の才能はお母さんの血のなかに在ると思っている。」（昭和二十九年「河」七月号、「友情ならぬ友情」）

この聡明でやさしい母であるハツは、後年著者たちには、小柄だが利口な男まさりで、骨太で掌の大きい働き者……というふうに印象されている。彼女は子等が欲しがる菓子なぞ銭に糸目をつけずに買って、袋ごと抱かせて飽食させるという……時に欲求不満をいっ気に解消させる放胆な養育法をとったとは、たしか静雄の話を聞いた花子夫人からの又聞きである。或いは彼女の放胆と思える飽食主義によるシツケは、菓子商が徒弟教育に伝来

するそれが、いつか彼女に伝っていたものかもしれない。このハツの血のなかの資質が伊東の才能になったと陣ノ内はいう。このハツの資質は又、彼女の母フジの伝えるものであるらしい。内田家の系譜は次のようなものである。

内田筆助
　―フジ（古賀貞吉二女　弘化4・3・3）
　　―ハツ（静雄の母）
　　―エイ（中尾茉に嫁す）
　　―エツ（園田茉に嫁す）
　　―清三（明治18・2・14）
　　―健一
　　―レイ
　　―スミ

内田家の系譜は次のようなものである。

内田筆吉はごく穏やかな人物で四十一才で早世し、別にこれといった話を後に残していない。未亡人になったフジは、ハツ・エイ・エツ・清三の四人の遺児たちを養育しつつ、家業に励んで夫の在世中よりも資産を殖やしたという男まさりである。この男まさりの激しい気質や風貌は、ハツを通して姉ミキや静雄や弟寿恵男に伝えられたとは、内田家の古老・清三翁（八十三）の語るところである。この清三自ら小学校を卒業しただけの学歴で小学校の教師になった人物だから、「伊東の母方の人々には頭のよい人が多い」の、一人の例であることに間違いはない。ちなみに、この清三の息子健一も、伊東寿恵男と同じく、大村中学・佐賀高等学校を経て京都大学文学部を出た秀才であった。しかし、内田家に流れている、この負けず嫌いの気質と頭のよさとが、静雄の血汐の内でどう結晶をして天才と開花したかは、なお今後の研究にまたねばならない。

静雄は別居しているハツを詩「事物の詩

様式について

浅野　晃

どこにも敬礼がなかつた
どこにも献身がなかつた
どこにも様式がなかつた
だから　混沌もなかつた

黄金の太陽の矢は
不毛の山河にふりそそいだ
黄金の太陽の矢は
敬虔な男女を求めあぐんだ

指のあひだからこぼれおちるのは
時ではない　いのちではない
指のあひだからこぼれおちるのは
いのちではない　ただの砂だ

林もなければ杜もない　だから木もなければ　木々もない
秋桜の花のかげで母性は聖なる伝統を守つた故に
聖なる秋の天に老いた
清い泉の湧き出るところに若い二人は相見たと
母性はむかしの歌をうたつてゐる　けれど
逸楽はきき手でない

どこにも様式はなかつた
だから　偉大はなかつた
われらは偉大でなかつた
決して決して偉大ではなかつた

けれど創造の歓びは
この刹那にも明滅する
そして創造の歓びは
混沌の火に照らされる。

抄」「母」で

頃日の僕等の唯一の
幻想である母……

と偲んでいた。日頃幻にさえ想い描く唯一の人である母……。この言葉には無償の愛を注いで惜まない母に対する、子の思慕が溢れている。その母は惣吉の死後、彼が建てた這松下の家を整理すると、静雄と同居するために大阪に引揚げた。詩「朝顔」はその間のハツと静雄の精神的な交渉をよく物語っている。

父の没後、母は故里の家をたゝみ、朝顔の種を持つて、都会のわたしの小家に住むためにやつて来た。そして間もなく死んだ。わたしはこの頃「あさがほ」と母の手で書かれた紙袋の、櫓に吊してあるのを発見した。

わたしはうけ継がう　この朝顔の種
を
夏の日わが庭に咲き出る
あゝその花の姿の
絶えよとばかり　想つただけで目く
るめく
けれど　八十八夜が来れば
きつとわたしは種を下地さう
そして花の盃から
飲み乾さう　死に振ひたつ勇気を

ハツは故里の土で結実した朝顔の種を、庭らしい庭もない陋巷の借家に持ってくると、なお故里とのゆかりの夢を絶やすまいと念願したのであろう。それは南無阿弥陀仏に通う心である。静雄は櫓に吊したまんまになっているハツの悲願の種をみつけて、母の不遇な生涯を回想し死に奮起を契ったのだ。

それほど静雄はハツの生涯の辛苦を知っていた。散文詩「薪の明り」に、静雄の憐愍の心緒を如実に読みとることができる。

子供の時三里はなれた町の中学校に通学していた私もそういう時刻にふと目ざめて、御飯をたいている母や姉の姿を、かまどの明りの中に度々見た。
……
暗い冬の朝、かまどの前、まきの火の明りの中にうずくまる女の姿ほど、あわれなものはない。

彼女は生涯を、夫のため、子のため、生活の低みであくせく償われることなく過ぎた。その償いのためであろうか？　静雄は彼女のために安息の座を空の高みにしつらえている。即ち、詩「夢からさめて」に

紺碧の空の下
春のキラめく雪渓に
枯枝を張りし一本の
木高き梢
あゝその上にぞ
わが母の坐し給ふ見ゆ

と歌っている。しかしそれは、春なお寒い雪渓の上の枯枝の座である。寒い冬の朝、かまどの前にうずくまっている母の姿が、天国へいった後でも静雄の脳裡から離れなかったからであろう。

つづく

諏訪時代の蓮田先生

今井信雄

三年の間、先生は一年生以外の学年は教えなかった。当時教務であった某先生に伺うと、それは蓮田先生御自身の希望によるところだったとのことである。しかし、生徒間には、

秋

福地邦樹

木々は
濃い樹液を充分たくわえて
眠りに入ろうとして
梢の先で
色づいた葉をひらひらさせながら
合図をしている
水は
冷たくなってきたのに我慢がならず
ぶつぶつ不平を言っている
人々は
心がやさしくなってきて
夜空の星の群れを
美しいと思ったりしはじめる

教頭であり国語主任でもあったK先生に睨まれていたからだと伝えられていた。K先生は大学の講筵にもたたれたことのある碩学で、紋服に皮靴で通学しておられた。〝父上〟の称呼をもって父君に仕え、つい先年九十数才で御長逝なさるまで独身で通された。第二次大戦で石油が統制物資になった時、長年愛用されたランプを初めて電灯に変え、それがまた地方紙にはニュースとして報導されるような先生であった。「現代文は読めば解る」といわれ、教室では古典教材しか扱わなかった。しかし、一言半句についての訓話注釈は精緻を極め、一句のために数時間を費すこともあった。その点、一つの詩教材に二週間をかけた蓮田先生とは対蹠的であった。それだけに生徒間の噂は、ある真実性を帯びて伝播していた。同僚であった一先生は、会議における蓮田先生を、「しゃべり方は優しかったが、話の内容は激しかった。全員を相手に、一人であっても自説を主張して狂げなかった」と語っている。「火鉢の周りでは、本人に向って手きびしい直言をされたことも度々あったが、いわれた当人も聞く人も格別それを気にしなかったのは、蓮田先生の真直ぐな性格がよく分っていたからであろう」と当時を回想される先生もいる。

先生御自身が影響を与えられたと語っていたのは、地理学者の三沢勝和先生と、画家の高橋貞一郎先生であった。「平凡些細な身辺の事実から科学を読みとり、美を教えられる三沢・高橋両先生の目をもって、文章は読まれねばならない。さりげないことばにも、深い意味が宿っているものだから。」とは、後々に至るまで先生が口にされたことばである。

先生は黒地に〝蓮田〟という金文字を入れたノートを常時携帯し、路上でも、床の中でも気付いたことを書きとめておられた。これは三沢式勉強法から得たヒントであると伺ったことがある。

高橋先生は岸田劉生に帰依し、『白樺』とトルストイに心を寄せていた春陽会所属の画家であった。蓮田先生が二・三の同僚と共に油絵を描いたのは、高橋先生の手ほどきに依るものである。作文教育論に「彼等の独自性を伸ばすこと」といったり、トルストイの娘を宿舎に訊ねて、翌朝、熱っぽい調子でその話を伝達された先生の陰には、高橋先生が幾分は動いていたのかも知れない。

教室で先生が熱情を傾けて語られたのは藤村であり、赤彦であった。しかし後には「あの王朝風の発想は詩人でないアララギ人などには恐しくてまねが出来まい。子規以来の俳

句、それから沢山の小説……私は藤村も芸術家ではないという信念を取消すことができない」と断じられて、赤彦も藤村も否定された。その意味においては、諏訪中学時代の先生と後年の先生とはその風貌ともども断絶している。諏訪時代の先生はその学問の模索時代とでもいうべきであったろうか。しかし、課題作文に〝雲〟・〝道〟を書かせ、書きあぐねていた中学生への助言として、「来年も、来年も、〝雲〟と〝道〟についてまた書きなさい」といわれたのは、〝雲のたたずまひ〟（「文芸世紀」）、〝雲の意匠〟（「神韻の文学」）、〝道の学び〟（「本居宣長」）に通ずるものが、早くも先生の中に内在していたとしか思えない。その意味合いからいえば、諏訪と先生は連続の関係にある。

昭和六年の暮も押し迫った頃、二、三の同僚と火鉢を囲んでいる先生のもとへ、中央公論に投稿した原稿が返されてきた。その時の先生の悄気様は見ているのも気の毒な状態で「僕は勉強が足りない」といわれたまま、頭を抱えこんでしまわれたそうである。これが先生をして、再び文理大に帰る決心をさせた一因だと同僚の一人は語っている。広島にゆかれて直ぐ校友会誌に寄せられた一文には「日本の文学批評の歴史の上で画期的な議論をもつてゐたのはあの本居宣長であるが、この人の言つてゐる事は一人よがりのやうに見えることが多いが、実際宣長の研究に親しく接してみると、その一語一語を読む上の研究努力は何人をも驚かさずにはおかない」とある。

私には、先生の学問の基軸が定着したのは先生が諏訪から広島に移られた昭和七年、二十八才の年であったように思われてならない。

四

年に幾日か、各運動部主催の競技大会があった。最後にアトラクションの意味を兼ねて、先生対一年生の対抗試合が行われるのが習わしであった。野球大会の日の先生のポジションはセカンドであった。長髪が邪魔にならないように、拡げた手拭を後頭部で結んでいた。先生軍が勝に乗じていた時であったと思う、先生はピッチャーマウンドを踏んで何球か投げられたことがある。バレー大会の日は中衛を守って、アウトのボールに手を出す後衛の先生に、「胸から下の球に手を出してはいかん」と真剣になってどなっていられたのが妙に印象深い。運動の後で催される先生方の茶話会では、童顔にかえって、羊羹に舌鼓をうっていられたようである。球技といえば、ある一日、教室の掃除終了の報告にゆくと、先生は共に教室の見廻りにやって来られた。先生の見えることなど予期もしなかった級友は、廊下にチョークで白線をひき、ゴムマリを素手で打ち合いながら、卓球方式でカウントを数える遊びをしていた。先生はその仲間入をなさった。途端に皆堅くなってしまい、適当な機会に一人、二人と姿を消して、しまいには私一人が取り残された。一言もことばを交わすでもなく、何時間か先生と打ち合いを続けた。変り身を示して、鋭い球を打ち込むわけにもゆかず、単調な球の打ち合いをいつまでもいつまでも続けていた。変化といえば、時たまサーヴを交換するだけであった。漸く夕暮れに気付く頃、先生は「君は汽車通だったね」とポツリといわれた。その生涯を、絶えず〝時間〟との格闘に捧げていた先生にとって、あの日の簡易テニスは、どんな意味を持っていたのであろうか。

私はかって、小高根氏が「バルカノン」に書かれた「蓮田が青年時代から持っていた、小球体に寄せる異常なほどの嗜好と偏執」という一行に、ハットさせられたことがある。古い校舎の一角で、誰もいなかった放課の一時を、黄昏近くまでゴムマリを打ち合っていた先生は、ひょっとすれば「小球体に寄せる異常なほどの嗜好と偏執」だったと思ったからである。

そういえば、諏訪時代の先生の詩篇に、〝雨滴〟であったか〝雨つぶ〟であったか、こんな一行があった。

俺が何であるか知るものか
ただ　落ちに落ちてゆくだけだ

また、〝独楽と子供〟には、蹌踉と歩いている剃抜独楽を追っかける子供が、一はたきぱっと叩くと、独楽は急に勢いづいて跳んでゆく。その独楽を目を放たず見送る彼の顔には満足の色があらわれているとうたい、同詩を次のように結んでいる。

あたりの喧噪と動揺（どよめき）にすこしも心を奪（と）られず
結びつけられたようになって
踊っている独楽と踊らされている子供が
追いつ追われつ移ってゆく

〝雨滴〟も〝独楽〟も小球体に外ならない。前者は小球体自体の心を、後者はそれに恍惚となり、一体となっている美しさをうたいあげている。ここにまた、諏訪と先生との連続を私はみるのである。

「私を育ててくれたものは、諏訪と軍隊である」とは、後年私に語られた先生の述懐であるが、峻厳な信州の自然や、何んでもいい合える信州教育会の風潮との間には、先生の気象と何か通じるものがあったのかも知れない。

昭和十一年の暮、台中から諏中の校友会誌に寄せられた一文に「信州は又はげしい寒さと厳いが始まって、人をして黙想せしめるような自然の相貌となってきたことと思う。未だに夏の装いで青葉の中で暮しているこの南海の島で、一日に一度は必ず想いを馳せるのは北の空である。私に於いては往々それは故郷をさえ越えて行く心の羽搏きである」と書かれている。透明な山と空と湖を持つ諏訪へ再び先生をお迎えすることはついにできなかった。欅の並木を持つ大手町通りを、白絣とカンカン帽で御長男晶一君の乳母車を押しておられた姿は、今や私一人の記憶にしか留まらない情景になってしまったのである。

（成城大学助教授）

風紋

美堂正義

風が運んできたのではない
海鳴りの夜
貝や魚たちが
ひとに知られず運んできた
青い海の底で
波にもまれたきめこまかな砂が
幾万年の歳月に推み重ねられ
海に陸を造つたのだ
風に吹かれてさらさら
軽げに灰のやうに飛んでゐる
靴の下でキュキュと泣く

あれは深海の魚の呼ぶ声
海の郷愁
ぽうぽうと拡がる砂　砂
太陽はキラキラと輝き
瞳に眩しく反射する

つねに風紋は海に向つてゐる
いくすぢもの波の模様を画きながら
波打際から水に没してゐる
海に接してゐるから心が安まる
海から出たものは海に還つてゆく
砂丘に画かれた不思議な模様
あれは風が画いたものではない
慟哭
ああ　背に波打たせながら

スマトラ記(三)

田中克己

わたしの入院する前の宣伝班支部はメダンのケサワン通りが終り、黒く防空ぬりをしたアフロスと呼ばれるスマトラ東海岸州ゴム栽培協会の角を曲りその西側のフォール街といふのにあったが、林の中で暗くせまいからであらう、デリ川をわたり、メダン州理事官邸の西の大砲通(カノーネン)といふのに移った。もとの持主はメダン市第一の本屋だった由である。支部長の中尉が一番いい室をとったのは当然だが、わたしは何となく入口の左側の小さい室を選んで、メダンにゐる間はここでとほした。

支部長から師団本部の令命といふので、わたしにはうれしい任務が与へられた。すなはちスマトラの民族についての概況を書けといふことである。シンガポールを出る直前、わたしが民族研究所の岡正雄氏に会って、「スマトラへゆくなら民族を研究しろ。参考書はロープとハイネゲルデルンの共著『スマトラの民族』をよみ、あとは実地で研究するんだね」との仰せだったので、わたしがラッフルズ博物館へ行って入場閲覧をことわられたことは前述した。今度の宿舎は本屋だったといふので、裏の小屋に積み上げてある書類を全部ひっくりかへしたが、多くはオランダ語の料理や裁縫などの家庭向きの本と小説がちょっとで、わたしは失望落胆した。しかし命令にそむくことは許されないので、わたしはアフロスへ行って見た。偶然にもここには数人のオランダ人技師がゐて、留用されてゐた(大部分は男女別々の隔離所に入れられてゐたのである)。その一人(名は忘れた)は承知したといってわたしにコーヒーを飲まし、一週間したら英語で書いてわたすといふ。わたしは喜んで礼をいひ、あとは市中を散歩して時間をすごした。

めぬきの通りは前にのべたケサワン通りで市に入った時、すぐ目についたきれいな建物はホテル・ド・プールである。わたしはここへ悠然と入って行って午食を注文した。将官の襟章をつけた軍人が一人ゐただけで、客は他にない。昼食何ギルダーだったか、わたしはボーイから丁重に扱はれて午食をすまし、チップを払ったあと、二度とゆかないことにした。オランダ風の料理が口に合はなかったせいもあるが、軍人軍属は軍規で指定の所以外では飲食してはならないのだが、お客のないのは「オフ・リミット」(これは戦後覚へたことばである)のせいではないかと恐れたからである。

原住民との接触も同じく軍規で禁止されてゐたのであらうが、ホテル・ド・プールのすぐ向ひには立派な邸があって、門には「瑪腰第」の額をかかげ、また「欽差考察南洋各島商務大臣」の傍額もある。わたしはおそるおそる傍門を押して、内に入り、名刺を出して主人に面会を乞うた。主人は午寝中のやうだったがわたしは快くその私室に通された。張歩善、号を公善といふ老主人は言葉の通じないわたしをにこやかに迎へて、勲三等の日本の勲章を見せた。明治天皇に謁して賜はったといふので、北清事変のあと杉山書記生虐殺のわびに清国が特使を派した時の随員だったのだらう。「瑪腰」といふのはオランダ語のマヨール、すなわち陸軍少佐、華僑の頭目に与へられた官位で、清国の官は郵伝部参議上行走広西試用道だった由である。大富豪としてこの官を買ったのに相違ない。あとで令息の張世良といふのに紹介されたが、これはオクスフォードに留学したとかで英語が通じた。わたしは非礼をわびて匆々に退去し、あとでシンガポールで買った本を二部持参し、どちらでも好きな方を、といふと、紀昀(いん)の「烏魯木斉(クルムチ)雑詩」を快く選びとってくれた。紀昀は進士に首席で及第したが、罪を獲

て新疆省に流されている間にこの詩集を出したのである。楊老人はそれを知ってゐたかどうか、も一つの本の名は忘れたが、詩集を選んだところでいよいよこの老人を好いたと覚えている。

さてオランダ人の「スマトラ民族略史」は出来上った。わたしは礼に何ギルダーかをわたしそれを翻訳して、師団本部に呈出した。スマトラの民族は十余り、うち通訳をしてゐるミナンカバウ人が最も多くて百五十万、次は支部でボーイに使つてゐるバタック人が百万。最も熱心なイスラム教徒でオランダ人の討伐をもしばしば退けた北部のアチェー人がこれについで六十五万人とロープの本にあるが、その通りに書いてあったと思ふ。ランポン人、ガヨー人、アラス人と東部の諸島の住民、それに少数のこってゐるヴェダ系の諸民族などものこらず書いた。あとはその実測がのこるだけとなった。(実はあとで気づいたが日常に接触するのはジャバからの移民と華僑とであるが、そのことは書かなかったと思ふ。)

大砲通りの隣家は同盟通信の支局、その隣りは毎日新聞支局、朝日の支局はちょっと離れたマンガラーンにあつたと思ふが、わたしはどの支局の人たちにも親切してもらった中で、毎日新聞の篠原支局長(故人)と桐山真君の二人と妙にうまがあって、あとでアチェー族やガヨ族の住み家につれて行ってもらった。

(附記)前号で不明とした南方への技師たちをのせて沈んだ船は大洋丸と高橋邦太郎教授にお教へいただいた。教授はわたしがスマトラを去ったあと、メダン放送局長となり、サイゴン局長となって終戦を迎へられたのである。

*　　*

*　　*

秋

萩本家義

校舎のうしろに咲き初めた木せいの花を、硝子越しに眺めながら、職員室の片すみで、グロンサンの錠剤をのんでいた。二日酔のためではなかった。疲れていたからだ。

今年の秋は、くるのが早い——と言われていたが、まさに図星だった。例えば手にしたコップの水にしても、この冷たさ。何かを誰かに言いたくなったが、黙っていた。

武蔵野ロームの丘の上なので、なおさら空は青かった。その目にしみる青空の底を、もうさっきから、すぎ去った真夏の思い出のように、いったりきたりしている白い雲。

下校のベルのあとだったが、妙に夕日が明るいのは、窓が西向きのせいなのだ。掌のしわに残った最後の一つぶを、水と一しょに胃の腑へ落すと、木せいの花を、また眺めた。

ゆめみこたちの群像(二)

山田 俊幸

茂雄と立原の交友は、そんなに淡いものから立原にとってもぬぐうことのできないものに発展する。立原の心の中に強くはいりこみ、立原の心を強く支配する。「マツナガシゲオヲキリコロセ、マツナガシゲオヲキリコロセ」たった一度の喧嘩が、このような思いに立原をおとしいれる。呪詛のように、それは深くひそかにつぶやかれる。「マツナガシゲオヲキリコロセ、マツナガシゲオヲキリコロセ」

立原にこのような思いを強いるものは何なのだろうか。立原道造にとって松永茂雄とはたして何なんだろう。そうしたものを考える前に、立原の茂雄観をみてみようと思う。

立原と茂雄の交友が作品として定着したものに、「やぶけたローラ」という小説がある。昭和八年、即ち高校三年のときにこの小説は成立したものと思われる。昭和八年といえば茂雄はもう自分の進むべき道を決めていた時期である。この「やぶけたローラ」は立原と茂雄が寮にあった頃であるから、おそらく、昭和六年、高校一年の時（十八歳）の時のことであろう。

立原は「やぶけたローラ」の執筆について、茂雄に昭和八年七月、武州御岳へ出かける前日にかき送る。

LOLA のこと　東京にゐる中に
まとめちまはうと　思つてゐたが
ああしたことは　僕の性に合はないのかも知れません
まだ　手さへつけてありません

「やぶけたローラ」は〃ミチ〃と〃シゲ〃という友達同士が、〃ローラ〃という女優のポスターをさがす話である。

二人は馴れない朴歯の練習をしている。が、希望にみちた騎士のように歩こうとして上をむき胸を張って歩こうとすると、どうしてもひっくりかえってしまいそうになる。堂々と胸をはって歩いて、「女の人の顔みたいんだけど」と思うが、やはり顔を上げるとひっくりかえりそうになる。そんなことをくりかえしくりかえし練習しているうちに、どうやら、やっと恰好だけはちゃんと歩けるようになる。

彼等、上向いて、朴歯の上に歩く資格を、享有した。ひょつこり顔をあげてみる、試し。そのとき、セニヨリイタ、すれちがふ。きれいすぎた。ふたり一緒にふりむき、また転びさうになつたが、やつぱりきれいすぎた（らしい）！　殊勝な彼ら、どんなお嬢さんの前でも、転んでみせることは、そんなに勇敢な行為とは思はなかつた。再び、四角な、平べつたい灰色の鋪石・石・石・石。凝視し乍ら、転ぶまい、と行進する。ふさぎの蟲、昇天する。石・石・石……。セニヨリイタ。颯爽と歩き顔は明るく変貌した。地面は恒にこのやうに楽しいものだらうか。セニヨリイタ、微笑する。が、うつかりすると、お顔踏みさうだ。

で——

（寮の壁に、こんなお嬢さんの顔を貼つたら、すばらしいだらうな、さうすりや、僕たちや壁歩くこともないから踏まないだらうし。普通、大低、下ばかり見てないから、直立面の方が見よいだらうし。）

偶然？　以心伝心？　ミチもシゲも同時に、このこと、考へついた。羞恥心がふたりに、沈黙、強制する。

そうして、二人はああいうセニヨリイタの

The End of the Summer

Shizuo Itoh

Strayed all alone by the overnight storm,
A white cloud flows down the sky of fragrant air
Faintishly clear to the bottom.
The quiet, giant shadow it casts down
On the sun-burning field view,
・・・'Bye・・・Goodbye・・・
・・・'Bye・・・Goodbye・・・
Like a look so nodding to everything,
Crosses a glowing line of road,
Travels over the face of rice field fresh dark-green,
Outruns the passers-by moving dwarfish,
Quietly, quietly shades the trees
And roofs in the village,
・・・'Bye・・・Goodbye・・・
・・・'Bye・・・Goodbye・・・
Still so nodding,
Then it tenderly gets out of my sight.

Translated by Ken Miyagi

写真を寮の壁にはろう、ということになる。しかし、誰の写真をはろうか、という所で、二人の計画は壁につきあたる。一面識もない令嬢に写真をねだるのはレディに対する侮辱だし、しかも、その首をとって室にぶらさげるのは、その人の生命に関わる大手術である、とミチは思う。おそらく、どの人も同じことだろう、と思う。

ローラ！　ふと閃いた彼女。ローラは一體どんなものだらうか。さういへば。先刻のセニョリイタ、一脈通ずるものを持つてゐた。ミチは、手早く、脳朧に秘めた記憶の手帳、とり出す。熟読。

ローラ――酒場「青い天使」のをんな。恋愛享楽者。アミイ・ジョリイがローラか、ローラがアミイ・ジョリイか。身許不許。現在、本郷座の客引――読了。

彼女、年こそとつて居れ、相変らずの写真版の鮮明さ。街の飾り窓で片足あげてゐる。客引も存外成功の気配。顔はほくそゑんでゐる。年齢だとて、二人の和37より多くはあるまい。さて、ローラは一體どんなものであらうか。さうした女の気軽さで、寮の壁、同室の十二人にまで、等分された微笑、投げかけるか知れない。

ローラをさがす。

二人は、かくして、この夜景を刑事となつて彷徨する。誰も、「青い天使」のマッチをくれる者もなく。ことによつたら、彼女は少年を忌避するらしい。それなら、妙ないこぢが余計に彼女を促へさせずに、おかないのだ。

ローラをさがして、ミチとシゲの彷徨がはじまる。菓子屋、西洋仕立屋、文房具屋、そして刃物屋で……

――あれでございますか。はア、おやくそくがございますので。やつぱり、学生さんで。みやうにち、とりにいらつしやいます。え、おふたりずれのかたでしたけど。ほんとに、せつかくなのに、おきのどくでございましたねエ。

シゲ、鄭重に、断られて、満足した。出て来る、シゲの顔に成算がある。ミチ失策2対1かなと惧れた。けれど。手にしてないポスター。その晩は、結局ふたり、あいこだつた。

その日は、二人とも仕方なく帰途につく。

しかし、次の日、ミチにはシゲの成算がやつと判る。次の日に、シゲは昨日行った刃物屋へまた行くのである。

街――。

横町――。

刃物屋――。

ローラが見えない。先越されたのか。失望。シゲ、昨夜の成算はどうした？シゲは、あつかましい。またそのうちへ、のつこり入る。ミチ、ガラス戸のところに立つてゐるのだが、どうしたことだらう。ガラス戸越しのパントマイム。女主人は笑つて、筒状のものを渡す。シゲ、おじぎして受けとる。何のことない、運動会の賞品授与だ。ガラス戸あけて、シゲ、その筒でミチの肩、ポンと叩く、笑つた。

シゲはやがて、この謎に対する整然たる分析をしてみせる。ミチはそれをみながら、旧時代の快盗・アルセーヌ・ルパンを思いうかべる。ルパンが犯行後、自分の手口をときあかすのに似て、シゲの分析、説明も、実に手ぎわよくなされたのであろう。

――あの女主人、（二人の学生に先約した）と声明した。おそらく、同じ学校の者だらう。それなら、あの女主人、どうして我々二人を彼等二人と識別し得るか。軍隊の行進する長い列、その一人一人、皆、同じに見える！　服装が個性を奪ふのだ。この経験、あの女主人にも適用されよう。我々が、先着さへすれば、必然、彼等と誤認して、ローラは我々の手に。さすがだ！　シゲ。この推理。昨日の成算と、今夜の成功。錯学の利用、シゲは応用心理学の、或は泰斗だ！　脳漿の神秘だ！

ミチの賞讃はこのようにかぎりない。しかし、このあとに二人をまつていたものは、やっと手に入れたローラを寮の壁へはったとき、いかにしてローラを伝統の魔手からまもるか、という心配であった。

ランダイ（五）

―バシュトゥ語民謡集―

森　亮

二十六

春をことほぐ世間をよそに
結ぼほれたるわたしの心
えい、なんとせう
花よ咲け咲けこの胸に

二十七

乳児（ちご）か若児（わかご）かわたしの心
人の庭から花ほしがって
声上げる声上げる

二十八

薔薇をわたしに貴方がそっと
投げたその手は嬉しいけれど
じろり見てゐた誰かの目

二十九

いっそ空ゆく
月ともなって
愛（いと）しい人が
羊飼ひ
牛飼ふ野らを
照らしたい

三十

ともし火よ
もいちどぱっと燃え上がれ
これがあの人の
見納めの顔になるかもしれぬ

三十一

愛する人は遠い国
離れて顔も忘れたが
名前ばかりは忘られぬ

（つづく）

山荘詩評

吉本青司

言はぬをもいふに勝ると知りながらおし
こめたるは苦しかりけり

いくらおしゃべりしても、何の答えも返さない末摘花に、せつない想いを訴えた、源氏の君の歌である。

和泉式部のあでやかな哀しみに対照して、紫式部の愛には、忍びやかな想いの哀れがある。モノに発する詩の本体である。

宇宙の幽玄にあって名づけ得られないものに、乞い焦れる想いは、少年と、詩人のものである。「苦しかりけり」と、悶絶の想いを経験したものが、原型的な詩のいのちを知る。きびしくそれを、幽契と呼びたい。

「詩の街」の別冊「矢野栄蔵作品集」（西宮詩話会）は、肉身への愛情を素直に表現して珍しい。

柿崎俊二詩集「獣の挽歌」（大阪市）　作品「獣の挽歌」「砂丘」などにみる、混然とした複合。それをもっと引き出してみたい。現代のサスペンスがある。

芳潟喜美子の詩集「星のランプ」（酒田市）　「真夜中」に目をとめた。「かくれている」ものが、比喩となる日を期待したく思う。

高森文夫の詩集「昨日の空」（一樹社）

「岬の冬」に暖かなふくらみを感ずる。「椎の木」「夏の海にて」「秋光礼拝」と、それがしだいに大陸に向って開き、やがてぽっかりと破れる。そして「楚囚の歌」が巻末を飾る。荒野の「径」に人生を想い「石の歌」の予告が、明日を結ぶ。モノなつかしい本である。

京陽出美詩集「野宿」（ロジェの会）

「淫祠」の音楽的発想が興深い。コトバに執することをいっそう強く、音楽にしてしまいたい。

松尾繁晴の詩集「愛について」（初音書房）

穏健な詩風は目だたず、「濃い湖の岸辺」の表情である。でも、現代の愛のあかしは、もっと険しく絶望に近くあるのではなかろうか。

川越綴子詩集「白い月」（天幕書房）

「夜」の「待っていたのに／何も起らなかった」という言葉が印象的。芸術は表現である。モチーフは飛翔しなければならない。

北一平の詩集「魚」　西脇順三郎が序文で「四十すぎてからが適当な詩作の季節である。」と言っているのが、目に立つ。「御神火」「富士」「鯉」「鮫」などが、この人の天質を語っている。「論理の逆転の中に、詩的新しい関係を発見しようとする――」とは、西脇氏の評言である。

小林重樹の詩集「こわれやすい心象」

「おもいで」「冬の夜」など、疑人化した自然の愛が呼びかける。

高梨一男の詩集「呉春花」（昭森社）　いくつもの詩篇に、しるしを付ける。「彼岸花」

花火がそのまま凍ったように美しい花

「空に投げうつ水中花」と並べて、ふと読み上げた。最後の「――この美しい花に何の罪があるのか」は、心要かどうか、論争になるだろう。

「占い」には、わまたに「夕占」を問うた昔のひとの悲しみを、にじませている。「特進」は、詩に書いた小説である。「組織悪への憤激」などいう言葉は、無くてもよいほど訴えるものがある。「射手」もいい。

「彼」の草野天平は、りっぱな詩人だったのに、文学辞典にも出てこない。いっそ、その方がすがすがしい。詩人天平の像を鋭くとらえている。「人間のようであり人間のようでない」とは、えらいことを言ったものだ。

河合博詩集「青春の地図」（木犀書房）

林富士馬の友情の跋がついている。戦後「午前」に河合峰夫の名で、詩を発表した人であることを知った。慈恵大で森田正馬博士に学んだことも無縁ではない。

私は、この優雅な青春の詩を、森田博士を敬慕する形外会で、幾篇か朗読させてもらった。「はるかなる国」「青春の地図」など、ふくいくと香気がある。

稗田菫平の詩集「獅子の歌」（牧人社）

「ひるがお」には、この人の観念のあそびからの脱出がみられ、レアリテが感じられる。でも大変な反逆をテーマに選んだものだ。

「茎」「牡神」などの大様さが、むしろ私には好ましい。

西一知詩集「なにがぼくらの魂をしずめるか」（昭森社）　「なにがぼくらの……」と、自問自答をくりかえしながら、目に見えぬ名づけようもないものに接近する。「見える海」一篇にぶっつかったとき、詩人の中に萌していたものが、ようやくはっきりする。

詩論を見よう。

「四季」3（東京都）の、山岸外史の「禽獣・虫魚・草木」の第二章「蟻について」は面白い。蟻を義の虫だと定義することから、「僕は日本正義派である」と宣言し、「自由な主体的感情がなければ詩も生まれない。」「文学とは表現の二字につきる。」と共感するところが多い。ユニークなエッセイである。

「日本談義」214（熊本市）の、丸山学の「あんた方どこさ」は、よく知られるわらべ歌を引いて、対話のうたの妙味を指摘し、ラジオやテレビの普及によって、子供たちの伝承能力が失われていくことを嘆いている。これは小さな問題ではない。

「南北」10（東京都）は、日本浪曼派特集をやっている。この誌の編集は並はずれなところがあり、そこがしだいに注目されだしたようだ。北川透が「〈天皇制の岩盤〉について」の中で、戦後、自らの愛国詩を拒否した人々にふれ、「いわば愛国詩時代の自分を、自己史から抹殺するいがいなかったところに、救いがたい詩人失格があった」というのは、痛快だ。

林富士馬と大久保典夫の「日本浪曼派周辺」も、日本浪曼派の人々への心情の理解が、二人以外には語れないものを見せている。

「VIKING」212（神戸）の、君本昌久の「中原中也」は、「人生的な態度を詩のなかに exchange していった中也の覚悟にこそなによりも問題の本質が秘められていた。」と、中也のアイロニカルな生き方に迫っている。博引を多くするが、焦点の定まらぬ感がある。筆者の読みのせいかも知れない。

「BLACKPAN」46　（橿原市）の、香山雅代の「幻想」は、能を芸術として、現代の目でみている。大切なことと思う。「間」のリズムへの着目から、魂への共感に行くことが待たれる。

「風日」七・八月（京都市）の、「保田直日追悼」は、さきの「河井寛次郎追悼」と並んで、日本の美しい魂のモニュメントである。なお、四・五月号の、保田与重郎の義仲寺での「講話」は、心情の美しさを天真爛漫に生きた、英雄義仲の最後のことばにふれて、詩歌のこころを説いている。

「骨」30（京都市）の、大浦幸男の「英詩と骨」は、おもしろいエッセイである。シットウェルの「子宮の中で作られる小さい骨……」の紹介が光っている。

「花・現代詩Ⅰ」25（東京都）の、太田浩の「芸術の道程」は、伊東の生活詩への経過を明した立論である。伊東の生活詩への経過は、敗戦時点に根本がある。この小論は、そこに着眼している。

滝口雅子の「書簡よりみたる室生犀星Ⅰ」では、犀星が詩をどんなに大切にしつづけたか、ということがわかる。

倖せがたくさんあなたを訪れるようにいのる。

こんなやさしい結辞もある。

「山の樹」夏季号（東京都）の、鈴木亨の「枯野の夢」は、風格のたかい文章。芭蕉がなぜ長崎を志向したか。モダニズムの秘密がありそうだ。幻住庵記と方丈記との交響を言ったのは面白い。

「白木綿」69（宇都宮市）の、河合象吉の「芸を生むこころ」は、武原はんの絵のよう

日本の詩歌 24

丸山 薫　田中冬二
立原道造　田中克己
蔵原伸二郎

¥480

東京都中央区京橋二丁目一番地
中央公論社

な話をあげている。

「ポリタイヤ」3（東京都）の、平林英子の「青空の人たち㈠」は、三好達治を中心に、いたい青春の詩人たちの会合と別離を語っている。

天野忠の「我が感傷的アンソロジイ」（文童社）　詩人の誠実さが宿命の同義語のように想われる。詩壇のそとの、アウトサイダーとでもいえる詩人たちの交友と群像が、コクのある文章から眺望される。奇特な仕事である。

唐川富評論集「抒情詩の運命」（地球社）きわめてシリアスな態度が、評者のおとなさを示している。

現代詩の根元的な問題として、「空間恐怖」を提示したのは面白い。でも、「おそれ」の心情の、古典的なかたちと現代的なすがたとを、もっと追ってほしい気がした。

「四季派批判」も鮮明な論説である。「伊東静雄論」も、親近的な論調が、むしろ心よい。後期の作品への「決して衰えをみせていないすぐれたもの」という批判は、定説を破ったものである。

「戦後における抒情の拠点」は、「地球」作品の紹介であるが、もっと詩の未来的精神へのアプローチがほしい。

「果樹園」153（池田市）の、小高根二郎の「蓮田善明とその死（五十五）」は、その完結の章である。「152」において、蓮田の凄絶の死が、描かれた。小高根の筆は、さながら怜悧な剣のように、その情況を再現した。悲痛がはげしく私達の胸にも伝わってきた。小高根の詩精神が蓮田と共にあり、悲劇の目撃者であったからだろう。

この長い評伝の意義は、多くの人々が語ったので、事新しく言うことを避けよう。だがただ一言。偉大なる死者蓮田をヨミの国から引きもどしたのは、小高根二郎であった。蓮田善明はヨミがえったのである。

編集後記

十一月三日。帰熊される蓮田敬子さんを発行所にお迎えして、善明の手紙と日記を中心に話をうかがった。善明思い出の高野山の遍照光院にご案内しなくては…と思いながら、果せなかったのが心残りだった。夕陽で向いの家のサルスベリが黄金に映えて、善明を偲ぶときによくかけるシベリユースの「トオロネラの白鳥」をお聞きいただけたのが、せめてもの餞けであった。

八日。川副国基氏から蓮田伝完結の祝い状をいただいた。九日に原田憲雄、足立巻一、栗山理一、清水文雄の諸家。十日に久保忠夫、岡保生、丸山学諸氏。他日中河与一、高藤武馬、清水孝之、浅野晃の方々。いずれも忝い祝いの御言葉を頂戴したが、とりわけ感銘をしたのは三島由紀夫氏からのそれだった。

「…毎月、これを拝読するたびに魂を振起されるやうな気がいたしました。この御作品のおかげで、戦後二十数年を隔てて、蓮田氏と小生との結縁が確かめられ固められた気がいたしました。御文章を通じて蓮田氏の声が小生に語りかけて来ました。蓮田氏と同年にいたり、なほべんべんと生きてゐるのが恥かしくなりました…」云々。

この日の新聞は、奇しくも伝えていた。東大林文学部長を軟禁する暴逆な全学聯の説論に、三島氏は阿川弘之氏を伴って勇敢にも東大におしかけていた。

（O）

果樹園　第一五五号（毎月一回一日発行）
昭和四十四年一月一日発行
池田市石橋二丁目六ノ五
編集兼発行者　小高根二郎
大阪市東住吉区桑津町三の十八
印刷所　元市印刷株式会社
池田市石橋二丁目六ノ五
発行所　果樹園社
定価　四十円　送料　二十円

果樹園　一五五号　昭和四十四年一月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価四十円　送料二十円

果樹園

第156号

伊東静雄研究㈡　小高根二郎
書簡（田中克己宛）　伊東静雄
蓮田善明氏との出会い　阿川昔
ランダイ㈥　森亮
スマトラ記　田中克己
退職　吉本青司
ゆめみこたちの群像㈢　山田俊幸
野うさぎ　福地邦樹
太郎㈠　浅田二三男
編集後記

伊東静雄研究㈡

小高根二郎

2

静雄は諫早小学校の五年生の夏休に十七才の次兄潤三を亡くしている。もっとも生れる十ケ月前に、誕生祝い直前であった三兄岩蔵を失っているから、すでに二人の兄に先立たれたわけである。しかし、死別の悲しみを体験したのは今度が初めてである。

その年の写真が残っている。十一月の撮影であるから潤三の死後三月後に撮ったものである。静雄と妹リツ（小学二年）と弟寿恵男（六才）の三人である。長兄英一（二十五才）と姉ミキ（二十二才）が一緒でないのは、あまりに年齢がかけ離れすぎていて不自然が感じられたからであろう。同じ年恰好の三人がならんだわけである。

学帽・黒の吊鐘マント・編上靴といういでたちの静雄は、リボン・立縞模様のマント・赤白鼻緒の草履のリツを右・ハット・細縞入りのマント・編上靴姿の寿恵男を左に従えて、兄貴らしく気を付け！　の姿勢で佇んでいる。当時筆者は同じ九州の小倉郊外の小学一年生であったが、記憶によるとこの三人の服装は最新流行に属し、なかなかのハイカラである。生活がかなりゆとりがあった事実を物語っている。

静雄の眼は明るく坐っていて、厚い唇もほどよくひきしまっている。いかにも秀才らしい。ところが学友陣ノ内の語るところによると、クラスではあまり目立たぬ存在であったということである。

「伊東は勉強はできない方ではなかったが、小学では優等などには一度もならなかった。伊東は小柄であったせいか、その存在は少しも目立たなかった」（同前）

又、作文なぞも静雄はあまり得意ではなかったらしく

わたしは　小がつかうのじぶんから
さくぶんが　むやみに　へたでしてね
じゆうだいがでると　きまつて
さくぶんはほんとにむずかしい　と
いふことだけ　かいたもんです
（昭和七年「童謡の国」第十一号――ぼくのうた）

と告白している。

この小学校では目立たぬ存在であった伊東は、大村中学に進学してからも、ほぼ同じ平凡な存在を続けたらしい。陣ノ内はいう

「大村中学校に入学した村学校出身者は六人いた。伊東もその一人であった。依然として、伊東の成績はあがらなかった。中学二三年の頃、十六七の生意気ざかりのためか、理由もなく伊東と反ぱつしあって仲ちがいした。

その頃のある年、伊東は家族と小浜に湯治に行って、中央大学の法科の学生から大いに出世主義を吹きこまれたらしい。「弁護士になって金もうけをするんだ」と伊東はいうようになった。金もうけなどなんだと考えていたわたしは、それ以後いよ〳〵伊東を軽蔑した。ことある毎に伊東につらくあたり、伊東もわたくしに反ばつして白眼視した。」（同前）

仲違いをした陣ノ内の眼に、静雄は当然いくぶん歪曲されて映ったろう。さもなくば全く無視されたに相違ない。その遮断ないし遮蔽された場所にいる静雄を、同期ではあったが当時は静雄と無関係な立場にあった蒲池歓一の中立の眼で捕えてみよう。

「諫早からは、ずいぶん沢山の生徒が、汽車で大村へ通つてゐた。…中略…。朝晩はそれらの生徒たちで、小さな田舎の駅は真黒になるほどであつた。冬はストーブのまわりに集り、夏は外にあふれて木柵のあたりまでむらがり、談笑する者、議論に花をさかすもの、カードをめくるものなど、とりどりであつた。汽車の中とても又同じ風景だつた。

その雑談組とても又一色ではなかつた。多少不良がかつた硬軟両派から、何とはなしの中間派、大人ぶつた一組、ぶらぶらする散歩派、その中のまた少数派で、文学少年ともいふべき二三人に、私などはいつてゐたが、伊東君はといふと、これはカード組の方であつた。そのなかでも亦、際立つた勉強家の一人だつた。

そんな風で中学時分の彼は、ひまさへあれば本を開きカードをめくると、いつた、例の小柄な姿だけが印象に残つてゐるほど、真面目一方の勉強家形であつた。そして無口で、心は強いがまた子供つぽいといふ少年だつた。

云はば彼は秀才形だつたが、その常として、世間なみに大人びて、生意気な口をきいたり、一ぱし文学の話などしたがる、出来の悪い子供たちに対しては、無関心の態度を取つてゐた様である。中学時分の彼に、後年の詩人伊東静雄を見ることは、ほとんど不可能に近い。」（昭和三十四年「果樹園」四月号――中学時代の思ひ出）

なんのことはない。静雄は真面目一本槍のガリ勉型、点取虫系の中学生である。この静雄を二年後輩の川副国基（現早稲田大学教授）から全く客観的に観察してもらう。

「当時の伊東氏の印象というのは、顔色の蒼い、ニキビの多い、勤勉な養勉強家だったという以外にはない。四年になると氏は通学中も丹念に英語の単語カードをめくって歩く中学生であった。午後の授業は早退して大村駅まで大きな鞄を抱えて走り、十二時九分の汽車で帰って自宅で勉強をする中学生であった。文学青年とか詩人とかいう素質はその頃の氏のどこからも見えなかったのではないかと思う。当時の大村中学校の文芸部の機関誌「玖城」などもおそらく氏の当時の作品を収めていないのではないかと思う。同じ汽車通学組の蒲池歓一氏や長崎港外の出身で寄宿舎組だった福田清人氏などの方がいかにも文学的中学生であったことを覚えている。」（昭和二十九年「河」一月発行第五号――伊東静雄氏のこと）

だいたい蒲池歓一の観察と大同小異である。

この目立たぬ存在であった静雄が、第四学年修了の身分で、第五学年を跳び越えて佐賀高等学校の入学試験に合格したことは全校を驚倒さしたようである。陣ノ内は「中学の成績など問題にせず、受験勉強一本にうちこんだ努力の結果であった」と改めて伊東の強い意志の力を認識し、蒲池は「目立たないが、心の強い強情さが、その実力を養はせたと見ても良いし、一方また運もよかつたのである」といい、川副は「氏の佐高入学には私共は驚

かなかったが、特に文科生として氏が入学したことには意外を感じたことを忘れない」といっている。この同期二人、後輩一人の静雄観は微妙にニュアンスを異にしているが、一年先輩である福田清人は、おびただしい後輩の馬鈴薯みたいな面貌のなかから、ニキビ面ならぬすこぶる美化された静雄の面輪を模索してくれている。

「伊東君は、大村中学で私より一級下にいたのであったが、在学中は知らなかった。

伊東君は、中学時代は、あの大村湾の海底の真珠貝にまだ秘められた真珠のようなものでなかったかと思う。」（昭和二十九年三月発行「河」――伊東静雄君の思い出）

大村と諫早は汽車二十分の近距離にある。しかし、その土地柄はがらりと違ったもののようである。

「大村というところは旧幕時代から藩主に英明な人が多かったこともあって金銭よりも学芸を重んずる土地柄であった。キリシタン大名として知られた藩公もあったし、また幕末の藩の動向から廃藩後、おなじ小藩でも藩主は伯爵を賜わっている。長與又郎、善郎兄弟、長岡半太郎、楠本長三郎、荒木十畝らの学芸の士を輩出させたところである。」（昭和三十九年「文芸論叢」、川副国基―伊東静雄の故郷）

この大村に対し諫早は暗く沈滞をしている。

「天正十五年（一五八六）、諫早家晴がこの地に初代諫早藩主としてのぞんだが、二代目の直孝のときから、隣藩佐賀鍋島の強大な勢力下に屈してその支藩のようなかたちにされ、ながい間圧政に苦しめられてきた。十六代目の藩主一学のときに明治維新を迎え廃藩となり男爵を賜わった。通称壱万石の小藩であった。

諫早の郷土史をひもどくと、明治まではずっとながく佐賀藩からの圧迫の歴史である。領地は借り上げられ物資は収奪され、泣寝入りの時代が続くのである。寛延三年（一七五〇）に佐賀藩に反抗する百姓一揆もおこっているが簡単に圧服されている。したがってこの土地の空気はながく無気力なものであった。退嬰的、保守的、保身的ということばが当るであろう。長いものには巻かれろ式の、あるいは事大主義の、もっとも悪い意味の封建的な風習が、わたしどもの少年のころまでこの土地の空気を暗くしていた。」（同前）

まさに対遮的である。一は進取的であり、一は退嬰的である。その一例は、桂小五郎が長州藩で有備館を創設する以前、すでに大村藩の齋藤塾の塾頭をしていたという事実だけを見ても、その進取性は推察がつく。その後を襲った渡辺昇が、謀略に近い戦術をあやつって家老その他の重臣を暗殺、あるいは失脚せしめて、俗論党を制圧して正義派の維新の道を拓いたのである。ともかく明治に至る陣痛を経ている。東征にさいしては薩藩に吸収されて、つねに最前線に立たされるという辛酸をなめているが、同じ辛酸でも、鍋島藩の重圧にあえぎどおしの諫早藩とは自ら趣を異にしている。（昭和四十一年「大村史談」第二号――渡辺有一――大村騒動について）

「諫早市史」をひもどくと諫早藩の惰弱ぶりには呆然とさせられる。鍋島の長崎行に随行をする諫早は、佐賀人に「如何様の無礼人これありと雖、無礼とがめ一切仕るまじき事」という触れを供回りの者に出している。唾をひっかけられたら黙って拭え……という卑屈さである。佐賀城が炎上したときには、諫早藩士全部が知行の一割五分と銀一分半を三年間も義捐している。これもさきほどの卑屈さの延長でお人好しからではない。したがって録高は看板だけで実質・台所は火の車であった。床の間に鎧櫃は飾ってあるが、内実は米や薬代に化けている例は稀ではなかった。これではいざ鎌倉という際に間に合うまいと

いうわけで、定期的に兵器検査をして、長期的に整備させようと重臣たちは親心を発揚している。オロシヤが来港した長崎の警固に当るのに、鉄砲が足りないので、三人に一人は弓の装備をしなければならなかったのは当然だ。百姓から猪が跳梁して困るから鉄砲を貸してくれろと申し出られて、鍋島から借るからしばらく待ってくれろという面目のなさであった。この鉄砲の整備はやがて民間の寄附金でどうやら恰好をつけた次第であった。こんな諫早に俗論党も正義派もなかった。明治は向うからやってきたのである。

この退嬰的な諫早で小学校教育を終えた静雄が、およそ対蹠的な進取の気性の大村で中学校教育を修了したことは大いに意味がある。川副も

「伊東は大村中学校で、進取の気風に充ちた学芸を尊ぶその学風にきっと触発されるところが多かったと思う。そこではいわゆる諫早的な卑俗なものが排撃されたからである。」（同前）

といっている。

この静雄が、先祖の尻の毛まで毟りとった鍋島の本拠・佐賀に、高等教育を受けに乗り込んだことは、さらに意味がありそうである。「釈迦も孔子も楠木も信玄も、終に竜造寺、鍋島に被官懸けられ候儀これなく候へば、当家の家風に叶ひ申さゞる事に候」という「葉隠」の徹底した現実主義を学ぶことは、まさに静雄好みの弁証法的な展開となるからである。

（つづく）

書簡（田中克己宛）

伊東静雄

昭和二十三年十一月二十六日

（大阪府南河内郡見山村北余部から奈良県丹波市天理図書館田中克己宛はがき）

その後御無沙汰しました。「1狐の詩情」ありがたうございました。着々と、身についたお仕事が出来、（ハイネといひ、聊斎志異といひ）、うらやましく存じます。お仕事が、全体でいかにもあなたらしく…一字不明…、いいです。この上の慾を言ふなら詩を見せ…二字不明…ただきたいものです。ひとのより詩を長くよまな…二字不明…うな気がして、自分でも詩書くのが、段々…三字不明…なつて来ます。又、学校が私をこき使ふのにも困つてゐます。中島君の本出るのを楽しみにしてゐます。

（大和文学いつもありがたうございます）

注1・田中克己訳「聊斎志異抄」。昭和二十三年十一月 養徳社刊

蓮田善明氏との出会い

台中商業時代の断想 ―

阿川　昔

蓮田善明氏と私との出会いは、昭和十年四月某日。はじめ、その年三月、国語科主任―台中州立台中商業学校――がやめたので、じぶんが昇格するものと思っていたやさき、校長からすばらしい人が内地から来るといわれ、どうせ広島出の後輩を呼ぶのだろうと、内心おだやかでなかった。しかしその人の名が蓮田善明と聞いて私は愕いた。すでに同氏は『国語と国文学』に論文を発表しており、私はこの高名な学究が台湾くんだりまで来るのは本当かと疑った。初対面のとき、「先生のお名前はかねてから承っております。」と私が挨拶すると、氏は「いや、あなたのお名前もよく知っています。」と答えられた。私はそのころが一ばん俳句に熱心なときで、内地の俳誌に俳句や雑文をさかんに投稿していたが、そんな高名な筈はなかった。これは蓮田氏が、誰か余人と感違いされたのだろうと今でも思っている。しかし爾来蓮田氏は、私大の専門部しか出ていない底の知れた私の学力や、詞藻に乏しい私の俳句を高く評価してくれて、私を励まし導いてくれた。主任でありながら何にかと私に相談され、台湾人の国語教育―当時の皇民錬成――に心血をそそがれた。私の「日本人的情操涵養の具としての俳句指導」に共鳴され、そのため全島的な研究発表会を呼びかけてくださった。これに関する一文は、同氏の「神韻の文学」（昭和十八年京都一条書房刊）に収載されている。

さて蓮田氏と同職中、こうした公的接触は極めて深かったが、私的な交わりは殆んどなかったと言ってよい。それは同氏が常々「学校の仕事は学校にいる間に片付けて家へは持って帰らない。家では自分の研究をする。」と言っておられたので、また仔細あって当時の私の生活は非常に乱れておったので、氏の私生活を邪魔しまいと考えたからでもあった。

台湾は官立万能で、殊に教育界は、広島高師が東京高師、東大を抑えて幅を利かしていた。正直にいって広島は同閥意識が強く、同窓間の結束は非常に固いが、他に対してはず

ランダイ（六）

―パシュトゥ語民話集―

森　亮

三十二

あの娘たづねて旅立つわたし
思ひ立ったる旅なれば
道よちぢまれ

三十三

夢でおいらは
王様気取り
お供を連れて
覚めたこの身は
相変らずの
托鉢坊主

三十四

もうし、もうし、旅の人
たんのされたかわたしの顔に
それとも、もいちどそち向きましょか

三十五

さといわが眼が悲しみ招く
こはやこは
鷹の目隠し倣うて閉ぢよう

三十六

おくつきを透かし見よ
そのかみの青蓮のわが眼
今ははやうつろの目
土を被りて

後記

ここ数ヶ月連載した訳詩「ランダイ」は今回を以て打ち切ることにする。原本に収められた民謡百数十篇の四分の一になるかならぬか、その程度の抄訳であり、翻訳の態度も初めに断っておいたやうに極めて自由なものであったから、西南アジアの民情土俗を紹介するには余り役立たなかっただらうことは自分にも分かってゐる。訳詩の排列順も原本のそれとは全く別個のものである。

最後にお断りしたいことが二つある。第一回の解説で「ベーワーナ氏採集本」と書いたのは私の誤記で、原本の編者の名前はベーナーワ氏が正しい。又、第四回の二十二番は翻案とも言ひかねる半創作である。原作中の「引き裂かれた心臓の断片」を「裂けた村肝」と訳して想を練るうちに、音の似通った「散った村、寒」にイメージが転じて、ああいふ物が出来てしまった。

いぶん冷酷であった。しかし蓮田氏にはこうした広島閥の中にあって、広島臭が一切なかった。私が氏に心から敬愛の念を持ったのもこの点からであった。

だが台中在職中、氏の詩人、文学者としての片鱗が全然見られなかったのは、いかめしい台湾教育界のしきたりに余儀なくされて、真率な教育者としての面しか出さなかったのであろう。氏が詩や新傾向の俳句をつくるとは全く知らなかったほど、氏はそうした面を私に示さなかった——尤も種田山頭火や大山澄太の話は聞いたことがあった——。

あるとき、「なぜ先生のような方が、この学問に不適な台湾なぞへ来られたのですか。」と尋ねたとき、氏は「文理大で費った借金を返すためですよ。」と笑われた。果して氏はその計画通り、在職三年で台湾教育界での栄達の道をかなぐりすてて、東京の成城へ赴いてしまった。当時台湾での教育官吏は、経済的にも生活的にも恵まれており、その安易さに心惹れて、いつしか在台が長引いてしまうので、現に私なぞは三年の予定で渡台したのが、ついに終世の栖として永住を志すまでになっていた。ここにも蓮田氏の果敢な意志と、透徹した知性と、学問探究にひたむきな情熱とを想い起すのである。

昭和十三年三月某日、台中の一旗亭で、蓮田氏と訣別の宴を国語科のものだけで開いた。似顔の寄せ書きなどをして興じたが、その時私は十年後の再会を約した。敗戦後中国の留用教員となって一年有余とゞまり、二十二年五月帰国したが、待っていたのは幽明境を異にする蓮田氏であった。

成城へ就職後いただいた数々の書状や、戦地からのお便りなぞ大切に保管していたのであったが、引き揚げにあたり、一切の書類とともに焼いてしまった。今、手許にあるのは、お別れに際していただいた一枚の短尺だけである。それには次ぎのような短句が認めてある。

行くほど広い月の空なり　はすだ

（元台中商業校教諭　四三、一二、二八）

スマトラ記(四)

田中克己

年末なんとなくせかせかした気でこれを書く。ふだんから飛躍のある筆だといふのが愚弟の批評であるが、一層ひどい文章になるだらうと思ふ。前に書き落したが、支部移転の直後に大失敗をした。以前の建物にはあったかどうか、師団司令部の命令で、通信隊の兵隊が来て電話をつけてくれた。わたしは永田軍属と二人でその作業を見てゐて、すんだあとも「ご苦労様」ともいはずにゐた。やがて司令部の参謀室から電話がかかった。支部長の中尉を呼び出してであるが、支部長の顔色はたちまち変った。通信兵の作業中によこにゐた軍属らしいのが、冷笑し嘲罵をしたといふのである。わたしと永田（年末なんとなしに電話帳を繰ってゐると、二十五年間音信不通の彼も東京に住んでゐるといふことがわかった）のどちらかを指してゐるにちがひない。わたしは咄嗟に「わたしが行きます」と言って師団本部へゆき、「何かお気にさはることを言ったかもしれませんが、冷笑したり嘲ったりする気は毛頭ございませんでした」と詫びた。呼び出した参謀部の将校はわたしの後背で「なんだあなただったのか」と勘弁してくれた。わたしが文章や言語で他人を怒らしたり不愉快にするくせのあることは、日本やシンガポールでも承知してゐたが、またやったのである。このくせは今もわたしにあることを承知してゐる。ただし救ひやうのない悪癖であることは、昭和二十年に華北で兵になった時も、この「くち」のせいで撲られながら、いまだに癒らないことでわからう。言はず書

退職

吉本青司

逆らって　ついに傷むのは
私のこころである
海辺の町へきて半歳　私は退職を決意した
さまざまな去来が　私から感動を奪い
一片の虚無と化した

歩いてきたこの人為の道に　私は
まったく絶望した
失われたものは　愛と誠実だけではない
叡智……
芭蕉の気鋒
宇宙的明晳さ

物語をしよう
テレビジョンから蒸発した少年たちは
伴れだって浜辺に出た
白い牙をむいて挑みかかる野性の海
悪魔の皮膚のように崩れかかる砂
魂を略奪された少年たちが願っていたもの
は何であったか
自棄か
復讐か
〈治癒の哲学を持たない教育など　糞くらえだ
道徳教育など空念仏だ〉

突如　天降ってきた少女は
砂漠のような午後の浜辺で無慚に犯されてしまった
そのとき　自然だけが
観客であったなどとは信じたくない
地上の悲劇をひとり背負って
傷ついた天使は慟哭した
〈おとなたちよ
少女のかなしみの声が聞えないか
噴きでる泪がきみたちを濡らさないか〉
すべては現実の出来ごとだ
〈太陽のせいだ〉と　うそぶく前に
失われたものの大きさに怖れねばならぬ　そして
祈らねばならぬ　無辺の彼方の
もっとも深いところに向って

少年たちは
いっそう空虚になった軀を偽装して　獣のように
落日の家路についた
砂上にとり残された少年たちの影は
飢えた蒼い狼であった

待っているものは　何もなかった
幻想の母にさえ忘れられて　少年たちは
ふたたび路頭にさまようのだ
魂を奪ったものだけが
彼らを真に裁きうるのだ

人為の道の空しさに
三下り半を叩きつける
私は退職届を書いた　絶望など
ありはしない　決して
山頂の泉にそって　後をふりむくこともあるまい
あんなに美しく輝いて　道はいつも
在ったではないか

かねばよいことは知ってゐるのだが――

スマトラの雑記帳には、先づスマトラの気候をどこかから写して来て、メダンの雨量は一、二、三月と六、七、八月とが少いことを記してゐる。いはゆる乾期にそろそろ入ったのである。わたしは毎日、出歩いてゐる。サドと呼ばれる馬車に乗るか、歩いてで、六月二十日の日付で「このごろ昼はケサワンのチップトップへ、夜は大東亜の向ひの中国人の家へ散歩にゆくのが習ひ」だと書いてゐる。ケサワンは前にも書いたオランダ人街の一番賑やかな通りだが、チップトップは喫茶店で、七月八日には閉店と記し、閉店のわけは主人に問ふと、「お客はあなた一人だから」といふことであった。将兵は軍規によって指定された店（昭和二十年以後のオフ・リミットに当る）以外にゆくことを禁じられてゐるのをわたしは知らなかったのである。大東亜といふのが、その指定の喫茶店でいつも兵で満ちてゐたが、わたしは却って行きづらかった。将校用の偕行社といふクラブが開かれたのはも少しあとか、わたしは多分あの後輩の少尉にさそわれてその自転車のうしろに乗せてもらひ（わたしは自転車に乗れないのだ）、行って玉を撞いた。三十五か四十といふ最低の点であったが、撞いてゐる中に、イギリスの国歌が聞えた。わたしはすぐそれに気づいて少尉に云った時にはもう終ってゐた。オーストラリアからのラジオ放送ででもあったらうか。わたしはラジオの聞えた室へ行って、ジョンゴス（ボーイのこと）をなじったが、答は懸命で「そんなもの聞いたことはない」一点張りだったので、わたしが我を折るよりしかたなかった。（わたしは今でも聞きぞこなひでないと思ってゐる）。役に立たない軍属であるが、わたしの属してゐる宣伝班といふのは、かういふたぐひの仕事をするのだと思ってゐた。

やはり六月の末にまた仕事があった。東海岸州の土侯を集めて、新聞記者が会見し、記事をとる。ついてはお前も行けといふことであった。わたしは半袖半ズボンのカーキ服に軍刀を指して、朝日、毎日、時事通信の記者たちと東海岸州の知事官邸に行った。定刻にあらはれたのは、スルタン、ラジャの称号をもつ東海岸州の土侯またはその子で、みな黄金の短刀を佩び、顔立ちも貴族的であった。土侯の地位や収入についての質問のあと「大東亜戦争の意義についてどう考へるか」といふ質問に、一等賢明な顔をした土侯が答へた「われわれはアジアがアジア人の手によって治められることを希望し、大東亜戦争の意義もそこにあると思ってゐる」といふことであった「日本国民に訴へることがあるか」と聞かれると、デリーのスルタンの子が答へた「出来るだけ教育をして貰ひたいから、宜い教師を送ってもらひたい」。わたしは日本で教師をしてゐた時の経験を思ひ出して嘆息した。（今だにわたしは教育は苦手である）土侯たちは自分の領民の無智をいって、これはオランダ人が教育をしなかったからだといふのだった。蘭領印度には一つの大学もなく、オランダ語もなるべく教へず、従って州の長官、分州の長官、警察署長などはみなオランダ人だったといふのである。わたしはこの慣習が改まるのには時間がかかるだらうと嘆息した。この嘆息は日本が負けてインドネシアが独立国となる日を予知しなかったからに相違ない。愚かなことはわたしの方がひどかったわけだが、インドネシア共和国でわたしの見たこの土侯たちがいまどうしてゐるのかは誰も教へてくれない。

ゆめみこたちの群像（三）

山田俊幸

二人は寮へむかって歩いてゆく。坂の登りも苦にならないくらいに、二人の心は軽い。

ローラをやっと手にいれた勝利感が二人を陶酔させる。坂を登る。楽な登り。そのとき、ミチの心をかすめたもの。「ローラは手にした。さて、どう処理するか?」シゲの権威―→失墜！ というのも、二人は寮の無聊より、底知れないおそろしい伝統、暴力の触手を以て迫るのを知っているからだ。向陵の伝統、それは青空を遮ってまで空中に屹立するものだ。そして、それは「城を枕に討死する」という古代英雄主義的決心をも強要する。勿論、その硬派的精神は、女優のポスターをはる、などという軟派的行動を許すわけはない。二人はこの伝統の前にすくまされつゞける。

――貼っといて、おこられてから、とりゃいいぢゃないか?

シゲのいい方はいつものように行動的だ。

――そりゃ、そうだけど。

ミチのいい方はいつもこうした受け身のいい方である。

――かまふもんか。要するに早く貼っちまえば、それだけ長い時間貼っておかれるんだろう。

――だけど――。早く貼れば早く見つかって、それだけ早く剝すようになって結局同じさ。

――そうでない。大丈夫さ！

そういいながら、二人は寮の中へはいってゆく。そして、「折角だから、とに角貼らう。」ということに話はきまり、ローラのポスターをひろげる。ミチへそれは笑いかける。その微笑、今となっては寧ろ憎悪の念さえ湧

野うさぎ

福地邦樹

野うさぎは魔女の化け姿だとも言い、捨てられた女はうさぎに化けて、男をのろい悩ますのだともいう。また野うさぎは毎年性を変えるとさえ言うそうだ。

僕の一家は、終戦後の食料難のころに、野うさぎを五、六匹飼っていた。それかあらぬか、野うさぎを飼っている間、僕ら一家に良い事は一度もなかった。中学から帰るといつも餌とりに行った。茶色い野うさぎは白うさぎにくらべてずっと気が荒く、春の発情期にはことにひどくなる。子をうんだばかりの母親が、自分の子を踏んづけて知らん顔していたりした。僕らは乳離れするかしないかに大いそぎで別の小屋に移したものだ。父が時々、金槌で頭をぶっくらわして皮をはぐのを、僕らは息をのんでみていた。二三日うさぎの肉ばかり食べた。

父は失職していて、兄弟のうちで働ける者はみんなアルバイトをしていた。母はミシンで椅子のカバーを縫っていた。僕は小学生を三人ほど教えていた。いつもみんないらいらしており、仕事をしない父を、七人の子供達はなじった。父は余り弁解しなかった。僕らがうさぎの餌とりをサボると、父がとってきて与えていた。

結局二、三匹たべただけで、殺すのがいやになった父は、どこかにやってしまった。その後にわとりを数羽飼ったが、餌をやりすぎて肥えてしまい、殆ど卵をうまなかった。その鶏も、近所でつぶしてもらって食べてしまったと思う。そうこうしている内に、父が職にもどり、我々兄弟もアルバイトから遠ざかっていった。

以後、僕のうちでは動物を飼ったことがない。動物を可愛いと思う素朴な気持は、あの時以来失われてしまったのである。

きあがらせる。ミチは、おこるまい、と思う。ローラは生命を失っているのだ。二人は、丁度電燈の光線が直接に壁へ投ずる所へローラを貼りつける。

ミチは思う。「あのセニョリイタでなかつたローラ、畢竟、寮はパラダイスにならなかつた。が、寮の壁の浪漫的な色彩増加の事実、誰も、否めまい。陶酔。悦楽。屢し眺めて、寝にゆかう。」

次の朝、いつもどうり、窓から教室へ、日々の課業がはじまる。〝巴里の屋根の下〟に出た俳優の一人に酷似した外人教師がやる、〝嘆きの天使〟のラストシーンにそっくりの教場の授業がおわると、二人は教場をとび出し、ローラの待っている寮へ帰ろうとする。そのラストシーンを立原は次のように書く。

寮へ、ローラの居る寮へ、帰らう。突貫する。

が。椿事――アクシデント！　或る日の事故。数日の平和、ローラ、微笑。

いふまい。ローラがやぶれたのだ。伝統の魔手？　否。友人の失策！

この「やぶけたローラ」は、茂雄と立原の間に事実起ったことを書いたものであろう。立原が茂雄に宛てた手紙にある「ああしたことは僕の性に合はないのかも知れません」という一文を見ても、茂雄と立原の間にはこの小説に関する共通の話題がすでにあったものと思われる。

小説の中に整理された茂雄像は、頭脳明晰・冷静沈着といった像であり、しかも行動的でもある。勿論、この像をたとえるならば、快盗ルパンのそれであり、シャーロック・ホームズの非行動的な人物像ではない。茂雄（シゲ）の行動や言葉は、人が躊躇しているうちに先に決断を下し、または断定的に決断し、人をぐいぐいと自己のペースへまきこんでしまうような行動である。そして、ここに定着した立原像（ミチ）は、疑問提出者ではあるが、常に受け身になっており、決して問題解決者とはなりえてない。現実としてもこの二人には各々同じ傾向があったものとみてよいであろう。後年、立原は茂雄を「ペダンテイックな所がある」（田中一三宛書簡）といっているが、茂雄の性格の原像が、ほゞこんな所にもみられる。若い国文学徒として国学院大学内に波紋を残して大陸へ死んでいった行動的な青年と、常に受け身の愛情で――堀との訣別と云う事件は勿論考えねばならないのだが――育っていった詩人の姿が、対照的に、むしろ正負のつりあいのとれた形として、この「やぶけたローラ」には定着している。

このように、多面的な立原の茂雄観は「やぶけたローラ」にみられる。しかし、昭和八年ごろ成立したとしても、この二人の像は極めて初期の像であろう。第一高等学校一年か二年の像であろう。この間の二人の交友を記した回想記もほとんどない。しかし、角川版五巻本「立原道造全集」の月報に、たった一人だけ二人の交友を記している人がいる。

大学にはいるとそれが女性との恋愛にかわるが、それまでは同性と恋愛めいた交遊があった。戦死した松永茂雄との手紙のやりとりなどは、文学的でもあったが、まるで女学生との手紙のやりとりのように、甘ったるくて見ていられなかった。（T・I「一高時代の立原道造」）

この記事は実に興味ぶかい。この記事を当時の立原の日記と見較べるとき、この何でもない一文が立原と茂雄の交友のかなり深い所をついている事を思わずにはいられない。

「やぶけたローラ」を書いたと同じ昭和八年、立原は日記に次のように書きこむ。

七月二十日

僕はその夢の中でずゐぶん幸福だつた。目が覚めてからしばらくの間は、それからそれへと、まるで過去のなかに生き返つたやうにぼんやりしてゐた。（松永のかげのささない僕の生活！　それを今日思ひ出してゐたのだ）いつもの例で夢はノートしなければならないと思つてこのノートをとつたとき、けれど、それはもう滑り去つて行つた。ぼく考へるにこれ程の夢の作る気分がこんなに思ひ出させるといふのは全く蚊帳のおかげであらう。また夢のなかに記憶をしのびこませようと思ふには入口が見つからない。

これは立原が、当時書きつゞけていた夢を記録した日記の一節である。この文章とT・I氏の回想とを見くらべる時、立原の中に松永がどのくらい深くはいりこんでいたか判るであろう。「松永のかげのささない生活！」そして、松永のかげのささない生活が幸福に結びついている、という事実。立原は茂雄が自己の内部にくいこんでくるのを享受しているわけではない。しかし、松永から解放されたい、と願う反面、茂雄をはなしたくはない、とも思う。「松永は横山正一君が好きなのだ。だからローマ字なんかをやつてゐるのだ。」そうした懸念のために、立原は茂雄を拒否することが出来ない。自分より頭脳明晰な茂雄。童話や新古今のことなどをよく知っている茂

太郎

浅田　二三男

(一)

太郎はどこへいったか
ちかくの山の
笹や雑草の
道もないさぶしいところで
夜露にぬれながらの
まんじりともしない
毎夜つづいているのか
お前がぐっすりねむれるのは
私の寝床のなかの
私のかいなの上であった
お前の足が
心地よく私のわきばらをつき
その晩は
じつにだらしなく
仰向けになってお前はねむった
としよりたちが死んで
私たちが一キロへだてた家で
寝おきするようになって
太郎の姿を見かけることがなくなった
日に一度ごはんを運んでやるのだが
もういくら呼んでも
お前は私の前にあらわれなくなった
食器に入れたごはんも
そのままなのを見ると
私は胸がいたむ
――うちの主人はどこへ行ったのだろう
と　しかしお前はお前で思っているだろ
不思議でならないだろ
突然姿を見せなくなった
二人の主人夫婦のことを
お前はうらんでいるかもしれない
しかしそれはしかたがないのだ
家につくといわれている
ネコが人間につき
人間よりネコのことで
胸一ぱいな私は人間なのだ

果樹園　一五七号　昭和四十四年三月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価四十円　送料二十円

果樹園

第157号

静雄十七回忌特集

書簡十二通　伊東静雄
伊東静雄研究(三)　小高根二郎
夜の葦　伊東静雄
宮城賢
ロセッティ小曲(一)　森亮
思想長沼静人
禹の治水浅野晃
スマトラ記(五)　田中克己
に　お　い　沢田閏
愛　福地邦樹
節操吉本青司
ゆめみこたちの群像(四)　山田俊幸
甘柑が熟す美堂正義

書簡

（蒲池欽一宛一通　蓮田善明宛五通　長沼静人宛六通）

伊東静雄

昭和三年五月三十日

（京都より東京市京橋区東港町一二五　石原方蒲池欽一宛（はがき））

家の外は柿の花咲き
その柿に雀居る故え
そのことを心にもちて
さびしけど　さびしきまゝに
うら安う　夕の座にゐる

昭和十六年十二月三十一日

（堺市北三国ケ丘町四〇より東京市世田谷区宇奈根八二四蓮田善明宛（はがき））

お葉書有難う。大詔を拝してより後、こゝろまことに爽やかにゆたけく、十年の鬱屈（詩書く決心をして、やり始めてから丁度満十年）、今は雲散する心持であります。それにつけてもこの数年の、もつとも悪しき思想の時期に、挺身して、その支へになつた友人達を持ち得て、それに随伴して来た光栄を思ふこと切であります。ます〳〵御健昌を祈り、鈍根を導き給はんことをお願ひして、新しい年を迎へる慶詞にかへます。

昭和十七年六月二十九日

（堺市北三国ケ丘町一丁目四〇より、東京市世田谷区宇奈根八二四蓮田善明宛（はがき））

こんどは、桜岡君詩集の件について大へんお骨折いただいてありがたうございました。林君も桜岡君も大へんよろこび、あなたにお会ひ出来たことだけでも感謝してゐるやうにて私もうれしくあります。私は何だか、あなたにたのんでみたかつたのです。一番出版の可能性のうすい詩集のことなどおたのみして、それでもすまなく思ひます。

このごろいくらかづつ健康よろしく、夏になり方々の家が開放されて、世のさまも、ひとのくらしもあらはにあはれふかい時季やつて来て、私の詩心もすこしづつ快活になるだらうとたのしみにしてゐます。

昭和十七年十一月十八日

（堺市北三国ケ丘町一丁目四〇から東京市世田谷区宇奈根八二四蓮田善明宛（封書））

○お葉書ありがたうございました。拙詩同封します。これは、初め、いつの間にかわが身辺にさへ、戦場に行く友、故国にかへる友の、去来激しい近来の世想の思を歌ふつもりでやり出したのですが、中途からおきまりの恋歌にばけてしまひました。易きについたわけであります。

○弟は今朝早く大阪駅を通過、一、二日中に出帆します。それを見送つて行き、今日は学校やめにしてこれを書いてゐます。先年、あなたが戦場へ、ここを通過されたのをお送りした日のこと思出し、感慨深くありました。いくらにもならぬのに世のうつりかはりはどうでせう。

果樹園　一五六号　昭和四十四年二月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価四十円　送料二十円

四季第4号

詩　イヴァン・ゴル詩篇（訳）　堀口大学
村……田中冬二
愛……神保光太郎
遠い明治のお正月……伊藤整
マロニエの葉蔭……阪本越郎
純粋・歩く・トンネル……杉山平一
日向路にて・谿間……伊藤桂一
シャルル・ルイ・フイリップ　大木実
天へ・窓……塚山勇三
井田川……小山正孝
勝負の焼身・他（長明の散文詩）　小高根二郎
問い……新川和江
旅人・風景……山形幹雄
評論・随筆
未完
禽獣・虫魚・草木（連載）　杉山平一
ある夏のたより　山岸外史
対談「紅、燃ゆる」　丸山薫・河盛好蔵　堀多恵子
座談会「津村信夫」　丸山薫　田中冬二　鈴木亨　室生朝子
同人近況・会員作品

特大号
¥380
〒70

発行所　東京都千代田区内幸町一〜二〜二
株式会社　潮流社
「四季」編集部
振替東京　九一三七五番

雄。飛行機の話、定家の、スチーブンソンの話などを僕は何時間にわたってきいていたのだろうか、と立原はふと思う。そして、「僕は松永が好きなのに……」という思いに陥る。この立原の言葉が劣等感の裏がえしか否か、それには問題が残るであろう。しかし、いずれにしても茂雄の存在というものが立原にとって大きなものであったことは否めまい。

茂雄についてのエピソードを、また日記からひろってみよう。八月五日の夢である。

……やつと用意が出来ると、ちやうどよい具合に松永が誘ひに来る。一しよに行くのだがばかに足がのろい、寮務室のところに行くまでに可成りはなしをしてゐる。松永が、「鉛筆よりもえらい」といふことに就いて、何か言つてゐる。僕は、それに反対してゐる。松永が、「お姉様がかういつてゐる」とかいふ、僕「それは理窟だ」松永「さうぢやない」僕「いや、さうにきまつてゐる」例によつて僕は松永の不思議な理論にとりかこまれてしまふ。だからその中でブリブリしてゐる。何か大声になつて、言ひ合つてゐるのである。寮務室には大きなアメリカの旗がひらひらしてゐた。

（おしまひには何でも向つて来たやうだつた。腕で胸をしめて来たらしかつた。僕にはうまく抵抗で来ないのだつた。）

日本の心

対話　保田與重郎　中河與一

¥360

東京都中央区日本橋小舟町一ノ二
日本ソノサービスセンター

編集後記

十二月二十三日。十数年ぶりで祖師ケ谷に中河與一氏を尋ねた。その際、與重郎との対談集が近刊されるという話をうかがつた。元旦の年賀状の中に宇治時代に親しく交つた小島信一君の一葉が混つており、それに與重郎・與一対談集の解説役をしたと書いてあつて、おや？　と思つたが、考えてみればかけがえのない好乎の解説者であつた。二十四日に故堀内歴の夫人寿恵子さんから伊東静雄書簡一通、二十九日に阿川昔氏から蓮田善明の思い出をお送りいただいた。共に本号に掲載して恢諧もうしあげる。（O）

果樹園　第一五六号（毎月一回一日発行）
昭和四十四年二月一日発行
池田市石橋二丁目六ノ五
編集兼発行者　小高根二郎
大阪市東住吉区桑津町三の十八
印刷所　元市印刷株式会社
池田市石橋二丁目六ノ五
発行所　果樹園社
定価　四十円　送料　二十円

○私が東京に行くといふことは誤伝であります。しかし東京は都でありますから一度は住みたいと思つてゐます。その思を「文芸」の十二月号に詩にしてみました。ついでにごらん下さい。

○このごろは少し元気にて、筆まめになつてゐます。

○池田さんにどうぞよろしく。お大切にと申して下さい。

栗山さんはお忙しいことでせう。

十八日　　伊東静雄

蓮田善明様

注　1・「淀の河辺」
　　2・「述懐」ならん

昭和十八年二月二十八日

（堺市北三国ケ丘町一丁目四〇から、東京市世田谷区宇奈根八二四蓮田善明宛（封書））

速達すみません。津田氏はすでに上京した後でございました。とにかく気のすむやうさせて見たいと存じます。御迷惑なことながら、もしお宅に参上の折は、御引見の上適当に御指示いただきたく伏しておねがひ申上げます。

林君お邪魔に上りました由、本人からも大へん感激的な報告只今とゞいたところであります。どうか向後もよろしく御指導いただきたく存じます。

さて、拙詩集の件どうやら桑原氏の肝入りにて弘文堂より出版に、ほゞ決定いたし目下原稿整理中です。御配慮まことに感謝いたします。さて、文芸文化一月号にのりし淀の河辺同詩集に入れたいのですが、同号紛失し、困りをります。就いては一部速達を以て御恵送下さいますまいか、甚だお手数ながらおたのみ申します。

二十二日　　伊東静雄

蓮田善明様

昭和十八年三月一日

（堺市北三国ケ丘町一丁目四〇より、東京市世田谷区宇奈根八二四蓮田善明宛（封書））

○度々お便すみません。津田の件、まことに御迷惑おかけしました。私の家中が皆病気になり炊事から看病までする日が十日許りつづきお手紙する暇もありませんでした。どうぞもうお便、私の方まで下さらなくとも結構です。と申しますのは、代人ではどうもわからぬところあるし、決局母親が、二、三日中に上京することに相成りました。そしてお礼やら、何やら申上げ、又御忠言も承りに参上する筈です。先日上京したやうに申しましたのは私の誤で、その母親病気になり、中止してゐたのでありました。津田氏は、一ト月内に何度か上京するといつた風の家ゆゑ、気軽に出かける気持になるらしいのです。どうぞその節は、よろしく御指導下さい。大へんお忙しい頃と思ひますが、津田氏に恩義ある小生としては、さうおねがひ申上げたいのです。どうぞ私の無理きいて下さい。色々の事情その母親から直接申上げる筈であります。実は、その子を、私の友人に託したい気持を持つてゐる程の家であり、その子も悪い子ではないつもりであります。

○御文章、文芸春秋にのつてゐる広告見、さつき買つて帰つたところです。あんな雑誌が、御文章に紙面大いにさかざるを得なくなつたこと愉快でした。「これでよし」と私はうなづいたのであります。

○序の校正まだ参りません。参りましたら、お手許までお送りするつもりです。よろこびです。

○拙詩集は表題に困り

　春のいそぎ

としようかなと考へてるところです。それは光平の

　誰が宿の春のいそぎか炭売の重荷に添へし梅の一枝

からとつたものです。少し雅文脈すぎる表題でせうか、わかりにくい言葉ぢやないかとも懸念してゐます。興味おこりましたら意見知らせて下さい。尤も炭売の重荷はちと時勢違ひなれど、その心は中々いゝ歌と思ひますがどうでせう。

一日　　伊東生

蓮田様

昭和二十二年十二月十五日

（大阪府南河内郡黒山村北余部より長野県下伊那郡上久堅村長沼静人宛（はがき））

わたくしが果していゝ先輩かどうか自信はありませんが、お気が向いたらお作見せて下さい。特別な感想があれば、私もお手紙差上げたいと存じます。

今度の五篇は、皆清潔な感で好感がもてました。しづかな知的秩序感のやうなものがあると存じました。（原稿は、そちらでも一通づつは保存しておいて下さい。私がなくしてはいけませんから）

十二月十五日

昭和二十三年一月十三日

（大阪府南河内郡黒山村北余部から長野県下伊那郡上久堅村長沼静人宛（はがき））

御詩稿拝見しました。これら、野の逆光線と影の詩篇は、わたしの趣味とも一致し、又私が北の国の詩人によつて書かれるのを期待してゐたものに近いもので、私は大へん興味

Night Reeds

Shizuo Itoh

What would it be like, the moment the earliest star begins to shine?
Who was where to see it?

Way over from the distant swamp there is heard the rustling of reed leaves through the dusk,
And it is the lodging of now settled stars that I am looking up.

The one who was watching the moment the first star began to shine
Would have looked through around,
Surprised at the too much depth of June night darkness which stole over the earth unnoticed.

And tht reeds of that pitchblack swamp surely then began to sound afar toward the ears of that one.

Translated by Ken Miyagi

を覚えました。ゲオルゲにも夕べの逆光線の野の上に、花を摘む少女の姿を書いたもののあるのを御存知ですか。「山羊小舎」「かげ」「雪明り」「ま昼野」等は私自身も書いてみたい題材です。しかし、あなたの詩には、私に言はせると、まだまだよけいな不消化な「感想」が多すぎます。外部を観、ゑがくことが、そつくりそのまゝ内部世界の秩序を示すものでありたいですね。「山羊小舎」ではなぜ妻のことを書かねばならぬのでせう。めまひにたじろくと、いはずとも、小宇宙をなす山羊の光を完璧に書けばいゝではありませんか。嫉妬などといふ感想もいらぬことです。

「かげ」はずゐぶん困迷した表現がありますね。小学校の五、六年生にわかるやうな平明、淡如たる詩句を私は喜びます。

「雪明り」ただ絵としてお書きなさい。「ま昼野」も同様。セガンティニィの絵御存知ですか。アルプスの平原の光と影ばかり書いた絵書きを。

浪曼性などといふつまらぬ扁見はすてゝしまつて、小学生の生徒が水彩画をかくやうな態度でこころみてごらんなさい。私は大いに期待します。

今年の終りごろ、大山定一氏と二人で思ひ切つた編輯をして日本詩華集を創元社から出す計画です。仮題明星。

昭和二十三年四月一日

（大阪府南河内郡黒山村北アマベより長野県下伊那郡上久堅村長沼静人宛（はがき））

原稿拝受しました。益々透明な風景詩になつてゆくと存じます。「鴉の対話」が一番すきです（但し最後の四行がよくわかりませんね）「扉の前に」といふのは、肝心の扉といふのがわからず、理解出来ませんでした。

「冬ごもりから春の野に馬を引出す云々」のお手紙拝見しただけで、あなたのご生活想像され、そんなのを主題にして詩を書かれたらいゝなあと思ひました。

昭和二十三年九月二十一日

（大阪府南河内郡黒山村北余部から長野県下伊那郡上久堅村長沼静人宛（はがき））

お手紙とお作いただきました。大へんいゝ生活をしておいでになるやうですね。私は七月下旬より神経衰弱性の胃腸病ですつかり虚脱、無力の状態に陥り、この二、三日やつといくらか生色を取り戻しつゝあるやうで喜んでゐるところです。筆もつ元気出たら、又改めてお作の評お送りしたいと存じます。小生はこのごろ風景の詩にはすつかり興味を失ひつつあるやうです。（これはあなたの詩とは別問題です。）これが小生の中におこりつつある大変化です。

昭和二十三年十一月八日

（大阪府黒山局区内南河内郡黒山村北余部から長野県下伊那郡上久堅村長沼静人宛（封書））

十月にはお手紙とお作ありがたう存じました。今夜再びよみ返し、大へんいゝ感がいたしました。謙遜なお人柄や澄んだお目が想像されるやうなお手紙でありお作でした。私は、もつと、いつもお手紙したい心持でゐるのですが、毎日の勤めで身体が疲れてしまふのです。それに、私は新聞や雑誌や本屋に勢力がないので、いゝお作をどこかに紹介出来ないことが――そりやごくいゝかげんなところでしたらいくらもありませうが、昔の四季の程度のものがこのごろなく、私は、いつもすまないと存じてゐるのです。勿論、度々あなたにお会ひ出来るやうな場所に住んでゐましたら、そんなことも気にかゝらないですむのでせうが、かう離れてゐては、何かいゝ雑誌に紹介でもしなけりやあなたにすまない感じがするのです。お許し下さい。

風景詩に心がすゝまぬやうになつたのは、風景の中には逃避し易いからです。もつと人間や社会のまん中にゐたい気持がするのです。何よりも風景には一つも心が動かぬやうになつてゐるのが原因です。

ロセッティ小曲 (一)

森　亮

小曲は「時」の碑、
霊ゆるる汝が瞬間を
永遠のいのちに返す
（来しかたの悔い新たしく
ゆくさきの希ひを籠めて）
豊けくも　こごし歌くち、
夜・昼を　白き牙に彫り、
黒檀の堅きに歌ふ。
小曲は銭貨にこそあれ。
表には　こころの額面を
打たせたる　裏銘の権威の、
「生」なら　世にはばからむ。
「愛」ならば　恋ひぢの路銀。
「死」のぜにならば　冥府の幣ぞも。

「生の家」序歌

しかし、これは、あなたの風景詩が面白くないといふ意味ではありませんから誤解しないで下さい。あなたの今のご生活では、風景詩書くなといふのは酷であり、無意味と存じます。自分に充分わかつたものだけしか詩にはならないのです。

私は五月ごろから少しも書けません。根抵的な転機を感じてをります。夏の病気も、その転機が身体の上に現れたものと解釈してゐます。

いまあなたは大へんお忙しい時期と存じます。何か返事しなければいけないなどと気をつかはずに下さい。

どうぞ、ノートにこつこつと詩書き溜めておいて下さい。着々と、気永に確実にご自分の果実をとり入れて下さい。

十一月八日　伊東静雄

長沼静人様

昭和二十五年八月十七日

（大阪府南河内郡長野国立病院北病棟から長野県下伊那郡上久堅村長沼静人宛（封書））

お手紙と御詩ありがたう。お元気に労動（ママ）と詩作の御生活何よりです。私は昨年の夏から胸の病気でこゝに入院。幾度か危険に陥りつつ、そのたびにアメリカの新しい薬に救はれつつ昨今は少康をえて喜んでゐます。仰けになつてかく文字、失礼。

伊東静雄研究 (三)

小高根二郎

しかし佐賀時代の静雄はあい変らず目立たぬ存在ぶりを続けていたのである。そのひっそりとした生活ぶりを、彼自身つぎのように述懐している。

「だいたい高等学校の生徒みたいな特権階級はない。学生は大学生にいたるまで、みんな特権階級だけれど、高等学校の生徒ときたら、天下におれほどえらい人間はないというような顔をして、大きな下駄をガラ〳〵いわせ、腰に手ぬぐいをつったり、わざ〳〵やぶれた帽子をかぶったりして、肩をいからせて、へいげい闊歩している。ぼくは高等学校のときも、そんなんじゃなかった。ぞうりなんかはいて、すたく、めだたぬように歩いて、すみっこのほうで、ひとり、ひっそりと、ゆめみている、そんな生徒だった。」（昭和二十八年「祖国」七月号）（池沢茂―詩人とサラリーマン）

事実、卒業記念写真の中の静雄はすり切れた藁草履をはいている。クラスの群像の中心ではなく、最前列の右端っこに腰をおろし

て、放恣にその足を投げだしている。その写真の余白には、「大志」とか「理想」とか、青春の反吐ともいうべき月並な語録が一人一句の割で書きこんである。静雄は草履の先っぽのところに Ich bin einsam（俺は寂しい）と書いていた。先の述懐のように「ひっそりとゆめみている」のであろう。

こんな静雄を、諫早出身の佐高教授酒井小太郎は次のように観察している。

「私が伊東君を知ったのは、私が佐賀の高等学校に教鞭をとってゐた頃からで、性格も非常に穏やかな、やさしい人だった。…中略…佐賀の学校にゐた頃は、そう出色するやうな人ではなく、全てが地味でそれにのん気なところもあり、ゆうゆうとして、迫らないものがあった。高等学校時代から独逸文学には、非常に愛着をもってゐたやうであった。」（昭和二十八年六月発行「河」酒井小太郎談話―伊東静雄君について）

ちなみに、酒井教授は諫早の輪内名の出身、五高を経て東大英文科を明治三十三年に卒業した。高校、大学を通して小泉八雲に教えをうけ、八雲が優秀な卒業生に贈った八雲賞―シェンキヴイッチ全集を貰った秀才であった。

又、小・中学を通して静雄と同期であった陣ノ内は、今までと違ってきた伊東を次のように語っている。

「彼が佐高在学の時、夏休みに一度栄町（当時の田町）の友人宅で、伊東と落合ったことがある。ノートに短歌をいっぱいに書いたものをみせた。弁護士志願の彼には珍らしいこととして、わたしはうわの空で、伊東の短歌を話をきいていた。…中略…。佐高時代の短歌の勉強が、伊東の詩魂を養ったのであろう。」（同前）

ここに初めて歌人としての静雄が現れる。ノートを短歌で埋めていたほどであるから、相当熱心に制作をしていたものと見ねばなるまい。「ひっそりとゆめみて」制作をしていたのであろう。この日、静雄はどんな短歌の話を陣ノ内や友に語ったのか不明である。筆者は、島木赤彦を中心にして、その他の歌人の話に及んだのではないかと想像する。というのは、静雄の佐高時代の歌として判明している二首の中の一首には、赤彦の影響が顕著に感じられるからである。

3

近頃の淋しき人は皆来れ一つ火かこみて
語りあかさん　　静雄

この一間（ひとま）まいばん頬を寄せ馴るる火鉢ひ

長沼静人詩集
もうひとつの神話
戦中、キスカ島、五島列島福江島に転戦。戦後郷里信州にて農耕後東京に移住。現在フランスペッド転員組合長として活躍する著者の二十年間の結晶。
¥300
東京都世田谷区玉川用賀町二―二〇
白土社

とつはかはゆかりけれ　　赤彦

静雄のこの短歌は、酒井教授の長女安代宛の書簡（昭和二年十一月二十三日付）に、佐高の不知火寮で詠んだ歌と書いている。赤彦の歌は、明治四十五年秋、木所茅場町の伊藤左千夫宅にあったアララギ発行所で詠んだものである。歌ってある主題は、一は火鉢の「一つ火」、一は「火鉢ひとつ」であり、それを中心に、静雄は淋しい寮友たちを呼び、諏訪から上京してきた赤彦は在京の同人たちと頬を寄せ合っているのである。まったく同じ趣向の短歌であ

る。

しかし、この一首だけの趣向が似ているというので、静雄が赤彦の影響をうけたと断定するのはいささか軽率である。又、次の歌にも相似性が感じられないであろうか？

頬にあてそのつめたさに驚けりかくも冷
えしかいとほし我が手　　静雄

夜寒の手栗を焼きたる真白き手さびしか
りし手うれしかりし手　　赤彦

静雄大正十五年、（十月二十四日付酒井安代宛書簡）赤彦は前と同じく明治四十五年の作である。前者は「いとほし」と純一にいい、後者は「さびしかりし…うれしかりし…」と感情をゆさぶっているが、手指に寄せる切ない自己愛憐であることには変りがない。

この静雄・赤彦間の相似性を看破したのは、別に筆者の鑑識力ではない。ひところ静雄が赤彦に傾倒していたということを、静雄の京大時代の文友・宮本信治（当時同志社高等商業学校生徒）

思想

長沼静人

世界地図をひろげる
どこにもしかし
竜はみあたらない

多色カラーで分類された共同体とその部落
指が少しづつ痛みはじめる
詩のための詩をかかなくなった指だ
だからといって勿論

竜が月に逃亡しているはずはない
この朝
人間にしたい仕事が存在する限り
湖水の底にたった一滴の水を残す限り

もういちど石との対決は考えなくていいか
ひょっとしてどこかで
竜が
永遠の影になりかけているとしたら

よく眠っておかねばならぬ
釘をいっぽんおれは
寝台の脚に打ちつける

から聞き知っていたからである。前掲の「一つ火」の歌で、静雄の赤彦への傾倒がすでに佐高時代に始まっていた事実が判明するのである。

静雄はこれら赤彦の歌を中村憲吉との共著である『馬鈴薯の歌』で読んだのである。同著は大正二年にアララギ叢書の第一編として出版されたのだが、佐高二年の大正十三年に重刊されたので、入手も容易であったであろう。さらに佐高三年の昭和十四年には『自選歌集十年』が刊行された。さらに親炙するのに便利であったに相違ない。まさに純白といっていいほど感受性のある青春期に、馴れ親んでしまった赤彦が、その後の静雄にさまざまな影響を与えたとしても別に不思議ではない。

それは

「いつの間にか識閾の下に心理の幾何図とでもいふ様なものが出来上つてゐて、何かの景色を見た時など、大仰に言へば宿命的に、愛情みたいな孤独感がその歌をふいと思出す……」（昭和十三年「新日本」十二月号、伊東静雄―沙畑清誓の歌）

この思い出した歌が、静雄のイメイジの形成や彫琢の過程において、想い設けもしなかった決定的な要因となった場合もありうると想像される。

そのもっとも顕著な例は、静雄が「播磨国

原」と題してへ穏つづく山脈彼方の空あかりやがてひそかにきゆるなりけり〉という歌を詠んでいることである。（昭和二年十月十七日付宮本新治宛書簡）この題名の「国原」は、実は赤彦得意の言葉の一つなのである。

げんげんの花の国原つらぬける川の行へや天路霞めり
夕ちかき雨のあがりに国原の麦の黄ばみは早くうすれぬ
国原をのぼる汽車おそし雪のうへに梢あらはるる樣の枯葉
旅籠屋のうらより見れば森おほき安曇国原暗くこもれり
わたる日の光寂しもおしなべて紅葉衰ふる古国原に
行きゆきて寂しきものか国原の土に著くなす低き家むら　赤彦

静雄は赤彦の「安曇国原」から、明らかに「播磨国原」を思い付いたのだ。

又、静雄はその頃「枇杷の花」を歌っている。（昭和二年十一月酒井安代宛書簡）これは赤彦の「唐茄子の花」からひねった……といわれても仕方ないほどよく似ている。

うつそみの蜂はたまたまますがりつつつひにわぶしき枇杷の花なり　静雄
暗しくらしかの唐茄子の花底に密吸ふ虻もくさり居るらん　赤彦

蜂のたまたまの哀訴をも寄せつけようとせぬ枇杷。すでに花芯まで虻を許しながら希望の光を与えぬ唐茄子。共に花の無情さに発想をえているところは同じだ。

又、赤彦のけだるい夏の汽車が、年月を経てから静雄の冬の汽車となって、うたた寝の夢の代りに、天国からのことづけ物を運んできたとしても、別にけげんではない。

暑苦しく寝ころびて居れば汽車の響きとろとろと来る日も腐るがに　赤彦

大川に張つてゐた氷が解けはじめた。鉄橋のうへを汽車が通る。
さつきの郵便でかれの形見がとどいた、
寝転んでおれは舞踏といふことを考へてゐた時。
……
おれはこの小匣を何処に蔵つたものか。

気疎いアロイヂオになつてしまつて……。
鉄橋の方を見てゐると、
のろのろとまた汽車がやつてきた。
詩集「夏花」「若死」

青春の日に静雄の心に投影した赤彦は、「夏花」の壮年期にも消えていない。それはさらに「反響」の晩年期にもくっきりとした陰影をつくっている。

ちようちんのうすき明りは足のへに落ちてゆすれぬ霜のけはひを　赤彦

わが歩みにつれてゆれながら
懐中電燈の黄色いちひさな光の輪が
荒れた街道の石ころのうへをにぶくてらす
……
光の輪のなかにうかぶ轍は
昼まより一層かげ深くきざまれてあり
（詩集「反響」「帰路」）

赤彦の提灯の光は霜柱の投影をさぐりだしているし、静雄の懐中電燈の光は轍の陰影をえぐりだしている。霜柱と轍の差こそあれ全

く同じ着眼である。

この静雄の赤彦への傾倒はどうして生れたのであろうか？　それはあくまで個人的な嗜好というほかない。佐高時代に馴染んだ前掲の「馬鈴薯の歌」の歌々から一歩進んで、京大時代には「赤彦童謡集」やら「馬酔木」に掲載された童話「萱草の花」まで覗いたのではないかと想定される形跡がある。その詳細は後述するが、その証拠の一つとして、「赤彦童謡集」序と静雄の「現代詩集」序を左に掲げる。

「此の童謡集は、小学校から中学校高等女学校初年生あたりまでの少年少女諸君によんでいただくつもりで出しました。…中略…著者は素朴な少年少女を好みます。この本は皆さんを浮き立たせません。花やかな歌は一つもありません。そのつもりで読んで下さい。あまり口早やでなくそろそろと読

禹の治水

浅野　晃

黄金の赤い夕映を見るべく
空はあつた
いちばん遠くにある星を見るべく
空はあつた
いつさいの水を切つておとすべく
堰はあつた
また抑へて放たないためにこそ
堰はあつた
雷よ
われを打つて過ぎよ
われ戦ひに得耐へぬものなら
われを打つて過ぎよ

雷よ
われを仆して過ぎよ
われ勝利に得耐へぬものなら
われを仆して過ぎよ
母なる大地は黙々と
深夜の揺籃をゆさぶつてゐる
彼女の光栄はつねに
男子を生み得たといふことだ
いかに新鮮な文明論を携へてゐようと
雷よ
また卓抜な未来学を準備してゐようと
雷よ
天は日をめぐり行かせ
低きに流れる水を地は
大海にまでみちびく
彼女は季節に従順に生みつづける
尻をふることと吼えることしか知らない
鬼火の時は過ぎる
甘やかされたものと甘やかすものとの
荒廃の時は過ぎる
男が男であることで
男があることを証しさせよ
男子にとつて母であることが
女が女であることの証しだ
禹は十三年
門を過ぎても家に寄らなかつた
禹の妻たちも十三年
空閨を守つて変らない。

んで見て下さい。」（大正十一年四月、古今書院刊『赤彦童謡集』序）

「現代の雑多な印刷物になれすぎた眼が、あまりに性急に読まねばいいが。」（昭和十五年一月、河出書房刊『現代詩集』第二巻『反響』序）

積極・消極の差こそあれ、まさに酷似といっていいほどそっくりな序の言葉である。さらにそっくりな例をあげれば、静雄の長男と赤彦の四男の名は同じ夏樹である。伊東日記の昭和十八年八月三十日の項に、静雄の夏樹命名の次第が見えている。「夏樹と命名す。これは数日前物故した藤村の春樹といふのがいくらか頭にあった」。藤村と同じく信濃を故郷とする赤彦……。春樹に次ぐ夏樹を脳裡に思い描いている静雄に、赤彦の四男の名も案外識閾の下から働らきかけたかもしれないのである。

ここに静雄の赤彦への傾倒ばかり論じてきたが、決して一辺倒ではなかったのである。宮本新治の語るところによれば、赤彦の他に長塚節や木下利玄も好尚した由である。節・利玄との交渉に関しては「作品鑑賞篇」で主として触れるつもりであるが、佐高時代のも一つの短歌（昭和二年十一月二十三日付酒井安代宛書簡）

日に一度御館の山に祈るこそ二十の我の日課にてありき

は、静雄以外の誰とも交渉のない、まさしく彼自身の歌である。この歌を載せている酒井安代宛書簡には、帰省をすると毎日四面宮を祀っている御館山に登り、その岩場に立って祈ったと書いてある。その歌の前後には、「若者らしい苦悩」とか「感傷」などという言葉が見えているが、彼はいったい何を、誰のために祈っていたというのだろうか？　彼は二十の身空ですでに感じていたのではないか？　生れたときにすでに負荷されていた運命という重い負いめを……。

川副国基はさすが諫早生れの国文学者、その負いめを適確に言い当てている。

「感性の上では生れ故郷のこの地を死ぬほどに愛しながら、しかも理性の上ではこの土地の気風をきびしく拒否せねばならぬという二律背反のなかにかれらの自己形成はとげられたと見られる。わたしは寧斎のあと、伊東静雄の上に強いこの悲しみを見る……」（同前）

（つづく）

スマトラ記（五）

田中克己

話は前後するが、わたしは宣伝班支部の軍属四人のうち、月給が最高であった。理由はわたしが多分、最年長の上、東京帝大を出てゐたからである。東大紛争のまだすっきりしない今、このエリート意識と待遇とにはわたし自身も考へることが多い。いくら貰ってゐたかといふと、戦地加俸を含めて四一〇円であった。今のいくらになるか比較の方法もない。うろ覚えでは大尉より上、少佐より下のところだった。支部の食卓にはじめて坐った時、最高の席についた支部長は下手な英語で現地人でただ一人この食卓につくことを許されてゐたメナンカバウの通訳にいった「月給では田中の方が上だが、わたしがここの長なのだよ」と。なぜそんなことをいはねばならなかったか、わたしにはわからなかったが、わたしは「その通り」と神妙な顔をしてゐた。軍人では軍曹が一人ゐて、これがわたしのま向ひの席につく。この軍曹はわたしのメダン着任すぐ、わたしに「兵隊で悪いやつがゐたらわたしにいって下さい、ヒドイめに会はせてやります」と好意的にいってくれた。その

兵隊は三木上等兵のほか、石川仁太郎上等兵と平井忠治一等兵、谷村泉一等兵であった。三木上等兵はちがふが、あとはなぜ宣伝班に廻されたかわけのわからない良い兵隊で、ひっそりとしてゐる。二人の一等兵はおほむね炊事に廻ってゐたやうだがその補助として、バタク族の青年が二人ゐて一人だけはアブと名を覚えてゐる。そのほかにいつのまにかジャバ人の美人がゐて、わたしはこれを支部長（口ひげをはやしてゐた）の専属だと察して、ろくに口もきかなかった。もう一人、洗濯、掃除の女中が雇はれて来て、何族だったか、日本人の妻で子供を二人こさえたが、戦争直前に追放された夫の帰りを待ってゐるので雇ったといふことだった。

このお掃除さんにわたしはある日、大分上手になったインドネシア語で笑談をいった。自分を指して「トワン・チャンテー（美男の

におい

沢田閏

ある日　ふと
両腕をかるくかかげてアンダーシャツをぬごうとして
その両わきのあたりが毛唐の女のようなにおいをたてたから愕然とした

地下鉄に乗っても
シャンゼリゼを歩いていても
パリはそこらじゅう　オー・ド・コローニュのにおいでいっぱいである

いつだったか
ソビエトの女たちといっしょの宿で合宿していたころ
廊下も洗面所もフロ場も洗濯場も
スラブのにおいがいっぱいで（わあ　そいつがたまらねえ）閉口したものだ

ナイジェリアの女の横に寄ると
硫黄温泉のようなにおいが　ぷんと鼻をついて
口のわるい仲間が「いっしょにつきあってると万病が快癒するだろうよ」と言ってくれた

だからといって
パリジェンヌのように
どこもかしこも　いいにおいいっぱい　というのもどうかな

それでもおれは　町の銭湯に行ってオー・ド・コローニュをつけ
毛唐のようにピカピカ光る金髪のための油を
黒髪にぬり
鏡にむかってニヤッと笑う

チーズのにおい
オー・ド・コローニュのにおい
皮靴のにおい　毛皮のにおい
とうもろこしの葉を紙がわりに使って巻いた「ポワイヤール」という煙草のにおい
便所に行っても　おれの宿の長男の十八歳の少年のにおいは
おれよりもずっと強い

おれは今夜
ブタの足の丸やきを食った
その形とにおいに胸くそわるくなりながら
こうなれば　ええいままよ
においのますますにおいたつこの国で悶絶してみせようか
おれは

旦那)、トワン・マニス(すばらしい旦那)、トワン・バグス(善良な旦那)」といったのである。彼女はにっこりして、このことばをくりかへし、その後はわたしの室へやってくると、挨拶にこのことばをいうやうになった。それはよかったが、いつからかわたしは彼女がわたしの室に花瓶をもって来て、毎朝、花を生けてくれてゐるのに気がついた。気がつくと、わたしはすぐ、「花は好かない」と叱りつけ、彼女は悲しい顔をして、笑談をいはなくなり、次に気がつくと、軍曹の室へ花をもってゆくやうになった様子であった。この好意はむくはれたか、わたしの場合と同じくむくはれなかったか——わたしは全然知ってゐない。(わたしが支部長になったころには、彼女はもうゐなくなってゐた)。

も一つ話す。支部の隣りは同盟支社でよく遊びに行ったが、さらによく遊びに行ったのはその隣りの毎日支局で、故篠原支局長と桐山真さんの二人と妙に気が合ったからだが、この支局に阿美といふかあいい華僑のお茶汲みがゐた。これが美人の上にとても賢い。わたしのインドネシア語で十分に意が通じるし、二氏の留守の時でも、お茶を飲ませてくれた。この阿美がある日わたしに女友達を紹介するからと日時を指定した。わたしは笑談かたがた「日本人を友だちにもちたい中国人のむすめさん」とデートした。もとより阿美立会ひの上であるが、一目見てわたしは絶望した。阿美のやうに賢くなく、顔つきから見てインドネシアと華僑のあいの子で、わたしの好かないタイプだったからである。

先に述べたわたしの月給四一〇円はシンガポールを出る直前、宣伝班の主計下士官にもみ手をして六月分を前借りしたが、その際たのんだ給与通報は一向に来ない。近衛師団では、この書類が来なければ一文も払へないことになつてゐるので、わたしはだんだん困って来たが、タバコ代だけはシンガポールへ帰るまで何とかしてゐた(毎日支局で三十円借りたが返したかどうか)。もとより金のかかる女友達どころではなかったのである。

ついでにも一つ話すと、六月から七月かに師団の慰安所が出来た。慰安所といふのは、外地へ行った兵隊ほとんどが知ってゐて話さない軍関係の設備である。日清、日露、第一次世界大戦の時にあったかどうか、日中事変で現地人の女性を将兵が犯すのを防ぐために出来た売春施設である。メダン市の東のはずれだったかに出来てゐるといふので、ある夜わたしは行って見た。浴衣を着た女性がゐたが、訊ねると半島の女性で、しかもわたしに偶然当った女はわたしを軍属と知ると「南方の軍関係の仕事をさすとの募集に応じて来て驚いた。わたしはちがふがこの中の二人は処女で、お国のためになり、お金がもうかると勇んで応募したのだ」といふ。その「わたし」は学校へゆく子供があるが、こんな恥かしい仕事をしてゐるとはゆめにも云へないから、便りもしないといふ。わたしはその子の名と住所とを教へてもらって「あなたのお母さんは南方(スマトラとかメダンとか書いてはいけない)へ安着し、お国のために働いていらっしゃるから、坊やもしっかり勉強して下さい」とハガキを書き、東京の妻へのハガキと同じく「投函」、といひたいが、実は軍曹の印をもらって、師団の郵便係りに廻した。このハガキが着いたかどうか、わたしが二度と会ひにゆかなかったこの女性が子供と再会したかどうか、わたしにはわからない。戦争は多くの罪を造るが、ここでもわたしに無力無恥卑怯といふ罪を犯させたのである。つひでにいふと、この施設は午後三時?までは兵、そのあと下士官、夜は将校ならびに将校待遇に開放されてゐて、相手はかはるが、女は同じ、ただし売春価格は兵が安く、将校が高いことになってゐた。バカにもほどがあるではないか。

愛

福地邦樹

愛は樹間をわたる風
いま吹いていて
もう次の瞬間に途だえていたりする
男のそれが栗の花なら
女のそれは蕗の葉だ
いや愛は　とらえたら
もう決してそこに居はしない
かと思うと　思わぬ時に
ひそかな野原に吹きわたる

節操

吉本青司

教育長は同期生だが
退職願を持っていくと
しばらく預っておくという
〈教育界に絶望——〉
理由書のことばである
同僚から声があがった
父兄からも出てきた
いま辞められては困る
停年までは辞めないでほしい
でも
抜いた刀は納められない
と答えておく
一騒動起りそうだ
自由だらけの世にも
意地をつらぬく自由は
与えられないのか

ゆめみこたちの群像(四)

山田俊幸

立原が茂雄について「やぶけたローラ」を執筆していた昭和八年には茂雄は一高を中退していた。松永兄弟の御母堂、松永よし子氏にうかがった話では、茂雄は一高一年の寮生活中にすでに一高をやめようかどうか迷っていたという。汚ない寮で南京虫にかまれ、ひどい姿になって毎週寮から帰って来た、とはその時の話である。

そんな風に、突然とも云うべき良家の生活からの環境の変化と、寮の中での退屈さ、そして淋しさが、茂雄と同じように一高の寮生活にとまどいを覚えていた立原と、より強く結びつけたのであろう。「やぶけたローラ」には寮生活の中にある向陵の伝統的な古代英雄主義的精神——茂雄からみると、それは実に低次元のものだつただろうが——に正面切って対立する茂雄は出て来ない。立原の茂雄観は、交友記風な「やぶけたローラ」から、未完の「テジの話」にまで到る。「テジの話」は構想のみで中絶した作品であるが、立

原の書簡の中に、梶井基次郎の「瀬山の話」によるレトリックであることが明確にされている。つまり、立原の中の茂雄は、淡い交友記から、内的に一つのしみのようになってしまった茂雄を描いておわるはずだったのである。（このことについては、拙論「デジアとタアト」を参照されたい。国学院大学「文学会々報」四一号）

それでは、実際の松永茂雄とはどのようであったのだろうか。茂雄は昭和六年、〝神嘗祭の記念に〟と、「水師」という作品を天智帝時代の白村江の戦に材を得てかいている。白村江の敗戦に日本の未来を予見する茂雄の小説の構成は、立原などの「第一高等学校々友会誌」に集った文芸部の一般的な風潮であるモダニスム風な小説法とは対立し、一つの確固とした史観にうらずけられた、状況を再現することによって真理を描く、という方法をとっている。

茂雄はその小説のあとがきに書く。「これは遠い昔の伝説である。けれども一三〇〇年後の今、日本の描きつつある歴史は、あまりにもこの物語と似てゐるではないか。」と。茂雄のそうした一つの真理――これは後に茂雄自身によって〝流れるいのち〟と名づけられる。――を求めてゆくという指向は、デカダンと退廃にみちている一般学生との離脱を促してゆく。しかも、そのたまり場のような寮生活にはたえられなかったらしい。元来が内性的でありながら、決意だけはすばやく下すという茂雄は、未だ寮の根本改革ということは考えず、一人でさびしい日をすごしていたようである。

そんな時、同じように寮生活からとりのこされたような少年、立原道造と、おだやかな光につつまれたある日、ふと恋人同士のように出合い、おたがいをかばいあうような形で交友したことは自然であったのだろう。

……むかしはだれかが僕たちをまもってゐてくれました。しかし　けふでは　僕たちは　自分でまもらねばなりません。そして　失ってはいけないのです　何も持ってゐなかったのに　すべてを失ったと知るときにさへ何も失ってはならないのです。このやうな時間のなかで　僕たちは　孤独な愛をおもってゐます。何か浄福な　最后の　諦めであり　優しさです。しかし　愛されてはならないと――

（松永竜樹「サロンⅡ」所収の立原道造の手紙。年代日月不明。茂雄宛のもの。）

立原と茂雄の交友は依然として続いていたが、茂雄は二年になるとほとんど学校へは出なかったらしい。「学校をやめたい」と、そんな声がいく度も茂雄の口から発せられた。理由は茂雄自身、はっきりと書きのこしてはいない。茂雄の遺稿と、当時を知る人の話を整理してみると、まず第一に茂雄が理科に対して懐疑的になりはじめ、立原によって文学の方の眼をひらかされたことが挙げられよう。

しかし、文学研究か科学か、というのは、茂雄にとっては、あまりにも大きい問題であった。家系的には祖父の代から海軍の重職におり、しかも、父親が航空技術者であるという家庭においては、文学に志すという指向はまずくだかれねばならなかった。その上、茂

中谷孝雄
招魂の賦
青春をともにした文学仲間への友情と追懐／招魂の賦／抱影／蝉の声／の名品。
¥500
東京都文京区音羽二―一二―二一
講談社

雄は父の後を継ぐべく理科を志し、これから、というときの事であれば、父からもひどく叱責されるのは目にみえていた。また、長男である彼は、自分勝手に自分の好きな学業に専念するには、あまりにも親思いだった。

思いつめた結果、茂雄は旅をしよう、と決心する。「Tabi no Nikki」と題されたローマ字日記はその時のものである。昭和七年三月十一日から四月二十日まで、茂雄は高知の親戚を尋ね、野良仕事などを手伝いながら、自分の進路を考えていたらしい。

三月二五日（金）……晴

また少し寒くなつた。昨晩は何だか躰が痛くてねむれなかつた。猛獣と戦つた夢をみた。今日すこしぐずぐずしてゐると障子の間から郵便屋さんが手紙を入れていつた。もうボクがこの部屋に居ることを知つてゐるのかしら。とうとう待ちかねたママからのお手紙だ。まあよかつた。これでひと安心。もうひとつはウエダクンから。すさまじい字だ。オジクンが大分やかましいらしい。おかあさまのおたよりとてもうれしい。なんていいかあさまなのだらう。お父さまみどりかあさまよしこかあさまボクたち兄弟はなんて幸福なのだらう。イナガキさん、ヨリオカさんなどをみるにつけてほんとにほんとにうれしくほこらしく。今日西山クンへ手紙をかく。一日の仕事、――桑の枝をかる。夜郵便を出しに町へゆく。Air Ship をかつた。はじめてのんでみる。夕めし時にあんこのもちをたべすぎたためか、（やすいもちがし）のやうな味がする。ぐうつとすいこんだら酔つたやうにフラフラとした。パットや敷島よりつよいのかしら。明日またのんでみよう。タッチとイナバと西山へ今日手紙を出した。今日もパスあり。ママへ手紙をかかうと思ふが、けふは少し気分が悪いからあしたにする。けふいよいよ学校へ出る決心をした。人が何といはうとかまいやしない。できない……なんてことがあるもんか。出来る、きっとできる。勉強をしてゐながらでもできるにちがいないのだ。あまりいくぢがなさすぎた。自分の能力をうたがいすぎたのだ。頑張らう！　いくぢなしになんな。きつと

甘柑が熟す

美堂正義

甘柑が色づいて
葉から黄色い顔を
羞しげにのぞいてゐる
なんとなくおどけ顔

あの色を見てゐると
暗い冬を耐へ
春待つ心がのぞいてゐる

明るい春がそこまで来たと
日本の春は
山の向ふまで来て立ち止まり
物音もさせない私の前に立ち止まる
突然　それは突然
毎年繰返へされる驚き

この空と海
瀬戸内の青い色彩をいっぱい吸って
大きく熟れた黄色い実
いま春を待つ心

果樹園　一五八号　昭和四十四年四月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価四十円　送料二十円

果樹園

第158号

陣中日記(一)　蓮田善明
讃歌　浅野晃
伊東静雄研究(四)　小高根二郎
タクシーの女運転手　沢田閏
ロセッティ小曲(二)　森亮
探訪　吉本青司
スマトラ記(六)　田中克己
決心　伊東静雄
太郎(二)　浅田二三男
近況抄　美堂正義
ゆめみこたちの群像(五)　山田俊幸

陣中日記(一)

蓮田善明

何物を措きても　此のノートは
左記へ送り届けられたし、これ
わが遺骨なり。

大日本熊本県鹿本郡植木町
蓮田　善明

昭和十四年四月四日

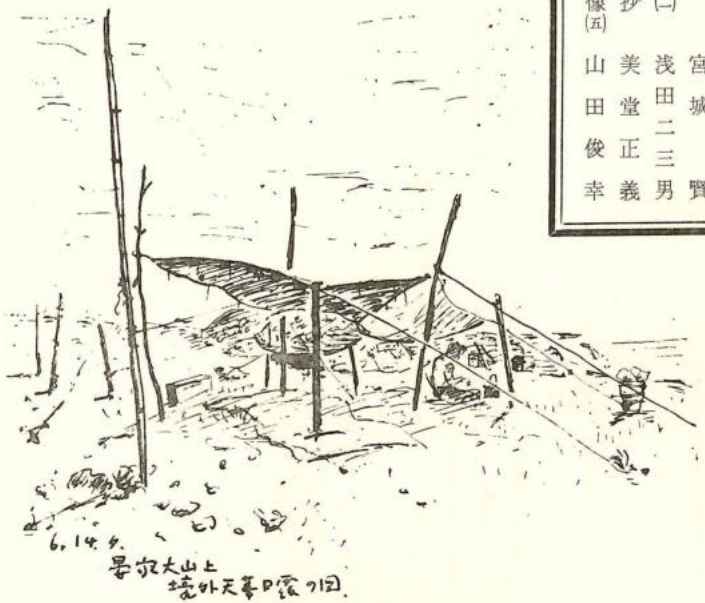
昨日より稍寒くなる。車中雨模様となる。菜の花六七分の黄なり。

午前九時四五分、熊本出発。三時すぎ門司着。兄、一家及び姉と夕食を共にし、後、兄と二三時間茶をのみつゝいろいろ話す。

帰りて風呂に行き、按摩をよぶ。

――しかしこんなこと書くつもりでない。敏子、晶一、太二のことを書きたい。

○昨夜妻と別れを惜しみて
眺念が流れて去く
身寒い潮となり……
しんしんと舳に潮をきつて
あふりつつ進む、白い船なり



果樹園　一五七号　昭和四十四年三月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価四十円　送料二十円

四季第4号

詩　イヴァン・ゴル詩篇(訳)　堀口大学
村……田中冬二
愛……神保光太郎
遠い明治のお正月……伊藤整
マロニエの葉蔭……阪本越郎
純粋・歩く・トンネル……杉山平一
日向路にて・谿間……伊藤桂一
シャルル・ルイ・フィリップ　大木実
天へ・窓……塚山勇三
井田川……小山正孝
勝負の焼身・他(長明の散文詩)　小高根二郎
問い……新川和江
旅人・風景……山形幹雄
評論・随筆
未完　杉山平一
禽獣・虫魚・草木(連載)　山岸外史
ある夏のたより　堀多恵子
対談「紅、燃ゆる」　丸山薫・河盛好蔵
座談会「津村信夫」　丸山薫　田中冬二　鈴木亨　室生朝子
同人近況・会員作品

大号　¥380　〒70
発行所　東京都千代田区内幸町一～二～二　株式会社　潮流社
「四季」編集部
振替東京　九一三七五番

できる。〝石とみて虎に立つ矢もあるものを！〟か、ハハハ。けふはオジさんもマサさんもどこかへでかけてゐた。夜お客がある。

四月十一日（月）　晴

ここに居るのもあと4～5日か？　まちどうしいやうな、名残り惜しいやうな……。昨晩夜なかに目がさめて、ねつかれないままにいろんなことを考へた。

1、幼稚園に行ってみる。日曜学校と連絡があればR、講習のことをもちかけてみる。

2、コーク研究会のこと……小沢君に

3、部屋のこと

部屋をつくつていただくやうにお願ひしてみる。

（原文ローマ字書きの日記を書き直す。――山田）

この文面からは、茂雄をして高知へ旅をさせ、また茂雄を悩ませていたのが、落第のことらしいのがうかがわれる。このころの事をよく知っているはずの茂雄の一中以来の友人・柿岡時正氏にも茂雄はさだかには示さなかったらしい。

編集後記

一月五日。長沼静人氏より本号所収の伊東静雄書簡六通をお送りいただいた。貴重な書簡である。氏からは先に詩集「神話」も頂戴していた。その一篇を本号に紹介したので、静雄が書簡で属目している志と照応して鑑賞ねがいたい。

六日。伊藤佐喜雄氏から珍らしく便りを貰った。昔の日記を見ていたら、昭和十八年四月八日のところに、日本文学者報告大会での蓮田善明の獅子吼のことが書いてあったので、参考まで……というのである。万謝申し上げる。

二十日。宮城賢氏より。静雄作品の英訳を「The New Poetic・Yeats to Eliot」の著者ニュージランドの詩人C・K・ステッドに送るといってきた。いよいよ静雄が海を渡る日がやってきた。

二十六日。蒲池もと子さんから本号所収の静雄書簡をお送りいただいた。深謝申し上げる。

三十日。蓮田敏子さんから、新夫君が新家庭を持って余暇ができたので、向いの家にあずかって貰っていた荷物を整理していたら出てきたと、資料をダンボール箱いっぱい送って下さった。とりわけ貴重なのは、中学時代の同人雑誌『護謨樹』十冊。再たと帰らなかった第二次応召の時、門司から民間人に頼んで敏子さんに届けてきた、「これわが遺骨なり」と表紙裏にかいてある第一次応召時の陣中詩日記。それに本号所収の貴重な静雄書簡五通も混っていた。

（O）

果樹園　第一五七号（毎月一回一日発行）
昭和四十四年三月一日発行
編集兼発行者　池田市石橋二丁目六ノ五　小高根二郎
印刷所　大阪市東住吉区桑津町三の十八　元市印刷株式会社
発行所　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社
定価　四十円　送料　二十円

別れ去くものか潮や
進み行くものか、われ
ああ蒼ざめて水沫あげ
流れ去く潮よ
舳は切る波の痛さに
ひとつの誓ひをつぶやけり

最後に妻を抱きつつ、最後に病児を見やりつつ、最後に幼児と二人自動車に乗りつつ、苦しきまでに、悲しきまでに、観念の波のわれを洗ひつつ去るを感じ、わが身のさびしく乗りいづるを感ず。観念的なもの、自ら去り、われ洗はれてはなれ行く。妻よ子よ、これを現実といふ。現実とは、このちかひの自覚なり。これを詩に言ふも、あらはに妻と子に言はず。詩に入るさびしさを感ず。われ作れる観念にあらず。大津皇子の歌、実にひしゝたり。

「百伝ふ磐余の池になく鴨を今日のみ見てや雲がくりなむ」

四月六日

昨日午後二時乗船——病院船六甲丸——三千噸余、三時出帆。後尾船艙を改造せる船室に満員なり。戸畑一家。及び姉右田氏桟橋に見送る。波平穏。今日、天気晴暖。青い海の大円盤、きらめく波、船は西々南に向かつて進む。上海につくのは明日午後三四時頃と。皆、土産ものの酒、ビール、果物に埋まり、朝からビールをのむ。輪投げに興じ、又小型カメラにうつる。

○

今日の平穏な海、陽にきらめく春波
この海路を征戦の人や船や、幾十百度び
いきどほりつつ渡りしならむ
悲しみつつ行きしならむ
強きもののふ
健きますらを——
大いなる海よ
今日の海、かくも和めり
われら又今日戎衣着て渡る

四月七日

昨日、右の詩を書きたるより一時を経ず、荒天となり、今日までつゞく。風寒く、雨交る。動揺強く、まゐる者多し。午食後甲板に上れば、左舷に遠く島影点々、波赤く濁る。江口に入りたるなるべし。鴎船につきて数十羽。大陸の鴎。空晴れて陽光そそぐ。

江口近く、海赭くなる。たくましい濁流。空は青く晴れ渡り、海は赭い円盤となる。

歴史文庫
小島信一著
運命の歌—万葉集
ドラマと楽しいリズムに溢れた現代人の万葉
¥680
東京都中央区日本橋小舟町一ノ二
振替 東京 八七〇八一番
日本ソノサービスセンター

望遠鏡に江岸や島の土、めぶいた楊柳、土堅の家、ああ人の住める、なつかしさ。はるかな水際に三人の黒い人影。日の丸をつけたジャンク、ジャンク漕ぐ黒い船人、支那人を満載した各国船、日本船艦。

黄浦江に入る。夕陽傾く、暮れかゝる江岸諸所に哨兵立てり。手をふり、声をかけ合ふ、なつかし、戦跡の楊柳青く哀し。涯なき地平線。七時、飯田桟橋につく。

船室にてレコードをかける。呉淞の桟橋にあるとは思はれぬ。明朝八時上陸との命令。防諜のため、発信はできぬ。

○

蒼穹漠々として碧きも
江水海に入りて赭し

風声何をか憤る
愁人あじあの鴎とたはむる

○

江は海洋を呑吐し
不死なるもののしるしを置く
私たちの巨いなる星は
虚しく深い日のかぎり
彼の世界である沈着な青のなか
われらを率ゐてめぐる
別れてゆく道や
帰らない河　死の湖や
暴風　暴動　ゲリラのあとの荒廃を
しかと見　見とどけ　見直し
私らの影でわれらを証しさせる

われらとつねにともに逝くもの
われらの日のいとなみを深く支へ
ひとり燃えつつ深く照らす
めぐみ深い私らの日は
地上のわれらを見失ふことがない
いつの時がその有てる熱を出しつくし
斃れて已むその日まで
われらと一切を照らし　また照らし
巨いなる星は倦むことがない

讃歌

浅野　晃

めぐみ深い日はかしこにある
めぐみ深い日は闇を破り
一切を照らしつつゆく
私は死んだ友や身内に守られ
この世の戦ひのなかにある
日は黙々と自分の道をゆき
われらと一切を真実に見る
それはつねに私らを照らして倦まない
大いなるめぐみの日は倦むことがない

私らの非運や屈辱や失望や
あるひは出会や対決の
深い谷　峠　無人の岬に
それは天の高さをめぐみ
われらに今日の意欲と明日の力を
責務を果たす勇気を
吝しむことなくめぐむ
それはあなたのうつくしい額に

波浪渺々、為めに赭し
白鴎流を追ひて雲に入り
百里船を迎へて江に帰る——
愁人手を叩いて鴎を呼び
残果を競はしめて稍放心す
陸影一髪水平に泛べば
望遠鏡裏楊柳青し

○

征路千里江上に泊し
夜半詩心頻りにして甲板に出づ
流水眠らんと欲して檣頭風音暗く
江水に東洋半月、長堤にかゝる

○

午を過ぎて船江口に入り
ジャンク破帆を掲げて濁溟に下る
白鴎遙かに空際に飛び
征人望遠鏡を把つて望めば
長堤楊柳青みて連る

（つづく）

伊東静雄研究（四）

小高根　二郎

二、予言としての悲劇

1　反アララギ

大正十五年四月に京都大学文学部国文科へ

入学した静雄は、下宿を上京区寺町今出川上ル四丁目阿弥陀寺前町の青木敬麿方に選んだ。阿弥陀寺は浄土宗の末寺で、開祖・清玉上人は織田信長の知遇をうけたので、本能寺の変の直後、焼跡におもむいてその骨を納めると、この寺に葬った。この阿弥陀寺の前は二日ヤイトである。なかなか繁昌しているらしい大様な二階建の右隣は、京風に奥まった袋小路で、その陰湿な空間に二階建四軒長屋が推し込められたように建っている。そのどんづまりの一軒が青木敬麿の家であった。家の前は通路兼庭である一間幅のきりきりの土地を残して、隣家の丈余の塀が丈高くそばだっている。

客である静雄はその二階の南向きの部屋に陣取り、その北側の三畳の部屋に主人である敬麿がくすぶっていた。静雄の階下の部屋には、同じ下宿人である京都府立医大の学生某が恋人の看護婦と同棲しており、その間にピーピー泣く乳呑児が一人あった。台所の脇の居間は下宿の経営者である敬麿の母が居城としており、屋外のわずかな余地を沽用して雄鶏を混えて鶏を飼っていた。静雄はこの下宿を阿呆陀羅庵と戯称した。門前の阿彌陀寺をもじったのである。

主人の敬麿はもともと兵庫県揖保郡御津村岩見港は西念寺の後継であった。五才の時に父を失い、由来伯父の後見で竜野中学・三高を経て京大哲学科を卒業していた。三高では務台利作を師とし下村寅太郎を友とした。大学では西田幾多郎・田辺元に師事した俊秀であった。母は宝物のような敬麿の進学のつど、その土地土地について廻り、結局阿彌陀寺前町で生業として下宿屋を営んでいたのであった。敬麿は静雄より三つ齢上だった。

二人はいい合せたように宵っぱりであった。午前一時頃になるとドシン！ ドシン！と音させて蒲団をとり、静雄は雨戸を繰って寝についた。互いに変った奴だな……と意識しながら、人見知りをしてなかなか口をきかなかった。が、そのうち静雄は敬麿に短歌を見せた。

「ぼくらは長いこともものを言はなかった。
或時歌をみせた。アララギ派の歌会に出たとも言った。二三の歌人の批評をした。みせてくれた歌は忘れてしまったが、韻律だけははっきりおぼえてゐる。それは伊東の声によく似てゐた。尤も普段の声とは少しちがう。或初夏の日八瀬の滝のよこに坐つて佐賀の校歌を唄うてくれた。あれに似てゐた。顔にもそう云へばどこか似た奥行がある。甘い、溜るような、流れるような、南の国の渓流のひびきだつた。ぼくはまだ、国文科だから歌人なんだ、など考へてゐた。その頃子規全集をほしがつてゐた。」

（昭和十一年「コギト」一月号、青木敬麿――哀歌に）

静雄は短歌を敬麿に見せると、それを朗詠して聞かせたのである。その韻律を、敬麿は案内した八瀬で聞いた佐高の校歌のそれに似ているといっているが、それは〈夕陽は燃ゆる吉井浜〉に始まる水泳部々歌である。又、静雄が批評した歌人というのは、節・赤彦・利元であったろう。あるいはアララギ派の歌会に出席しているから、系譜的に子規・節・赤彦を論じたのかもしれない。ともあれ静雄は卒業論文で取組む運命となる子規の全集をすでに欲しがっているが、その子規と論戦を

竹中郁詩集 そのほか

絶唱「観光日本」「夏の旅」「魚の骨」等二十年間の作中から選びだした二十五篇の精髄…。

¥1、000

神戸市東灘区御影本町二丁目

中外書房

した先輩詩人・寧斎に無意識的に結縁したことになる。そういえば、この日朗詠を聞かせた敬麿と共に、六年後には同人雑誌『呂』を

タクシーの女運転手

沢田　閏

クリスマス・イヴの晩七時
友人たちの集まっている安ホテルに急ごう
　として
みぞれの隆りしきる凱旋門の裏側でやっと
　つかまえたタクシー
おや、女の運転手じゃないか――フロント
　をすかし見ておれは内心ニタリとする
しかし　座席に身を投げて行先を告げよう
　としたら
助手席からおれの体ぐらいありそうな茶色
　の犬がむっくり起きあがったので
おれはのけぞるほど仰天した
「ベルトレ＝ポール・ロワイヤルへ、どう
　ぞ」――思わず言葉がていねいになる
「それはパリ市内のことか」
「もちろんです、どうぞ」
しばらくして　やっと落着きをとりもどし
　たおれは
おそるおそる
「この犬はあなたの守護者か」
と尋ねてみる
とたんに犬がまた起きあがり
女は「奥にすっこんでろ　奥に体をくつつけ
　ていろ」
とほんの少し褐色がかったプラチナ眼鏡の顔
　をふりむけておれに命令する
おれは座席の奥でほとんどホールド・アップ
　せんばかりにおびえた
車はシャンゼリゼをつっきり
コンコルド広場でパリの右岸から左岸へとセ
　ーヌを渡る
クリスマスのシャンデリヤばかりがむやみに
　豪華絢爛としており
退屈した犬が助手席に立ちあがってくるりと
　半回転すると
女は「坐っておいで」と軽く犬の尻をひっぱ
　たく
サン・ジェルマン通りにはいって　見なれた
若い男女のにぎわいにやっと気をとりなおし
　たおれは
「彼はいつもあなたといっしょか」と尋ねる
しかし女は答えない
犬も動かない
所在なくポケットから煙草を一本とりだし
　て口にくわえたら
煙草は吸うなと
女が手ぶりで合図した
お犬さまの機嫌を損ずるというのか
「ゲー・リュサックを行くのか、ムッシュー」
「うん、そうだ、クロード・ベルナールか
　ら右へはいる」
――やっとホテルの前にたどりついたおれ
　は（身を固くしていた）
八フラン八〇の計算にちゃんと一〇フラン
　の札を出してつりはいらないよと言った
（フランスはチップの国である）
しかし　フランスはヒューマニズムの国だ
　ったはずじゃないか
それでも人間よりも犬の方が信用できると
　いうのか
おこっているぞ　おれは

刊行したり、乳呑児のピーピーで彼を悩ませている階下の医科大生に、二十年後…弟・寿恵男の結婚で世話になろうとは、想像さえしたであろうか？　静雄の句に〈真に独りなるひとは自然の大いなる聯関のうちに恒に覚めゐむ事を希ふ〉（「夏花」「野分に寄す」）というのがあるが、その自然の大いなる聯関――つまり、縁をひとたび彼は結んだら、生涯これを見離さず、又見離されなかった男である。

静雄は京大の教室で一人の友人を発見した。それは服装のきたならしさで互いに共感を呼んだものらしい。歌人であり俳人の堀内薫である。

「二人は一番前で机を並べていた。どうして親しくなったのかわからない。二人ともアカデミックとは異質だったのだろうか。とにかく、服装のきたならしい点では似ていた。伊東は木線のかすり、よれよれの袴、羽織にむな紐があったのかなかったのか……。それでも角帽はかぶっていた。私はルンペンのかぶる黒い中折帽の底の伸びてしまったのをすっぽりかぶっていた。また、はにかみやで、しかも不遜であるところも似ていた。それだから世間と交らない。私は風来坊で、世間の事を雲煙過眼視していたが、伊東は、穴から目だけ出して外をうかがう鼠のようであった。…中略…私は他の学友を知らなかったが、伊東は折にふれて教えてくれた。『あれがアララギの五味保義だ。』君子然とした五味は伊東とは肌が合わなかったようである。」（昭和三十九年「果樹園」六月号、堀内薫―学生時代の伊東）

静雄が一年先輩の五味保義を知っていたのは、アララギの歌会に出席していたからであろう。東京高師から京大に入った保義は、高校のバンカラ生活を経ていないので、高校時代そのままであるきたならしい伊東にとって、いささかキザな存在であったかもしれない。しかし、保義と静雄とが肌が合わなかったのは、他にも理由がありそうな気がする。というのは、アララギの歌会に出席した静雄に、次のような感想があるからである。

「先日黒谷瑞泉院で催されたアララギの歌会に出席して、自他共に許してゐる歌人達の頭の悪さかげんに一驚を喫しました。私の歌はかなりほめてくれる人がゐましたが、こんな男にほめられてもはじまらないと思つたので、途中でかへりました、私はやつと私のあゆむべき道がわかつて来た様です。自信であふれてゐます」（昭和二年十一月酒井安代宛書簡）

つまり、静雄はあくまでもアララギの歌人たちの頭脳に疑いを持っているのである。

ロセッティ小曲（二）

森　亮

白日ながき日影に映ゆる
汝が面　御座と仰ぎ、
汝れにより知りてし「愛」を
わが眼　斎きかしこむ。

また蓮暮、ただ二人ゐて
くちびるをひたと触れあひ、
ほの浮かぶ汝が目見黙し、
霊と霊　われら語らふ。

よきひとよ。わが恐るるは
汝が姿　地上に見えず、
汝が眼　水に映らぬ

末の日に、われ独りのみ
ながらへて　降らむ坂に
しまき散る「希望」の枯れ葉。

「生の家」第四歌

探訪

吉本青司

ある日　雪蹊寺を訪ねた
長宗我部信親の墓に詣るためであった
本堂の裏手
松の木が斜めに空間を切ったところに
宝塔が立っていた
〈そも長宗我部信親は
身のたけ六尺一寸ありて
いとおとなびて見えけれど
年まだ二十二歳にて……〉と
鴎外の詩を口誦みながら　しばらく
そこにたたずんだ
いまは
戸次川合戦の物語を知るひともなく
青梅がひともと
花を墓辺にかざっていた

花は空こころは風にさそはるる
想ひに似つつ訪ふむかしかな

その低調な判断力に基いた錯誤した褒め言葉は、たとえ褒め言葉であっても受けたくないという、徹底した拒絶である。保義もこの歌人群を形成している一人である。堀内がいう、単なる肌が合わないという以上の感情を、静雄が抱いていたと見るのが至当であろう。

その感情を形成した一つに、保義が静雄より歌人として遙かに先輩格に当るということである。静雄が佐高時代から傾倒してきた赤彦は、保義にとっては郷里諏訪の先輩であるよしみで、静雄がまだ大村中学三年の大正十年にすでに入門していたのである。しかも静雄が佐高を卒業したこの三月末に赤彦は死んだので、保義は土屋文明に鞍替えをしていた。いわば保義にとっては赤彦は卒業したつもりであり、静雄にとっては目下勉強中の対象である。この二人が教室で一緒になる機会といえば、沢潟久孝助教授の万葉集の特殊講義あたりであったが（野間光辰推定）、君子と乞食学生とでは会話を交す機会はなかったであろう。もし話す機会があるとすると前述したアララギ歌会であるが、静雄にとって、保義が赤彦の卒業者であると知っただけで、充分に挑戦の対象に値したであろう。由来静雄は先輩ないし先進に猛烈な挑みをする激しい気質があった。挑戦を感じないような友情は友情ではない……と公言してはばからなかった。後年、静雄は「コギト」の先進詩人田中克己に対しても激しい挑みを感じているが、これは静雄が歌会を中座しているのであるから、挑みというより蔑みの方に近かったであろう。

こんなに誇り高く汚らしい静雄は、ときに大村中学の一年後輩で同志社高商生である市川一郎の下宿に現れた。

「『一郎さん髪をつんでくんさい』

ある時はブラリと来て長髪をかき上げたりした「あんまいハイカラにすれば私には似合はんけん、よかくらいに」と云はれて人の髪を刈つたことない私だつたが相手が伊東さんなればこそ楽しんで鋏を握つたことだつた。年齢は一つしか違はない友であつたが総てのことがはるかに大人で、はるかに先輩のつもりでその言葉に耳を傾けざるを得ないやうなことばかりであつた。芝居や映画の見方にしても静かに話る感激や批評は実に参考になり彼が激賞した映画などは腑に落ちぬまゝ二度も重ねて見に行つたものだつた。彼を深く知れば知る程あのボサッとした風采の上がらぬ姿さえも底光りのするものと思はれる。

下加茂時代四五人集つて短詩も句も一緒にした句会など度々したが今でもどうして

も忘れられないことがある。それは枇杷の季節で机の上に枇杷を並べてこれが今夜の題だと云ふことになり互選をやつてみると

これが枇杷の実か　　静雄

といふのが出て議論の的になり私など攻撃一方で、やれ枇杷の必然性がない、やれこれは詩ではなくて単なる言葉だとか云って野次りまくつた。その時これを選んだ一人が「いやお前の云ふのは常識的で皮相しかみていない、これ程純粋な見方が出来るか」と力説した」（昭和二十八年六月発行「河」、市川一郎――伊東さん）

この俳句はたぶんに荻原井泉水の影響が感じられる。印象詩としての俳句である。しかし主題の枇杷がまだ季題になっている。その季題を放擲して、井泉水の主唱さながらの句を、数年後静雄は作っている。先の句会は学生や生徒たちの素人の集いであったが、先生を混えるすでに一家をなした国文学者――玄人の集いにおいてであった。藤井紫影・頴原退蔵・加藤順三・樋口功・野間光辰らの定型句の中に、静雄はしやァしやァ……と

あゝ雲の何処かで
弓弦の切れる音がする　　伊東静

と書いてのけている。（昭和三十九年『果樹園』六月号、野間光辰―西鶴臨講会と伊東）この静雄の決心の底にあるものは、やはり井泉水ではなかろうかと想像する。というのは、静雄は井泉水の随筆まで愛読しているからである。これは井泉水の『層雲』に載ったものか、それとも他の誌紙に掲載されたものか判らないが、「遍路になりて」という芭蕉随想を、酒井安代に必読の文章としてすすめているほどだからである。（昭和二年十一月二十三日付安代宛書簡）

スマトラ記（六）

田中克己

六月のおはりに毎日新聞の篠原さんから、アチェー州へ取材にゆくが同行しないか、との申し出があった。わたしは仕事がなくて困ってゐたうへ、スマトラ民族のうち人口で三番目、熱心なイスラム教徒で、オランダ人と三十年間戦ったといふこの民族の実態が見られるといふので大喜びであった。ただし支部長を経て近衛師団の許可がなければといふと篠原さんはさっそく渡りをつけてくれたと見え、支部長から出張命令が出た。

六月二十八日、わたしは刀を佩びて毎日支局の自動車に乗った。篠原、桐山二氏の護衛兼通訳といふのが交換条件で、わたしは役には立たないが、刀をもって出たのである。出発は夕方だったが、メダンから二二キロのビンジェイでは熱帯につきもののあっといふ間の日暮となり、また二二キロのパンガラン、ブランデン市を通った時はまっ暗であった。しかし赤々と灯がついてゐるのは、石油工場で、鉄条網を張りめぐらし、歩哨がついてゐる。ここから出る石油はそのままで自動車につかえ、航空機用にも役立つ純度の高いものだが、噴き出る量が多いのに、日本からの油槽船の来かたが少いので、海へ流してゐるといふ。なるほど油槽もあまり見えなかった。ただしこの説明は誰から聞いたのか、篠原氏は記事にならないと早々にここを去って北へ向った。わたしのノートにはこの夜、アチェー族の四酋長と篠原氏との会見があったことをしるし、これは記事になって内地の新聞にのり、家族たちも「田中克己軍属が同席し」とある箇所で元気なのを知った由である。しかし場所はノートに記さず、会合した四酋長の名のみしるしている。日本軍政下に郡長、

丸岡明随想集
赤いベレー帽
¥880
東京都文京区音羽二―一二―二一
講談社

Resolution

Shizuo Itoh

With the vehicle of weighty iron wheels released,
A tired horse stands still in the evening courtyard,
And the thill has its free end resting still on the ground.

But true repose rests only on what doesn't need it.
Look at that poor horse
Being deeply confined by something.

His muzzls, now sensitive from hunger,
Swings endlessly to right and left, in vain, above the manger.
O surely, something's making him refuse.

Is it fatigue?
My soul, do not hesitate to answer, thy resolution.

Translated by Ken Miyagi

村長の称を与へられた四酋長はみなトク、すなはちインドネシア語で「わがきみ」と呼ばれる東海岸州のラジャ（王）と匹敵する称号をもってゐた。みな得々と日本協力を約し、特に日本軍の占領以前にオランダ人をつかまへてこれを日本軍に引き渡したことを誇る様子があった。通訳はわたしに出来ずアチェー語の出来る軍属の人がしてくれた。終戦のころアチェー族は反乱を起し、近衛師団の討伐に先だって、この通訳は殺された由であるが、散会のとき、アチェー族の自負の強すぎるのを愁へておいでだった。すでにこの頃から覚悟をきめておられたのだらうか。駒井通訳といひ、名は忘れたが、哀惜にたへない。この夜の泊りは会見の行はれたロスマウエだったらう。こことシグリ、ビンジェー、バンビの四郡村の酋長が集まり、ロスマウエが丁度その中間になってゐるので、かく推理するのだが、毎日新聞の古いのが見られれば確定する。わたしは宿屋（中国飯店）の主人にどなりつけて用意させ、ベッドに入ったがほとんど眠れなかった。これは寝ぎはにどなったせいである。

しかし翌日わたしはいひつけてパンと卵焼きをもって来させ、自動車に乗り込んだ。昨日は夜なので気がつかなかったが、自動車の速度は時速一〇〇キロどころか、一二〇、一

四〇となる。平坦な舗装路だが危いと、わたしはショピール（ジャバ人？）にたびたび注意して一〇〇キロを守らせた。それでも速いので、目に見えるところ前方を横切るアチェー人はみなかけ足であった。

そんなわけですぐアチェー州の首府コタラジャに着いた。記者二人はウェ島のサバン軍港へ出かけたが、わたしは洋風のホテルで昼寝さしてもらった。やがて二人は帰って来て軍港は記事にならなかったといふ。元気づいたわたしは二人にたのんでアチェー族の民族学調査に同行してくれるやうにした。案内にはコウラジャの郡長トク・ニャアレフの甥のトク・ハナフィヤ（ラジヤ）がついてくれた。トクは前にのべたやうに王なのである。

わたしのハナフィヤへの注文はアチェー族の富豪と貧民それぞれの住宅に案内してくれといふことだった。この注文どほりまづ金持の家へ案内された。家の名を問ふと、ハナフィアはトク・ハッサンの父の家といひ、ついでハッサンの姉妹（シスター）の家といひなほした。あとの方が正しいので、アチェー族は結婚しても、女子は両親の家にとどまって、子供もここで育て、夫は妻の家へ訪ねて来る。日本の平安時代と同じく通ひであって、かれらの厳しく守るイスラム教徒とは一致しないが、かれらはこれだけは頑守してゐるのである。

この家のことをのべる前に、わたしは鴎外先生と同じ「発見」をした。ただし鼻糞ほじくりではない。わたしどもが自動車でゆく途中尿意を催ほすと、もとより車外に出て立小便をする。この風習は日本人の悪習で、スマトラにゐた間ももとより見たことがないが、路傍で向ふむきになって膝まづくやうな格好をしてゐる男たちを二、三見かけた。そのあとが濡れてゐるのである。これはイスラム法ではねがかかるといけないといふので、日本の女と同じ流儀でやる、といふのがショピールの説明であった。このショピールはのちには尊敬する日本人のまねをして、立小便をして得意だったが、今どうしてゐるだらうか。何日も命を預け、わたしのインドネシア語がよく通じたのでなつかしく思ふ。閑話休題、先をいそぐことにしよう。

ゆめみこたちの群像(五)

山田俊幸

昭和六年彼は兵学校を断念して一高の理科に入学し、私も東横線の新校舎に通学するようになって、会う機会は前よりも幾分減少した。ところが翌七年の三月頃彼は突然「一高を退学する」と告げた。驚いた私はその理由を尋ねたが、満足な説明は得られなかったし、今に至るまでその真相はさだかでない。たしかに立原道造君（一高の同級生）による文学的影響はあったろうが、しかし立原君も理科にいて後に大学の建築科を出た位だから、松永君が高校一年で中退しなければならない程の理由はなかったろう。ただこれはその結果であると思われるが、真面目な彼にしては珍しく学業を怠り、その年の進級は困難だったようである。

柿岡時雨氏「松永兄弟と私」（「風信」第五号収録予定）

柿岡氏が示されたように、茂雄が学業を怠ったのは茂雄自身の悩みゆえだろうと思われる。つまり、四月十一日の日記にみえるような教育への欲求と文学に関する興味が、理科という学に対する意志の退却をよび、自己の理科への興味というディレッタンティズム——このころ、茂雄は技術的なものへのはっきりとした指向で理科へむかったのではなく、海兵学校への夢の挫折から、航空機に対するあこがれをもって理科へ入学したようだ。つまり、彼は専門的な技術者志望の集団の中で、彼はやはり技術者ではなく、単に軍事評論家であったという事実を見のがすわけにはいかない。——がそこにおいて、みごとに挫折を余儀なくさせられたのであろう。

夢をみる少年の前には、専門の理科の授業はあまりにもあじけなかったようだ。それが故には、当時の茂雄がつき合った人々は、同じ一高の理科でも文学に対する指向のあった立原道造であり、生田勉であり、そして府立一中以来の友人で茂雄の最も古い友人の一人である柿岡時正であった。柿岡氏とは、哲学への指向よりも、当時は文学的な交友をしていたらしい。これは後年のことになるが、柿

近況抄

美堂正義

Ⅰ

仕事上のことで
娘さんが雄と雌（おん　めん）を尋ねた
一瞬説明に苦しんだ
雄は入れるほうで
雌は入れられるほうだ
下をうつむいてゐる紅い顔を見ると
私はわけもなくわきを向いてしまった

言葉の不自由さ
神様もおひとが悪い

Ⅱ

注射をうつのに
静脈がなかなか捕へられない
看護婦は困りはててゐる
血管が細いのは
心臓の弱い内気な人が多いと
医者は私に説明する

職場で皆んなに話すと
男も娘達も笑ひ出した
あなたは違ふ
とても信じられない
例外である

なんといふ悪らしさ
心臓が弱いから
てれかくしに意地悪が口から出る
辯解しても聞き入れず
風に吹かれた草花のやうに
口はいつせいに左右にゆれてゐる

太郎

浅田二三男

(二)

田うえも終り
山や野は
みどりの葉っぱでうずまってしまった
が
もう三カ月
太郎はどこへいったか
太郎よ　太郎よ
お前のやわらかい下あごをさすってやり
たい
たくましい前足をにぎって
冷たくぬれたお前の鼻と
わたしの鼻をくっつける
あの挨拶を交したい
何か病気をしているのではないか
赤チンキをぬってくれる人もなく
舌でなめても追っつかない
大きなけがでもしたのではないか
太郎よ太郎
お前はどこへいった

果樹園　一五九号　昭和四十四年五月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価四十円　送料二十円

果樹園

第159号

孔雀の悲しみ（英訳）　伊東静雄
スマトラ記（七）　宮城賢
閉校　田中克己
平野謙にもう一度　吉本青司
ゆめみこたちの群像（六）　中河與一
還へらざる日よ　山田俊幸
太郎（三）　美堂正義
浅田二三男
陣中日記（二）　蓮田善明
伊東静雄研究（五）　小高根二郎
空華　福地邦樹
ロセッティ小曲（三）　森亮

陣中日記（二）

蓮田善明

四月八日

上陸、上海郊外将校会館に宿をとる。のどかなり。蛙の声朗々、トーチカ、戦跡。バリケード。広漠の天地を思はせる風光。隣家は殆ど破砕に近し。吉岡、石見二君と同室。敏子と猿渡氏に急ぎ手紙をかく。午後三三五五上海租界に向ふ。朝日のM君の同道にて朝日支局に行き、写真をとり案内を受けて閘北一帯、四行倉庫に上りて戦跡を見学。六時より支那料理の歓待を受く。九時辞去。明日は大場鎮その他戦跡を兵站にて案内の由なりしに、帰宿すれば、明朝七時半宿を出て南京に向ふべしと。風呂に入り、就寝。蛙の声きこゆ。戦跡と陸海軍警備、その他に関する感想、見聞は別に記すべし。朝日社の厚意にて、又特に案内の市人君により恐らく多くの見学者の閲す能はざりしまでに精到なりしは、謝するに余りあり。

○四行倉庫屋上にて

こは　火と燃えたる憤りの跡なり
こは　高貴なる怒りの下に
屈伏せる賤しきものの跡なり
日本の旗　空に立てり

四月九日

午前八時半南京行列車にて、午後四時（？）南京着。兵站で六時まで暇どり南京ホテルに落ちつく。

○上海――約二時間の間、崑山よりほかに丘さへもなし。題「天打杖（たたかひをはつた）は完了、春来（きたり）来了

満地麦と豆と菁々
菜の花は黄金色（こがねいろ）に照り
溝渠（クリーク）の水もふくれて来たぞ――

着ぶくれて丸つこい背をした百姓たちが
今朝も早くから畑打ちだ
汽車が通っても振り向く者もなく
彼らは耕土に余念がない

打杖は完了、春になつた――
畑中の墓地の土饅頭に立てた
紙片（ざれ）の小さな吹流しがはためいて
楊柳の樹林子も薄青み
家の裏の五株の桃李は花ざかり
古びた屋根は陽に乾いてゐる
小孩（シャオハイツ）子の凧がよく揚る

大地を抜いて空はすつくと高い
雲雀の影さへ見えなんだ
老鴉（からす）が何処かで飛んでゐたが――

果樹園　一五八号　昭和四十四年四月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価四十円　送料二十円

四季第4号

詩　イヴァン・ゴル詩篇（訳）　堀口大学
村……田中冬二
愛……神保光太郎
遠い明治のお正月……伊藤整
マロニエの葉蔭……阪本越郎
純粋・歩く・トンネル……杉山平一
日向路にて・谿間……伊藤桂一
シャルル・ルイ・フィリップ　大木実
天へ・窓……塚山勇三
井田川……小山正孝
勝負の焼身・他（長明の散文詩）　小高根二郎
問い……新川和江
旅人・風景……山形幹雄
評論・随筆
未完
禽獣・虫魚・草木（連載）　杉山平一
ある夏のたより　山岸外史
対談「紅、燃ゆる」　丸山薫・河盛好蔵　堀多恵子
座談会「津村信夫」　丸山薫　田中冬二　鈴木亨　室生朝子
同人近況・会員作品

特大号　¥380　〒70

発行所　東京都千代田区内幸町一～二～二　株式会社　潮流社

「四季」編集部

振替東京　九一三七五番

岡氏は、東大法学部に昭和八年に入学したが、思うところあって、昭和十年に文学部哲学科に転学したという。そして、その後京都大学の哲学科へ再入学され、現在は富山大学で哲学を教えて居られる。つまり、茂雄は立原道造や生田勉氏――『第一高等学校々友会紙』に当時は何か哲学的な論文を寄稿されていたのを見たことがあるように思う。詳細は判らない。――そして柿岡時正氏などの中で、彼自身の夢の挫折をふみ台にして、大きく別の方向へ自己をかえていたのがこの時期であろうと思われる。そして、これは悩みを知らない少年の日の軍事評論家、茂雄から、教育学者・国文学者である青年茂雄への大きな過渡期であるとも云える。柿岡時正氏は、この時期を中学が「海軍と少年文学」の時代であったとすれば、この頃は「映画と外国文学」の時代といえるかも知れない（前掲「松永兄弟と私」）、と追想して居られるが、まさに茂雄の目はこの時期に広い世界をみつめはじめたのである。それは、少年期の夢に縁どられた海軍と少年文学から、きわめてリアリステックな――ということと、彼が当時見たものが理想的な映画であったということは別。現実をふまえた、とでも云うべきかもしれない。――映画や外国文学から現実を自己の体験とともに教えられた青年・松永茂雄のとにかく〝ゆめみこ〟としての出発なのである。

編集後記

二月一日。中谷孝雄氏より「招魂の賦」を頂戴した。鎮魂でなく招魂であるところに、僕らの文学上の意志と共通なものがある。

二月三日。宮城賢氏よりC・K・ステッドへの英訳伊東静雄詩の送り状の写しをいただいた。拙誌のことにも触れてくれており恐縮した。

二月九日。角川書店の現代詩鑑賞講座10『現代の抒情』が届いた。田中克己篇の解説役は福地邦樹が担当している。拙作一篇の解説は村野四郎氏を煩わしていた。感謝申し上げる。

二月十八日。日本経済新聞の随筆欄に蓮田善明の伝記開発に関して随想を書いた。文学とは直接のかゝわりのない実業関係の城戸元彦、浅川忠夫、川上一雄、今西英造らの諸氏や、高校時代の学友の小川鈞一や先輩の工藤勇助君から便りをいたゞいた。特に実業関係の諸氏の熱烈な鞭撻の言葉には感激した。国民の心を代表しているのは、やはり文学人なぞでない。これら実業にたずさわっている人々なのだ…と今さらながらに痛感した。同じように、この時代を代表する文学はいわゆるベストセラーなんかでない。真の体験の裏うちのある蓮田の「陣中日記」のようなものである。（O）

果樹園　第一五八号（毎月一回一日発行）
昭和四十四年四月一日発行
池田市石橋二丁目六ノ五
編集兼発行者　小高根二郎
大阪市東住吉区桑津町三の十八
印刷所　元市印刷株式会社
池田市石橋二丁目六ノ五
発行所　果樹園社
定価　四十円　送料　二十円

大地のことは不関焉い空が
広く　ひとりで曇つてゐる

しかし大地もひとりで開いた饗宴だつた
空が照らうと曇らうと、大地はそんなに
　逞ましい。
百姓たちも、此の地上で起つた激しい交
　易を忘れ
目前一塊の土に鍬振るばかり
敗残の兵匪が犬のやうにまだ村々をうろ
　つき
米を持ち去り児子を拐し
時々渠溝で水をのんでゐるが
己らの知つたことではない——
己たちは荘稼地の彼方の地平の彼方を知
　りもしないし
考へてみようとしたこともないのだ
春が来了——戦は完了
こんなに確かで永久なことはない

○常州附近を過ぎて

漠々たる麦畑
疎らに村落が楊柳に囲まれ
百姓たちは野良に耕し
千里閑散
野の溝濠はひつそり太湖の水を湛へ
重たい民船がのそりこと行く
姑娘がひとり、艫で
膝に肘ついて水を見てゐる
——烏秋が水際に舞ひ下りて
　菫を食つてゐる

○龍潭にて

滔々田圃は水浸り
老爺は畑から鰌を六匹釣つて帰つた——
溝濠の土堤では芽生えた葦に
水牛が横腹を撫でさせて、草を食り
その背に小孩子が昼寝してゐる
白頸鴉が楊柳の下枝をついばみながら
水鏡で粧してゐる
張家の李子が花ひらいたらしい——
しかしあいつが咲き出したら百姓はどう
　しようもない
田植の仕度は還快一点児
楊子江のおやじ奴
遙かなくもつた空際の下を
太て太てと今日も
腹ふくらせて流れてゐるだらう。

○佈　告

南京行の軍用火車が轟々と走りながら
鉄路傍の家の軒で高々と鳴く黄鶯を聞い
た
——「建設東亜新秩序」車窓を掠める青
　字の佈告

四月十日

午前散策、午後中山陵に行く。昨日と今日午前との不快なる南京臭を中山陵への途は全く入れかへてくれた。文字通り山紫なり。山肌が紫を帯びてゐる。陵も環境も絵の如し。日本軍の破壊を避けし中山廟の石壁に敗退支那兵の放てる弾丸の当れるが残れり。

帰途城内の飛行場を見る。

十分健康といひ得ず、上海よりの車中より、疲れると軽く咳が出る。腰の痛みは今日は余り思ひ出さず。

四月十一日

昨夜中、左乳下疼痛激し。肋膜炎かと疑はる。今朝さめて、それが夢の中での感覚で、誇大に感ぜしものかと思はる。希くはさうありたい。

○中山陵に立ちて

上海の新市街予定地
南京の中山門内外
これほど明るい天地を私は見たことはな

い
ここには彰々と
天あり、地あり
広漠たる野は新鮮である
茲に新市政府建てられ
茲に中山陵設けられ
輪一字不明殊にあたらしく
華麗なる詩情を茲に歌ひたり
中山陵の拝殿の額には
「天下為公」と白い花崗岩に素ばらしい
　筆蹟で
金文字が刻りつけてある
旅人われ茲に立ち
彼等の浪曼に殆ど涙堪へがたし
旧市街はすべて
世界無類の酔汚と恥辱の処
人類斯くて喪亡して知らず
欧人更に毒液を注射し
覚醒の砲丸と佈告から更に之を既つてゐ
　る
ああ戦の跡をかへり見よ
日軍は彼等の浪曼を傷つくるに忍びざり
　き
彼等のために尊くもそを保護し得たり
ああ何為れぞ無要の抗ひ——
見よ　敗退しつつ彼らは中山門より
中山陵を射つてその美はしき石壁と
紫の屋根とを傷けたるを
われ憤りに燃え
われ悲しみに堪へず
彼ら天を仰ぎ地を俯し
「公」を想ふの尊きを
常に何為れぞ斯くも自ら破り
遂に恥辱と亡国とをくりかへすや
日軍遠征して　ひとり
彼等の浪曼の新生の日のために、衛兵を
　立て
厳しく之を衛りてあり
遙かに壊れたる城門を指して語れり

午前十時半ホテルを出て、下関に至り、十二時船登す。「つかさ丸」、大きな船かと思つたら、まるではしけである。一七九噸。みんな呑然たり。走り出したら、思つたほど大揺れせず。しかし機械のための小刻みの激動と音。波も大きくない。今日は雨まじり。濁水。岸（江岸と、島と）には緑草と麦と楊柳と菁々たり。望遠鏡に、菜の花も見えた。小さな窓から余り眺め渡されない。二時間半ほど昼寝した。太魚波間に躍る。午後四時半、右舷に鴨の群数千。或は万を超えよう。或は数万なるべし。微かな点々として見ゆるのみ。

○鴨

崑崙山の奥から
解けて来る雪の滴りで
江水が岸を超える日は
未だ来ない
今日の水はまだ
わずかに春の雨の流れ込みだ
数万の鴨はまだ江に群れて
遠い水を待つてゐる

船中、南京案内図をよみ、惜くも旧名所の多くを見落してゐたことを知り、自分の不用意さが残念である。ひとり廻るべきだつた。

四月十二日

昨夜蕪湖に碇泊し殆ど眠れず、夜明け方少しまどろむ。六時半出航。晶一がもう快くなつて、まる〳〵太つて健康に遊んでいる夢をみた。今日は晴れて日が照る。タンクの水で顔を洗ふ。外は風が強い。

昨日に同じき景色。濁流。単調な褐色の岸の層土。その上縁を彩る鮮緑の麦、灰色の家、時折小さい人影。船を曳いてさかのぼる曳綱者の姿には何か胸うたれるものあり。百米おき位に岸に四つ手網を垂れてゐる者があ

つた。引き上げても殆どとれてゐないことが多い。今日は安慶に着くまいといふ。

○扁　舟

江を溯る三日又四日
扁舟一日漸く四十里
浩々濁水舟をめぐつて速く
蹤々江岸と島影と低し
江水に洗はれて褐土は自らに崩れ
春を迎へたる麦は緑自ら燃えんとす
昨日見たる水一昨日に同じく
今日見る岸昨日と相同じ
征くところを想へども迥かに
来りし所をかへりみて心更に貌たり

四月十三日

昨夜は割方眠つた。昨夜は遂に安慶を目前にして到着せずに碇泊。今朝船が動き初めてから、濃霧のために止まり、八時半頃晴れてから又走る。屋根の上に日に照らされて眠る。覚めた頃日午に近く、船長が左手の山を眼鏡で覗きながら、あの山から十日程前に山砲で射つたからよく看てゐて下さいといふ。気味わるくなつて皆靴を穿く。眼鏡で覗くと真赤な躑躅の花が映つた。昼食は皆屋根の上で食つた。今朝糞の流るゝ水で洗つた茶碗で。午すぎ、下つて行く日本船多し。手を振り合ふ。今朝九江を出たのだらう。和寇の話を宮崎氏がする。宮崎世龍少尉は龍介氏の弟だとか。同文書院出身、朝日記者で、支那について詳し。豪快な男なり。倭寇は日本人は八幡大菩薩の旗を立てゝ重慶まで遡つたと。しかし彼らは悪事といふやうなことを企んでしたのでなく、之を歓待するものを害せず、抗ふ者をのみ害せしと。唯、支那人にして之をまねたる者が悪かりしと。恐らく真ならん。彼ら物慾のために寇略を事とせしものに非るべし。宮崎氏語る。彼らは日本に不平なりし徒なりと。我、かの倭寇に英雄を感じ、詩の行為を感ず。他日機あらば、倭寇の事よく調べて、詩を書きたい。二時近く曇天漸く暗く、雨滴来る。船空に入る。二時半、数隻の船もて閉塞せる所をすぐ。右岸に戦跡あり、日本砲艦一あり。背後は峨々たる低い岩山なり。

○花

好天なれば船の屋上に風吹かれて寝ころびてありしに
午近く船長は左前方の岸に長く伏せる低き丘の寄り来るを指して
「あの頂より十日程前に山砲もて射ちしことあり
よく看視せられよ」と自らも望遠鏡をひたと目に当てたり
我ら稍気味悪がりて屋根より下り
背を低くして眼鏡もて山を覗くとて息をこらせり
江岸の丘阜としては割合に潅木の密なる丘なりき
我ら怪しきこと無きやと麓より嶺へと尋ねしに
真赤なる躑躅の数多株潅木の間に咲き乱れたるが眼鏡に映り
躑躅よ、躑躅よと言ひ交して覗き惚れてゐたり
遂に敵弾も敵影も無くて事無く其処を我ら過ぎたりき

（つづく）

伊東静雄研究（五）

小高根　二郎

2　士族・酒井家の立場

静雄が『わがひとに与ふる哀歌』の哀歌詩人として運命づけられたのは、夏休で帰省する途中、姫路五軒邸の酒井家に立ち寄って、一泊したときに始まる。酒井小太郎は昨春、佐高から姫高に転勤し、九州から移住していたのである。それから山口・佐賀で道草を食って諫早に帰った静雄は、さっそく小太郎・フミ宛と、娘安代・百合子宛に別々に礼状を書き送っている。

夫妻宛の手紙には、「古い家庭に古い人々の間に育って来、余裕のある考へ方や、暮し方から遠ざかる様に余儀なくされてゐますいつもの私には、ほんたうにどれ位嬉しいことか、御想像以上のことと思ひます」と、厚遇に対する喜びと感謝を率直に伝えている。

娘たちへの手紙では、「二日間のことを考へ出しては微笑したり、私の様なものには似合はない様なゆつたりした気持になつたことを変な気持で思ひ出したりしてゐます」と、先の手紙とは多少ニュアンスは違うが、思いがけなかったコンファタブルだった処遇に対する満足感を伝えている。

静雄は、当時にあっては中流家庭の典型ともいうべき明るくのびやかな酒井家を、自家の旧弊な家風や環境や、さては余裕のない思想や暮し向きと対比して、羨望に近い感動で思い出しているのだ。由来…静雄の胸中には、将来実現すべきモデル家庭としての酒井家が建ちつづけたといっていい。

しかし、冒頭のこの喜びに溢れた言葉は、焦点のすぐそばににじり寄ろうとして
焦点をおびやかしていらいらとふるえる
私がその空華を気にしはじめるのは
いつも身体や精神の調子の悪い時だ
寒山も空華を持っていたのだろうか
いやおそらく妄想の譬えにつかったにすぎまい
私のもろもろの煩悩は
私だけに見える空華に象徴されて
ともすると　私の神経をゆさぶりに来る
そのような時　私は眼をつぶる
すると私の空華も途端に消えてしまい
寒山のように静坐して
憂悩を絶とうと
頭をからにする努力をするのである

空　華

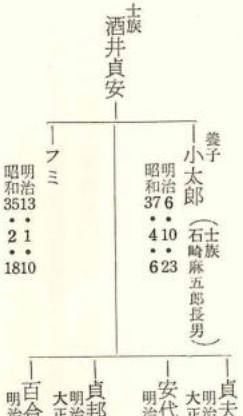
福地邦樹

寒山詩に虚空華という語があって
それは空華と同じ意で
目の悪い人が空中に見るちらちらとした花のようなものという
その寒山詩はおよそこんな内容だ
心高い坊さんが居て儒仏道に精通しているが
懺悔を知らず破戒をおかしても平気
おれの説法は下品のものにわかるものかと
第一人者を自称している
愚者はみな讃歎するが智者は手をうって笑っている
それはちょうどかげろうや空華のようにむなしい
どうして生死を超えた解脱など出来ようか
こんな連中のことなど考えるより
静座して憂悩を絶つ方がずっとましだ
ところで　私には空華が見える
近視のひどい左眼の方に
毛糸のくずのようなよごれがいつも見えている
眼を酷使した大学生の頃に
水晶体に出来たにごりらしい
それは空華などという綺麗な感じのものでなく
女の髪の毛のくずのような
アンドロメダ星雲の陰画のような
それはふだん殆ど気にならないのだが
疲労してくると
読む頁の上に跳梁しはじめる

末尾では一種の不安に変っているのである。これは夫妻宛、娘達宛の書簡共に同じである。「今度は特に先生には御元気がない様にお見受けしました」と、同じように書いた後で、前の手紙には「御病気にでもなるのではないでせうか」と心配し、後の手紙では「どうかなさつたのではないでせうか」と疑っている。この不安と疑いはあい半ばしている。よすぎた夢を見た後の落ちつかぬ気分である。

しかし静雄はまだ、自分が酒井家――特に夫妻から、招かれている客ではないということに、充分気が付いていないようである。来訪者に対する儀礼的な処遇が与えられただけなのである。小太郎教授に元気がなかったのは、無心な青年の喜びに応えることが心苦しかったのである。彼には不安があった。長女の安代は二十一で静雄と同じ齢であり、しかも幾月か姉である。次女の百合子ももう十七の年頃である。静雄が無心であればあるだけに、負担に感じられる何かが、胸にわだかまったに相違ない。というのも、小太郎自身も酒井家の養子だったからである。しかし士族石崎家から士族酒井家へ婿入りしたのであった。平民伊東家と平民榎並家との縁組とは少し趣が違うのである。既述したが諫早藩は真の意味での御一新を体験していなかった。しかも士族は永年圧迫されつづけてきたインフェリオリティ・コンプレックスを根強く持っていたはずである。士族と平民との間の壁はかえって高かった……とは、『諫早市史』の伝えるところである。

ちなみに酒井家の系譜を参考までに掲げると次のようなものである。



即ち、長男貞夫は二十二才、次男貞邦は八才で若死をしている。安代か百合子に養子を迎えねばならぬ環境にある。小太郎の心配は無理からぬところである。

ところで、静雄はこの安代・百合子に宛てた喜びと疑いの文章の中間で、悲劇の舞台としての世の中を提言していることは、なんとも運命的といわねばならない。すでに彼は、この姉妹との交渉に悲劇を予感しているかのようである。

佐賀の不知火寮の旧友の部屋に二泊した静雄は、長崎県下であろう田舎の親戚に立寄って二三泊していた。悲劇はその家の若嫁を中心に語られ、さらに世の中全体に類推がなされている。

「その二晩を不知火寮ですごして、例のサンチマンタルな若いお嫁さんがゐる例の田舎の親せきに行きました。この前に行った時より一そう悲観して、私にいろんなこと打ちあけてきかせました。『ほんたうに子供が縁のかすがひですよ』と云つて膝の上の子供の頭をなでる時は気の毒に思ひました。何度も手紙を書きましたが皆破つてしまひましたとも云つてきかせました。又、暗い納戸で、あなたが次に来る時にはもう私は死んでゐますよ、などと気味の悪いことまでも云ひました。私はその不幸な若いお嫁さんを気の毒におもつたり、その考へ方の低いのに憐を感じたりして、『物事の考へ方』についての私の意見を話したりしました。

百合子さん、安代さん、ほんたうに、さう思ひますね、自分の境遇から、（それが楽しいものにせよ、苦しいものにせよ）新しい生命と力とを拾ひあげ得ない人は不幸な人ですね。あきらめよとは云はない、只その境遇に光をもたらす様に努力し得ない

ロセッティ小曲(三)

森　亮

言葉よ　われに見せてよ
（むかしの奇蹟さながらに）
海の水　二つに分けて
恋の淵の　底のふかさを。

わが腰折歌　いかで伝へむ
《淑女の霊と色身
交りあひ、彼女の身と我の
区別なき　神秘の恋》を。

この恋は神わざなれば
恋にうづく　わが胸さぐり、
幾春の　思ひの凝りて
柔魂と　なれるをとらへ
なべて世の愛の大根の
証明よと　告るすべもがな

「生の家」第五歌

人は不幸です。そのサンチマンタルな若いお嫁さんもその不幸な人の一人ですね。このままにして生きて行くことはほんたうに苦しいことだらうと思ひました。私が高等学校の二年生頃の情熱と真剣さがあつたなら、きつと人一人救ふんだと云つて、その人の味方をして、大変なことをしでかしたことだらうとも思ひます。もうそんな元気もありません、じつと眺めてゐるよりは仕方ありませんでした。ほんたうに自殺でもしはしないかと心配にもなります。私がそこの家に来てから二三日してから、実家にかへるのだと云つて朝の四時頃から子供をおんぶして家にかへつたさうです、（勿論私はその時ねてゐましたが）私はその日の夕方そこの家から出ましたが、あのお嫁さんは又かへつて来るだらうかと心配してゐます。…中略…

あんな田舎の百姓屋にもあんな悲惨な事件が一つや二つはありますね、ほんたうに世の中にどんなに不幸が、間違ひが沢山あることでせう。ある詩人は

あゝ島が見える、
そこからひばりが立つてゐる
雲雀が立つのは畠のある証拠だ
はたけのある所には人が住む

人が住む所には恋があるんだと云つてゐるのを読んだことがありますが、私は又その後の所に、

そこには又必ず悲劇がある

とつけ加へたいと思ひます。ほんたうにそんなことを思ひますと、人の群や、民家の数を汽車の窓から眺めるにしても、平気ではゐられない様な気がします。」

静雄が同情しているこのサンチマンタルな花嫁は伊東家・榎並家・内田家の、そのいずれの関係に当る人であるかしかとしていない。今までにも哀訴されているとこから想像すると、彼女は彼とほぼ同年輩なのであろう。したがって安代とも同年輩のところから、すでに姫路において話題に提供していたものと推定される。特に女は相手を選ばないと一生の不幸を招来する……という話題だったのかもしれない。

静雄はこの花嫁の不幸から、群集や集落の中に無数に潜在している不幸や間違いに言及している。その事実に安代・百合子の純粋な注意を喚起しようと努めている。しかし、いかなる苦境にあろうとも、そこから新しい生命と力とを拾いあげ、自ら光を呼び寄せるべきだと主張している。そう主張しているにかかわらず、〈あゝ島が見える〉の詩の結句と

して、〈そこには又必ず悲劇がある〉を静雄は添加しているのである。いかなる努力をしようと、とどのつまりには必ず顕現する悲劇を、静雄は運命として予測しているかのようである。

この悲劇解説に起用された〈あゝ島が見える〉の原詩は国木田独歩の「沖の小島」である。大村中学の先輩福田清人は後年独歩と取組むにいたるが、静雄はすでにここで独歩に、清人に、結縁しているわけである。

沖の小島に雲雀(ひばり)があがる
　雲雀すむなら畑がある
畑があるなら人がすむ
　人がすむなら恋がある

これはもともと独歩の自然と人生を謳歌した詩である。この詩を静雄が悲劇と結びつけたについては、結びつけるだけの心緒があらかじめ心の中にあったと見ていい。つまり、独歩の佐々城信子に対する悲恋の記憶が作用したのである。

独歩の「欺かざるの記」明治二十八年八月十六日の項に、この詩のできたいきさつが書いてある。

「夜十二時、神に祈りて曰く
全心全力を以て為さしめ給へ、愛さしめ給へ。
今夜バイロンのチャイルドハロルド中のローム(Rome)を読み、「時」の不思議なる力に感じて涙眼にあふる。バーンスの Ae Fond Kiss を読みて泣く。
此の両三日新体詩を得ること四五、独歩吟、沖の小島等なり。
昨夜のぶ嬢来宅。薄暮来状、曰く発熱就床、明日来訪を望むと。今日これを訪ひ、午後五時まで居たり。…後略…」

この日より五日前の八月十一日、独歩は信子と二人っきりでランデブーをしていた。飯田橋から汽車に乗り国分寺下車、そこから人力車で小金井に出、明るい日射しのなかを武蔵境まで歩いて、そこから汽車で帰ったのだ。

「汽車林を貫いて急行す、窓外白雲深く哀感交々来る。われ嬢に曰く、余がために一曲を歌へと。嬢すなはち、『故郷の空』を歌ふ。悲壮の調、実に断腸の調なり。われ此の調に応じて悲歌一つ作る可きを約しぬ。」

この日の約束によって前述の独歩吟と沖の小島四五篇を作ったことになる。ただし「沖の小島」は「故郷の空」の調に合わない。つまり独歩の意図した悲歌ではないのだ。信子との最初のランデブーの喜びを、そのまま自然に託した人生謳歌の詩なのである。この詩を静雄は悲歌に作り変えたのである。この日の独歩の喜びが、三ケ月後に結婚の歓喜となって燃えあがり、結婚半年たらずで信子の出奔によって消え去るその悲劇を、静雄は改作に際して詠み込んでいたとみねばなるまい。静雄の悲劇の意識はかなり深いのである。

その事実は、夏休が終って帰洛する途次、姫路に酒井家を再訪したとき、ふたたび明らかになる。その訪問の礼状(大正十五年九月八日付安代・百合子宛)の結びで、小太郎の変らぬ態度を、静雄は伝えている。

「近頃、先生があんな風におだまり勝でうつたうしい御様子なのが大変心配になります。御身体に御注意なさいます様に。」

先の手紙では「元気がない」小太郎であったが、今度は「うつたうしい」積極的な意志が表明されているのである。静雄は歓迎されてはいない。招かれてはいない。… にもかかわらず、「姫路は私のオアシス」と静雄は休らいを感じている。いや、オアシスどころではない、救いの場であるとさえいっている。

「こんな幸福は、ともするとあんな境遇によつてひねくれようとします私の心を素直に、正しくそだてて呉れる様に思はれます。あんな学生達の社会運動などにも相当の魅力を私は感じますけれども、あんな運動にも少なくとも根底に、相争ふ二つの階級の各々に、『理解とそれから生ずる愛』が缺けてゐる様に思はれます。私はそんなことにたづさはる前に、もつと心を理解することに努めねばと思ひます。」

封筒の宛名は安代・百合子宛だが、この中身は皆々様宛である。静雄はそれとなく、彼自身に対する理解と、それから生ずる愛を、酒井一家に希求しているわけであろう。しかし前掲の家長・小太郎の心の動向を思うと、静雄は自ら悲劇を買って出たようなものである。

(つづく)

The Sorrow of a Peacock

—at the Zoo—

Shizuo Itoh

A butterfly dances around my slumber,
Madly reduced its circle of revolution, and soundlessly.
No longer I long for a refresher,
For I have something deeply promised.

Thus my robe shines and I walk asleep,
Passing through the scattered reflections・・・
The glassy sky, unable to endure itself,
Listen! It calls me.

Translated by Ken Miyagi

スマトラ記 (七)

田中克己

ハッサンの姉妹の家へハナフィアの案内で入ってゆく。入口の門は石川五右衛門の隠れてゐた門そっくりで、南の右側に男専用のベランダがある。みな正倉院と同じく高床式である。ベランダのすぐよこに設備があって便所である。芝生を南にゆくと突当りに建物があり、これがおも家。庇のベランダ(シラサ)

には左右に階段があり（正面にはない）、ハナフィアはつかつか登って、交渉をすましたらしく、「入ってよい」といひ案内して見せる。ベランダにもベッドが一つあり、奥に東西に拡がったスラマと呼ばれる室は何だか使用法がわからなくて、また左隅にベッドが一つ、階段を登って寝室（ジュラヤ）に入る。寝室は三つならんでゐて、それぞれ廊下で隔たっている。また階段を上るとスラモ・リクルといひ、女部屋だといふ。ここには何も見当らない。ここから廊下で連ってゐる別棟へ階段を下りてまた登ると、厨があり、その左は召使の室、右は物置だときいたが、厨にゐた主婦らしい人はわれわれ一行に目もくれず、物もいはない。ハナフィアに合図してシラサに帰ると、ベッドに腰かけた男がゐて、トングー・イスカンダーといった。「アレクサンダーの君」といふ名をもつこの男に対しわたしは甚だ狼狽した。「留守に無断で」と思ったからであるが、この先ほどの主婦の夫は何ら動ぜず、コタラジャの電話局員であるといった。勤めがおはったので「通って来た」のだと気がつくには大分かかった。ハナフィアが「女主人にとついで来た人だ」と説明したからである。母方居住制は頭でわかってゐても実際はわたしたち父方居住制には理解しにくいものなのである。

ハナフィアは次に約束どほり、最も貧しいアチェー人の家につれて行ってくれた。前の家が柱四九本だったのに対し、これは一六本でいふまでもなく小さい。垣を入ってゆくと左側に水浴（マンデー）場があり、右側に便所があり、すぐよこを小川が流れてゐる。文字通りのカワヤである。階段を上るとすぐ右は男の待合室、次は寝室（ベッドが一台ある）もとよりここは扉があるが、あいてゐたのでまる見えである。左と奥で家の大部分を占める主婦（同時に主人）の用いる箇所には机があって、もとより勉強用ではなく（学齢の子どもはよそに寝泊まりする）食卓である。左（北西隅）には炉があって、これでおしまひ、家具は何も見えない。わたしはよこにゐたコタラジャの「アチエー新聞」のイスマイル・ヤコブ君の署名をもらうと「すんだ（インドネシヤ語「スダ」）」といって退去した。不十分であるがアチェーの家は貧富を問はず三部に分れてゐるのを知ったからである。（図は略する）。

このあともうすることがないし、わたしは昼寝をしたので、篠原、桐山二君をさそってレストランへ行って見た。バンドが奏されてゐて最上席かどうか、一等前の席が空いてゐる。隣りに白い服を着してゐるのはいふまでもなくサバン軍港駐在の海軍将校である。わたしは会釈もせず並んで坐った。これも面白くないと、曲が甚だよくない（ただしわたしは音痴である）。わたしはこの時までついて来てゐた新聞記者イスマイル・ヤクブ君に質問した。「敵国アメリカ風の曲ばかり奏するがどうしてか」。ヤクブ君はビクッとして答えた。「これはわたしたちの同族ハワイの曲です」。ハワイがアメリカの一州となるまへで、ウクレレではなく合奏曲なのだが、音痴のわたしはだまって席を立った。篠原、桐山二君も同時に席を立った。そのあとわたしは何をしたか忘れたが詩が残ってゐて、行跡を証明する。「印度洋を見る」といふ題で、スリーマン高原にてと傍題がある。

こゝより見れば静かに湛へたりな印度洋
そは若き日のスタムフォード・ラッフルズが
新嘉坡の建設のために船をゆかしめし海
——その市の昭南島（ママ）と変らんとは夢にだも知らず
またダルブケルケの大艦隊、マラッカの市を取らんため
満帆（ママ）に風をはらませて急ぎしは四三〇年の昔なりき

いま知るやこの洋を自由自在に往来するは
わが艦艇、わが輸送船のみ
あだし船（ママ）なべて沈み、島蔭にひそみ隠れて
往来するたびに許されざるを——
右手には象、虎の棲むスラワ山聳え立ち
コティヂの庭には仏桑花紅く、金鶏草黄なり
知らず吾が生きて再びこゝに来らんこと
ありやなし
たゞわが感慨の一端を述べて
家郷遠征を懐ふに答へんとす。

「果樹園」一五六号の「（昭和二十年以後のオフ・リミットに当る）」をとる。
「果樹園」一五五号の「楊老人を張老人と訂正。

還へらざる日よ

美堂正義

いつまで待ってゐただらう
立ってゐる岩は暖く
吹く風と
波の音
もう幾時間
幾年
待つものは影を見せない

こぼれ落ちる
青春の日の哀しみ
繰返へす波の無為
されど
なほ波は岩にいどむ

終戦と消へた夢
そのさきはつづかない
ひとはそれから先は歩けない
さらさらと砂はくづれる
くづれた砂は
もう二度ともとの姿にかへらない

冷たい海の風よ
待つ永い年月
茫々
私のうへにも　君にも
夕ぐれの月のやうに
淡く遠い

平野謙にもう一度

中河與一

平野謙が「風景」という雑誌で僕をやつつけてゐたので、その反撃を去年の十一月号の「新文明」に発表した。

平野の非難は、僕が戦争中やつてゐた「文芸世紀」で、尾崎秀実を批判してゐるのが怪しからんとか、「文学界」に集つた連中がルネッサンスを否定してゐる座談会を、「文芸世紀」で非難してゐるのが怪しからんといふやうなものであつた。話にもならぬ頭の悪い攻撃であつた。それに対して僕は国際スパイとして日本をソ連に売つた尾崎秀実を批判した事の何処が悪いのか、またルネッサンスといふやうな偉大な歴史上の事実を否定するやうな便乗の座談会をたしなめる事は寧ろ文筆に携つてゐる人間の責任ではないか、と答へておいた。とにかく攻撃にも値しないことで「文芸世紀」並びに僕をやつつけてゐるのは、よつぽどどうかしてゐるのではないかと書いておいた。

その時「新文明」の編集者は、平野謙に対して「反駁のためなら幾らでも誌面を提供するから」と編集後記に書いてゐた。ところが

彼はこれに対しては反駁出来なかつたらしく何の反論も掲げなかつた。

ところがそれから四ヶ月して今度は前の攻撃が無意味に終つたばかりでなく、自分の馬脚をさらす破目になつたので、今度は別の観点から僕を「新潮」三月号の「続批評家白書」なる文章の末尾で、またぞろ攻撃中傷してゐた。実に執拗でその精神の所在の卑劣さ加減には驚くばかりであつた。

かいつまんで彼が述べてゐるところを適記すると、戦争中に僕が同じ仲間の文学者を黒丸半黒丸、白丸と分けた文士のブラック・リストを作つてその原稿を情報局に売り込んだといふのである。実に由々敷き中傷である。

さういふ事が実際問題として常識のある人間に出来るだらうか。この事については既に中河與一全集第十二巻の「自由のための公開状」に書いてあるから此処には繰りかへさないが、毛に角さういふ事を中島健蔵や厳谷大四が戦後の混乱期に書いてゐたといふのである。然もそれには何の証拠もなく、中島も厳谷も「データについては何事も語つてゐない」と平野自身書いてゐる。且つ「自分もそのデータについては全く無知である」と告白してゐるのである。

何も知らないと云ひながら、左様な風説を根拠にして僕を中傷し誹謗しようとするのは一体何事であらうか。見て来たやうなウソを書いた中島、厳谷の罪は最も深いが、このカビのはえた中傷をなほ流用しようとする平野の神経に至つては、時をまちがへて生れそこなつてゐるのではないかと疑はざるを得なかつた。これこそ言論の暴力であり、名誉毀損であり、人格の無視である。少くとも批評家をもつて任ずる人間の出来る事ではあるまい。

彼自身「私はそのデータについては全く無知で、たゞその作家が戦時中主宰してゐた「文芸世紀」といふ雑誌の性格からみて、如何にもありさうな話だと類推してゐるにすぎない」と書いて、僕の名前はあげず僕を暗示し、無根拠の類推によつて、さういふ空気を作らうとするのが彼の意向らしく思へた。即ち左様なことをあちこちに繰り返しのべることによつて、次第に中河征伐の実をあげようとする心理からとより考へられない。

嘗て藤田嗣治を攻撃した連中が、まともには藤田の絵を攻撃することが出来ず「妙な男だ」とか「どうも神経がわからぬ」といふやうな風説によつて彼を葬らうとしたのと実によく似てゐる。

実に卑劣な方法である。類推によつて左様な重大な事を流布し、中傷するとしたら、その悪意と悪意を表現する頭の構造には度しがたいものがある。

「文芸世紀の性格については前文で解明してゐるから精しくは説明しないが、この雑誌の執筆者は、一例で云へば幸田露伴、與謝野晶子、島崎藤村、長谷川如是閑、志賀直哉、萩原朔太郎、高村光太郎、保田與重郎、太宰治、田中克己、三島由紀夫、伊東静雄、蓮田善明などによつて書かれてゐた。如何にも無雑虚妄な雑誌のやうに印象づけようとしてあらゆる卑怯な手を使つてゐるが、さういふところにも平野といふ人間の低さと、世渡りとがむきだしになつてゐるのである。

一体倫理とは何であるか。何の根拠もない風説をあの手この手で流布しようとするなど文士の風上(かざかみ)にも置けぬ卑劣さである。

彼の文章の一節に対してわざ〳〵「新潮」をわづらはす必要もないので、迷惑かもしれないがこの紙面を借りて、彼の非倫理と卑しい意向を暴露しておく。僕は今印度ヒマラヤ旅行を計画してゐてそれに忙殺せられてゐる。こんなものを相手にするのは一口に云つて大人げないし、筆の穢れになると思ふが、その戦術がわかつてゐるだけにもう一度書いたのである。

こんな理非曲直の感覚のない連中が今の文

壇に若しはびこつてゐるとしたら、これはまさに末期の病状である。

僕はしようと思へば名誉に関して彼を告発することも出来る。彼の如きものを征伐しようと思へば歴史を待たずともたちどころに出来るのである。この俗悪、低劣、頭の余りよくない人間が、今後どういふ風に動くか、暫くその無知と滑稽な行動とを観察したいと思つてゐる。

閉校

吉本青司

子供たちが手んでに挿した花環が　生き生きと飾られた小学校の閉校式　子供たちのうたう最後の校歌には元気がなく　父母たちのすすり泣きがむしろ高かった　しきりに往来する過疎の村の寂寞とした想い　挨拶に立った詩人は　泣き虫なのでと　ことわる先から　もうこみあげる熱いものに声を奪われた　こころ余って言葉が無いのだかつて住まいし愛しためるへんの国　漏斗形のみどりの谷間　傾いたお茶堂　赤い屋根の巣箱みたいな小学校　空はあくまで高く美しく　詩人は野性の賢い子供たちに囲まれ　失われた幻を見つづけた　村長が閉校を宣言し　永い学校の歴史は終つた　追憶の舞台も取り毀され　子供たちの明日からの旅がはじまる　嶮しい山河よ　石で爪を剝がさぬように　刺で肘を裂かないように　村の女神は　指先で泪をぬぐった

小鳥は歌う　ホケが森
花咲き匂う　玖木の里
みんなで勉強　よくまなび
玖木小学校　たのしいな

校歌を刻んだ自然石の歌碑　それをめぐって　年々に　すみれの花は咲くだろうか

ゆめみこたちの群像(六)

山田俊幸

三月二十五日の日記では学校を続けることに意を決したはずの茂雄だが、昭和七年には一高を中退している。友人の柿岡時正氏は、中退後の茂雄のことを〝一種の精神的放浪生活〟の状態にはいったと記している。この時期の茂雄の遺稿はまるで残されてはいない。

そうした茂雄の精神的放浪生活も一年後の昭和八年にはほぼおさまっている。昭和八年四月につくられた短歌「屑篭から」には次のようなうたがはいっている。

…逢ひみての後に…
あひみてはまた云ふこともなかりけり
云ふことありと招(よ)びて逢ひしが
…「制服の処女」を見て
マヌエラのくらき瞳のかげに見き悩む
ことありと云ひし君がまなざし

茂雄は四月にこんな歌のいくつかをものし、また「あ・しいさいど・すとおりい」「小青草」という小品を、そして「海の名将列伝」というエッセイを書いているが、それらはまだまだディレッタント的な指向からはぬけでていない。「水師」以来の終始一貫した創作意図もはっきりと出ていることは出ているが、それはいまだに文学としてのそれではない。同じ昭和八年に第一高等学校の校友会雑誌にかかれた立原道造の小品とくらべても文学作品としては数段完成度が低いし、また生田勉氏の論文などとくらべても茂雄のこのころの論文は見おとりのするものである。

しかし、茂雄にとって〝物を書く〟という

行為は、初期の立原式の文学の為の文学ではなく、また〝思考〟も〝思考の為の思考〟という観念的なものではない。〝言行一致〟、それが茂雄の理念だった。茂雄は観念が観念としてのみ存在する時、決して方向性を持ち得ないことをよく知っていた。それが実行されることによってのみ、それは誠となり得る。茂雄の小説なりエッセイなりをそうしてみた時、〝「仏陀の生涯と思想」を読んで〟と副題のある「仏陀の宗教」（昭八・五）というエッセイは面白い。創作から離脱して純粋に自己の指向をたしかめる場としての哲学を求める茂雄の姿がはっきりと垣間みられる。

……（前略）……

以上述べ来った所を要約すれば仏教は世界を流動の生命と観、永遠の人格とか霊魂を認めない。物質主義とは相容れないが、自然科学とは矛盾しない。之が仏教の優れた点である。

※

仏教に就いて哲学的に「生きて行く道」を示すものとして研究するのは価値のあることだと思ふ。「頼るべきものを求める」ためにはキリスト教の方が適当であらう。併し「生きて行く道」を自力で見出して刻々の自己反省に依つて生活を築いて行かうとする人々にとつて仏教を知る事は極めて有利である。

茂雄は、決して〝頼るべきものを求める〟人間ではない。幼いころからキリスト教に近い所にいた（家の隣に二人の姉妹がいて、その姉の方が病弱な文学少女だったという。茂雄・龍樹の兄弟はその人から児童文学の、またそれに関連してキリスト教を雰囲気として受容したらしい。）とはいえ、理念という力をもちはじめた茂雄には〝頼るべきものを求める〟という消極さはなくなっている。それは茂雄が仏教を愛したということではない。茂雄の理念は、〝生きて行く道〟を自力で見出して刻々の自己反省に依って生活を築いてゆこうとする指向をすでにこのころに生んでいる。しかも、仏教が〝世界を流動の生命と観〟るという表現は、茂雄自身が後年、自己の求める真理を〝流れるいのち〟と名づけたことと無縁ではあるまい。

このころの茂雄の読書は「愛賞名篇集」と題された一冊のノートによってほゞ推定できる。このノートは、茂雄の愛読書の中から自分の好きな場面を抜書し、それに寸評を加える、という形式で成り立っている。古典では「枕草子」「伊勢物語」「神皇正統記」「吉野拾遺」「古事記」「増鏡」を、明治以後のものからは、茂雄が「僕が初めてこれを読んだのは、中学へ入つた年の冬だつた。明治以後の作品で、これほどの感激をもつて読んだものはない。」と記した中村星湖の「少年行」を、そして池田宣政の「輝く凱旋像」をえらんでいる。また、外国文学からは、トルストイ「戦争と平和」「少年時代」、チャールスカヤ「ニイナ・ジャワーチャ」、アンデルセン「絵のない絵本」を抜書している。

これは内容的に大別して戦争物語と少年文学とにわけられる。少年文学は茂雄の早い時期からの愛読書であり、戦争物語は中学後期からの愛読書であろう。少年文学は茂雄に少年の夢と、人々へのやさしさをおしえた。戦争物語は茂雄に一つの史観をおしえた。この二つは若い茂雄にとっては別々の受容であった。そして、少年文学は実生活におけるやさしさと文学としてのジェームス・バリ的イロニー含んで「小青草」「あ・しいさいど・すとおりい」という二つの作品を生み、戦争物語は日本古典――例えば「古事記」――を戦争文学として受容することにより、極めて記録文学的な「水師」という作品を生んだ。

こうした茂雄の中の二つの文学が、一高中

退後の精神的放浪生活の後に、外国文学が少年文学、又は戦争文学とむすびつき、単に戦争場面への興味から、戦いのあとの虚しさなどの、心象としての戦争文学へと昇華される。茂雄の文学への眼覚めはそうした形で完成する。そこでは「水師」を書いた時のような無意識の記録文学への指向はすでになく、〝何故〟そうした形で文章としてそこに一つの形象か定着したのか、という作品自体への問いかけがなされはじめている。そして、それは決して文学者のものではなく、茂雄が研究者としての道をすでに歩みはじめていることを示すものである。

茂雄のそうした姿は、列えば「神皇正統記」に対する記述にもみられる。

太郎

浅田 二三男

（三）

柿の葉が大きなみどりをそよがせ
茶の芽はすっかりのびて
ホトトギスの声がする
チョットコイもないている
太郎もそれをきいているか
山の中の葉っぱの繁みの
静かな孤独のなかで
チョットコイをきいているか
近所の人にきくと
太郎はさっぱり見ない
というすげない答え
たずねようもなく
さがしようもない
お前はどこへいった
じゃがいもに土をかけ
その間も
お前の前足で掘った
土のあとがないかと
目を皿にして見ているが
白々と土はかわき
そよ風に草がゆれているばかり
ニャオニャオ　ニャオニャオ
というお前の
あのわがままな
せかせかした声を
いま一度耳にしたい
どうしても耳でききたい

親房卿――神皇正統記（巻六）

又の年戊寅の春二月、鎮守の大将軍顕家卿、又親王を先立て申し、重ねて打上る。海道の国々を悉く平げて、伊勢伊賀を経て大和に入り、奈良の京になん着きにける。それより所々の合戦あまた度、互に勝負侍りしに、同五月和泉の国石津と云ふ所にての戦ひに、時や至らざりけん、忠孝の道こゝにて極まり侍りにき。苔の下にも埋もれぬ物とては、唯いたづらに名のみぞ留めてし。心うき世にも侍るかな。官軍猶ほ心を励まして、男山に陣を取りて、暫く合戦ありしかど、朝敵忍びて社壇を焼き払ひしより、事成らずして引き退く。北国にありし義貞も、度々召されしかど上りあへず。させることなくて空しく成りぬと聞えしかば、云ふばかりなし。

神皇正統記も巻末に近く、日に〳〵衰へて行く南軍の勢を眺めながら筆を運んで行く親房卿。最愛の我が子を失ひながら

さきだてし心もよしや中はにうき世
のことを思ひわすれて

と詠じ、

上村肇詩集
みずうみ
詩人は一生のうちに一篇でいいから絶唱を書くことを悲願とする。そのためには自が全生涯を賭けて悔いるところがない。上村肇の「みずうみ」は紛れもなくこの種の絶唱の一つである。
序文・伊東静雄　小高根二郎
撮影・上村紀元
序詩
鶴
幼童詩篇
密柑／朝霧／蟻／公園
地上の歌抄
独楽／夜の鏡／秋風／瓦／鶏／詩道／蝙蝠／雀の歌／なしよなるらんぷの歌／虚日／雪／大阿蘇／終戦冬の海
海島の歌抄
紅葉谷らんぷの歌／旅程／鱶／不知火／福野天草紀行／大国主命／陋巷詩篇／年を経た鯖の物語／蛍／雪の日／亀／牛／つばめの歌／海鳥の歌／春の潮／雲に寄す／湯の谷温泉／鯉／象／鶏鳴／夏の服地
みずうみ抄
桃太郎悲歌／夜明駅／遠い花火／永別の春／鎮魂歌／みづうみ／
〒共　¥890
東京都新宿区山吹町二二
黄土社

忠孝の道こゝにて極まり侍りにき。
……心うき世にも侍るかな。……

と記した本当の心の中はどの様であつただらう。

「神皇正統記」は山田孝雄博士などの校註でかなり以前から流布しているが、茂雄の読んだ本は神道史の権威宮地直一博士の校訂本である改造文庫本であろう。茂雄の「神皇正統記」に対する観方の多くは宮地博士のものからきている。解説で宮地博士は、「……尊氏更に大兵を擁して改め上るに及び、官軍防ぎ難く、正成は討死し、義貞は敗れ、天皇は吉野に入らせ給うた。顕家更び東国の兵を率ゐて打ち上つたが、延元三年和泉の国石津にて戦死した。親房卿の悲歎如何許りならんと、漫に落涙を催さる。」とかき、本文においては〔苔の下云々〕を註して「身は苔の下に埋りても、唯名のみをこの世に留めた。顕家は著者親房の子。「心うき世にも侍るかな」と歎ぜられた情思ふべきである。」と記している。茂雄はおそらく宮地博士と同様に親房の心情を思いやり涙したのであり、史書「神皇正統記」の文学的な〝あはれ〟はここに尽きるのである。茂雄の終生の座右銘としての「神皇正統記」との出合いは、ここにきわめて稚い形として出ている。

編集後記

三月四日。中河与一氏から本号所載の一文の寄稿があゝた。僕も「文芸世紀」同人の一人だったよしみでこれを掲載する。一方的な交通が文壇ジャーナリズムの慣行であったがもうそろそろ目が覚めていい頃ではないか…。そういえば最近の平野謙氏は、個人的な回顧に耽溺して、前進の気勢がなくなった。つまり過去や個人に淫しすぎている。

三月七日。宮城賢氏より、既報した詩人ステッド氏に、伊東静雄の英訳を送つたところ、大体次のような礼状がきた由なので、一部を紹介する。

「伊東静雄の英訳をたいそうエンジョイしました。以前にこの詩人のことは聞いておりましたが、その作品は未見でありました。貴訳をもっと時間をかけて読み考えてみたくおもいます。彼が大へんすぐれた詩人（a very fine poet）であることがわかります。たとえ一つの言葉から他の言葉への翻訳にあたってどんなに失われるものがあろうとも」。尚、ステッド氏が伊東の存在をすでに知っていたのは、過般ニュージランドを訪れた江藤淳氏からでも聞いたのだろうか？

三月二十七日。筑摩書房の小宮正弘・東博両氏に約束の定稿「蓮田善明とその死」をお渡しした。本号所載の「陣中日記」も大幅に収録して、面目を一新したつもりである。尚此度お世話を頒う東氏はすでに高野山の会同で剃染の人であつた。高野好きだった善明とやはり黙契があつたのだ。（O）

果樹園　第一五九号（毎月一回一日発行）
昭和四十四年五月一日発行
編集兼発行者　池田市石橋二丁目六ノ五　小高根二郎
印刷所　大阪市東住吉区桑津町三の十八　元市印刷株式会社
発行所　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社
定価　四十円　送料　二十円

果樹園　一六〇号　昭和四十四年六月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価四十円　送料二十円

果樹園

第160号

陣中日記(三)　蓮田善明
友だちに沢田閏
伊東静雄研究(六)　小高根二郎
夜汽車　板倉鞆音
太郎(四)　浅田二三男
スマトラ記(八)　田中克己
ロセッティ小曲(四)　森亮
自然に、充分自然に　伊東静雄
宮城賢
ゆめみこたちの群像(七)　山田俊幸
山荘詩評　吉本青司
朝福地邦樹

陣中日記(三)

蓮田善明

○倭寇賦

彼らは劫ねたる大和の民なりき
彼らは涯り無き海を渡り
大いなる陸を望みて
情寂びしく遠征せる民なりき
彼らは「八幡大菩薩」の幡を押し立て
言語通ぜぬ国々を掠めたりき
彼らは心、物の慾に拘泥はざれば
宝を供へて賞で迎ふるものを愛しみ
財を惜しみて抗ふものを腹立ちて伐ちたりき
彼ら、摩訶不思議なる群どもはかくて大陸を
南に北に掠め廻り
或は昔仏の住みたまへる花鳥異しき天竺を襲ひ
或は長江を溯りて老仙天がける崑崙を探りしかば
大明国驚き騒ぎて防ぎ肯へず
日本将軍に諂ひて討滅せんと欲し
不逞なる虚名を奉り
貢物山と積みたりしも
遂に将軍之を鎮め得しことを聞かず
彼らはいつしか己れと水に死に行きき
唯ひとり山田長政なる者
暹羅国に王者の勢を恣ままにし
毒を盛られて最期を遂げしと
青史にその遠征を惜しまれぬ

四月十四日

夜来の雨気。昨夜九時、九江に碇泊、岸闇（ママ）し。鼾声と虫とで眠れず、三時漸く眠りにつく。明けてみると相当の街らしい。駆逐艦二隻。「オホトリ」、和船がどし〳〵下航して行つた。此の舟は沖に止つてゐる。

下船、大泥濘なり。兵站宿舎に入る。不潔汚雑、食事の拙さ、さすがに堪へがたきものを感ず。街は死の街。

西安へ行くとの噂あり。虞山攻撃初まりと。同行者の精神状態にも不快なり。二三嬉しき人あり。「透谷選集」を行李より出しよむ。夜、鹿児島の将校酔ひて酔狂的にくつてかゝり、うるさし。夜おそく瑞昌より引返せる鹿児島の衛生部隊なり。夜おそく三名の下士、六師とて訪ね来りその戦争談をなす。心打つものあり。十一時辞し去る。久しぶり足を伸ばして寝る。

四月十五日

昨日につゞく微雨、次第にやめるも泥濘はひどし。やゝ下痢気味、強ひて誘はれて街に出る。俄か出来の飲食店と食料品店と兵隊と自動車などの往来。支那人は難民区。第一線

の町としての典型的風景。ミルクばかり三度のみ、パンを一切くふ。昼、夜飯をくはず。帰りて、宿舎前の花園旅館の風呂をもらふ。浴場より望める風景、寂しいながら佳し。帰りて寝る。遊びに出たる連中ぼつ〳〵と帰り来りて猥雑愚劣の話、眠つたかと思ふと又例の鼾声はじまる。

心に花をもちたい。

しかし今日悲哀に心の重心の傾く思ひもせり。犇々と、帰郷の心あり、乃生は一線に出たし。或はとにかく漢口へ行きたし。昨日迄出した手紙が機秘に触れて届かぬかもしれぬ。敏子、晶一、日本文学の会宛更に出す。早くも不健康なれど、元気と書く。晶一を思ひ涙出づ。憲治さんと同室の室長たりといふ御船中出身の戦車隊長藤本大尉、村上少尉らを訪ね来る。マラリヤ起りて帰る。明日又ここを出発する。

○燕に寄す

弾丸に壊れ果て町より人は去りし廃墟
ふりやまぬ雨に舗道さへ泥濘みにあふれ、靴を没しぬ。

兵と自動車と泥をあびて往来し
破れ残れる家に俄かに設けられたる汚穢なる飲館には
よごれてずるい姑娘が臭き安料理を運びぬ。

心思郷に倒れんとす、燕あり一羽
暗き室より軽々と人なき軒にすべり入り
又翔り出て雨雲の中にしきりに舞ふを見たり

足ふみとどめその軒をのぞきて見しは我
ひとり
涙せまくる思ひあり

四月十六日

十六日、町に出で、フランス病院にてチブス予防注射をうけてたま〳〵入院中の郷土部隊の戦傷将校を見舞ひ、某飲食店にて兵小椋某に会ふ。給水隊の特務一等兵なり。四国の産、その行軍力の自信と、上官の恩信とを語り、又故郷への便りには「健康を祈る、こちら元気です」よりほかに書かないといふ。

帰れば、今より稲葉部隊長に申告し、明朝早く出発といふ。花園旅館にて部隊長に申告す。一、東亜新秩序の意義を兵にまで徹底せよ。二、断乎として己の信ずる所をなせ。と訓辞し、年をきゝ涙ぐまれ、尚励まさる。その眼光、その烈しさ壮烈さ忘れがたし。参謀長に挨拶、将校の指導について烈々、兵は神様だといふ。共に忘れがたし。

辞して衣料廠に被服を貰ひに行き、遂に九時になる。暗澹たる大泥濘路をトラック辛うじて宿舎に到る。夕飯もなし。荷造にかゝる。この日記ももし携行すれば紛失するかと思ひ、遺品としてせんとして行李に入る。腰又痛くなる。十二時就寝。

四月十七日

六時起床。すぐ師団のトラックを借りに行く。河野少尉の厚意にて借り、朝食は飯盒につめて八時乗船出発。再び江上に出で、悠久の濁水の面に泛んで心悲し。船上に仰臥す。日照る。風暖し。眠れず、子供の事など考へて涙出づ。ねたまゝ碼頭鎮につく。上陸、久しうして宿舎に入る。淋しい部落なり。大きな船がつき、輜重続々と乗りて遡る。風呂に入る。風呂よし。夕食、米の飯に、トンカツと、青々した小葱と肉の醋味噌あへ、菜漬。みんな驚呼す。饑ゑて名言風発。色々うまいものの話出す。「舌ンスピツ切るごたるビールばグーツと一杯ナア」といふ稲津少尉の話が最高点。石見少尉、「オラその中の一つでよか」内地への葉書をかく。食後、対岸に空爆あり。ペンをおきて岸に上りて望遠鏡にて見る。何ともいへぬ気持。痛快であつて痛快

だけですまぬさびしさ、そして又そのさびしさを粉砕する壮烈さ。夜蠟燭の灯をとりかこんで猥談。六師の兵の気合の讃美。十一時頃就寝。同室—吉岡、中村、松岡、稲津、余、石見の六人。別室—橋本、志水、岩佐の三名。別室に残余八名。夜冷ゆ。明日出発するのでもなく、連絡の者だけ先発となる。殆ど急いで往く必要なし。自重を要す。

本日、六時にめざめ、朝食梅干うまし、後散歩。部落を見、沼のほとりで浄水器より出たる生水をのみ、西方高地に上り、脱屎して下り、昼食、サンマの冷凍の煮つけ、馬鈴署とブタの甘煮、シンギクのゴマ醤油、ゼイタクな御馳走。酒を二杯あほる。行李よりウイスキーを出してのみ、この帖を出す。なつかし。皆昼寝。稲津少尉より、「胡歌の詩」をきゝ写す。

難民の窮状、気の毒なり。

夕刻吉岡少尉、雉子を射ちに行き帰りて告げて曰く、ある家の門に白墨にて次の如き落書ありと。「欲見其人而来、未見其人而去、悵然返也」。吉岡氏を案内に中村少尉と実見に行く。

四月十九日

碼頭鎮より瑞昌に至る。約三時間余。泥濘大分干きたるもトラックの転覆せんとすることあり。左右の山に山つゝじ、黄に赤に美し。鳥多し。到着後昼食。出発以来最も味ある食事なりき。吉岡、石見、余三名一室。鳥声しきり。午後三時頃より砲声きこゆ。明後日出発になるとか。どんより曇りて降らんとして未だ降らず。

昨日、橋本、岩佐両少尉碼頭鎮南方に散歩せしに、野砲兵と歩兵と二名の来るに会ひ連れ立ちて帰りしに、彼らはトラックにて来りしも、瑞昌との間にて故障し、野宿して来りしと。トラックの運転手は一人残れりと。而して、その歩兵、橋本少尉に向ひて、「切つてみなはりまつせんか、私がそこらから連れち来ますけん」と。「良民を可哀さうじやないか」「どぎやんありまっしゆに」

今日かの運転手は尚トラックにつきてゐたり。

○自然

船出しぬ、崩壊と泥濘の巷より
小船は波にたゆたひつ
江上はるか遡る
濁れる水は今日もまた
面変りせずうち濁り

ためらひもせで又急かず
ただひたすらに大いなる
輪廻の帯と流れ行く
遠き岸には菁々と
春とて草も木も萌えて
空と水とを隔てしぬ
われ、ふなべりにさし倚りて
涙ほとほと堪へがたし
自然を見るは斯くのごと
悲しきものと思ひけり

四月二十三日

十九日碼頭鎮を発し、本日、中隊に到着(手帖)范家舗にて可児小隊に立寄り、支那酒の饗応を受く、一日小雨中泥濘の悪路を来り、その味その色又甚だ佳なり。

○讃支那酒歌

ならびなき玉といふとも
天ざかる唐の田舎の
玄粮のこれの地酒に、
あにしかめやも

盃に注ぎてし見れば
水のごと色てふなくて

盃の底まで透きぬ
そよ風の面に吹くごと
香りとはあらぬ香りを
ちびちびと舌に嘗むれば
淡雪のしばしのひまを
しみじみと口にふくみて
辛味ある　舌に浸みつゝ
焼くがごとのどをくゞれば
ほのぼのとあま味のこりて
爽かに口こそひゞけ
二杯の三杯の酒に
われ酔ひにけり

今日幾里　泥濘路を
汗みづき辿りつきたる
水清きこれの谿べの
村里を警備る君が
たくはへの少き酒を
惜しみせで饗へてまひつる
めづらしきこの支那の酒
いくさびと　われ酔ひにけり
あはれ佳き酒

此の酒や強くやさしき
君が手になつける村の
なにがし等　君を慰さに
さゝげもち到れりし酒
この酒や　川辺に集ひ
女どもその夫がため
姑娘どもその父がため
酒瓶並べ醸みけれかも
其を選りて献りけれかも
甘らこの酒

酒強きわれにはあれど
うれしくも二杯三杯
ほとほとに酔ひぼれにけり
われこそは大和の男子
愛しき妻　故郷にあれども
幾百里　国を放りて
かゝる酒酌む

四月二十四日

雨、滞在、ひるもよく眠る。夜敏子の夢みる。夜雨はげし。

四月二十五日

曇、出発、雨降る、張庄に泊る。敏子の夢みる。

四月二十六日

雲切る、飯うまし。大矢田に泊る。酒わたり、進級者もあり、はじめての酒ゆえ小隊のものとのみすぎ、非常に苦しく、吐けり。敏子の夢みる、寒し。

四月二十七日

晴天、道もよく乾く、横港湾に泊る。今日は美しい川添ひなりき。朝食よく食へなかつたし、歩き出すと宿酔が出たが、大したことなく、元気出たり。

この行軍中、つねに詩を思ふ。

軽装と、靴もなれ、気分としても、この行軍殆ど苦痛なし。日々の行程も四五里平均にすぎず。

○痩馬！

幾日の雨に泥濘の
尺余に深き中に又
鉄より堅き石瘤の
憎や星々うち交り
頭もたげて漸くに
歩兵は道の縁伝ひ
辷りながらにさし掛る
峠の坂に彼方より
激しく聞ゆる声々と
馬の足掻ける蹄の音

あなやと見るに三頭の
痩弱馬の曳く車輌
輜重の行李と見られたり
馬の口取る兵もあり
後ゆ傍ゆ鞭うちて
勢ひ猛く叱咤しつ
一気に登り来るなり

坂の下には順を待ち
続く車輌も幾十車
重たき行李うち積みて
馬に息をば入れゐたり
兵は互に助け合ひ
一車につゞき又一車
坂の麓にひきいだし

呼吸をはかり一斉に喚き
その声谷に谺しぬ
馬も歯をむき、気ほひ立ち
足は痙攣り踏み滑り
或は石に躓づきて
脚入り乱れ踏み紛ふ
轍も岩に砕くかと

友だちに

沢田　閏

きのう
オペラ座へ行こうとして
わざと遠まわりして
コンコルド広場でメトロをおり
ちょうど七時に地上に出たら
広場の中央のオベリスクと
それを囲む八つの女神像を　春近い夕闇の
　中に浮きださせるように
街燈がいっせいにパッとついた
それは音のない　ひとつの華麗なうたげだ
　った
冬に病気をしてからすっかり気が弱くなっ
たのか
なににでもすぐ涙をこぼしそうになる
メトロの乗換え駅で
通路から通路へと急ぎ足に歩いていて
曲り角をひとつ折れたところで
はなやかな音色のアコーディオンが聞こえる
ずっとむかし　大学生になったばかりのころ
　に習いおぼえた古い曲
通りかかってみれば　それはヨレヨレの服と
　帽子とエリ巻きを身につけ
白い杖をわきに引きよせためくらの老人だ
パリの生活もあと三カ月
道ばたの小さなショーウインドーにも街路樹
　にも
ひとつひとつ別れを告げるようにして歩いて
　いる
うつむいて歩いていても
さまざまの想念と情感が
人工火花のように明滅する
ゆっくりと生きるということはいいことに
　ちがいない
日本に帰っても　ゆっくりと生きよう
オペラ・コミック座でオッフェンバッハの
　「ホフマン物語」を見た
少女歌劇のように可憐な少女がふたり
手をつなぎあって舞台のまん中に出てきて
「ホフマンの舟歌」をうたった
舞台の奥をゴンドラがゆらりゆらりとすべ
　っていった
ぼくはまた　座席の奥に深く身を沈め
そっと大きなため息をついた
涙がこぼれそうだった
そんな日々である

狂へるごとく弾(はつ)みつつ
躍りつつ跳ねつ登り行く
峠に近く到るうち
馬もあはれや力尽き
坂の中途に足掻きのみ
次第に弱り附き添へる
兵に不安の色溢れ
必死に喚き引き立つる
歩兵も見かね傍(かたへ)より
声を合せて励ましぬ
折から車上に手綱とる
車輌の主(ぬし)の喚(をら)びたる
「ソラ　ソラ　痩馬！
　頑張れ　己(おの)れ　痩馬！」
その言ひ草(くさ)のをかしさに
思はず彼を見上ぐれば
鞭ふり上げてびしびしと
馬の尻をば敲けども
まことは打たずわづかのみ
鞭を触るるにとどめつつ
眼には涙の露浮かべ
泣くがごとくに叫ぶなり
「ソラ　ソラ　痩馬！
　頑張れ　己れ　痩馬！」
声を涸らすに、兵ら
又励ませば痩馬の
頂越えて　からからと
坂の彼方に消え行けり

伊東静雄研究(六)

小高根　二郎

3　愛と詩の原形

静雄が酒井家の姉妹のどちらに悲恋をしたか？　については、人によつて意見が違っている。大村中学同期生で酒井家の縁者である蒲池歓一は姉・安代説であるに対し、京大時代の文友・宮本新治は妹・百合子説である。筆者はその折衷説で、初め安代に友愛を寄せ、後に百合子に悲恋を捧げたものと観察している。それほど二十一二の青年期の愛情は溶融性をもっていて不確定だからだ。まず愛は自己思慕という原初の形に始まって、母体である父性ないし母性思慕から、やがて異性思慕へと移行する。その移行過程において、それは愛であるのか、恋であるのか、純粋に分離しえない、相互にたゆたい溶融する複雑な心情である。その溶融する不確定な愛を、静雄が自分より十ケ月ばかり姉に当る安代に抱いたとしても、別に不思議ではない。

障子を
あくれば
枇杷の木
障子を
させば
枇杷の影

昭和二年の正月、静雄は松の内の幾日かを酒井家で過した後、こんな詩とも句ともつかぬものを安代に書き送っている。「これで、少しは、私の近頃の心境がおわかりになるだらうか」と解説が付されているとこから推して、これは明らかにたゆたい溶融しつつ、これから愛に凝固するか、恋に凝固するか、にわかに判定しがたい不確定な心情である。障子を開けても閉しても存在する枇杷の影とは、寝ても覚めても心に佇立する面影の比喩だからだ。

この正月に撮った写真がある。陽あたりのいい姫路五軒邸の南縁である。向って一番右端に、まだお下げ髪の百合子が縁に腰を掛け、両足を踏み石の上にそろえている。女学生らしくまだ堅い木の実を感じさせる顔である。その左に、ふっくらと実った束髪の安代が、小太郎の背に半身をかくすように坐って、にんまり微笑を含んでいる。中心に主人・小太郎は無雑作な右立膝で、はだけた裾を押えるように両手を前に伸し、右手指の先にシガレットをくゆらしている。屠蘇機嫌であろうか、列のむっつりではなく、笑っている顔は、安代にそっくりだ。その左にひさし髪のフミが両掌を膝の上に組んで端然と坐っている。養子の小太郎と違って小柄ながらどっしりした貫録がある。顔は百合子に似ている。前に茶瓶と煙草盆をすえている。その左、写真の最左端に、招かれざる客の静雄がアット・ホームな大胡坐をかいている。所在なげに手先でなにかもてあそびながら、陽に眼を細めた蓬髪の頭を、家族の方にかしげている。信ずるところありげな風貌である。

おもうに、この幾日かの滞在で印画された白桃のような安代の面影が、枇杷の立木の影と一緒に静雄の胸に投影をしたのであろう。この枇杷の詩は、＜これが枇杷の実か＞の解説の折に触れた井泉水の句に似ている。＜暮れても鶺鴒の夜　明けては白い障子＞。但しこの句は昭和四年作であるから、静雄の方が二年先行していたわけである。それにしても静雄はこの他に枇杷の歌＜うつそみの蜂はたまたますがりつつつひにわぶしき枇杷の花なり＞も詠んでいた。陰微に花咲いていつか甘く実っている枇杷は、伊東の生涯の象徴であるかのように、その後も静雄につきまとって離れない。

これは百合子から直接聞いた話であるが、静雄は酒井家を訪問した際は、きまって「こらえておりましてござんしたけど、とうとうきましてござんした」と挨拶した由である。こう前置きをされてみると、酒井家ではたとえ多少迷惑を感じたとしても、断る言葉に窮しただろう。というのは、＜誘はるる清らかさを私は信ずる＞（わがひとに与ふる哀歌）という信念以上に、強い謝絶の言葉も、信念も、この世にないからである。先の写真における小太郎の投げやりな立膝姿や、見ようによっては微苦笑とも受け取れる表情には、どうにでもなれ……という放下した心境がうかがえないこともない。それかあらぬか、その後の姉妹宛の静雄の手紙には、むっつりと推し黙った例の小太郎の無愛想さや、或いは不機嫌は、訴えられておらない。

静雄の安代に寄せる思慕はとにかく、彼女が彼に抱いた感情は、姉としての愛情を出でなかったようである。時に小遣や、靴下や、本を恵み、風邪を引いたと聞いては、風邪薬や、ウガイ薬なども送っていた。要するにドメスチックな愛情ではあるが、娘たちが思いつく平凡な好意の限度を出でない。ところ

夜汽車

板倉　鞆音

旅の終りの夜汽車だった
何も見えない窓をのぞきながら
お前はたずねた
――トム　何を考えている？
裏日本の夜汽車のなかで
ルイーゼ　三十余年ののち
おれはあの問いに答えよう
――窓にうつったお前の顔をながめ
ている

が、薬を送ってもらった好意を回想している静雄の方は、いささか度がすぎた感情を露呈している。△病熱ゆゑにうつそみに湧くほとの汗をぬぐひて我は淋しかりけり▽（昭和二三日付安代宛手紙）。ただし、この「ほと」とは、身体のどんな部位に当るかを、ごく最近まで、彼女たちが知らなかったことはさいわいだった。

これに類した、青春が特質している暴走性を、母親のフミは百も承知していただろう。父親の小太郎が、むッつり……とした疎外の意思表示をあきらめた後も、しつけによって娘達の心に節度の生垣を植えることを忘れなかったろう。それは典雅だがトゲのある柊の生垣だ。それは又、士族の家付娘としての当然の矜持でもあったろう。魚ン棚の雇人は勝手口からしか来訪も話しかけも許されない。その雇人の息子は書生ッぽを越えた存在ではありえない。そう、しつけられた生垣の一線を、安代の応待に感じたのだろう、静雄はみじめな失望に見舞われたのである。

おちやま　くるる
はりまぬ　かげる
いのる子は　たれの子

遠い山は暮れ、播磨野からも日は陰った。薄暮のなかに一人とり残されて祈っている子とは、幻滅の悲哀を味わされてしょんぼりと帰落する静雄自身であろう。そう結論するゆえんは、この詩には次の解説が付けられているからである。

「どんな女も女は冷めたいものをもつてゐるんですね。ある男にはその冷たさが女に対する恋情をあふり、ある男には恋なぞといふことをうんざりさせる。」

多感な静雄はうんざり型であるより煽られる型に属することはきまっているが、この詩を送った宮本に（昭和二年十月十九日付書簡）、少しいい格好を見せているわけである。筆者は想像するに、この頃安代にはそろそろ縁談があったのだ。静雄は彼女の心に、いつか柊の生垣がとりめぐらされているのを知って、「どんな女も女は冷めたいものをもつてゐる……」と感じたのだろう。

その後、静雄は出家を気取って庵に籠っている。庵といっても例の下宿の別名である。最初の青木の下宿は阿呆陀羅庵と呼んでいたが、雄雞のコケコッコーや、同居人の赤ん坊のピーピーに悩まされて、一年余りして大学近くの吉田にいったん引越し、さらに夏休明けに左京区聖護院西町一元岡方に越したのである。聖護院の西門を出て左、とっつきの角屋敷元岡家（現在高橋家）である。その屋敷の内庭に隠居用に建てた三畳の離れがあったが、不用になったので下宿に供したのだ。もともとこの離れは、隠居所としての使用目的だけでなく、毎年七月に行はれる聖護院の大峰入りの行事の際などにも利用されたのだろう、聖護院側の軒に「御憩所」という扁額が掲げてある。その額の下にくり抜かれている丸窓。その丸窓のとこに静雄は小机を据えたのである。ところがこの離れには、不都合なことに、便所が附設されていなかった。大小にかかわらず便意を催せば、主屋の背戸の格子戸をガラガラと開けて便所に通わねばならない。昼はとにかく、日暮れ以後は、小の方は主屋通いを省略したのである。離れのアガリカマチから四五尺の所に枇杷の立樹があった。まずその幹に注ぎかけ、なめらかな樹皮を伝わらせ、ついで地面に流すという間接法を起用したのである。ただし、雨が降れば直接法でやらかした。△雨の音と小便の音と分くべくもあらず夜更けて雨しきりなり▽という静雄の戯歌もある。その枇杷の立樹は肥料が効きすぎたかして立枯れて、現在はツッジの茂みの中に経一尺ばかりの根ッ株を残すのみである。この枇杷にちなんで静雄は、その離れを「寒枇庵」と名付けていた。

話はさらに尾籠となつて恐縮だが、静雄は雨を利用した直接法、枇杷に頼った間接法の他に、投擲による間接法も得意芸であった。彼はよく宮本の下宿を尋ねると、夜を徹して文学談義にふけった。そんな時、この間接法を活用した……とは、宮本のなつかしい思い出の一つである。

「深更、二人尿意を催すことしきり、京都の家は奥深く、且つ家の構内にいくつも仕切り戸、くぐり戸があるので、夜中ならずとも用を足すのは中々不便で億劫の極みであつた。彼に教えられてパトロン紙の封筒に静かに洩らし、ブラリブラリと反動をつけて二階の窓の柵の間からなるだけ遠く向いの路面にほうり出す。しじまを破つて『バシャリ』と音がする、続いて又『バシャリ』。首をすくめて舌をだしニヤッとしたものである」（昭和三十六年二月「伊東静雄全集」ノート宮本新治―若き日の伊東静雄）

余談はさておき、寒枇庵に籠って静雄は万葉集の筆写をやっていた。写経する有髪の僧のつもりなのである。その第十五巻、通巻第三七二三番の狭野の茅上娘子の歌を安代に書き送っている。

太郎

浅田　二三男

（四）

今日は朝から
二十日ぶりの雨ふりとなった
草の葉もぬれ
土もぬれ
山の樹々もびしょぬれになった
そんな山道を
お前はひとりでさまよっているか
太郎よ
もう田んぼの稲草も
ずいぶんと伸び
畦の草は高くなった
草がしげると
お前はジャングルのなかに
とじこめられたことになる
食べるものとて何一つないジャングルで
お前はなき声をたてることもなく
さまよっているか
太郎よ帰ってこい
はやくはやく

安之比奇能　夜麻治古延牟等　須流君乎
許許呂禰毛知弖　家須家久母奈之

彼女は斎宮寮の蔵司に仕えた女官であった。ここは禁男であった。ところが彼女は中臣朝臣宅守と恋に陥った。掟によつて処罰された。彼は遠く越前の国に流されることになった。その別れに際して慟哭しながら歌った彼女の惜別歌である。その惜別歌は四首あるが、これは冒頭の歌で、これに続いて「君が行く路の長手を手操り寄せて焼き払う天の火でもあればいい」と、まさに断腸の歌が続いている。恋人を流罪にした勅掟をさえ肯じようとしない烈々の情火である。いとしい彼を止めるためには、天災地変を招いてもいいという条理を越えた女心である。この茅上娘子の歌に対し、宅守の歌はいかにも神妙である。／塵泥の数にもあらぬ我ゆゑにおもひわぶらむ妹がかなしさ▽と冒頭の歌で、己が罪をうべない、自分のあさはかさゆえに、恋人を憂悶に陥れてしまった腑甲斐なさを歎いているのである。さらに切ないのは末尾の歌である。「流罪の身を恐懼して彼女の恋しい名を呼ぶことさえ憚ってきたが、越路の峠に立つに及んで、つい堪えかねていとしいその名を呼んでしまった」という意味の慟哭歌であ

る。恐らく彼は都の方位の空に向って茅上娘子の名を一声呼ぶと、後はわッ！ と男泣きに泣いたことであろう。

この茅上娘子の女心と宅守の男心とでは、どちらがより切なく悲しかったか？ その比較はとにかく、縁起でもないこの惜別歌を、なぜ歎ある万葉の歌の中から選んで、静雄は安代に書き送ったのであろう。恐らく一ケ月前の姫路訪問の際、急に他人行儀となった安代の態度で、縁談がすゝんでいる事実を察知した彼は、惜別の情をそれとなくこの歌に託したものに相違ない。その証拠に、この歌を書いた手紙（昭和二年十一月二十三日付）の末尾には、「特にゆりこさんにはお手紙を下さる様にたのんで下さい」と書き添えてある。静雄は、溶融しつつ愛とも恋とも確定しがたい厄介な心情の相手役を、姉から妹へ引継いでくれ……と、申し入れているわけである。（つづく）

スマトラ記（八）

田中克己

この詩は宣伝班に呈出して日本でどこかへ掲載された。その理由、その場所は記憶から逸した。ただ緒戦の戦果!!におこった軍属の気持がよく表はれてゐると思ふが、この間わたしの詩の選をした福地邦樹君などきらって（或は下手クソと思って）採ってくれなかった。日本が負け、わたしの二度とスマトラのスリーマン高原へゆけなくなるなど予想しなかった様子は実によく書けてゐると自讃する（これがわたしのいつも妻からたしなめられ、主に乞ひいのる過失の最大のものである）。

スリーマン高原はもうアチェー族の住家でなく、ガヨ族の住地だったと思ふが、ここで偶然「アチェー語」といふわたしのノートが見つかったのでしるすと、アチェー語では一はサトウでなく、二はインドネシア語と同じ、三はトル。四は、パート、五はリムンと少しづつちがふ。夫はラカイ、妻はビナイ、父はバ、母だけがインドネシア語と同じくマである。ただし後の旅行でやった方言採集はこの時はせず、マースデンの「スマトラの歴史」からぬいてゐる。まだ民俗採集の用意が出来てゐなかったことが明らかである。

六月三十日の泊りはタケグンのホテルである。師団参謀と同行したおかげで、駐在隊長（京都の撮影所長だった由）が現地人の楽隊を集めて歌をきかしてくれた。その譜は「魚捕り」といふ歌で、インドネシア語だったことは写しがあって判明する。譜も略譜ながら写しとってあって、わたしのただ一つ採集したインドネシアの民謡である。参謀と五葉か二葉か問答した松の木のことはガヨ語でダマルといふと、ただ一つ覚えたガヨ語である。

この夜の眠りは涼しくてよく眠れたが、わたしは眠る前に悪事をした。楽隊のよこにゐて通訳した青年にガヨ語の辞典があるかといひ、あすの朝もって来させる約束をした。

翌朝出発前に得々と持って来た青年にわたしはその価をきき、五円と聞いて、「オランダ人から盗んだくせに」と憤慨して（とっさによく憤る男である）、ぬけぬけと、一、金五円也、右正に借用仕り候と英語で書きサインし、日付をいれた。この借用証はいまだにガヨ族の中に残ってゐると思ふ。ただし字引きの方はわたしがシンガポールを去るまへ、憲兵の検査で「買った」といひ、「受取りは」と問はれ、「無い」といへば、「もち帰り無用」との命で、憲兵隊に預りとなり、他の数十冊の字引きと共にその後、大本営かどこかの命令で日本に来、いま彦根の大学にあるとか聞いた。一ページも開かなかったこのガヨ・オランダ語辞典を一度だけよんで見たいと思ふが、いまだにはたせない。ガヨ語はも一つ記した。テロペといって女たちのかぶりもののことである。涼しいからか、それとも別の理由からか覚えはない。大原女のやうだったと思ふ。

午前中また篠原君らにたのんで民家を見せてもらった。アチェー族とちがって大家族制で、昔の飛騨の家々のやうに大きな造り、もとより高殿式で、床下にはタキギを積み、これが多いほど金持だとのことだった。アマン・ムハマッドの家はクケグンのブラー・ハキム村の六一戸の密集した家屋の一つだが、中に入って見るとまん中が昼間の生活用、両側が寝室で、家長用の寝室以外はしきりがなく、マットが五つ並び、奥には寒さよけのゐろりがある。マットの数からいふと十家族以上住めるやうになってゐたが、ここではいま六家族が住み、普通は八、九家族だとのことだった。アパートの壁なしと思へばよい。ただし昼間用のところには十二間のしきりがあった。

こんなことはその後、訳されたレープの「スマトラの民族」（上下巻とも昭和十八年国立民族学研究所――今はない――の訳で出た）にも書いていないから、得意でしるす。図入りだとはっきりするのだが、その必要もなからう。子どもたちや孫たちよ、わしは「来た、見た」とだけ記しておく。

家の背後には米庫が二、三棟あって蓋をした木の桶の中には精米してない粃がつまってゐた。一夫多妻婚はと聞けば、金持だけがするが、回教徒とて四人以下との規定を守ってゐるとの答であった。唐辛子を乾してゐるので聞くとロンボリと答へた。ゆふべの楽隊の演じた踊りはムナリといひ、表情をしてゐるが椅子を用ひて踊るタリ・クルシといふのもあり、クルシは椅子のことだといった。タケグン地区の人口二万九千人、内ガヨ族二二八三六人、インドネシア人五三八四人、アラブインド人一〇〇人、華僑五〇〇人、郡長をラジャといふことアチェー地区と同じく、村長はケジランといった。タワル湖は六四平方キロ、深さ二〇〇メートルと記してゐるから十和田湖より大きく、摩周湖より浅い。季節風テビクの吹く時には魚がとれるといふが、その魚の名をきかず見もしなかった。

ゆめみこたちの群像（六）

山田俊幸

茂雄は「愛賞名篇集」を編んだ昭和八年に、私立花岡学院という所で児童教育の実践にもあたっている。茂雄の愛読したニイルの教育理論にのっとったものであろうか、茂雄のその教育方法は現実生活に密着した概念規定をさせ、知識の空まわりをさせない所に彼らしい指向がみられる。

ロセッティ小曲（四）

森亮

高草透けて汝が掌より
薔薇と匂ふ　指の先。
汝が目見　和に見る原は
照る日、曇る日　渡るかな。

我等が宿は　涯しなの
黄花の原の　金鳳花、
山査子　白む野末まで
沈黙　眼に立つ昼真中。

鯖蛉　花より下がるごと、
蒼空のあをより　一筋の
翼ある「時」ぞ　垂らしたる。

言葉もなくて汝とわれ、
胸には通ふ　声ありて
沈黙を清に歌ふなり。

「生の家」第十九歌

昭和八年という年は茂雄にとっては彼の指向の定った年だと云えるかもしれない。哲学・文学・歴史学・教育学というように茂雄の中で大きな統一がはじまる。おそらくこのころから、立原にとっては機智とユーモアにみちているべき茂雄は〝ペダンティックな所のある〟と形容される友人へと転化してゆく。

昭和九年一月二十日、茂雄は父の希望で徴兵検査をうけ、陸軍第一歩兵連隊に入営し、精神は放浪生活からも、またすべての指向からもはなれ、兵隊生活を送ることになる。

入営の前日、茂雄は銀座松屋へ源氏物語展にいったりしている。

一月十九日（金曜）

朝、もう一度と思って銀座松屋へ源氏物語展覧会を見に行った。いいなあ、と思ふ。

午後、松岡君が来てくれた。うれしい。あの人が来てくれなかったのは、さびしいけれど、それは仕方のないことと思ってあきらめもしよう。柿岡君はふだんはあまり来なくても、さすがに思って居てくれるのだと本当にうれしかった。

たよりない物語みせて、うたのこといろ〳〵話しあふ。修善寺日記、更科日記、源氏物語がいいという。つつき君は源氏を、それから街の灯のことばが好きといふ。ママにはお目にかける隙なかった。夜、西山君から手紙が来た。日曜日のあつまり、それにこのお祝ひの手紙と云ひ本当にうれしい心だとおもふ。うたに

暮るるにはまだ間もあるに街燈のひかりともれりさむざむのみち

夕かた、お墓参りして床屋へ行った。夜杉本君が来た。

入営から六日なった一月二十五日、茂雄は教練中に銃隊長から茂雄の父にあってはなしたことなどについてはなされる。銃隊長は、軍隊教育の長所短所などを充分に研究するように、と茂雄につげる。茂雄は教育への指向をもったまま軍隊生活にはいったものらしい。そして、〝天子さまの忠実な〟臣下としての自分をつくっていった。おそらく茂雄の科学的思考は、まず天皇制の問題で障碍をむかえることになったであろうか、残念ながら、茂雄はそうした時点に行きつくまでにみまかってしまった。ただ、この時点にあっては、歴史とは茂雄にとって〝そこにある〟ものであり、この時期の茂雄には少しも自己の指向とは矛盾をおこさなかったものと推定される。茂雄がそうした日々をうたがわずに生活した、という事実は、茂雄の〝家〟の環境のせいもあるだろう。

入営以後、茂雄は立原とあうことがほとんどなかったらしい。七月八日に立原と半年ぶりにあったことが日記にみえているが、それについての詳しい叙述はない。兵隊生活の退屈さゆえだろうか、日記の内容も無味乾燥なものである。

七月十七日

はがきを出すごとに「お変りありませんか、僕も元気です。」と書くけれど、正直な所、ちっとも元気ぢゃあない、パスチーユの囚人みたいに退屈にさびしくくらしてゐる。

入営当初の意気ごみはどこえやら、茂雄は自分の指向する仕事が何も出来ず、いらだちににた日々をおくっていたようでもある。

茂雄がそんな日々をおくっているころ、立原は茂雄のいない空虚さにいらだち、そのいらだちを小説へ定着させ、そこからぬけでようとつとめていた。立原が「テジアとタアト」とか、「テジの話」とかを構想したのは

Naturally, Naturally Enough

Shizuo Itoh

A boy found a bird struggling in the bush;
He didn't miss it.
But the bird, somehow fatally wounded,
Bit his finger fiercely.

Suddenly disappointed of his caressing, the boy
Threw it away with all his strength.
Strangely with vigor the bird kicked the air,
And flew and chose a nearby branch naturally.

Naturally? Yes, naturally enough!
—Soon the boy saw
The bird drop on the ground like a stone.
There it lay on its back with ease.

Translated by Ken Miyagi

このころだった。二つとも構想のみで中絶した作品だが、「テジの話」の方は杉浦明平氏にあてた書簡のいくつかによっておぼろげながら内容は想像される。

近作《ホベーマの並木道》は二十五枚の好短篇。つづいて《テジの話》にかかる。これは「瀬山の話」を僕の言葉になほす試み（カンタンにいへばヘウセツかしら）。一しやう懸命、何とか青年の事業です。ゆめ笑ふな！

山荘詩評

吉本青司

目に見えないものにしか不滅を信じ得ないぼくは、一読してその不在するものには、がっかりさせられる。

目に見えず、名づけられないものの認識、それは宇宙的共感とでも言えようか。ベルグソンの「精神的共感」とも、いくらか違っている。雰囲気とかムードとか言われるものとも異う。いわば、ひびきに近く、しかも静まりかえっている。

中世の女性たちが言った「もののあはれ」「ものにまゐる」などのモノ。なのかも知れ

ない。やはりその道を歩いた与謝野晶子は、こんなことを言っている。

「詩の使命と妙味とは、散文的に千語を費しても云へない端的の感激を、よく洗錬した少しの言葉で新しく作曲して表現するところにある。」

この「端的の感激」という言葉には、今も学ぶところがある。詩の認識は感激である。南海の篤学の人が「感激なき人生は空虚なり」といったが、永遠の空虚を埋めるものは、ちりばめられた美の星々である。

感激とは、読むことであり、詠むことである。読むは認識であり、詠むは表現である。

宇宙的共感は、節奏ある言葉となる。世阿弥が「もじ一字にじよはきゆう有べし」「じよはきゆうなくば、とゞくべからず。」といったことにも通ずる。序破急とは、感激の息づかいである。序破急がなければ、読む人の感銘もないのである。

「存在」45（各務原市）　立川修作品、この野生のタッチは、現代に反語的な意義をもっている。熟れないさきのザクロの実肌のように、荒らかな感触がある。

「原始林」17（四日市市）　前川知賢の詩論は、いつでも大胆な論旨を展げる。「詩のエテロトピー」の問題も例外ではなさそうだ。あわただしいぼくの読みでは、とやかく言えないが、「ロラン・バルトの零度」と、ベルグソンの「純粋直観」を連結したところでは、教えられるものがあった。

「花」現代詩Ⅱ（東京都）　太田浩の詩論「青春について」は、大垣国司の無惨な青春と、そのため美しく残された二篇の詩を、つつましく碑銘のように語っている。

金井直の「茱萸」は、詩の発想における意識が、感動の統一をじゃましている。でもそれは、

あの鳥の名は知らない
あれはむれをなして
茱萸の人から遠ざかっているのだ
暗い宇宙の空間に
茱萸の種を星のようにばらまきながら

という最後の連を誘導するための、序想のためかも知れない。

「新詩潮」10・11（東京都）　大木惇夫の「羈旅即興」は、おそらく現代の絶唱と思う。惇夫は、春夫のない後の随一といっても言い過ぎではない。古典の節奏を忘れない最後の詩人である。老胡の境涯が慕わしい。

「詩宴」64（岐阜市）　赤座憲久の「チロルの娘クリスティーネに」詩の技術は、どんなに使駆されているように見えても、外観に終ることが多い。この詩のシンプリシティーは、アルプスの白雪のような美しさである。

殿岡辰雄の詩人「芳水記」は、かなしくもあり面白くもある、詩壇の裏ばなしである。

「詩宴」65　村瀬和子の「炎上」一つの作品を発見するために、根気よくページをめくるぼくも、こんな詩に出会うと報いられる。鋭く殺意の走る詩だ。

「日本歌人」秋（大阪市）　前川佐美雄は、今日のけわしい抒情を支えている。ふと与謝野晶子の「白桜集」を想起した。

冬日和こずゑにちちと声すれば猫はねら
ひて身をすくめたる

日常性の底にある緊密なリズムは独特のものであろう。事物のもつ諷刺性が貴重である。

「骨」31（京都市）　天野忠の「密柑」むだのない言葉の組み立ては、決して技巧的でない。単調な叙事の終りに置かれた密柑の重量は、創造律の定型であり、感銘を与える。思惟するものと、されるものとの合一。ふと、そんな言葉も頭をよぎった。

依田義賢の「安藤真澄と忘れ物」、この小説的な詩は、神話のひびきを持っている。悲しみを笑いに変える詩法は、極めて東洋的でロマン的である。そのために、いっそう闇は

朝

福地邦樹

朝　子供たちは
熟睡の　けだるい雲の中から
はい出してくる
フニャフニャと　甘い声を出しながら
そして　さわやかな朝のひとときを
母親に叱られながら
一時間もかかって
プラリプラリと　不熱心に朝食をとる
屈託のない彼等の耳には
世話やきの母親の声など
まだ一向にしみこまない

深い。

「詩の街」10（西宮市）　山井幸子の「俎板」は、物に語らせた詩。甘えを切り捨てたら、もっとすがすがしくなるだろう。

「若い人」1（東京都）　堀内幸枝の詩論「今日の詩とその現象」は、むぞうさに書かれた文だが、詩の行為のきびしさを言い当てている。でも「社会の様相と断絶し」ということばは、誤解を招く心配がある。

「若い人」2　岩崎呉夫の「基盤的詩論のための詩的アフォリズム」は、正統的な抒情詩のテクノクラシーを、断章的に記述して印象的である。

「詩帖」十七（東京都）　安部宙之介の「石階」かなしみには、廃墟に残る石階を、登り降りする風のように形がない。詩人の内面に彫られた石階は、どこに向って下降し、どこに向って上昇するのであろうか。

「現代詩語」1（新潟市）　小柳俊郎の「貧血の想念」　病める時代を諷刺的にえがいて読みごたえする詩。ただ最後の結部に、安易さを感じるが、存在論的な絶望感は言い得て興味をひく。

「詩苑」24（東京都）　堀口大学の「マシマロの歌」　こんな単純さを隠し持っている詩人は、現代に稀有といわなければなるまい。このさりげないアイロニーは、今日の典型として、見落さないでおこう。

口の中
焼けてしまってないみたい

このサタイヤ。ただそれだけのことだ。と言いきれるものではない。

池田瑛子の「落葉」　ゆたかな、まぶしい空間を彫りとることは、詩人の素敵な仕事である。このような「美しいおののき」は大切にしたいものである。

「歴程」1（東京都）　村上昭夫の「ラリックス物語」　おトギ話めいたこの詩は、すこしもてらいがなく、首尾よい結果を遂げている。大きないのちの哀しみが、うずいていて、老い朽ちる日も近いという土佐の大杉のことを想いださせた。

「歴程」Ⅱ尾崎喜八の「Poemes intimes」高雅な美しさは、何に触れてそうなるのか、考えさせられる。「小さい散歩から」「勉学篇」「エリュアール」と、詩人のカルチュアについても、その広さや深度が敬畏される。

なお、斉藤広志の「なでしこ」「夏雲」など読むと、歴程詩人の大人しさなどについて考えさせられる。

こうして、詩の紀行者となってみると、そ

詩集 聴濤館

板倉鞆音

リンゲルナッツ、ケストナーの紹介者として令名の高い著者が、こっそり筐底に蓄えていた詩稿をここに一本にまとめた。清新簡明で洒脱な哀韻は前掲のドイツの諷刺詩人のトゲよりも我ら日本人には馴染みやすい。

目次

沼／墓／蘆原／犬／朝／故里／磐駝／雨／黄昏／薄原／思慕／宵／郷愁／季節／牡丹／雲雀／目白／鴉／暮色／惜別／聴濤館／夜汽車／ひばり／青春像／路地／上諏／病院屋上／病院にて／三日月／亡失／告別

¥600

東京都豊島区南池袋一ノ一七ノ三
振替口座 東京一九五〇五八

国文社

の厳しさに驚いてしまう。

「リズムの東方的指向ないし回帰」などということがいわれるが、つまるところ日本語の節奏は、間のリズムであり、呼吸のリズムである。

ここでまた、与謝野晶子の言葉が想起される。「日本の詩は定形律を持たず、韻を押さないので、最も自由な詩です。その自由を濫用しないで、一篇毎に一句一語も無駄のない、洗錬と緊張と統一とを備へた新しい作曲を示さうとするには……なま優しい努力では出来ない。」

表現のテクノロジーを、ぼくは創造律と呼んでいる。それは、認識の三段階論といわれるのとも矛盾しないし、中国の作詩法四段階とも、また能の三段階構造とも一致する、感動のテクノロジーである。

なにもかも、散文化するか、機械化した時代に、呼吸のリズムを覚醒することは、容易でないが、国語を愛する詩人のいるところ、きっとそれは実現することを、ぼくは固く信じている。リズムは認識であり思想である。

* * *

編集後記

四月二日。小川和佑氏から、宇都宮大学の入学試験に、拙著『詩人その生涯と運命』の「水中花」解説から問題が出た旨の連絡をいたゞいた。宇都宮大学にどなたか伊東静雄好きの先生がおられるのだろう。

四月八日。林富士馬氏から、拙誌が精力的に刊行される意義がだんだんはつきりして来たように感じられる由の、たよりをいたゞいた。そもそも拙誌刊行の眼目の一つは、放つておけば再び陽の目を見ぬような学界や文壇の遺失物を、この世に残すことであつた。その精神は創刊から今日にいたるまで変つていない。たとえば、このところ連載している蓮田善明の「陣中日記」なども、その一つである。この種の野戦での実録は、尋常であれば内地へ持ち帰ることが絶対に許されなかつた。軍機に触れるかどで憲兵隊に没収されるのがおきまりだつたからだ。ところが、善明が洞庭湖畔の第一線から上海にひきあげてきたとき、析よく学友の丸山学氏が上海陸軍部の渉外担当だつた。「これわが遺骨なり」と冒頭に書いたこの日記や他の原稿に、偽つて「公用」の印判を押して内地へ送りとどけたのである。もし丸山氏の軍紀を越えた友情がなかつたら、今日この世にありえなかつた貴重な実録なのである。

四月九日。諫早の上村肇氏から静雄の桑花忌が三月三十日に催された旨のたよりをいたゞいた。今春は天候が不順だつたので、半月あまり開催を遅らせたとのことである。参加者一二〇名余あつた由で、年々盛大になることは、なんといつてもめでたい。

(O)

果樹園 第一六〇号（毎月一回一日発行）
昭和四十四年六月一日発行
池田市石橋二丁目六ノ五
編集兼発行者 小高根二郎
大阪市東住吉区桑津町三の十八
印刷所 元市印刷株式会社
池田市石橋二丁目六ノ五
発行所 果樹園社
定価 四十円 送料 二十円

果樹園 一六〇号 昭和四十四年六月一日発行（毎月一回一日発行）池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価四十円 送料二十円

果樹園 一六一号 昭和四十四年七月一日発行（毎月一回一日発行）池田市石橋二丁目六ノ五 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価四十円 送料二十円

果樹園

第161号

陣中日記(四) 蓮田善明
台湾人の黄福地邦樹
伊東静雄研究(七) 小高根二郎
ロセッティ小曲(五) 森亮
庭の蟬 伊東静雄
宮城賢
書簡（大上敬義宛） 伊東静雄
太郎(五) 浅田二三男
山荘詩評 吉本青司
阿蘇美堂正義
ゆめみこたちの群像(七) 山田俊幸

陣中日記(四)

蓮田善明

○

神はあらゆる処を新鮮しくし給ふ
戦闘ありし山に卯の花さかりなり

○

神は悲しみ給ふ時
飾り給ふか
戦ひ荒れし山に
つつじ、卯の花盛りなり

○

泥濘踏んで　きしむ靴は　山谷に
荒振神々の入り給ふ音ずれぞ
渓流激し　古き木の葉を空に捲き上げて
突風は
金粉となりて青光りする水に融けゆき
鈴鈴挈げて優しき鳥らは神の前後とり循りて
ひとしきり楽しき祝祭の唄奏しけり

○支那の丘

花咲ける支那の丘
白々とさくらに似たる
丘の畑　去年の豆麦
雲翳の寒く通れる
戦ひの激しかりしよ
今日返る道のあちこち
丘に来て春の鳥のみ
ちりぢりと花にあそべる

○

兵隊が行軍する
兵隊の耳を小鳥が群れて過ぎる
兵隊が行軍する
兵隊の目を川が青く染める
兵隊が行軍する
兵隊の胸に山岳が矗々と重量する
兵隊が行軍する
兵隊の列が谷と谷を縫ひ合はせた

五月一日

○山河の民

われら山嶽地を行軍し来れる時
こころもとなき空模様の、雨がちなるに
雲層の上に、巌山に滝は白々とたぎりく
だりつ
濡れそぼてる背嚢は肩と胸に締めつき

泥濘に没せる靴は鉛の如く重く粘りつき
ぬ

われら山峡を出で、川の水悠々と野をめ
ぐり、野の草深き処を通る時、
雨収まりて忽ちに快霽なりしかば
路乾きて、夕べの土ははや
昨日通りし兵どもの靴と轍のあと石の如
く固まりて
われらの鉄鋲うてる靴もて踏みゆけども
光れる土の塊に足裏はかへりて痛み傷き
たり

われら　戦の跡を経帰りしかば、その沿
路の村々
宿るに堪ふる家も稀なりしが
その崩れたる土壁を見るに、かの道路の
土と同じき土もて固め作れる　土角
（土煉瓦）なりき
われらその土角を拾ひあつめて竈をつく
り
折れ裂けたる柱もて炊ぎをなし
陽のあたりわるければうち濕れる土に藁
敷きて寝ねたり
僅かに帰り来れる蒼き難民はかさかきて
汚穢しく
犬のごとく残飯に手を差しのべて寄りせ
めぎ
彼等の荘稼地は去年の麦と豆とおのづか
ら不揃ひに伸びて実のり
冬枯れしままの地下の根に里芋の白き芽
を出してありき

今日　長き行軍の後、われら再び江岸の
寂しき碼頭に到り
新しき任務を示されて、江上に待てる太
元丸に移り
荒々しき響立てゝ錨巻き上げ船出したる
に
嘗て茲に見たりしと同じき赫く濁れる江
水は
強き風に波あげつつ悠揚と流れ去り
長堤は水に沿うて果なくつゞき
いとやさしく茂れる楊柳林のをちこちに
つつましき農家ども聚り
麦畑耕す土民の姿広き野に散ばりてあり
き
われら、ここらなる土地の広大と農民の
閑々たるを見て　羨ましき思ひに堪へ
がたく
心安らけくたのしき思ひをなしつ
されど傍なる船員の語れるところによれ
ば
春より夏にかけし幾月の増水には
唯江辺の木々の梢を残すのみにて漫々た
る水に沈みて秋に到るといふ
やがて日午を過ぎし比より風更に烈しく
なりて
船の風切る音兵どもをおどろかせたりし
が
いつしか上流より不思議なる濃霧の濛々
とうち烟りて江を蔽ひ　日を隠し
船の進路を仄暗く阻りて口惜しくも徐行
を余儀なくせしめ、愉しき展望を妨ぐ
るよと見しは
陸土の今日は乾きて折からの烈風に埃と
なりし黄塵なりと――

われ、船長の所に到りて舵とる人々と
この白昼夢のごとき風景を眺めつつつく
づくと相談りしに
不図しも悲しき思ひに胸塞がれたりけれ
ば
吸ひつけしバットの火をうち湿らせしま
ま黙しぬ

ああ　かれら　山河の民

幾十度その生活を山河のために喪ひ　山
河ありてのみ存し
天と地と人とに冷たき不信を学び、はげ
しき憤りとてもなく、却つて
冷たき礼器と詩書ともて　わざと神を祭
り　文化を飾るを慣はしとせり
ああ堯舜の民、龍と鳳と亀とを崇め、
世界で最も古く、飽くなく文化を壮大に
作り
陋屋の門に赤い聯をさげて山と水と相媚
ぶと誌し
印刷せる数巻にわたる系図を堂奥に蔵
し、豚と同居し
梅毒を遺伝し、子供を売買し、
おどろくべき敏捷さをもて　山深く兵乱
から逃れ
嘗て遠征せずして唯自らの広漠たる山河
を経めぐりて
自らの山河の間に国家を建てたり、と宣
言したりき

ああ、かれら山河の民、われここを行軍
し
船に乗りて蕩々たる江を遡る……
わが消えしバットを水に投じたる時
船は黄塵と烈風に檣ども唸らすのみに
て、しんしんと水押し退けて進み行
きぬ

五月二日（漢口近し）

朝陣

江下の朝びらき、
みんな日を浴びて
かなしいほど
清潔に輝いてゐる。
珈琲色の水面は
神が心こめて柔らかに耕された
ひろびろたる花畑、
朝風を孕んだ無数の帆船が
白い芥子の花辨のやうに
咲き散つてゐる。
真緑の新しい卓布を掛けた
両岸の平たい大食卓よ、
神は畑から花を摘み来つて
卓の上を飾り給ふのか、
野中の溝渠へ通ふ帆も彼方此方――。
ときどき風に軽く吹き散るが
露の重さに落ち藉くやうに
白鷺がひらひらとぶ。

想ひ

シトロンの冷たい泡
飛沫があなたの睫毛にしめり
青々と夏の朝がひらける――

つめたくしめつた睫毛に
あなたの目がかなしむ
薄赤い朝貌の花が咲いてる――

カップの硝子はあまりに透きとほり
液体の思想はあまりに発散し易い
樹々のかげがシトロンの中に揺れる――

五月四日（武昌宿舎にて）

月夜

午前三時
陋しい二階からくだる
わたしは、月の甃を踏みたかつたのだ

家の前の路次には
着剣した歩哨が
月光の中にくろく、立つてゐた

彼の青い剣尖から
キラキラと満月が風船となつて

空高く上つた

「今夜は月蝕があつて
今　先刻　晴れました」と
報告した……。

わたしがコツコツと甃を踏んで振り返る
と
彼は音も無い冷たい光となつて
夢のやうな目つきだけしてゐた

五月五日

水池子のほとり

中山公園の庭は峩々たる岩山を作りなし
樹林めづらしく植込んだ小暗い小路、
——近代式園庭の中に此の怪奇な自然を
——
わたしは、赤く咲いた薔薇を見た。
木々と岩とに絡み、しかし、その花かげ
に
岩に凭れて
——何のためにそんな所に休んでゐたか
——
姑娘が憩うてゐた
その疲れた少女のすがたが美しく
その髪に挿した一輪の薔薇が心に残つた
わたしは憩うべき所を喪ひ、
不図水池子の匂ひを嗅ぎ
木立の間を抜けて行くと
あをい広い水のほとりに出た
中の島には　しやれた　飯館があり
人が群れてきれいな橋を渡つてゐたが
わたしの憩むところは無かつた

偶　詩

月が非常に遠くで上つた

暗い窓に
絲で吊した紙風船が
かさり　かさり　おどつてゐる

敵も北げてしまひ——

みんな、ひとり　ひとりだつた

五月七日（咸寧に向ふ）

遠　征

アカシヤの並木をくゞつて
火車　が馳る
石炭の粉がかかつてくる
無蓋車の兵隊の顔に
車の横腹には「津浦」と大きく書いてあ
る
暑い日だ——

兵隊が眠つてしまふと
花がちつてきた

五月九日（刘家橋——山口舗の峠にて）

峠の歌

うつくしいほど高い峠
かなしいほど緑なる山。

兵隊の列が、ながながと
山を上つて行く
頸飾のやうに——

水と兵隊

汗くさい兵隊が通る時
水はいつでも化粧最中

あいつはおれの好きなやつ、
ちらりと見ずには居られない

台湾人の黄

福地邦樹

父の運転手の　台湾人の黄は
度しがたいアル中で
エチル・アルコールをくすねては
大きなフラスコでうすめて
がぶ飲みしていた

主人の息子に見られていることが
自虐的な楽しみを増すかのように
デカダンのソクラテスは
透明なフラスコの　透明な液体を
天をあおいで晴ればれと飲んだ

生意気な小学生の僕らが
「酒ノミハ　ナマケモノ」と
大声で　節をつけてひやかしても
ニヤニヤ笑って　一向腹を立てなかった
のみならず　お人良しの黄は
暇の時は　よく車にのせてくれたものだ
運転だけはたしかだった黄は
どんな家に住んでいたのだろう
あのひからびた黄に
奥さんは居たのだろうか

僕らが台湾から引き上げて数年後
嵐の日に　黄は
汽車と衝突して即死したそうだ
父の友人を道づれにして

夕方になると　その踏切りを
台湾人たちは通りたがらなかったという
彼らは幽霊をかたく信じ
彼らの幽霊は
黒いフットボールぐらいの
フワフワのかたまりで
地面を転がるように迫ってくるのだという

アル中の黄の魂は
ついに妄執の黒いフットボールになってし
まって
夜がくると　あの椰子の木蔭の踏切りのあ
たりを
のろわしく　いまも
ころがり続けているのだろうか

ひろい湖水、遠くの村かげ
恋人の白い横顔

青い水、草のかげ
おまへの胸に食ひ入るやうに接吻する

飾らぬ赤い岩山の間にも
つめたい滴りのひとすぢ

あいつはおれの好きなやつ、
ちらりと見ずには居られない

五月十日

小　曲

有明のうする〻前こそ
月の光こよなく光り
冷たき水田の面に、最も
思ひは静かなる
鳴き飽きし蛙の姿をかしや
ふと浮む小さき花びら
囀りの、さまざまに愛しき
今日も行軍く朝疾き準備
水田ゆ落ちる水汲みて
少女さぶ化粧と想ひつ

（つづく）

伊東静雄研究(七)

小高根二郎

4　安代から百合子へ

百合子はすでにその年の春から京都に出てきていた。同志社女子専門学校に入学し、構内のプリンプトン寮に寄宿していたからである。五月の或る日、その百合子に静雄はバタリ…と町で出会った。

「昨日、土曜日の午後、私は室にをるのが何だかいやになりましたので洋傘をついて、久し振りに三条の方に行つて見ようかと思ひまして、河原町丸太町の停留所で電車を待つてゐました、ぼんやりと。すると、出町の方から来た電車が向ふの方でとまると、そこから美しい洋服を着た女学生の人が二人、愉快さうに、おりて来ました。私はいつでもそんな女学生の快活さを見ると、自分が妙にみじめに見えて仕方ない様な気分になるのが癖で、その時も何ともいへない憂愁を感じながら、それを見てゐました。するとどうでせう、その女学生の一人がこちらを向くと、それは明かに百合子さんではありませんか、私は何といつていいかわかりませんでした。百合子さんも驚いてゐられました。

「どちらに」ときくと、

「三条に」それだけ云つて、百合子さんはお友達の人と鋪道をあるいて、向ふの方に行かれました。私は停留所に、自分の電車を待つてゐながらじつと見てゐますと百合子さんのきれいな洋服の垂れたバンドが風でゆれるのが見えました。」(昭和二年五月安代宛書簡)

この正月まで堅い木の実と思っていた百合子が、半年もしないうちに色づき熟しているのに静雄はびっくりしたらしく、彼女の後姿を呆然と見送っているのである。

その直後の安代宛の手紙に、「百合子さんにはお手紙を上げては悪いだらうと思つて遠慮してゐます。あなたからよろしく申して下さい」とあった。翌六月の手紙では「百合子さんにもよろしく。あれから又一度も会ひません」であった。それが「特にゆりこさんにはお手紙を下さる様にたのんで下さい」という、さいぜんの積極的かつ直接的な意志に、茅上娘子の惜別歌を契機として変っているのである。もはや女としての百合子の面影が静雄の胸一杯に拡がっていたと見ていい。

静雄は胸のなかにあるものは一切心友・宮本に打ち開けていた。宮本の励ましで静雄がプリンプトン寮に百合子を尋ねたのは、その頃であったろう。宮本は百合子と同じ同志社の生徒だったから案内を知っていた。まず静雄と共通の歌友である、百合子の一年先輩の平山まさ子に、寮のボスであり庭球選手の岡田ネロ子を紹介してもらった。このネロ子を介して表の面会所まで百合子を呼びだしたのである。しかし、百合子の好物の林檎とチョコレートで、小倉ガスリのふところを鼠を呑んだ青大将のように眼らせた静雄は、彼女に面と向うとろくすっぽ口がきけなかった。しかも堅くなって間幅をとっている上、話し方はれいの枇杷式間接法であるから、百合子にはまるで比喩のように聞こえ、さっぱりぴん！　と心に響かなかった。介添役の宮本の方が歯がゆくてならなかったほどであった。

こんな百合子を一人京都に遊学させておくのは心配になったからか、翌昭和三年の春に姫路の酒井家は今熊野日吉町百番地に引越してきた。小太郎は教職があるので姫路に残り、南日吉町はフミ・安代・百合子の女世帯となった。静雄が「こらえておりましてござんしたけど、とうとうきましてござんした」といって訪問するには、まことに好都合になったわけである。が、いつも一人で足繁く訪問するのは気がさしたかして、宮本と連れとなる場合もあったのである。というのは、酒井家のすぐ近くに「銀鞍会」という乗馬クラブがあって、宮本はそこのメンバーだったからだ。土・日になると彼は拍車をつけた長靴をはいて、塔ノ段あたりの下宿から遙々と今熊野まで徒歩で通った。その宮本に扈従するといった格好で、下駄ばきの静雄は酒井家を訪れたのである。

ある夜百合子が客間に現れぬことがあった。病気だというのである。それを仮病と直感した静雄は、宮本が制止するひまもあらばこそ、つかつかと彼女の書斎に立ってゆくと、いきなり襖を引き開けた。半暗がりに蒲団が伸べてあることが確認できた。が、まだ猜疑のホムラがおさまらなかったのか、つかつかと室内にまで侵入すると、いきなり、天井から下っている電燈のスイッチを捻った。燈下にはまさしく百合子が伏っていたのである。猜疑と憤怒とで、燃えあがっていた静雄の眼は、瞬間、慚愧と陳謝と自己放念とで、まさに消え入るように陰った…とは、立会人・宮本が語るところである。

つまり、静雄は自分から、百合子の胸に終の生垣を植えてしまったのだ。いや、いや、終の苗は、もっと昔に彼女の胸に芽生えていた。それは諫早女学校に入ったばかりの大正十二年七月末のことだった。若死をした兄貞夫の葬式をすませて、彼女は家族・親戚の者たちと這松下にさしかかった時だった。一人の佐賀高校生に出会った。あれは死んだ先輩の弟だ……と誰かが囁いた。それが静雄だったのである。静雄の死んだ次兄・潤三と貞夫とは、明治三十五年生れの同年で、学校も同期生だったからである。その事実を一行の誰かが知っていて、先輩の弟という紹介をしたのであった。その日静雄の印象は百合子にこびり付いて離れなかった。弊衣破帽で鳴る佐賀高校生の中でも、これほどに汚いのはまずなかろう……という確信を、彼女が抱いたほどだったからである。

五月末の或る日、静雄は例のように酒井家へ急いでいた。銀鞍会へゆくために右に曲った宮本と別れた静雄は、一間幅のだらだら上りの道に、下駄を引きずっていた。と、左手の酒井家から出てくる安代にばたり……と出会った。彼女の背後に見知らぬ青年が付添っていた。フィアンセである。彼は奥村義雄といって東京高等工業・建築料の出身で、さらに京大哲学科の聴講生であった。音楽の愛好家でセロも弾いた。趣味がいいので、結婚の話があってから安代は夢中になっていたので

ロセッティ小曲(五)

森　亮

遠出楽しとわが手して
汝が金髪をふた分けに
ひろぐる隙にこぼれ咲く
羞ちらふいろの淡紅はなや。

み冬の光景　退れども
ためらひがちの春の足。
小李の花　雪に似て
木立ち素通る風寒し。

されど　陽光は四月とよ。
眼閉ぢませ、仰ぎませ、
水枝息づく春なれば、

汝が喉伝ひ　唇を尋むる
わがくちびるを知り給へ——
恋知る頃のならひとて。

「生の家」第十四歌

ある。すでに茅上娘子の惜別歌を彼女宛に送った後ではあったが、うつつの眼で見た二人の姿に、一種いうにいわれぬ感動とも衝撃ともつかぬ心情に静雄は浸らざるをえなかった。その心情はさっそく次の詩になって安代に送られた。（昭和三年五月三十日付）

家の外に柿の花咲き
その柿に雀ゐる故え
そのことを心にもちて
寂しけど寂しきままに
うらやすう夕の座にゐる。

花咲いている柿にきている雀。それを強いて心の中で連れであると虚構することによって、寂しいには寂しいが、ともかく安らかに夕食の膳に向っている……というほどの心緒であろう。羨望と軽い嫉妬とが頃合いに混った諦念が生んだ詩である。この詩の含蓄をさらによく味うために、次の短歌を読んでいただきたい。

窓べよりつづきて見ゆる柿畑若葉動ける
はおほむね鳥なり　　赤彦

この若葉を賑やかに動かしている鳥。この鳥の活潑なイメイジを借りて、静雄の〈その柿に雀ゐる故……〉を味わい直してみると、彼の意図した表現がさらによく理解できる。静雄はまだ未熟で手不の赤彦に遠く及んでいないのである。

この「鳥」を「雀」に置き換えてみるとさらに訴求力が加わる。

雀　　赤彦

柿の木の枝に
雀三つゐる
捕れぬかなあ

三つながら
こちら向いてる
捕れぬかなあ

三つながら
平気な顔して
こちら向いてる
捕れぬかなあ

（大正九年「赤彦童謡集」）

この手で捕れそうなほど親愛な雀たちが、賑やかに柿の若葉を動かしていたからこそ、〈そのことを心にもちて……うらやすう夕の座〉に、静雄はおれたのである。

尚、この詩は、同じ日に東京の蒲池歓一にも書き送っている。蒲池が「わがひと・安代説」であったことを思うと、静雄はそれに近い心緒を、或いは蒲池に打ち開けていたのかもしれない。

三、悲願と空しい栄光

1当選童話「美しき朋輩達」

宮本は当時の静雄をモデルにして『氷雨降る日』という小説を書いているが、その末尾で静雄の日記の断片を掲載している。その中に、「L子サンノコトヲ思う。人ニ要求ヲセズニトモニ喜ビナガラ自分モ高マツテ行ク生キカタガアル」「L子サンノタメニモット勉強セネバナラヌ。」（昭和三年、『同志社高商校友会誌』第六号、宮本新治―氷雨降る日）という文句がある。LはLilyのイニシアルで百合子のことである。

ここにいう「人」とは百合子のことだろう。彼女に要求せずに共に喜びながら高まってゆく生き方とは、どんな生き方なのか？静雄はすでに形而上でしか愛が可能でないことを覚悟しているようである。そのためか、もっと彼女のために勉強をせねばならぬと自己を鞭打っている。

The Cicadas of the Garden

Shizuo Itoh

When I came home from a travel,
I found in this garden its own cicadas singing.
I wanted to write
Something like a poem
and spread a sheet of paper,
Then there came out some lines plain as water.
And
with the writing before me,
Unexpectedly I was listening to the cicadas
With a kind of pre-existential thoughts
All different from it
And with a nausea accompanying a slight dizziness.

Translated by Ken Miyagi

その勉強の絶好のチャンスを静雄はたまたま大毎紙上の広告で発見した。十一月十日にとり行われる即位の大典を記念して、三越が児童映画の脚本を懸賞募集することになったからだ。要旨は、少年少女を主人公とし、健康で明るく清新なテーマで、映画五巻にまとまるもの。賞金は一等一千円、二等三百円、三等二百円。締切は九月二十五日。発表は十月上旬。審査は大阪毎日新聞。以上の条件である。

静雄はこの懸賞に応募することを決意したのである。万が一にも当選した暁には、彼女に愛を要求せずとも、共に手をとり高まることができて、障碍である生垣を跳び越えられるかもしれない。小太郎・フミの諒承も自然に得られるに相違ない。そんな期待がさらに彼の決意を堅め試練をうながしたろう。彼は夏休が始ってもすぐには帰郷せず、童話の制作に専心をした。「童話ニ心ヲヒソメテキマス。四五篇出来マシタ、自信ノアルノモ一、二ハアリマス。昨日ハ今熊野ノ座敷デ朗読会ヲヤリマシタ。」と、すでに帰郷をした宮本に報告をしていた。彼は四五篇、安代・百合子・フミたちに朗読して聞かせ、彼女たちの反響に耳を傾けたのだ。自信作の一二とは、彼女たちの共鳴がえられた作品に相違ない。作

品ができると周囲の誰彼に朗吟して聞かせ、その反響で彫琢する傾向は、すでにこの日にあったのである。彼はまず客観的な観照を重んじたのだ。百合子の談話によると、その日彼女たちが与えたヒントによって、それはいい…と彼は重要な発想をえたとのことである。この彼女たちの反対給付の要請からだったろうか、「コレカラ又女ノ衆ト琵琶湖ユキ、少シ、自分デ自分ガカハイサウデス」（昭和三年七月十二日付）と、末尾で静雄は宮本に訴えていた。惚れた身の弱さなのだ。そんな自己確立のできぬ自分自身にも愛想がつきたかして、静雄はさらに愚痴っている。「家にも帰りたくなし、ゆり子さんにも行きたくなし。私は目をとぢてじつと寝たり坐つたりしてゐます。こんなに人の心が見え透いてては閉口です。一方が純情になると一方はすぐそれを利用したり、まあ正直な方で笑つておいてきぼりにする。」利用するのは百合子で、笑っておいてきぼりを食わしたのは安代というわけであろうか？訴えられる宮本にとっては再たかと思われる静雄のヒガミなのだ。結局、静雄は書生以上には見られていないことが憤懣なのだ。「私の様な男はどうせ利口になれぬし、かうして自分を軽蔑したり、他人を瞠若トシテミテヰルより仕方なし。どれもうそんなくだらぬことは考へないとして、子供の水およぎでもみにゆくとしよう。」（七月十五日付）。重要なのは末尾の子供の水泳を見にゆく静雄である。彼は岡崎公園をよぎり、動物園下の疎水まで出かけると、そこで童話の主人公である少年少女たちが、泳いだり甲羅を干したりしてる実景を見たのである。その観察は執拗に二週間ちかく続いた。天衣無縫な天使や小悪魔たちが期せずして展開する生態を追求し、歓声や悲鳴や会話やらを現実に聞いたのである。これは主観的な観照をうるための努力であった。その結果、＜みておれば子等の泳ぎのうつつなさ電車も人も用なし子等には＞という短歌を久しぶりに得たが、快心作の童話「お坊さんと鱠（ひさ）」も二三日で仕上げたのであった。（七月二十八日付宮本宛書簡）

静雄が諫早に帰り着いたのは八月に入ってからであった。這松下の家の二階で前掲の快心作とは別に「美しき朋輩達」を執筆したのである。

「昼は城趾の森を窓から見る二階に坐って書きつづけ、夕の食卓におりて行ってはそれを皆に読み上げてきかせました。若い弟妹達や、老いた母の、それに対する無邪気な助言は私をほほゑませることが度々でありました。この仕事は何と楽しいものでありましたらう。」（昭和三年「大阪の三越」十一月号、伊東静雄―作者より）

静雄はなおも客観的な観照をえるために朗読をやっている。彼の悲願を知った母ハツは「大変心配して励ましたりお祈りしたりしてくれた」（昭和三年十月十日付大毎所載伊東談話）のである。静雄は四十日間かけて仕上げた煙突掃除屋の少年三吉を主人公にした童話「美しき朋輩達」を、「さようなら、三吉君とその朋輩達！」とつぶやいてポストに投入したのだった。賭けられた静雄の運命……。三吉君に深く頼むところがあったからだ。

昭和三年十月十日の大毎は選考の結果を報じている。応募総数は千四百十七篇で、わが国の脚本募集の新記録をつくったこと。その中からまず五百篇を予選し、そこからさらに候補の五篇が厳選された。最後の決は審査員の採点の総得点数の順位によった。その結果静雄は見事に一等当選の栄光と賞金一千円を獲得したのである。二等は石崎という三十四の男。三等は竹腰という二十一才の女性だった。一説には副賞として平櫛田中の木彫が添えられたという。ただし静雄はその値打ちがわからぬため、後年作文の上手だった生徒に褒美として与えたが、後でその真価を人に教えられて返えして貰いに行ったという逸話がある（昭和三十七年「果樹園」四月号、原野栄二―伊東静雄のこと）。又、当時

一千円といえばかなりの金である。それだけあれば結構アトリエの一軒ぐらい建てられたものである。学生の身空でその大金をせしめたことだから、当然その使途が話題となった。その賞金の半分は安代の結婚祝いにしたという説もある（昭和二十八年「詩学」六月号、蒲池欽一―旧友伊東静雄）。伊東自身は学友の堀内薫に、「一千円もらつたが、悪銭身につかずで、すつかりなくなつた」と語っているが（昭和三十九年「果樹園」六月号、堀内薫―学生時代の伊東）これは多分に眉唾で、彼の成功を近くの神社まで祈りにいってくれたハツの孝養の資にも当てられたろうし、それに卒業論文の資料として「子規全集」を購ったことだけは間違いない。

「美しき朋輩達」は松竹蒲田映画で清水宏監督によって四巻物に制作され、十二月二十日から全国の映画館で一斉に上映されたが、遺憾ながら原作は、今日残っていない。脚色者である水島あやめは、どんな魂胆からかしらないが、原作者の姓名まで壁静と脚色する冒瀆を犯しているのである。後輩市川に、自作が映画になった感想を聞かれた静雄は、「自分の考えていたものとはすっかり違ってしまった。他人のものを見るようだ……と、世にも悲しい顔をしていた」（掲載誌同前）というのは真実であったろう。従って「キネマ旬報」（昭和三年十二月一月号）が伝える梗概が、どれほど原作の面影を伝えているか不明だが、参考までに掲げてみる。

（つづく）

太郎

浅田 二三男

(五)

あついあつい日照りがやってきて
草は木のようにのび
あの青くながい
いやな顔のキリギリスが
くるりと葉っぱの向うにかくれた
かと思うとギーッとうしろでなく
そんな夏草のジャングルの中を
太郎はさまよっているのか
僕はお前が
ツシマヤマネコのように
たくましく野や山の中でくらしてくれたら
いっそ安心だと思うが
それも生きているのか
死んでいるのか
何もわからないいまでは
どうしようもない

書簡（大上敬義宛四通）

伊東静雄

昭和二十三年四月二十六日

（大阪府南河内郡黒山村北餘部より奈良県郡山町洞泉寺十四大上敬義宛〔封書〕）

大上敬義様

家森さんを通して貴詩集いただき有難うございました。厚くお礼申上げます。

「少女と犬」「娼婦」「かげろふ」の三篇は、独逸抒情詩の或るものを読むやうな感がいたし、美しく心に残りました。（これはお世辞ではありません）

――しかし娼婦の中の一行「見あげる乳房は挑まんか」だけは一寸理解しがたい不協和音を感じ残念でしたが。

第二詩集も近い内にお出しの由、是非見せて下さい。又大阪においでの節は、中学校にでもお立寄り下さい。たのしみにしてをります。

四月十日

大阪市アベノ区北畠
大阪府立住吉中学校　伊東静雄

注・処女詩集「愁ひの實」昭和二十三年三月初音書房刊

昭和二十三年八月七日

（大阪府南河内郡黒山村北余部より奈良県郡山町洞泉寺十四大上敬義宛（はがき））

「遮断機」[注]ありがたうございました。大へん個性的なお作が集つてゐるやうに拝見しました。従つて不可解なものが私には多いです。

病気で十日ばかりねてゐてお礼おくれました。

注・第二詩集「遮断機」昭和二十三年七月、自家版

昭和二十三年十二月十二日

（大阪府黒山局区内南河内郡黒山村北余部より奈良県郡山町洞泉寺十四大上敬義宛（はがき））

「美しき夜のために」[注]ありがたう存じました。こんどの集は、私の好きな傾向のものばかりで楽しかつたです。素直で、平易で――でも時々どうにもわからぬ行が飛び出しますが。

これらが一層彫塑的な力にあふれる日を期待いたします。

とにかくお喜びを申し上げます。

十二月十二日

注・第三詩集「美しき夜のために」、昭和二十三年十一月、自家版

昭和二十四年四月二十六日

（大阪府南河内郡黒山局区内北余部より奈良県郡山局区内洞泉寺十四大山敬義宛（はがき））

三月卅日に書いた葉書を、投函忘れたまゝカバンの中に見出し、これは大失敗だつたと、あわてて、これを書きます。先日は騒々[注]の宿ありがたう。やはり、あの中では、お作が、私には一番面白かつたです。ユモアーのあるサタイアが特色。又お作にびまんしてゐる粘液的色情とでもいつたものも特色。

このごろずつとからだ悪いのですが、詩の方には割に興うごき、三、四つづけて書きました。文芸往来六月号、文芸七月号、ついであればごらん下さい。

詩の中に「時間」を入れること。対話 Dialectic（葉書では意をつくさず）のあること、等に興味をもつてをります。又詩を仕事の意識で書くことにも心持がむいてきてをり、自分ではいゝことゝ考へてゐます。

注・新世代人詩叢書「騒々の宿」昭和二十四年四月重書房刊、宮城恒敏、森下陶工との合著。

山荘詩評

吉本青司

詩の批評から、主観を追放することは、出来もしないし、その必要はない。むしろ、主観が客観と一致するところに批評は成立する。

私は、一つの詩を発見しようとして紙魚となる。一つの作品を取りあげることで、作者の本質や可能性にふれることを望む。

天野隆一詩画集「閲歴」（文童社）　真作と贋作の見わけにくいことは、詩においてもそうである。「名園」は、言葉の使用にむだがなく、安価な文化批評におちることを拒否している。前の集に比べて、詩にも画にも剛いものが見える。

犬は信用出来る
だが人は信用出来ない
思いきったことをいう人だ。

平光善久の詩集「東洋の裸身」（詩宴社）

薫り高い風土の香料のように
東洋の裸身が立つ

という詩のことばが、詩集のモチーフを示している。

「ベンガルの朝」「インドの太陽」など、

阿蘇

美堂正義

沸々と噴き出す煙は
大地のなげき
大古からつづいて
いまも哀しみは消えない

東洋永遠の原典にせまる詩情をただよわせている。「インドの牛」は

インドの牛は啼かない
ただ黙って歩くだけである

それだけでも、よいのではなかろうか。

石垣りん詩集「表札など」（思潮社）　たとえば「島」である。自分をものにすることは詩の常法だが、この詩の比喩はユニークだ。人間のポシビリティーが鮮明に表現されている。

さえずる鳥。
かくれた泉。
花のにおい。

こんな言葉が、女性の島を、かなしく彩色している。

知りつくすこともできない。
永住することもできない。

この言葉は、島をめぐって在るものに、目を解き放つ。

「崖」は、愕然とさせられる。こんなおそろしいテーマに、正面から取り組んだ詩が成功したのは、何だろう。安易な戦争否定の観念に終らず、人間の普遍の闇に身を投げているからだろう。

まだ一人も海にとどかないのだ。

この虚無こそ、詩人の認識ではないのか。

石塚照代詩集「観自在の御手に」（信誠堂書店）　「オフェリヤ」の浪曼精神は、確かな言語の意匠をともなって美しい。ただ、この人の詩には、幻想を支える感情のレアリテが不足している。仏のイメージが、今日の教養の中でどう生きるか、ということは大変にむつかしい問題だ。でも、最後の「補陀落山のしばしの団欒」は、十分な力作である。

石井藤雄詩集「野の声」　野の明るい土根情が、ひしがれぬ輝きのようにあるが、いまひとつ詩魂の芸術のようなものをほしい。「奇妙な日」という長い詩は、野の健康さが、いっぱいで興味がある。

長沼静人詩集「もうひとつの神話」（白土社）　「演説」という詩は、空転する現代の論理をよく諷刺しているが、同時にこの本の弱さをも示している。この余裕派の見せる、一種厳画的な面白さは、どこで現代の神話と交わっているのだろう。「窓」は、厳しい精神のしおりである。

河野仁昭詩集「瑣事」　「骨」のもつイマジズムは、強い願望を秘めて、永遠への想いが、死者のたましいを見つめている。

谷沢辿詩集「山椒魚の故郷」（昭森社）

「自敘伝」「概略・一九五四年」「山椒魚の故郷」が、ユニークな面白さを見せる。

自伝風に展開する紋亭が、底にひかる情緒をともなって読むものを誘う。でも後半、紋事に追われた傾きで、前半ほどの感銘がない。

田島穂積の詩集「昨日の柩」（中部聯詩社）　制作とは構成である、といい、また、一切の日常性を拒否する、と主張するこの人の詩風は、たしかに峻厳である。「昨日の柩」という表題の象徴的意図もわかる。だが、詩が永遠のひびきを定着させるためには、現代の虚妄を以てしなければならない。とする鉄則は、流派の違いを超えて、古典の日から、厳しくあるものだと思う。

森哲弥詩集「初猟」（文童社）　「フィリピン」「廃坑」「初猟」三篇の散文詩は、この人の資質を示す作品である。特に「初猟」の密度は、後半において高まっている。

仲村八鬼詩集「膨大なる孤独」（若い人社文学会）　ヨーロッパ紀行詩集である。「巴里は燃えている」は、集中の佳品である。巴里の名どころを採りあげて、一片の観光詩に終らせず、実感的な情緒の明暗を伝えている。

町田多加次の詩集「小さな葬列」（現代詩工房）　日常の言葉で詩を書くむつかしさを改めて考えてみる。日常語が感動をともなって詩の韻律となるかどうかは、やはりたましいの問題にちがいない。晶子の詩論や朔太郎の詩論は、現代に少しも色あせてはいない。時間的宇宙こそ詩の実体でなければならない。永劫回帰の思想もまた、そこに発する。

詩集の最後の「記憶説・稿」は、その情景のなつかしさを描いて力作だが、

結局は出鱈目で
ありもしない

という存在観は真説と言えるだろうか。

五十嵐重尾の詩集「釣忍」　詩の執念を思う。あきもせず身辺の事物や自然にキャンバスを据え、何ものかを把えようとする。「湿風」のような作品に、淡彩の美しさがある。でも総評して情感のきびしさが足りない。感銘は、主観の表明だけではどうすることも出来ない。

木村武詩集「イ調の変奏」（関西書院）「感覚の美」は、現代への反射からくるものである。現代への倚りかかりは、詩の訴えを弱めると思う。作品「イ調の変奏」は、片仮名が多すぎ、日本語の美観をそこねている。

福多久の詩集「序章」　自分を甘やかしていはしまいか。詩集の「あとがき」のようなスタイルで、感傷を殺した詩を書いてみてはどうだろう。

人間詩集「獅子弄得」（天幕書房）　外村文象の「思い出」は、一人の貴重な詩人の挿話である。詩はこのように、ささやかなレポートでもあり得る。

五島鴨平の詩集「鰯」　「帰依」は引用部の多いのが気になるけれど、力作である。

春木吉彦詩集「埠頭」（ギャラリー熊野）余裕派らしい伸びやかさはあるが、いますこし険しさと密度がほしい。

中村志げ子の詩集「茗荷をむく女」（詩宴社）　「きたぐにのはな」に、氷雪がより結晶することを願う。

外村竜児の集詩「ミノムシ」（詩宴社）作品「ミノムシ」のように、モノに即したメタファーが、この人の詩性に合っているようだ。

伊藤成雄の集「PARTHENON」（詩宴社）「太郎丸の夢」の映像的な進行は面白い。最後のどんでんがえしは、通俗な手だが、ドキリとさせられる。でも、モチーフの不安定さは致命的と思う。ギリシャ的な素養が、詩精神の必然にどう結びつくかは、やはり問題である。

村瀬和子の詩集「罌粟のリフレイン」（詩宴社）　自棄感のようなものが、素直な感銘に皮膜をつくっている。「月蝕」一篇を上げておこう。

藤村幸村の「樹のデッサン」（詩宴社）たしかに詩人のモチーフは、焦点をもつまでによほど時間がかかる。「鳥」には、そのような実体への認識がある。

坂本稔の「椿原川」（昭森社）　真正の抒情の系譜はつづいている。この人も、その稀な幾人かの一人である。「椿原川」ユスハラガワ。このひびきのリクリエイト。ここに、発掘された風土がある。そしてその美観は世界にも交響している。

雨あがりの空を
美しいという
少女は七つ

空へあがっていきたいな
せんせい
空へいってみたい

片岡文雄の詩集「悪霊」（岬書房）　ネガティブな抒情が、粘着力のある凝らされた意匠の底に、悪霊のように沈んでいる。それはむかしの家に暗く置かれた、膳箱のうるしの色を感じさせる。岡本弥太の系列にある、南方的なモラリストだ。

沢英彦詩集「振子」（MESクラブ）　散文詩に力作がある。シュールレアリスムの要素は、素敵な幻想やウイットや暗喩などにあるが、表現のモダニテイーに弱さがある。

西森茂詩集「美しさと哀しさのために」（日本未来派）　キリストへの接近とそのための痛みが、詩集のモチーフである。生涯をベットに横たえながら愛と死を見つめる人のかなしみが、詩の巧拙を超えて感銘を呼ぶ。だが、悟道ということのむつかしさよ。

Ⅹ

ところで、私のいう「老胡の詩」とは何か。と問う人があるが、これは、萩原朔太郎が「青年性の文学」をイデアしたことと交響する。トラヂショナルな精神を大切としながら、ダンディーを忘れない詩である。外観上のモダニズムや表現上の新感覚でなく、流行に媚態せぬ不易である。老年の詩は順応し、老胡の詩は反撥するといってもよい。

このごろの三島由紀夫の生き方は、あたかも現代を舞台として詩劇を演ずる俳優のようである。その演技は、古典的でしかも創造性に富み、いつも華々しく観衆の目をみはらせる。現代能のたぐいであろうか。そのドラマツルギーは、まったく剣の道そのものと言えよう。

早熟だった三島は、四十代にして「老胡の詩人」となった。など言ったら叱られるだろうか。その一途な道義を、頑固と言い換えるなら、老胡の純粋に照応させて差しつかえなかろう。不惑を過ぎれば迷わないのが、東洋の志である。夭折の美学は、不惑の美学に変容したのである。メタモアフォーシスは、能の原理であった。

詩集が相対的に面白くないのは、なぜだろう。三島の生き方や、その作品に比較して、もっと考えてみるのもむだではなさそうだ。

ゆめみこたちの群像(七)

山田俊幸

「瀬山の話」とは梶井基次郎の名篇である「檸檬」を挿話としてはさんだ物語である。梶井は、瀬山という男を、知らぬ間に〝私〟（語り手）の心の中に汚点のようにしみつき、ぬぐおうとしてもぬぐうことが出来ずに、そうしようとすればするほど強く意識下へひろがっていくような男として想定している。立原が「瀬山の活」からうけたレトリックへの指向は、おそらくそうした人間を底辺としてもった改作であったろうと推定される。〝テジアヘーニアン〟とよばれ、立原に〝テ

果樹園　一六二号　昭和四十四年八月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価一二〇円（〒共）

蓮田善明25回忌 特集

諏訪中学校教諭時代

果樹園

第162号

陣中日記・山・その他　蓮田善明
みづぐるま　浅野晃
蓮田善明と私　丸山学
蓮田君の思い出　斎藤清衛
花　田中克己
蓮田さんを敬慕して　大山澄太
ロセッティ小曲（六）　森亮
蓮田善明に於ける「西欧一神」　谷忠孝
「有心」寸感　桶谷秀昭
「鴨長明」について　岡保生
「神韻の文学」管見　塚本康彦
「まどひ」の美について　吉本青司
遺稿「をらびうた」のこと　清水文雄
追憶　蓮田晶一
桜井忠温氏と蓮田善明　池田勉
生き死にの文学　久保忠夫
亡友の備忘録　栗山理一
手紙　三島由紀夫
黙契　小高根二郎

陣中日記（五）

蓮田善明

五月十三日

童謡

水田はきれい
小蝦がはしる
つんこ、つんこ
怒り屋さん

水田はきれい
どんこが集つている（注、どんこ、おたまじゃくし）
ちょろ、ちょろ
何の相談

水田はきれい
めだかが泳ぐ
さら、さら
水の中にも風吹いてんの

水田はきれい
影が倒さに映つてらあ
パチ、パチ
やあい手を敲いてらあ

果樹園　一六一号　昭和四十四年七月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価四十円　送料二十円

論討　三島由紀夫 vs. 東大全共闘

＝美と共同体と東大闘争＝

最も非政治的な両極から、政治の現状を揺さぶり、時代と変革を迫って行動する両者が妥協や収拾を思わず闘わせた激論二時間半の再現。討論の全文と双方の特別手記七〇枚を収録。

￥250

文化防衛論

三島由紀夫著

感傷とゲバルトの横行を許したコミュニズムの幻影に抗して〝最後に護られねばならぬ日本〟は我々の決意と行動の裡にある！　著者の論理と行動の書。

￥400

東京新宿矢来　新潮社

ジア〟とよばれた松永茂雄が立原にとっての〝瀬山〟であり、必然には〝テジ〟という作中人物のモデルとしてあったといっても、あながちうがちすぎではないであろう。

茂雄が立原にとってそれほど重要な位置をしめず、単に淡い交友でしかなかったとしたら、立原が茂雄にあてた心的訣別の書簡である昭和九年七月十日付の手紙——角川版五巻本全集では上記の日付になっているが茂雄の日記などとくらべてみると、年月日に不明な点がある。ここでは一応五巻本全集の整理に従っておく。——にある、「僕はもう君を裏切ることも思はない」という文の意味するものが、かなり軽いものになってしまうおそれがある。

小川和佑

立原道造研究

文献目録年譜付詩人研究決定版

￥780

東京都千代田区神田神保町二ノ四〇
振替東京　七二二七五番

審美社

編集後記

五月四日。高知の吉本青司氏から、三島由紀夫氏の「文化防衛論」で溜飲を下げた由のたよりを貰った。先に好評を博した「春の雪」「奔馬」の裏付けをするこの著は、まこと近頃珍らしく胸のすく快著であった。書斎と出版社、或いは呑み屋の間しか往来をしない多くの作家・評論家のものするものと全く面目を異にしている。それもそのはず、三島氏の肉体も魂も、現実の世界と触れ合い火花する体験に鳴り響いている。五月十三日の駒場の焚祭で、全共闘派の学生と渡り合う氏をたまたま僕はテレビの画面で発見して思はず快哉を叫んだ。そういえば「文化防衛論」中でも、わが蓮田善明に応援して下さっていることがうれしかった。

「かつて戦時中、丹羽文雄氏の「海戦」を批判して、海戦の最中これを記録するためにメモをとりつづけるよりも、むしろ弾丸運びを手つだったほうが真の文学者のとるべき態度だと言った蓮田善明氏の一見矯激な考えには、深く再考すべきものが含まれている。それが証拠に、戦後ただちに海軍の暴露的小説「篠竹」を書いた丹羽氏は当時の氏の本質は精巧なカメラであって、主体性なき客観性に依拠していたことを自ら証明したからである。」

五月二十三日。俘ちに待たれた浅野晃氏の詩碑の除幕式が、いよいよ六月八日苫小牧で開かれる旨のご案内をうけた。選辞は／われらはみな／愛した／責務と／永訣の時を／である。染筆は水野成夫氏である。遠く祝意を表す。（O）

果樹園　第一六一号（毎月一回一日発行）
昭和四十四年七月一日発行
編集兼発行者　池田市石橋二丁目六ノ五　小高根二郎
印刷所　大阪市東住吉区桑津町三の十八　元市印刷株式会社
発行所　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社
定価　四十円　送料　二十円

展望哨

山上の哨所から展望すると
谷間を巾広い青い川が流れ
水車が白くめぐつてゐた
そこらの水田には水が満ち
しかし望遠鏡の中に人かげは閑つた
哨所の控兵は退屈すると
いつもその川を見た
彼らは地球の脈搏と廻転を感じ
踵を返して更に高い崖の方へ
棘の中を分けて上つた
そこから遠望すれば、夕靄の中に
眼下の一つの高地の嶺はるか彼方に
銀のやうに光る大きな水があり
やがて血のやうに真赤に燃えるのが見えた

五月十四日

紙風船

支那の家は、屋内に中庭があつて
屋根はその上で四角にあいてゐた
その中庭の横に小房があり
私の部屋は大抵そこに定められた
そこには寝台があり（私は薬かアンペラを藉いてそこに寝るのだが）
紙の剝げた大きな窓が庭に向いて居り
その窓は又屋根の間から天に向いてゐた
私はその窓に小さな紙風船をふくらませて釣るした
紙風船は昼は雲を、夜は星を搏つて弾み
風の無い時は透きとほる球体を
しかし、地に落ちることなくひつそりと空中に支へてゐた
兵隊はその風船を眺めて故郷への手紙を書き
私は窓の下で詩を書いた
——視線とはこんなに熱いものである、と

竜

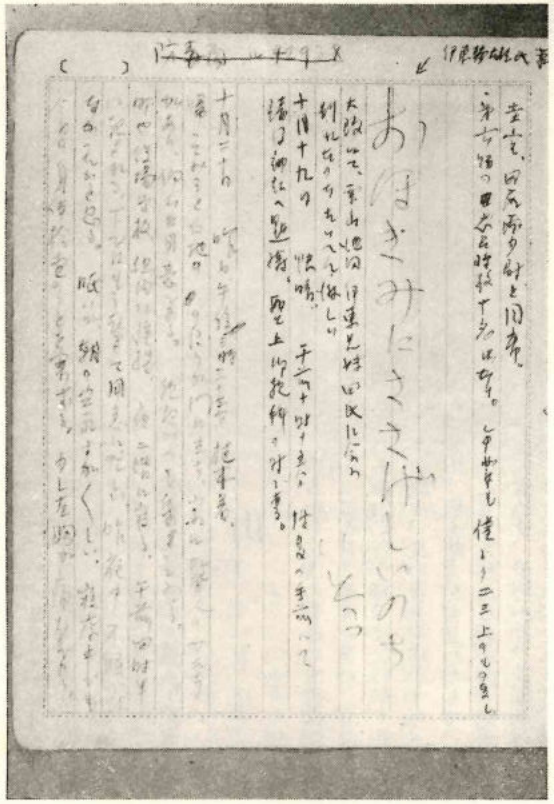
支那の橋には屋根が架かり
屋根の棟木は空に反りを打ち
橋廊には神像の堂があり
「玄之又玄」と朱板に金字の額が掲げられ
あまりに清冽な山川に過ぎぬに
高い壮きな石の礎柱を築き
此の橋を「白寛橋」と名づけられてゐた

年譜

明治三十七年（1904）—一才
七月二十八日 熊本県鹿本郡植木町十四番地金蓮寺住職蓮田慈善の三男として生まる。母フジ。為明・道明・キク・フミの二兄二姉あり。
大正六年（1917）—一四才
三月植木尋常小学校卒業。四月熊本県立中学校済々こうに入学。
大正七年（1918）—一五才
九月より翌年三月まで肋膜炎で休学。級友丸山学・中川軍太郎と共に回覧雑誌「ゴムノキ」を始め、短歌・詩・俳句等を発表。中川脱退後は小学校で一年先輩の坂井一明を同人に加え、後年「耕土」として続刊。
大正十二年（1923）—二〇才
三月済々こうを卒業。四月広島高等師範学校文科第一部（國語漢文専攻）に入学。在学の熊本県人丸山学・蒲池正紀・山崎貞士等と同人雑誌「噴野」の編集委員となり、詩・小説・評論等を発表し、学芸部の全盛時代を築く。
昭和二年（1927）—二四才
三月広島高師卒業。四月鹿児島歩兵四十五聯隊に幹部候補生として入隊。
昭和三年（1928）—二五才
一月退営。四月創立直後の岐阜県立岐阜第二中学校（現加納高校）に赴任。六月十二日植木町の医師師井淳吾の長女敏子（二一）と結婚。但し、岐阜加納と植木に別居。
昭和四年（1929）—二六才
四月長野県立諏訪中学校（現清陵高校）へ転任。

橋傍の家は不気味な高い白壁を川に向け
鱗のやうに屋根は積み重なり
それにも、空に何かを書かうとする反りがあつた
空はあまりに茫漠と広く
うすい黄塵に曇つてゐるだけであつたが
——

私が橋を渡つてみると、目の詰つた格子戸は暗く、
その隙間から川面も空も眺めるに堪へず
既に朽ち壊れた板や柱は剝がれて
焚木のために子供らが持ち去り
私が岸から下りて顔を洗つてゐる時
向ふの家の窓から穢い埃がぱらぱらと投げ



応召日記 伊東静雄の俄けの言葉が見える。—昭和十三年十月十八日

作文教育に熱中、國話主任菊池久吉に睨まれ、毎年一年生のみ担当。高藤武馬が発行する「方言」に寄稿。
昭和五年（1930）—二七才
二月二十日長男品一諏訪市湖柳町で生まる。
昭和七年（1932）二九才
三月諏訪中学校退職。四月広島文理科大学國語國文科入学。
昭和八年（1933）—三〇才
三月二十三日 広島牛田町の大山澄太宅にて山頭火と出合う。九月清水文雄・栗山理一・池田勉と共に同人研究紀要「国文学試論」第一輯を刊行（春陽堂）、「真福寺本古事記書写の研究」を掲載。
昭和十年（1935）三二才
三月広島文理科大学卒業。四月在学中の尚志奨学会からの借金（七五〇円）返済のため、三年間を目途に、台湾台中州立商業学校に赴任。
昭和十一年（1936）—三三才
次男太二台中市村上町に生まる。八月二日堺の栗山理一宅で初めて伊東静雄に出会い詩人らしさにうたる。十一月高藤武馬が創刊編集した「伝統」に詩を発表、爾後編号執筆
昭和十二年（1937）三四才
八月高野山遍照光院で再び伊東静雄に邂逅。
昭和十三年（1938）—三五才
四月成城高等学校へ転任、清水・栗山・池田と共に「日本文学の会」を設立。六月「国文学試論」第五輯に「本居宣長に於ける「おほやけ」の精神」を掲載。七月「日本文学の会」で「文芸文化」を創刊。七月二十八日より四日間高野山にて「日本文学講筵」を開き垣内松三・斎藤清衛・久松潜一・源豊宗四氏を講師とす。同講筵で伊東静

込まれた
私は竜が水と天とを搏つて昇天する意か
と
おどろいて畏怖を感じた

五月十九日（中舗――仰山殿の峠にて）

意　志

峻嶮七百米の峠は雲の中。
しかも、雨露が敵影を遮る
山岳を切る意志。
滑る石みちを上る。
雲の中で尖兵が戦つてゐる。
濡れた山肌を来て、弾丸がカツと草を切
る。
萱の葉の白い露が――。

五月二十一日

満天の星

星
夜空に明るく、
地から高く乗り出し
自在に、そして秩序を
崇高に、きびしく
情熱的に
ああ、燦爛たる
純潔で美しく
神秘で、いつもそこにゐる
星よ　満天の星よ　私は人間を感じない
オフエリアのやうに水に浮きつつ、
そなたを見ながら
流れて行きたいと思ふ……（つづく）

山

明日から又山の警備に交代に行く。早くも下山してから二週間を経た。あの山、草と岩のあの山、余り高くはないが、低すぎない、が急峻な、長い背を空に脈うち、ならしたあの山、敵も味方をも見わたして、その中に割り込んで、兀然たるあの山、絶えず敵がその麓に蠢めき、射ちかけ、友軍からも孤立してゐる山、しかしほんとの親和を以てでなければ、或はほんとの正攻法を以てでなければ、自分は絶対にあの山を何人にもゆづらない。あの山は、死をもつて守るべき、詩の山である。岳陽楼よ、亡びよ。同じく洞庭湖を望むこの草で青い岩山に、形無き、新しい詩の楼を、自分は築く。ここは、純粋に戦ふ山である。今度は、「奥の細道」「北村透谷選集」を携へて行くことにした。それと、部下の父

雄と三度めぐり会う。十月十七日応召、陸軍少尉として郷里熊本の部隊に入る。大阪駅頭にて伊東静雄の見送りをうく。

昭和十四年（1939）―三六才
四月六日中支那に遠征（中支派遣稲葉部隊・坪島部隊・河野隊）。上海・漢口・成寧を経て洞庭湖東岸に進出新墻川を望む晏家大山の警備に当る。九月二十八日作戦で出動新墻・長沙中間の福臨舗で右腕前膊に銃創をうく。十月十三日三男新夫植木町に生まる。十一月阿蘇山麓の大矢野原・浅の蔵兵舎で寸暇を割いて執筆した『鴨外の方法』文芸文化叢書の第二篇として子文書房より出版。十二月稲葉中将転任し野尻中将着任、部隊名野尻部隊・坪島部隊と変る。

昭和十五年（1940）―三七才
四月池田勉大阪の今宮中学より川崎木月の法政第二中学へ転勤。十二月一日帰還の途につく。上海にて陸軍部に勤める丸山学（支那派遣軍総司令部参謀付）に会い、日記・原稿類の持ち帰りにつき相談、丸山「公用」の印判を押して内地へ託送す。二十五日に帰還。

昭和十六年（1941）―三八才
一月『預言と回想』（文芸文化叢書第七篇）出版。この原稿は晏家大山の陣地で執筆したもの。阿蘇垂玉温泉に保養。二月単身上京帰任、六月家族上京まで池田の許に寄寓す。小説『有心』、評伝『鴨長明』の稿成る。十二月太平洋戦争始まる。

昭和十七年（1942）―三九才
八月栗山理一大阪の堺中学より奥亜工業大学へ転任。同人四人東京に居住することになる。

昭和十八年（1943）―四〇才
昨年より今年にかけて『文芸文化』をはじめ「文

兄に出す葉書の袋。詩を書くかもしれぬ小手帳。とにかく、書くことを欲しない。今度は、この前、日誌を書いたノートを持つて行かないつもりである。草を描く気持である。沈黙の岩窟（岩で造つた蓋蔽壕）がある。赤熱の陽を蔽ふ四尺の天幕の屋根を竹柱に張り、岩の上に五尺の莚をしいて眠る血と汗が蒸発し、乾燥する。一日と一夜がゆつくりと見事な足どりで歩む。黄金の沈黙を愉しまう。己を厳しく黙せしめるとき、――あの山ではそれが出来る自由を自分はもつ――喊黙の底から、きこえてくる声。映る影。彼方のもの、純な光だけのもの、音だけのもの、影だけのもの。焼きこがす炎熱、来り、又来る風。星。――今度は月が大きくなりつつある。岩の中に鳴く、少い虫。あそこでは、小鳥たちは鳴かない。谷の方で遠く鳴くのみ。雲雀が岩と草のかげに巣をもつてゐるらしいが、あれも、山から高く翔つた空中で鳴く。黙つてゐる鳶だけが、近く浮んでくる。敵の弾は、それて空際はるかへとび去る。砲弾も岩を少し

晏家大山の陣地で
座像中央蓮田。向つて左欵事係。右当番兵。その他は中国の使用人。　―昭和14年―

学「「現代」「文芸世紀」等の諸誌に多くの研究、評論を発表し、生涯中もつとも旺盛な活動をなす。四月『木居宣長』（新潮社）、九月『鴨長明』（八雲書林）出版。十月二十五日再度の応召。大阪駅頭伊東静雄の再度の見送りをうく。静雄の序を冠したる新著『神韻の文学』（一條書房）ゝ静雄の新著『春のいそぎ』を交換し劇的な別れをなす。十二月『古事記学抄』（子文書房）出版。同月二十九日ジヤワのスラバヤにて佐藤春夫に逢遇、歌稿を託す。

昭和十九年（1944）―四一才
一月元旦小スンダ列島の淺北の島スンバ島に進駐（淺北派遣静一一九六一部隊）。六月『忠誠心とみやび』（日本放送出版協会）出版。八月雑誌統合の政府要請を機に、第七十号を以て『文芸文化』を終刊、この号に佐藤春夫の「遭遇――スラバヤに於ける蓮田善明君」と共に「おらびうた」を掲載。

昭和二十年（1945）―四二才
一月より三月にかけマレー半島に移駐。第二方面軍から第七方面軍（板垣征四郎大将）の指下に入り、迫撃砲隊中隊長としてジヨホール水源地附近の警備に当る。八月十九日背信の上条聯隊長を射殺し、みずからも自決す。

昭和二十一年
六月十七日植木町なる留守宅に死亡の公報至る。

昭和三十五年十月十九日
田原坂に「おらびうた」中の一首〈ふるさとの駅におりたち眺めたるかの薄紅葉忘られなくに〉（斎藤清衛博士揮毫）の文学碑を建立。

（清水文雄・小高根二郎）

削つたり、草を僅かに焼くだけで、その姿をどこかへ自ら吹き散らしてしまふ。自分は、敵に一発の応戦も禁ずる。敵は自分が守つてゐる間、寄りつけない。何ものが寄りつけるか。自分は、純粋に戦ふ故に。私の生涯に於ける、この「場所」。私が死に、永遠が、私に薄いかたびらを着せる。

（「陣中ノート」昭和十四年六月晦日）

無題

今日みんなと旧陣地の壕などを埋めに行つた。これまで数度敵がこれを利用して、木一本ないこのなだらかな山では、その都度突撃して奪回するのにその時は命かけての苦労だつたし、それにも拘らず敵が遁逃すると又そのままにほつてゐるといふ呑気さも必ずしも難ずべきでもないが、とにかく埋めておけば又の時らくである。さて自分は昨年の秋以来はじめて行つてみると、度々の戦斗（その最後は所謂冬季攻勢の時だつた）で斃れた敵屍が壕の中に骨になつてくづ折れてゐる。もう直白くきれいになつて、匂ひもしない頭蓋骨などもある。屍体は大分片附けたが片附け残されてゐたのである。これももう誰のやら分らない。そのまま上から土や石をもつて壕に埋めておくことにした。これが彼らの最もふさはしい墓地かもしれない。自分も実はこの山この陣地には去年数ケ月間の全くなつかしい思ひ出があり、山が気に入つて死ぬならここでと思つて、詩にも自分の詩神を献じてゐた山でもあり、今でもその心が失せてもゐない位なので、ここに戦死してゐる支那兵に一寸羨ましい気が起らないでもなかつた。そんなことをいふとへんだけれど、ほんとうの心持である。

しかしその骨の上に石や土をかけながら何かあはれを催した。置きすてられてゐる死体――収容させてくれと言つてくれば、さうしてやりたいとさへ思ふなどといつてもそんなこと支那軍は信用もしまいけれど。もうこんなに、どこまで戦つても死体を打すてて恐らくは誰が戦死したかもそのままになつてしまふであらうやうな戦争はやめるといふことが正しい――こんな正しさこそ誰一人動かすことの出来ぬ人道ではあるまいか。自分は俗劣な私情をかばふために人道を言ふ類に対しては人道などといふことをさへ排斥するけれども、こんな昭々明々たる人道を踏みにじるやうなことには無関心ではゐられない。悲しまずにはゐられない。

しかし私はそれよりも何かちがつた気持で「たつたこれだけか」と心の中でつぶやいて胸中かすかなさびしい――といつても一片の骨と化した人間のなれの果てがどうのかうのといふよりも、むしろ、清々しした気もち――、丁度「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる」といつたやうな涼しさで胸が吹き抜けてゆくのを感じたのであつた。それを我自らしらず〳〵いたはつてゐたのであつた。頭蓋骨などは普通生きてゐる時の肉のついた顔の感じからするとへんに小さくて、而も頭蓋の部分がつるつるとまるくきれいで、きちやうめんに数枚の骨板で組合されてゐるのなどいかにも人間といふものの正直さを露してみせてゐるやうで殆ど不快な感じなど残らず、ああこれだけで、――これだけの正直さで、人間は生きてゐた、とあはれに人間をいたはる気持であつた。

（「陣中ノート」昭和十五年四月十六日）

山上の言

最も現実として確実なことは、人間は死ぬといふことだ。他に何を探してもこれよりも確かなことはない。

リアルとか現実とかとして、何や彼や論ずるが、誰にでも明白に分つてゐること、万外れっこないのは、死ぬといふことだ。そんなことは分りきつてゐる、今更いふがほどのものはない、今更説教なんて、問題外だ、われわれの現実は生の現実だ、――生こそ現実だ、と反駁してみても、いかなる反駁をも越えて、最も現実的なものは死だ。むしろ「生の現実だ」なんていふことこそ、今更いふがほどのものはないのだ。

死を以て決定的現実とすることは、虚無的であり、悲観論的であるとも言へよう。しかし私のいふのは、太古以来不変な、死についての率直な認識を言つてゐるだけであつて、それを以て何も虚無的とか悲観論ときめる必要はない。勿論、死はわれわれの生を脅やかすものである。そして、死ぬことについては、もう誰もが諦めざるを得ない位だ。われわれは、なるほど、今更そんなことを取上げても致し方ないし、もつと、生きることについて努力してゐる。考へてゐる。これが近代的なのだ。

けれども、この近代的な努力も、決して死を忘れてゐない。又、死に対して決して、それは自然的生理的一事実にすぎぬと諦め捨ててはゐない。われわれは唯近代的な或る一つの仕方で死に対してゐるにすぎない。

ここに近代的な見事な鉄筋コンクリートの大ビルディングがある。この建築は此の時代の文化の堂々たる表象として歴史に残るかもしれない。しかしこの鉄筋コンクリートのビルディングは、この建築物の廃滅期に対し、又地震、火災、空襲に対し、健康衛生に関して、最も根本的に計算設計されてゐる。これは人の生活と生命を守るものとして計算されてゐると共に、そのことは実に最も現実的に死―に対する設計であることを示してゐる。

しかし私はここでも徒らに死を数へ立ててゐるのではない。否、斯かる死に必至に対面した所に、人間が生を、文化を、見事に作り上げようとしてゐるのだといふことを言ひたいのである。この、近代的大ビルの見事な偉容は、死に対して必至であるほど、それほど、見事に、堂々とうち建てられたのである。死ぬことを知らない無生物は、それ故、文化をもたない。死ぬことを、単に自然の生理的な

みづぐるま

――蓮田善明君の忠霊を思ふ――

浅野　晃

足もとに萩の花なく
牧に吾木香の花なく
校庭に待宵草なく
橋のたもとに撫子なけれど
川は流れ
君は月光のなかで
むかしの歌に出会ふ

独りゆく道に道はなけれど
故国に帰る道は
みな携はり帰る道
夏草の野によこたはり
まどろみのなかできくは
水車の音
形なくして廻つてゐる水車の音
故山に秋は帰り
川は流れる
水車は歌つてゐるのだ
母に負はれていつもきいた
いつもきいたあの歌を。

無意志な事実ときめて、われわれの現実は「生の現実」だなどと思つてゐる者の装ひは、唯けばけばしてゐるか、悟り顔に蒼ざめてゐるか、何れにせよ頽廃的である。創造ではない。

われわれは唯死を悲しみ、生を惜しむのではない。又単に死の彼岸の天国への希求や或は現世の享楽に生命を徒費してはならない。それは何れも妄執である。しかし死が一切を閉ぢてしまふのではない。前にもいふやうに死は却つてわれわれをして生かしめてゐるのである。

死ぬをあはれぶ――これは大和人の詩であつた。死ぬをあはれぶことは生をあはれぶことであつた。最も現実的な現実である所に必至になる時、われわれはその現実に閉塞され、圧倒されて無知、無意志、無感情に化石するのでなく、その現実を凝視してその底に闇を透して星の如きものを見出すのである。この事が美しく尊いのである。

現実の底に純粋を。そしてこの目は、実にかかるものを見るべく与へられた目であり、現実とはかかる光を秘蔵した浪曼的な世界なのである。かかる浪曼的な、あはれぶに堪へうるものこそ、最も現実的なのである。

斯ういふことは、徒らに事の概念をつき混ぜて妥協させてゐるものであると、非難し、現実は現実らしく、浪曼は浪曼らしく取り分けて捌いて行くべきだ、といふ忠告は、寛大にそれを許すこともできる。しかしそれは突きつめて行くと、然ういふ現実は、現実と認める目をも否定し、又われわれの智は妄想に終つてしまふことになる。

わたしたちは、今改めて、死を思はう。死を思ふことによつて、世界は雲の如く愉しいものとなる。勿論、この愉しさのために己の生理的な死の痛苦感は無くなりもするものではないが、最期の断末の思ひは誰にも分りはしない。しかし、われわれにとつて、死は、単なる個の死以上のものとして今思ひつづけられてゐるのである。

（「陣中ノート」昭和十四年九月―推定）

蓮田善明と私

丸山　学

蓮田と私との出会いは大正六年四月四日、国鉄鹿児島本線の植木駅でのことである。この朝、彼も私も真新しい中学の制服を着て、黄色の筋の入った制帽を被っていた。二人はこの日から毎日この駅で乗車して熊本市黒髪町にあった県立中学済々黌に通学することになる。彼が私と同じくこの中学に合格したことを私は父親からきかされていた。私の父は小学校長で私の学校と蓮田が出た植木小学校とは隣接の学校であったので、父は私の友人となるべき蓮田善明の合格のことを、そこの校長からでも聞かされて知ったのであろう。

更に云えば、小学校時代に私は父に連れられて何度か蓮田の父君たる慈善師の説教を聞きに行ったことがある。父は慈善師を崇敬していたし、二人は相当に親しい仲であった。しかしその息子同士が顔を合わせたのは確かに四月四日の朝であった。一見して小柄の、がっしりした体格、眼の大きい少年、と云うのが私の第一印象であった。

入学してみると二人は同級であった。毎日毎時間を二人は一緒にすごし、同じ列車で植木駅に帰って来て、そこで別れた。家庭的の往来もはじまって二人はすぐに親しくなった。毅然とした立派な体格のお父さんと、やさしくて眼を病んでいられたお母さんの俤も私の記憶にはっきり残っている。二人のお姉さんがまた格別私にやさしくしてもらった。

済々黌と云う学校はもともと西南の役で人材を喪った穴埋めのために、熊本県の民間の有志が発起した私立学校で、私共が入った頃はもう県立となっていたが、古武士のような先生たちが何人も在職していられ、スパルタ式の教育で、人材養成を目ざした建学の精神がまだはっきり残っていた。生徒たちは国士を気取って街頭を風を切って歩く、と云ったところがあった。

二年生になった四月から私の一家が熊本市に移住するのだが、家が駅から済々黌に行く途中であったので、蓮田と私の交友はすこしも疎くなることはなかった。学校で寒稽古や毛狩などの行事があって朝の集合が早かったり、帰りがおそくなるような時には蓮田はいつも私の家に泊った。反対に植木の町に何か行事でもあると、私が彼の家に泊りに行った。

済々黌の二年生の頃に、彼と私と、もう一人、中川軍太郎と云う同級生と三人で「ゴムノキ」（後には漢子で「護謨樹」と書いた）と云う廻覧雑誌をはじめた。誰が云い出したのかもう覚えていないが、この中川君と云うのは熊本市内の小学校の出身で、なかなか早熟の文章家で、当時の少年雑誌の投書家仲間では相当名を知られていた。彼の投書した作品は毎月のようにどれかの少年雑誌に載っていた。廻覧雑誌と云う形式は当時の文学少年の間に流行していたもので、期日を定めてみんなが書いたものを持ち寄って一冊に綴じて廻覧し、それを批評し合うのである。中川は巧みに選者の傾向をあてこんだ作品が作れると云う技巧派であったが、蓮田は当時から既に思索肌で、自分の考えたところを、自己流の形で作品に表現していた。詩や随筆が多かったが、絵も時々出していた。この絵と云うのは「草画」と呼んで当時の文学雑誌などでも募集していたもので、ハガキ大の用紙に描いた墨絵である。この絵が描けるのは三人のうちで蓮田だけであった。従って「ゴムノキ」の表紙は大抵蓮田の担当であった。

そのうちに蓮田はロクマクで休学し、中川は文学をやめると宣言して受験勉強に打込むことになる。ゴムノキは七十号位まで続いたかと思うが、病気で引きこもった蓮田の思索は更に深まり、中川の代りに蓮田小学校時代の同級生板井一明君が加わって、「耕土」と云う廻覧誌を続け、蓮田のところに私が見舞に行って、この廻覧誌の編集をしたこともあった。「耕土」は同じ廻覧誌だが三人が交替で、一冊分を一人で筆耕する方式にした。

大正十一年私が広島高等師範に入ったが「耕土」は続刊し、五十号に及んだ。翌十二年蓮田が私のあとを追って広島に入学して来たので、こんどは「空」と云う謄写刷の文芸誌を出す。これには同じく済々黌を出て広島に入ってきた蒲池正紀君など広島と熊本の仲間が多数参加した。当時は云はば日本の文芸復興期で、若い人々の同人雑誌が無数と云つてよい程、全国各地で発行されていて、私共のこの雑誌も決して珍らしいものではなかった。ただ教員養成のための官立学校であった私共の学校では前例のないことであった。当時私共はこの学校の退嬰的な形式主義に対する一つの反抗としてこのような文芸運動を盛り上げたものであった。そしてこの運動はたしかに成功し、私共は校風を一新することに成功した。

蓮田は決して所謂「文弱」の徒ではなかった。身長こそ大きくなかったが、広島にやって来た当時の彼は筋骨逞ましく、スポーツもいろいろやった。一番の得意は砲丸投げで、彼の腕は隆々と力瘤を作っていた。ボートの盛んな学校だったので、彼も広島でそれをおぼえて、クラスや県人会のクルーで漕いでいた。

私どもが彼を引っ張り込んだグループ活動

の一つに軍事研究団と云うのがあった。この活動の発端は軍の乗馬隊の馬を貸してもらって乗馬の練習をしていたことにはじまる。日曜日ごとにそれをやっている中に仲間の話が段々と固まって、夏休になったら軍艦に乗せて貰うことにしたら、と云うことになった。グループの中に平賀源内と云う兵隊好きの学生があって、呉の海兵団に談じ込んで、とうとうこの計画が実現することになった。リベラリズムの風潮の強い時勢に、こんな申し出をする学生があるとは感心だと云うことになって、私共は大変に手厚く海軍から迎えられ、海兵団で一週間の訓練を受けた上で、呉軍港から駆逐艦に乗せてもらい、九州の東海上でやっていた大演習を参観したのであった。万事に秘密主義の日本の軍部としては全く破天荒とも云うべきことで、新聞などもこの企てを大袈裟に記事にした程であった。私共としても夏の大洋の上での艦上生活は愉快な体験であった。

こうした一連の活動は別に思想的な根拠があった訳でもなく、また誰かに躍らされてやったものでもなく、ただ青春のエネルギーの発散とでも云うべきものであったが、蓮田や私が徴兵検査で甲種合格と云う、当時としては大に光栄ある取扱を受けたことと、すくなからぬ関係がある。私ども二人だけでなく、このグループに属していた仲間は、それぞれ郷里で徴兵検査を受けたが、ほとんど例外なく甲種合格であった。当時は各大学に陸軍の軍人が配属将校と云う名で在勤して軍事訓練を担当していたので、我々の学校の配属将校からこの学生活動に参加したもののことは軍の当局に報告されていたようである。私は郷里の熊本県で検査を受けたが、検査官が私のことを知っていて、非常に賞讃してくれた。

そんなことで、私も卒業と同時に宮崎県の都城連隊に入営することになるが、一年おくれて卒業した蓮田も同様に、鹿児島の連隊に入り、ともに予備士官の資格を持つことになったのである。後に大東亜戦争となって蓮田も私も陸軍将校として二度も召集を受けることになるのだが、一度目は二人とも支那大陸で、ただ私が一年程早く出征し、二度目には同じ日に応召したが、彼は南方に派遣される部隊に属し、私は内地に残る補充隊にとどまることになった。こうして、この二人は昭和十八年の秋に引き離されて、遂に相見ることがなくなったのである。

蓮田君の憶い出

斎藤清衛

「時」のちからは、万物を消し去ってゆくというが、蓮田君のおもかげも、半世紀もたてば、どんよりと白い霞を通して舒々に忘却の底に沈められてゆく――と老耄の自身を嘆いても仕方があるまい。ただ、広島高師時代にわたくしの教室に、隅の方角にちょこなんと机についていた学生の姿を憶い出す。当時熊本出身の入学者には、やや異様の文学青年がいたけれど、蓮田君は可愛らしい眼をしていただけで、むしろ沈静がちだった。当時、漢学の教授に北村、武藤など壮々の学者がいたが、むしろその人々の魅力にひかれていたのではなかったかしら。

わたくしが、蓮田君と親しくなったのは、昭和十年前後からのことである。当時自分は、上京していて武蔵野の一農家の室を借り、半ば自炊の生活を続けていた。今は、世田谷区祖師谷町と改名されたが、その頃は東京府下の千歳村と称し、見わたす田野に、雑木林や竹藪があり、草葺の農家がその蔭に点々と見られる程度の農村にすぎなかった。附近のある農家では、数頭の養豚を副業としていたため、折角訪ねてくれた知人にも不快な悪臭をかがせなければならなかった。

その頃、漸く借屋に移ることができたが、家を訪ねてくれた人は、大半、師弟関係のも

のたち、出版関係の人、上京後の小数の知人の程度であった。その師弟関係の中に蓮田君が加わっていたわけで、信州諏訪中学を退職して上京した当座だったと思う。そうした古仲間で、「日本文学の研究会」を作っていたが、年令から見て、蓮田君は年長者であり協議の間にも相当の私見を述べてくれた。顔色は学生時代と変りなく、いくぶん青味を持った白さであったけれど、眼光が烱々として、たえず唇を閉し、決断を要する時は両眉をあつめるような習性を持っていた。それだけは学生時代から成人していった結果だろうとも評される。

しかし、相談においても雄辯型でなく、いわゆる情緒的浪漫的でなく、実証的厳格型であった。わたくしの陋屋には、グループが集まり、しばしば飯食したこともあったが、仲間は蓮田君の説に服するような議事が多かった。蓮田君は、最もおそく同人に入ったのであるが、隠然とした位置勢力を保っていた。例えば、昭和十三年四月五日の簡単な日記の一節をあげると。

四月となってもなかなか寒い。一昨日は、栗山（理一君）、池田（勉君）、清水（文雄君）蓮田、高藤、池田、広谷各君自宅に集合した。蓮田君は台湾から一昨日上京したばかり。誰もが元気にあふれ若々しいのが羨しい。近く刊行予定の研究雑誌の件や国文学叢書の準備相談なのである。刊行関係の事務には、池田（順介君）と広谷君とがあたることとなった。云々

と書遺されている。すでに四五年前、同人によって「国文学試論」と題した二三百ページの文学研究書が春陽堂から刊行され、蓮田君は、「真福寺本古事記書写の研究」「古事記の文学史学的考察序説」「日本文芸史理論」「大鏡研究」などを各冊に発表しているが、その着実で精細な研究方法はかれの個性をよく示していた。必ずしも考証や文献学のみに偏しなかったことは、それら辞句の間にもすでに文芸的な観察力の輝いていたことで分る。「大鏡」は誰もしる中古時代の「鏡物」の一種であるが、蓮田君はその論文の冒頭で、更に以下のようにも述べている。

ここに私は「大鏡」を取扱はうとするのであるが、私は「大鏡」を如何にして文芸作品と目することを許されるであろうか。このことは一応問はれていいことである。と書いているが、こうした思想あって、歴史物もまた文学の世界に吸収されうるのである。

花

田中克己

去年の春シネラリアの重い鉢をもって訪ねて来られた
おつきあひを始めたのが昭和十三年で
ちやうど三十年になる
わたしは恐縮してこの先輩をお迎へした
「イザリアの花ってどんな花ですか」
「南の星」に出て来る花だが
わたしはこまって「一晩中ねささないいい
匂ひのする花」と答へた
二十五年まへのサイゴンの一夜を思ひ出したのだ
次にお越しいただくと庭のアヂサヰが満開だった
「一枝下さらない」と仰せで喜んでさし上げた
今年もまたアヂサヰが咲き出したが
阪本越郎さんはもうおいでにならない
きれいな詩をお作りになる学のある方だった
アヂサヰの咲くたびに思ひ出すだらうが
それもあと何回か
わたくしは梅雨どきには喘息が出るので
咳をしながら考へてゐる。

なお昭和十二、三年頃になると、わたくしのような老骨には万事記憶が薄れがちとなってくるが、蓮田君のグループは、大半、祖師谷町（旧千歳村）あたりに住居していたので、朧ながら思い出すことは、蓮田君が現住を不自由として、鳩の家幼稚園に引越したこと、高野山大学で同人主催の夏季講習を催すこととなった時、蓮田清水両君が準備のため早く出発したこと、さらに蓮田君が病気の母を見舞に帰郷したこと、太平洋戦争で全君が招集令をうけ南支に出発する報をきいたことなど——すべて昭和十三年における諸事件は頭に残されている。人事多端と評すべきかその前後、わたくしの生活にも、ごちやごちやと身辺の問題が多くなって、おちつきがなくなった同人雑誌の「文芸文化」には、ほとんど毎号、私論や私評を戴せていたが、北海道一周の旅をしたことなども何か心中に落付かないものがあった結果だったと思う。ところが翌々年十五年のことであるが、突然に師藤村作博士の私訪をうけ、先生が北京大学の顧問として大陸行きをされるについて、わたしも同伴することとなり、中国の大学教授とか、華北日本語教育研究所々員の職につくこととなった。しかし蓮田君とは連絡がついたわけでなく、大国の南と北とに居住しているというだけで、戦地の様子を知る由もなかった。いって見れば、その後の四五年間——わたくしはもとより、終戦の昭和二十年帰国した——の蓮田君の消息は、ほとんど判らなかった。果樹園主の資料拾輯と掲載とで暗示されたのであるが、蓮田君の人間性、ないしその学力はおそらくこの就戦中に完成されたもののように思う。丸山君や清水君の努力で、田原坂に君の紀念碑を立てることが計画された時、蓮田君が一介の歌人であることを始めて知ったこと、果樹園の「陣中日記」抄の中に新詩の多いことなどがそれである。もとより、蓮田君には最初から詩歌肌の要素はあったがそれを逐次円熟させたものは、大陸に渡っての生活上の結果に因するものではあるまいか。蓮田君の詩作の一首。

○自然

船出しぬ、崩壊の泥濘の巷より
小船は波にたゆたひつ
江上はるか遡る
濁れる水は今日もまた
面（おも）交りせずうち濁り
ためらひもせで又急（せ）かず
ただひたすらに大いなる
輪廻（りんね）の帯と流れ行く
遠き岸には青々と
春と水とを隔てしぬ
われ、ふなべりにさし倚りて
涙ほとほと堪へがたし
自然を見るは断くのごと
悲しきものと思ひけり

（果樹園第一六〇号より）

蓮田君には、「鴨長明」の研究なども遺されているように、古典主義と浪漫主義とが並んでその胸中に仝居していた。日記の文体も文語体で綴られているように、「自然」と題されたこの詩にも、何となく明治時代の新体詩を聯想せしめる香りがある。じっくりとその境域を守っていったところに、かれの特色があるともいわれよう。

「伊東静雄」研究に、精細綿密の成果を公にされた小高根氏の效蹟は世人すべてが認めるところである。さらに、氏が、地下の文人乃至隠された国文学者蓮田君の功の発掘に志されたことは、そこにいろいろの契機が係わっていたにせよ、すでにこれまで「果樹園」誌上その他に公表されたその労は、故人の一友としてまことに感謝に堪えぬところ、特にこの度、蓮田君追憶の特輯を果樹園でされるという計画をきいて、驥尾に附して憶い出を述べた所以である。

蓮田さんを敬慕して

大山澄太

私は至って横着もので、日記をつけていない。その代り昭和四年から十七年まで在官中は職場の機関雑誌を毎月編集し、昭和二十一年からは小さいけれど毎月私の「大耕」を出して来た。この雑誌が日記のようなものだと思っていたのがいけなかった。

今度蓮田さんについて書けと小高根さまから言われると、あの至って、正しく詳しい蓮田さんの生涯をお出し下さる「果樹園」を思うと、何事も漫然雑然としたものしか書けない私がおはづかしくなってくる。

蓮田さんを私に紹介されたのは斎藤清衛先生であった。先生はその頃はもう広島を去って武蔵野の祖師ヶ谷で自適していられた。しかし、広島高師や文理大の国文学生たちはいつまでも先生をお慕いしていた。

「山頭火の手記」（潮文社発行）によると昭和八年山頭火は二回、広島市牛田町の私の家へ泊りに来てくれ、二回とも蓮田さんは、後輩の後藤貞夫君たちと、山頭火に会いに来てくれた。三月二十一日、小郡の其中庵を立ち、徳山・宝積に泊り、二十三日広島に来ている。

「夜は親しい集り、黙壺・後藤・池田・蓮田の諸君。近来にない気持のよい酒であった。ぐっすりと眠れた。」

と記している。この池田は池田勤さんで、同じ文理大の学生時代。この夜どんなものを馳走したか忘れてしまったが、酒は賀茂鶴であった。山頭火は蓮田さんが肥後の植木が故郷だというと、わしは禅宗坊主になって間のない頃だが植木の町はづれの山の石段の急な味取観音堂に、一年あまり堂守をしていたよ。味取観音へは僕は少年時代によく遊びにいきましたよ。等と語り合い、特に蓮田さんは、不思議そうに、なつかしそうに山頭火を視つめるのであった。次は

九月十五日・十六日・十七日・十八日と山頭火は四泊してくれている。蓮田さんへは通知がおくれて十八日夜来てくれている。

「多賀さん来訪、生れて初めて薄菜をよばれる。横畑さん来訪、ブドウをよばれる。波田さん等二人来訪。話、話、話。」

この日は夕食が終ってから、四人が三回にやって来たのである。多賀さんは教育学、黙壺は帝人の幹部で「層雲」の俳人。波田さん等二人」とあるのは、後藤君に確かめたところ、蓮田さんのこと、自分が一所だったと言う。夜が更けるまで、皆で賀茂鶴を飲みながら話した。酔うと山頭火はよく語り書くので皆が帰ろうとする時に、私が画帳を出したところ、山頭火は「其中一人」と大書し、多賀さんは「無一物中無尽蔵」と書いてくれたが、蓮田さんたちは遠慮して筆をとらなかったが、その画帳は現在も大切にしている。

そんなことがあって蓮田さんは時々遊びに来てくれ、夕餉を共にすると、大したもてなしもしないのに、家庭的なそして豆腐や蠣や、蕗の佃煮・古い味噌漬などの日本の味を楽しんでくれるのであった。蓮田さんは、小声ではあるが、力強く、一言一句、自分で自分の言うことをうなづくようにして、無駄のないものの言い方をする人であった。

卒業して台中へ就職してからも、私は『地下の水』の原稿を送って、とかく仮名づかいを誤ったり、誤字を書いたりし易い、私の欠点を補って貰ったりした。またその頃斎藤先生の編著せられた中等学校用の『作文』に、蓮田さんは、しきりに私の『青空を戴く』の中の文章を採りあげてくれたりした。

昭和十六年の夏、私は満洲の旅から戻ると

すぐ東京の逓信本省へ転勤せねばならなかった。私は斎藤先生の祖師ケ谷に近い砧町に家を建てて住みついた。蓮田さんはその頃は成城高校に戻って来ていて、中支の従軍中は部下の一兵も殺さず、自分は一弾にやられたが、それも大したことなく、宇奈根に住んでいた。うちから歩いて五分もかからなかった。大きい家ではなかったが、十八年再度の出征までのこの宇奈根時代が、蓮田さん全盛時代ではなかったろうか。「文芸文化」の編集もするし、「本居宣長」「鴨長明」をはじめ七冊の著述をとげている。そして保田與重郎、中河與一等と親しくし、文壇にぐん〳〵のり出したのであった。彼は子供に勉強室を与え、自分は玄関の二畳に頑張っていつも原稿を書きまた校正もしていた。

「朝は三時頃から起きて仕事します。戦場のくせがつきましてね、長く寝ぬでも疲れぬようになりました。」

と言った言葉は忘れがたい。彼に会っていると、私は鬼気に近い気魂を感ずるのであった。私は十七年夏から役人を止めて自由になったものの、満洲、朝鮮等へ長期に出張することが多く、時間は次第にきびしくなって行った。宇奈根の記憶としては長男の坊チャンが、頭髪黒く、眉鮮やかに、眼光深く鋭く、白隠和尚の自刻像によく似ていると思い、そのことを蓮田さんにあとで語って笑われたこと等なつかしい。

私は二十年の三月、家内の親族を頼って伊予の山中へ疎開した。そこで敗戦を迎えた。斎藤先生は京城大学から再び広島文理大に戻られたが、蓮田さんの戦死は、いつ知らされたか記憶していない。しかし二十六年の十一月十一日、山頭火夫人にも会いたくて、熊本へ行き、植木の敏子夫人をお訪ねして墓参することも出来た。師井という医院の前でバスを降りると、そこが奥さんのお里で、二番目の坊チャンがもう中学の三年生で待っていてくれた。宇奈根の家にかけてあった「蓮田善明」の門札はなつかしく、奥さんにお会いするのも八年ぶりだ。仏壇の写真は私服でゆったりと腕を組んで微笑している。私はこみあげくる涙を押えて合掌念仏した。

お墓は街道の西側の森の中で、そこへ行く道が、あまりにも蓮田さんの愛した宇奈根から成城へ通う道とよく似ているので、そのことを奥さんに話すと、

「柳田先生も言われましたよ、成城あたりの土と、日本で一番よく似ているのは、肥後の植木付近だよ。」

と答えられた。墓はお父さん、お母さんそして蓮田さんという順に、三基皆西に向いて立っている。どちらを見ても広い原野であるが、西方の山が近く茂っている。香を立て、その煙をふり返りながら、畑中の道を屋根の見える金蓮寺の方へ急いだ。

金蓮寺は蓮田さんの生れた寺で、今は長兄が住職されている。古寂びた庫裡のお内仏の前で、兄さんに御挨拶することも出来た。そして掃き浄められた庭に出ると、庭木の中の大きい一本は泰山木で枝の先きに赤い実がついていた。

泰山木実となり寺はすが〳〵し　蓮田善明

この庭に育つ
母そばの母に並びて倶会一処西に山あり安らかに眠れ
武蔵野の土を思わすふるさとの土に帰りてななとせの秋
大阿蘇の煙の見えて馬遊び粟刈りすすむ君がふるさと

山鹿行きのバスにのって私達三人は山頭火の跡を訪ねて味取観音堂へ詣った。今度は咲野夫人が主役である。山頭火の『草木塔』『愚を守る』を熱愛した蓮田さんは、あの『鴨長明』を書く時に、二人の性格は異にするが、何かしら一つの通うたものをしきりに感じましたよと私に言つたこともあった。

ロセッティ小曲(六)

森　亮

歌ぐちの　人を泣かすは
汝が涙こもればこそよ。
胸の火の執念き希求ぞ
歌を護り　歌を立たする。

我賢しげの歌ふしは
吹上げの玉ちる水か。
思ひやり被らぬうたは
魂なくて　乾れにかれたる。

詩歌の神のアポロンは
また　狩猟の神　ひやうと射し
矢に打たれたる　汝れがする

帛裂くごときその声に
言霊の（呼べば応へて）
汝が友の　胸に貫入らむ。

「生の家」第六十一歌

その後田原坂に蓮田さんの文学碑が建てられた時、私は大洲如法寺の参禅会を主催していて欠席したので、翌三十六年九月二十三日丸山学さん御夫妻の案内で、敏子夫人と一所に、碑に詣で、再び君のふるさとの土を心して踏しめたのであった。（四十四年六月二十日、松山市鷹ノ子町大耕舎。泰山木の匂う窓にて）

蓮田善明に於ける「西欧」

神谷忠孝

たとえば『鴎外の方法』の中に次のような文章をみるとき、蓮田善明の、あの壮烈な死にかたのもつ意味がわかりかけてこないだろうか。

「戦死――にわれわれは芸術を見なければならない。戦死が詩であることを、はっきり知らなければならない。」

「戦争は唯人を殺し合ふのではない。我を殺す道であった。文学は人を唯頽廃せしめるものではない。『死ね』と我に命ずるものあり。この苛酷なる声に大いなものの意志が我に生き及ぶのである。」

「死の彼方に永遠の勝利を立て、勝利の時に死を想ひ死を希求するは、大和びとの家訓である。」

「詩は厳密には建設や希求ですらない。命令である。少くとも命令を絶対主義とする。命ぜられて、その命令の息吹きを受けてその身凍る時、透谷の所謂万物の声を発する。詩は運命的である。詩人は何人よりも詩人自ら詩人として運命づけられてあるかの如く感ずる。故に詩人は為るものでなく生れるものであると言はれる。詩人は悲劇的である。」

「詩人は悲劇的である」――蓮田善明は武人としてではなく詩人として死んだ。彼の内部には、明晰な論理性と熱情的な詩精神が渦をまき、そして彼は混沌を混沌のまま生きたのである。彼にあってはどんなイロニーも有効ではなかった。この点では、保田與重郎とは決定的な違いがあるのであって日本浪曼派の実体にせまろうとするとき、保田與重郎と蓮田善明を両極に見据えてかからなければならないのである。ロゴスとパトスのせめぎあいのさまを、蓮田善明ほど如実に示している人はいない。

『鴎外の方法』『預言と回想』『神韻の文

学」「鴨長明」「本居宣長」と読みきたって、たとえば「本居宣長に於ける『おほやけ』の精神――日本文芸学の精神のために――」（「鴎外の方法」）の中での宣長批判は、蓮田善明が学者としても一流であったことを示している。

「宣長が庶幾した『おほやけ』も、未だ因襲的な実際性の見地を脱脚し得ず、たゞ封建的な人間の心性や政治思想などに限定された結果、寧ろ合理的精神に反して、遂に独善的な自主主義に赴き、鎖国的現状維持主義に陥って、再び神秘主義的非合理主義的な態度をとるに至ったのである。いはゞ、新しい『世界』智にめざめかけた際に於ける封建時代日本人の矛盾を示す代表的な身構へである。」というところに、本居宣長をまともに理解した上での、一種の時代的制約の確認には、一流の学者だけがなし得る正しい歴史認識があると思うのである。この論文は昭和十三年六月刊の「国文学試論・第五輯」に載ったものであるが、昭和十年代に流行した国学の書の中にあって、今日もなお説得力を持ち得ている。

日本浪曼派が展開したさまざまな主張の中に、科学主義という名のもとに歪曲されてゆく古典文学の蘇生という課題があった。保田與重郎は外部から、当時の文献学的研究を抗撃していたわけだが、蓮田善明を中心とする『文芸文化』に依る国文学者たちは、内部からその戦いを展開しなければならなかった。そうした悩みは、たとえば『預言と回想』の跋に如実に示されている。

「私も数多い国文学者の一員として数へられてゐるのであるが、私の仕事は国文学でないと評するものあるを聞く。私自らも亦た所謂国文学の閑仕事でないと語ってもゐる。しかし私が敢て之を評論と言ったからとて、また世の所謂評論家たらんとしてゐると思はれるのも私の諾する所ではない。しかしそもそも国文学は今日既に幾ばくあるのであらうか。又評論も既に幾ばくあるのであらうか。」と書かねばならなかったことを思うとき、その苦衷はいかばかりであったろうか。彼にとって敵とは、科学主義によりかかっている非科学的で自由精神の欠除している、独善的鎖国主義者、狭少な自慰的日本学者たちであった。また「日本知性の構想」の中でも強調しているように、安易な国粋主義に彼は同意できなかったことは、「所謂日本主義者といったやうな人々の中には自らの意識の裡には、日本を世界の一地方国と意識してゐるくせに世界に向って逆に無理に遮二無二突っぱってゐる反動的な人々のあることも確である。彼等にとっては西欧は感情的に忌々しい国なのである」という文章にもみられる。

究極において蓮田善明が「本居宣長に於ける『おほやけ』の精神」において主張しようとしたのは、国粋主義などではなく、世界精神とでもいうべきものであったことは結論の部分に示されている。

「今日我々は、嘗て宣長が、漂泊的植民地根性的な儒仏崇拝者の、無気力怠惰な、文化的創造意力に乏しい態度に挑戦したやうに、漫然たる科学信奉者と戦ふべきことと、及び、これと相対して漫然たる亡国的自慰に耽ってゐる神秘主義的国民主義者の白昼夢を亮り去るべきことを痛感する。共に日本文化の意力を失へるものである。」

「今日吾人の西欧の道に対する態度も、『西欧』の道を己の中に含むものとして、『世界』性を『日本』のうちに見ることの発見へ進まなければならない。」

「西欧的方法は之を避くべきでなく、又之を避けて別個に日本の独自性が独立して存するのでもなく、西欧的方法を生かし使い得る立場へのはげしい努力こそ日本の運命でなければならない。」

この主張の最後の部分を読んでいて連想されるのは、日本浪曼派批判者として知られている加藤周一が、戦後一貫して主張している「雑種的文化」の論である。氏は「果して『断絶』はあるか」の中で、文学近代化の問題を解明する方向として、

「日本文学を日本に固有な伝統の枠のなかに戻そうとせず、しかし、同時にまた西洋化、近代化という不可能な計画も放棄しなければならない。この文化はいずれの方向にも、どうせ純粋にはならない。考える必要があるのは純粋にならぬものを純粋にしようとすることではなく、雑種のままで雑種のよさと強さを生みだしてゆく道を見出すことである。」

と述べている。本居宣長から解きおこして国学を肯定する立場から出された蓮田善明の結論と、「国学者は、外来の要素を無理に排除することによって、偏見を作った」（「日本的なものの概念について」）という批判的立場に立つ加藤周一の主張とが、ニュアンスのちがいはあれ、ほぼ同じような見解を示していることがわかる。加藤周一は日本浪曼派の役割を、日本の文化を純粋化しようとした運動ととらえた上での論ではあるにしても、蓮田善明がその初期において、右に述べたように柔軟な思考を展開していたことは銘記されねばなるまい。さらにいえば、国文学者と称する人の中で、蓮田善明ほど広い視野にたって日本文学の方向を示唆し得た人は稀有であったことも、この際はっきりさせておきたいと思う。何故なら、国文学のその後の歴史は、ますます蓮田善明が憂慮した方向に向っていることがいえるからである。最後に附言すれば、江藤淳が「永井荷風論」の末尾で、「荷風の倒錯した論理は『マチネ・ポエティク』と『日本浪曼派』を包含している。『日本浪曼派』の論客蓮田善明が、近代文学者中ほとんど例外的に荷風を激賞していることを忘れるわけにはいかない。」と述べているが、「マチネ・ポエティク」という中に加藤周一の問題をもあわせて考えているとすれば、炯眼のいたりというべきであろう。

『有心』寸感

桶谷秀昭

このもの狂おしいものがたりの、ようやくおわりに近づこうとするそのすこしまえのあたりで、作者はこんな一節を静かに置くように書いている。

「あの中年女のあやかしが、今は無用の抵抗なしに自分に作用してくると共に、又抵抗なしに静かに他の人々の列の中に帰って行きするのを見まもり、それが、ひたひたと自分の中にあることを感じて、それをかへりみつつ己の中に『生』が泌みるやうに熱く覚えられてくるのであった。もどかしげに火鉢の上で掌を返してみたりした。

『神は常にある。なくなりやうがないものだ。』何といふことなしに、さう呟いたりもしてみた。そしてその言葉によって満足させる何かがあった。否、今は何と言ってみてもいいといふ気もした。」

このものがたりの中には、ちょうど颱風の眼のように静かに澄んだ個所がいくつかあり、しかしなんといっても、ものがたりぜんたいはあやしく揺れているため、その静謐な眼は読者に垣間みられたとおもうと、すぐに暗雲に掻き消されてしまう、そういうときたまに訪れる安心と不安の手さぐりで闇の中にすすむような行程の一等最後にあらわれる静謐な颱風の眼が、このくだりである。

「神は常にある。なくなりやうがないものだ。」――この言葉こそ「有心」を書く作者

のモチーフであり、テーマであった。そしてモチーフでありテーマでもあるこの言葉は、作者の強いられた祈りをおもわせる。祈りはなにか絶え絶えでこころぼそい。「有心」のそうでない他の部分、ものにゆこうとして、ゆきなやむとき、作者の文体はくねくねと蛇行し、しつくどいばかりに連綿としてつづくのであるが、ここにくると言葉のリズムはみじかく、沈黙の方に吸引されるようにみえる。

作者はこの作品に、「今ものがたり」というサブ・タイトルをふっている。いや、ことわりをつけている。いうまでもないことだが、作者は「もの」を語ろうとしているのであって、小説を書こうとしていないということのことわりである。「現実感覚的な『枕草子』が古風の心で書いた『源氏物語』に、狂言が能に、檀林俳諧が蕉門俳諧に、位を異にしそれぐ〳〵『をかし』き所以である。今の小説は私には文学として（をかし）いのである。しかも古来のそれに比して小説がその「をかし」い身の程を知らないで、まじめくさってゐるところに文学国日本のものとして愚劣なところがあるのである。」（「文学の古さ」）ひたすら「もの」を語るところに日本の文学があり詩があると信じていた作者は、小説は拒否すべきものであった。

わたしはいま、蓮田善明の小説に関する論究を手もとに資料がなく、またよむ時間をもちあわさずにいるのだが、たとえば、日本の近代の文化にたいしてあれほど本質的な批評と痛恨こめた洞察をもっていた漱石についてさえ、「所謂東洋的乃至日本的などいふ謂はば要素とか本質風にとり出された非人情や則天去私のやうなもの」とあげつらうのをみれば、小説にたいする蓮田の拒絶は、根の深いものであり、「現実感覚的」という言葉にこめられた批判は、要するに、「もの」をつねに対象化し、概念的に構成することを通じてのみアプローチする西洋近代の理性にもとずく発想へのたたかいであった。その対立物であるかのように現在あらわれている、わが国の批評家や作家が新しい小説文学としてありがたがっているあの「アンチ・ロマン」にしろ、かりに蓮田善明がいまに生きていたとしたら、いまさら何を、とそっぽむくのではないかとおもう。

しかし蓮田善明は、その頃の万葉の流行にたいして、万葉をよむために荷風をよむことを青年にすすめたというから、日本の近代の小説をおしなべてファナティックに否定はしなかった。文明開化以来の日本の文化、文

蓮田善明とその死

小高根二郎

敗戦に臨んで神国日本の終焉を象徴したのは、「人間宣言」によって神国のきざはしを降り給うた今上天皇ではなく、逆にきざはしを昇って扉を閉ざして雲隠れた、影山庄平翁やわが蓮田善明であった。

内容

第一部
「豪僧の父・慈善」～「『万葉末期の人』としての家持論」に至る十七章

第二部
「応召と賜死の「大津皇子論」」～「生還の感いと『方丈記』」に至る十五章

第三部
「道世の願いと阿蘇行」～「死・それから」に至る二十章

序・三島由紀夫
年譜・清水文雄

11月刊予定

東京都千代田区神田小川町二一八
振替東京四一二三
筑摩書房

学の中に流れるあるか無きかの詩心、発想に敏感であったとおもう。島崎藤村が「破戒」を書くためにおこなった『スタディ』は、けっしてレアリズムとしての写生にとどまるものではなかった。サイモンズの「イタリヤ紀行」の中に、「われは眺め入りぬ。眺め入りつゝ運命の激しさに涕きぬ。」という詩句を発見し、「眺め入る」という日本語に移した藤村は、西欧近代人の自我に動かされながらも、そのレアリズムの「スタディ」の背後に、「眺め入る」という発想をひそませていたことによって「夜明け前」を遠く準備していたといえる。そういう事情に蓮田善明は敏感だったとおもうのである。

「有心」の主人公が阿蘇の温泉にたずさえた書物は「方丈記」とリルケの「ロダン」である。この二冊の書物の象徴する世界は、しかし、主人公の生の技術獲得のねがいからする或る予断を、中ばみたしながら、中ば締木のように主人公を苦しめる。主人公は障子を立て切ったうすくらい部屋で、「自分を思ひ出さうとして」リルケの「ロダン」にすがっていくのだが、そのあまりの生ま生ましさに、そこからはじき出され、目の前の鉄瓶の黒光りする肌にわずかに自分をおもいだそうとしたりする。「観察の対象の実体が突然に浮び上って来るまで幾度も繰返し観るといふことを学んだ」というリルケの言葉に同意しながらも、主人公はついにそこからはじき出されるのである。彼の目の前には安出来の障子がある。突然日光が障子にはげしく当り、

「障子は外側からその強い光を受けとめて、紙といふよりもその光そのもののやうに澄んで、素直に燿きながら、その直接光線を室の中にはそのままに透さずに、異った明るさの色をいちめんに室の中に放って、恰度或る印象が人の心の中に熱い何かのやうに一杯に充ちるやうに、一つの世界と仕出すのであった。」

これにつづく描写は——やはりそれは描写である——リルケの西欧的知性をわれ知らずなぞったような、「観察の対象の実体が突然に浮び上って来る」印象の分析的記述であって、「もの」を語らないのである。それに愕然とした主人公は、そして作者は、「何か苦しいばかり自分の思念の比喩を試みてゐることに気づいた。そして此の比喩が、遂に、障子の『無』に観念的に陥ちかけて、哲学者めいた、乾いた思念が目に触れてきた時、ふっと我に返ると共に、その安易な『無』の観念から自分をもぎ取らうとして苦しんだ。」と反転して書かざるをえない。何という不幸な「ものがたり」であろうか。

「有心」を書くきっかけを作者にあたえたものは、戦場の体験であり、内地に帰ってその日常に溶けこめないちぐはぐである。戦後にわたしらは、戦争の傷痕を描いた文学にかず多く接したのだが、戦争の傷痕以上のもの、近代の日本の文化感覚の爪あとに傷ついた戦争文学を知らない。「方丈記」が内容などは何もなく、ただ歎きに歎いている本だという作者の発見は、歎きの実践を出家遁世に求めて阿蘇の温泉ゆきとなるが、——いや、そう言ってしまうとこのものがたりに添わない。

わたしらは、すでに温泉にゆく途中の車中で、朝鮮人の少女のなぜかわからぬが、はげしくながく号泣しているその泣声に、何かの「絶対的な響き」を感じて、一瞬、内地の日常とのちぐはぐから解き放たれる主人公（作者）に感動したのである。ただ、作者はこのひたぶるな歎きに没入できなかった。温泉場の浴場での原始の人間のかたちへの凝視の中で錯乱するのである。この錯乱の中でまぎれもなく蓮田善明は現代の作家である。

「神は常にある。なくなりやうがないものだ。」これは作者の祈りであり、乏しき時代の詩人の歎きである。「今ものがたり」はこ

の歎きをかりそめのように響かせて中絶する。――ここであえて連想を飛躍させれば、敗戦直後のジョホールでの異常な死の行為が、絶望の中に響く反語的な生の形式の完成として、「有心」の中絶を補なっている…。しかし、もはや批評的言辞のむなしくなるときだ。

（六、三十）

「鴨長明」について

岡　保生

蓮田善明にとってその著「鴨長明」はどのような意味があったろうか。「鴨長明」が、力作であり、熱心な調査研究をふまえた労作であったことは、いうまでもない。そして、こんにちなお学問的にもその意義が失われていないことは、たとえば手近な「新潮　日本文学小辞典」（昭和四三年刊）を見ても、鴨長明の参考文献の一として、その名があげられているのを見てもわかる。いや、蓮田のこの著における独自な長明像は、あの高名な唐木順三の「中世の文学」（昭和三〇年刊）に収められた「鴨長明」の中でも、ある部分では重ね合わせられているといってもいいほど、はっきりと光彩を放って生きつづけているではないか。こう見てくると、蓮田の「鴨長明」の意義はもはや不動のものであり、著者の没後二十五年の歳月を経たとはいえ、その著作は古典に列するというべきだろう。そういう古典的な本著について、あえてその意味を問いなおそうとするのは、およそ愚挙に属する。だが、私はあえてそれをこころみようと思う。そして、このことはたんなる好事ではないと信じている。

蓮田の「鴨長明」に描かれた長明の激越に着目し、その激越性に蓮田その人を感知して、長明＝蓮田なる両者の親近性を指摘せられたのは、小高根二郎氏であった。同氏の「詩人、その生涯と運命」（昭和四〇年刊）には蓮田の「鴨長明」にふれた一節があり、そこにはこのような指摘のほか、この著執筆当時の蓮田の心情が精細にあとづけられている。さらに氏は「蓮田善明とその死」29以降において、蓮田の手紙その他を引用し、より鮮明に当時の蓮田を描いておられる。このような小高根氏の研究を参照しつつ、あらためて蓮田の「鴨長明」を読んでみると、これは遠い昔の文学者の伝記でもなければ、評論、研究でもない。研究という操作を借りての私小説とさえも言えるものではないか、という気がするのである。この著を一見すればわかるように、蓮田は叙述の間にしばしば自身の肉声をもって読者に語りかけている。小高根氏が指摘せられた第一章はいうまでもないが、「文芸文化」昭和十六年五月号所載の第二回分のところでも、蓮田は、いわば長明をそっちのけにして、青春のデカダン論を展開している。

「直情が身内で湧きたぎってゐるその青春がこの肉体といふ慾身を持て扱ひかねて狂ひ廻ってゐる苦悩である。

さういふ苦悩に於ては直情の正直といふものが肉体を用役すればするほど却って志と違うて肉体は真直にその慾の直道をとる。精神の清らかな直情が肉体的直行として汚濁のデカダンとなるのである。その汚濁を青春の直情はその直情の故にこそ何としても統御できない。汚濁と知りつつ内面には己れの「直ほなるを愛す」る熱情に憑かれてゐるためにどうどうめぐりをし、混迷し、苦悩のみはげしくて、生にも堪へ難てになる。」

という調子である。これは一例だが、こういう、いわば筆者の内面独白とも見られる叙述は、各章に見られる。そして、実はこのスタイルが、この著の魅力ともなっているのである。スタイルといえば、蓮田が「鴨長明」の第一回を発表した「文芸文化」四月号の編集後記で、「研究論文などといふものはすこしも面白くない。大きらひだ。国文学といふ学問をもっと高い童話へとり戻さねばならない。」と自分で書きとめていたことも思い出される。「鴨長明」は、まさしくその実践にほかならなかった。

ところで、蓮田はこの著で長明を「恐らくは日本の詩人の中でも、最も小さな最も狭い最も浅い、又最も耻しいものであったであらう」と見ている。そして、長明の和歌の低調さを、くりかえし説いている。ことに歌壇登場後のそれを完膚なきまでにやっつけている。たしかに蓮田を待たずとも、長明の歌は、私などが読んでもおもしろくない。初期の歌にしても、そんなにいいとは思えない。そして、長明の散文作品としては、周知のように、「無名抄」「方丈記」「発心集」という三篇があるが、これらが「源氏物語」のような大古典とくらべられる存在ではないこともいまさらいう必要はない。つまり、所詮は二流の詩人なり作家なりでしかなかった、と思われる長明に、なぜ蓮田がこうも打ちこんでいったのか、ということである。これは小高根氏が詳述せられたのにしたがって、蓮田が戦地から帰還の途中、たまたま手にした「方丈記」から長明に心ひかれ、やがて長明の激越への共感からこの著が生まれたのだと見ることによって説明されよう。だが、従来の国文学の研究において長明の伝記は必ずしも明白になっていたとはいえない。彼の言動そのものすべて激越だけでわりきることはできない。このことはおそらく蓮田にとっても自明であったろう。にもかかわらず、蓮田は激越者長明というイメージを作りあげ、逆にこのイメージにもとづいて彼の一々の言動を照らし出そうとした。強引といえば強引である。だが、蓮田からすれば、まさにやむにやまれぬ決意に立ってのことだった。

激越者たる蓮田善明が、戦場での体験を経たのち、祖国日本に帰還して、じかに社会、世相にふれ、その激越の情はまことにただならぬものがあったろうことは、想像にかたくない。彼は、「鴨長明」の中で、しばしば「世」といい「時代」をいっている。その「世」あるいは「時代」から出離した中世の隠者長明を思うとき、ここに彼の共感は高鳴り、長明に自身の反映を見いだしたのではなかったろうか。

蓮田は、「鴨長明」で、しばしば詩人長明の貧寒をいい、卑小をいっている。それはとりもなおさず蓮田みずからの文学者としての自己反省ではなかったか。しかも蓮田は、また長明の姿に「純粋といふもの、弱さと消極さとはげしさ」を発見する。この「世」において「純粋といふもの」がいかに稀少な存在であるか、ということを蓮田は身にしみて知っていたのである。蓮田の「鴨長明」が、いわゆる国文学の研究論文とは異なる熱っぽい魅力をもって読者に迫ってくるのは、その行間から蓮田のこのような呼吸づかいが聞えるからである。この著を蓮田の私小説と見るのは、私のひがめであろうか。

というものの、これが国文学者蓮田善明の著作であることはことわるまでもない。たとえば、長明の秘曲づくしの事件を、従来の築瀬一雄氏らの文治二年長明三十歳前後の伊勢旅行の前に起ったとする説を斥けて、もっと後年のことだと考証している点など、さすがだと思わせる。「考証は独断がちの私の特に拙とするところ」と蓮田はいうが、決してそうではない。だが、蓮田はたしかにこの著で「考証」などにはかかわりたくなかったので

あろう。それほど彼の激越は、大きく、また強かったのである。そしてその激越はとくに何物に対して噴出しているのか。もはや現代に生きていないひからびた国文学などではない。現代日本の文芸そのものにであった。蓮田はこの著の終章近くで、「方丈記」冒頭の名文を引いていう。「詩人が「かたち」失へる時代の発想であり、また、言ふべき言葉（かたち）もなく、ゑがくべき意匠もなく、ただ、ああとなげいてあるのみの、徒労の中に徒労を流してゐるそのなげきの発想と聞える。それが美しいのである。実は彼のこの生が徒労よりほかにない時代の完璧な徒労の故に、この時代の最も美しいひびきをもってゐるのである。」

ここに「国士」蓮田の敬虔ともいうべき祈りが見てとれるであろう。以後の彼のコースはすでに決定づけられていたのである。

『神韻の文学』管見

塚本康彦

私の勤め先はもう半歳以上、授業は一切ヌキの紛争が続いており、私自身、学長・学部長などいわゆる首脳部を除けば最も激務と云われる学生部の長ではないけれどとにかく委員なのだ。一般教員達も非常事態の動員を免れ得ず、各種臨時の役目に従わされているわけだが、彼等の間では、枯れきった巨木、朽みきった怪獣がどうと倒れるがごとき、大学の崩壊の光景と時点が盛んに想像されているらしい。しかし私には右の不安・恐怖をゆっくり考える余裕すら与えられていない、それ程目先のことに追いまくれる毎日なのである。

学生達が昼間組んだバリケードを夜の闇と降り始めた雨の中で解く。テロで血だらけになった負傷者を病院に運ぶ。諸セクトの猛々しく、暁方に及ぶ執拗な抗議に我ながらぶざまな言訳。怒濤さながらに荒くて速いデモに対する遠くからの無力な監視――こういった日々の連続で、人はなお古典に親しめるか、まともな文章を書けるのだろうか。

誰にしたって無理、と私が言いきれないのは、故蓮田善明の仕事ぶりを僅かでも知っているからである。「バルカノン」二十二号は、蓮田がその渦巻の中心であった「文化文芸」を特集しているが、そこに所収の簡便な年表によれば、昭和十三年十月蓮田歩兵少尉応召、十五年十二月帰還、十八年十月同中尉再応召、そしていかにも痛ましい例の終戦時の自決といった次第で、彼の文学的生涯がまさに激動のうちに送られたことが判る。しかも彼の諸作品は応召前後の時日にだけ書かれたのではない、それらは文字どおり砲煙弾雨の合間、塹壕の中、蠟燭の灯をたよりにしても書かれたのであった。彼だったら私の現在の逆境？なぞそれこそ屁とも思わず書きまくるだろう、いやそもそも当今の紛争に対して、彼の熱血は教師としての身をいかなる行動に駆るであろうか。私事にべったり付き過ぎたようだが、蓮田に関する限りこれは是非とも述べておきたかったことである。

さて小高根氏の大労作に毎月接した本誌の読者にはこの断わりは不要かもしれないけれど、蓮田があの戦時下の十余年間、何かに憑かれたみたいに書き続けた作品群を貫流するものは、通念に反して「戦時中のこちたき指導理論や国家総力戦の功利的な目的意識から、あえかな日本の古典美を守る」意志と情熱に他ならなかった。上の括弧内の文句は、かの三島由紀夫が『私の遍歴時代』の冒頭、己れの文学的出発点がそこに求められる『文芸文化』の反時代的な性格をいみじくも規定した処に見られ、むろん蓮田の仕事の形容として剴切きわまりないものだと私は思っている。前述の「バルカノン」誌上、篤実な日本

浪曼派研究家神谷忠孝氏は、蓮田の『預言と回想』を溢れるばかりの愛情をもって礼讃した。私はここでは、評論集として『預言』と好一対を成し、その内容は主として昭和十六年から十七年にかけて物されたエッセイ二十七篇を収める『神韻の文学』について、今さっきの三島の性格づけの線に添って、ほんのいささか所感を記してみたい。

こういう立場の私が一巻読み終えてまず気づくのは、「大東亜戦争詩歌」に向けての、実に苛立たし気に繰り返される反感・侮蔑である。枚挙に遑ないけれども例えば、「私にはあの狂噪耳を聾し、己の音のみを響かせて他の音を拒絶しようとしてゐる支那楽器を想起させられてならない。」「あの競って石油缶でも敲くやうな言葉は何事であらう。それは悠遠なやまとうたのしらべを知らなくなってしまった近代文学の残骸といふを以て足りる。」などの文章が、しかもそれぞれ「羽衣を祓る」「たわやめぶり」といとも優美に題された作の中に記されたことに、通念に毒された手合はすべからく驚いていいだろう。蓮田は確かに筆を断つべき時に断たなかった、あまりにも書き過ぎたと言うべきかもしれない。確かに彼が書いた作品は悉く反戦の思想に貫かれていず、対侵略・殺戮の歯止めとはなり得なかった。さりながらそのことと、蓮田が粗野・醜陋として斥け、擁護されねばならぬ美として認めたのは何かといったこととは、あくまできちんと区別すべきだろうと私は考える。

ところで蓮田にとって蔑むべき戦争歌は「万葉調短歌」と同義であった。彼は異常なばかりにアララギ派を、茂吉を非難した。「あれは一種のリアリズムの文学、自然主義の文学の一選にすぎないもので、怪奇な文学である。」（古風の保守）「それはその全身を養って香芬あらしめるのでなく体軀のみ重厚で、痴呆に見える栄養主義ともいふべきものである。」（養生の文学）などという烈しく攻撃的な文章を『神韻の文学』は少なからず含む。もちろんこの評価は過激で偏頗であろう、茂吉に対しては何か私怨宿怨でも抱かれていたのかと思われぬでもない。けれどもここから汲み取ってもらいたいのは、彼蓮田がいかに生のままの素朴、濾過・屈曲を経ない直情、尊大と重なる自負、優しさ哀れさを欠く気概といった類のものに鋭く反発していたか、である。

蓮田が酷愛したのは、これらと正反対の、すなわち洗練巧緻の限りを尽して辛うじて約束されるはかない虚構の美、含羞に翳り自虐にも陥りかねまじき繊細な心情、不遇のうちの矢道、生き延びたとしてもそれはうらみつらみの生涯――幾らでも並べられようけれど要するに正・陽に対する負・陰の側面を多分に帯びた対象を彼は深く好んだのであった。伊東静雄記す当著の序には「この書中に、著者の果断の勇気と、痛切の情とを看取る読者のために」云々と見える。「痛切の情」は私が今述べたことからいいだろう、「果断の勇気」にしても、それは決して粗暴・強圧・高慢に与するものには非ず、これらを徹底的に憎み、倶に天を戴かずとするところから発したものであったのだ。

事実『神韻』において必死懸命に頌せられるのは、かの保田與重郎が熱っぽく謳いもした、大津皇子の痛惨な死であり（青春の詩宗）、そしてまたその「大津皇子が殉ずることによって、うち建てられた青春の道の悲しみを知る」志貴皇子なのである（志貴皇子）。周知のごとく業平は藤原氏の専権圧政下、遁れて好色と作歌にいのちを燃やしたわけだが、この「みやびにあくがれた精霊たちのなげき」（しのぶのみだれ）への共感は書中ここかしこに吹き零れる。私は曾て著者の別の名著『鴨長明』を読んで、狂熱と自嘲の塊みたいに描かれた長明像に感嘆し、その行間か

ら太宰の顔が浮かんでくる旨述べたのだったけれど、当著からも次のような叙述を並べて引用しておきたい。「長明は和泉式部や曽根好忠、源俊頼の如き不羈放埒の徒の中に魂をみてゐた。（中略）放埒しなければ、美の発想が出来なくなってきてゐた中世であったのである。」（明治神宮菖蒲田拝観）「太宰氏の場合は一見寧ろ放漫に見え、うぶにてれくさがった弁解を繰返してゐるだけに見えるが実に真に文学者らしい十分に生のいたはりに充ちた、その点で感動を（好ましい幼さで）蔵してゐるのである。（養生の文学）

現代文学でいえば、蓮田の敬愛は太宰の他、歌では勇、詩の静雄、小説では荷風、春夫などいわばロマン的な芸術派に専ら捧げられている。特に「永井荷風」は直前の「森鴎外」と続けて読まれるなら、福沢諭吉、鴎外、荷風における衛生の観念が無視から啓蒙へ、更にはこのわたを賞する趣味までに成熟した筋道、ひいては文化一般の変質の軌跡を彼の藤ば鮮かに示す力篇である。如上の敬愛の念は村嫌いを必然的に導くのであるが、ここまで述べれば、蓮田善明の文学の輪郭と本質は、ほぼ察せられよう。前に戻って言えば、彼はこれらの作品をあの緊迫騒然たる状況において書いたのだった。それとも、彼の特異な文学的個性は激しい季節に逢ったからこそ見事に開花したのだ、と考えるべきなのであろうか。

「まどひ」の美について

吉本青司

いきどほりつつ渡りしならむ
悲しみつつ行きしならむ

聖戦、という大義名分が、倭寇の非命に了ることを、蓮田善明は予知していた。友人に託して妻子のもとに送り届けられた「陣中日記」は、最初の戦場に馳せた日の彼の遺言であった。そして、苦しい戦地にあって

この行軍中、つねに詩を思ふ

と、夢想しつづけたその詩のために殉じた、彼の遺骨でもあった。たとえ心無く倭寇の名を着せられたとしても、このように「心に花を」もち得た詩人は、歴史という時間宇宙の光芒なのである。

私が、あわただしい旅の途次、熊本の田原坂公園に、蓮田善明碑を訪ねたのは、三年ほど前の三月、まだ黄枯れの草に、しとどの雨の降る日であった。

一人の旅の気楽さに、バスの車掌から教えられた、名も知らぬ停留所に降りたつと、その近くの茶屋に駆けこんで、善明碑の在りかをきいてみた。七十歳前後かと思う老夫婦は、善明の名も碑のことも全く知らなかった。でも、田原坂公園の道を教えてくれ、親切に傘まで貸してもらったので、出かけようとしたところへ、上品な中年の女性が、買いものに来て、「それならよく知っています。ちょうど私の家は、公園の途中にありますから、そこまで御案内しましょう。」といってくれた。

小雨の中を婦人と一緒に歩きながら、やはりこの女性は、有縁の人であることがわかった。御主人は、熊本の雑誌「日本談義」にも寄稿したことのある人で、同人の方々とも親しかったようだが、惜しくも戦死されたとのことである。

「蓮田さんの奥さまとは、お親しくしていただき、時々お目にかかります。」と、なつかしさをこめた婦人の言葉に、私は旧知にめぐり会ったような感銘を覚えたことである。戦死された御主人の名は、たしか作田哲さんときいた。

そのひとと別れた長い赤土道は、昔の道のようにひっそりとして寂しかった。教えられた巡路をたどると、西南の役の遺跡があり、それを少し下ったところに、あこがれの善明碑が雨に濡れて立っていた。

ふるさとの
駅におりたち
眺めたる
かの薄紅葉
忘らえなくに
　　千戈の巷にありて

見事に彫られた自然石の碑のうしろに、土佐のヤマモモに似た木が一と本立ち、その向う小雨の中に、青く木の葉山が、浮かんでいた。「かの薄紅葉」というのは、この山の秋の眺めではなかったろうか。そう想うと、ひとしおに碑前をたち去りがたい思いがするのであった。

碑背に記された建立の趣意文の、「その性の清潔と学風の高邁さはまさに秀達の一語に尽きよう」という行句が、私の心に強く灼きついた。

「陣中日記」に「敏子の夢みる」と何度も書き遺したその夫人を、植木町にお訪ねすることをも考えたが、気ぜわしい旅を雨に濡れてするのでは、かえって御迷惑と、天草に向かって立つのであった。

「勝てば官軍、負ければ賊軍」とは、西南役の西郷隆盛の敗戦を風刺した、庶民の批判精神である。善明が、陣中日記の主題としたものは、このような倭寇の精神であった。

たしかに、大東亜解放戦争は、大義名分において聖戦であったがその敗北の現実において、倭寇であった。二律背反の相である。

善明は、陣中日記の四月十三日、安慶に向かう船の中で、宮崎世竜少尉から、和寇の話をきく。和寇が八幡大菩薩の旗を立てゝ重慶まで遡ったこと。彼らは悪事というようなことを企んでしたのでなく、これを歓待するものを害せず、抗うものを害したということ。

渡支前の記念撮影　左から敏子。病中の晶一。善明と太二。一昭和14年4月植木師井家にて

宮崎からこの話をきいたあと、善明は「かの倭寇に英雄を感じ、詩の行為を感ず。他日機あらば、倭寇の事よく、調べて、詩を書きたい。」と述べている。そして、その後に記されたのが詩「倭寇賦」である。

彼らは拗ねたる大和の民なりき
彼らは淫り無き海を渡り
大いなる陸を望みて
情寂びしく遠征せる民なりき

これは、時間宇宙の目を通してみた、聖戦の嘆きであった。そしてそれは敗北者への警告でもあった。理想を失ったものは、もはや倭寇である。「心に花をもちたい」と念じ、「轟々と、帰郷の心あり、乃生は一線に出たし。」と思い乱れるこころは、民族の詩を防衛しようとする兵士の真実の叫びであった。

四月十五日に記された詩「燕に寄す」は、民族の文化を守ろうとするものの悲壮な心情を、ありのままに伝えている。

心思郷に倒れんとす、燕あり一羽
「心思郷に倒れんとす」　このような、めめしさ。それが善明の本質では無かったか。

しばらく彼の著書に目を移してみよう。評価の高い「鴎外の方法」は別として、学者としての本領を発揮したのは「古事学抄」であろう。その中心となる論文は「「天地初発之時」について」であるが、これは彼の詩人的直感を基底にした卓論である。試みに古事記を朗読してみれば、「初発」を「ハジメ」と訓まなければならない所縁がわかるような気がする。詩の認識とは、やはりそのようなものであろう。民族の文化の防衛は、その人の生き方とその結果する、文化そのものに依ってしなければならないのである。

いま一つ。それは「神韻の文学」である。彼の意志の姿勢を示す「神韻」は、いくらか今では異相に聞こえるかも知れない。しかしそれに盛られたものは、時務的な意匠を取り去って、なお深い美の宇宙である。

気長く落ちついた読者なら、時務論を措いても、その底に流れつづける詩と真実を見落すことはないだろう。

彼はその中で言っている。「私どもの文学は誘はれ、まどふ者たち（古典の詩人たち）の上に、すぎてゆく波紋のやうに、ふっと乗ってきてかぎりなく美しいあとを残してまた自ら拭って行った。「誘はれ」は、もちろん伊東静雄の詩のこだまである。

この「まどふ者」という言葉は、前記した善明の思い乱れる姿を想起させる。彼もまたまどふ者たちの仲間なのである。

「神韻の文学」の中で指を折ったのは、「たわやめぶり」「しのぶのみだれ」そして最後に「雲の意匠」であった。「雲の意匠」はまた時を変えて触れてみたい。

ここでは「たわやめぶり」と「しのぶのみだれ」に述べた「まどひ」の美学が、彼の本質であったことで結んでおきたい。

善明はいう、「総じて文芸は文弱なるものである。はかなく、あだなるものである。はかなく、あだなるものとして感傷的なものである。」

戦中の日記に、「心に花をもちたい」「心思郷に倒れんとす」「敏子の夢をみた」

われ、ふなべりにさし倚りて
涙ほとほと堪へがたし

と、真直ぐに書き留める、この真情こそ、まさに「たわやめぶり」である。

剣刀いよよ研ぐべし古ゆ清けく負ひて来にしその名ぞ

と歌った家持の「ますらをぶり」とは、同根にして異花と言えるだろう。

伊勢物語にふれて「まどひ」の美学を述べた「しのぶのみだれ」は、短文ながら美しく独創的で、集中の傑作である。詩人の本質に発するエコーである。

善明が「行軍中、つねに死を思う」と言ったとき、その「詩」は、生と死の「まどひ」を意味した。そしてその故にこそ、彼の死は壮烈であり得たのである。

遺稿「をらびうた」のこと

清水文雄

蓮田善明君が第二次召集をうけたのは、昭和十八年十月二十五日であった。翌二十六日東京出発、二十九日熊本歩兵第十三聯隊入隊、間に二日おいて十一月一日にはもう門司港出船といふ、まことに慌しい数日であった。途中、高雄・阿媽港などを経て、十一月二十四日朝、昭南（シンガポール）に上陸した。この昭南には、十二月十六日再び乗船して前線に赴くまで駐留したことになる。

昭南上陸の翌日、つまり十一月二十五日に「御召しをうけて一月目の今朝、思ひがけない便を得てこの手紙を昭南から送ることが出来ることになった」といふ書き出しで、長い手紙を敏子夫人に出した。それには、東京出発以来の概況、家事の処置についての指示や家族の健康上の注意などがこまごまと書かれてゐる。その中で、貨物輸送の命をうけて一日早く熊本を出発したこと、その間に余暇を見て原稿を整理し、それらを四箇の小包にして門司から郵送したことなどを報じてゐる。その小包の中に、本誌に掲載された「有心」の草稿のほか、「講談社の分と第一書房の分」（注、何れも未刊）「必ずしも本にせずともよし、戦死でもしたら出してくれてもいい」として「歌意考」と題する草稿も入ってゐた。「その他中支に行ってゐた時のノートや原稿」として加へられたものは、目下本誌連載中の「陣中日記」を含む諸稿ではなかったかと思はれる。第一次応召で中支戦線にあった頃のものをわざわざ携へて、「熊本でよみ返すつもりであった」といってゐる所には、並々ならぬ覚悟のほどをうかがはせるものがある。

この夫人あての書信のあとに、「諸友、今井君へ」として、次のやうに記されてゐる。

出立及びその後大変御厚情をわづらはし多謝。小生健在なり。同封の歌稿は今日までのもの。手紙のつもりでよんでもらひたし。古歌ばかりつくってゐるが、仲々むつかしい。しかしたのしみである。こんな境遇も僕だけのうけうるものか。

「同封の原稿」とあるのは、「文芸文化」終刊号（昭和十九年八月）に掲載された「おらびうた」（長歌十四首・短歌百八十六首）のことである。「今日まで」の「今日」は、「思ひがけない便を得」た十一月二十五日をさす。そしてこの夫人への手紙と歌稿は、熊本西部第十六部隊丸山隊丸山学中尉あてに送られたもので、当の丸山中尉あてにも別に手紙が添へられ、「この中の手紙は東京へ送ってくれたまへ」と、まだ在京中の夫人への転送を依頼している。かういふ書信や歌稿をとりまとめて送ることができたのは、検閲を要しない幸便が得られたからであらう。

その後、池田勉・栗山理一・私の三人あてに、十二月十二日付の葉書が届いた。出船数日前の昭南からのもので、それには、「佐藤春夫さんがジャバにゐられるので、或は近く会へるかもしれぬとたのしんでゐるが、或は行き違ひになったりしはしないかと案じてゐる」と書かれてゐた。その佐藤氏とスラバヤの朝日新聞支局の一室で会ひ得た時の情況は、前記の『文芸文化』終刊号に載った佐藤氏の「遭遇——スラバヤに於ける蓮田善明君」に活写されてゐる。詳しいことは同誌にゆづるが、その末尾の一節は、この小文の題目にも関はるので、やや長文にわたるが、左に抄出することを許されたい。

蓮田氏は僕から受取つた時計（注、夜光時計、佐藤氏が支那事変の溯江部隊に従軍した折、芳賀檀氏から記念に贈られた品であるが、ここで改めて蓮田君に転送されたのである）を手頸に巻き終るとやをら立つて軍刀にそへて外して置いてあつた図嚢に何やらさぐつてゐたが取出したのは黒いクロス表紙の懐中冊子であつた。遠征の途すがらものした詠草であるといふが見ればところどころやや長い詞書のあるものもある。その冊子を僕に預けようと申出て蓮田氏が言ふには、ここではかうしてうき世を外ですが暮の二十八日といへば、家郷ではさぞてんてこまひでせう。今年も余日幾何もありませんからこの冊子も年とともに新らしいものに変へようと新らしいのを用意して来ました。それにつけてもこれが魚腹に葬られるのを悦れますから、御保存を願ひませう。これをお持ち帰り願って同人の清水にでも見せて下さい、さうして蓮田は欣然勇躍して前線に赴いたとお伝へください。といひながら窓外にうつろふ日かげを見てゐたが時計の三時半になつてゐるのを見てから、そろそろ帰つて出発の用意でもしませうか、宿は市外の営舎に兵と一緒ですが、この地にもあと二時間ばかりとなりましたから、と挙手の礼をすると、壁にもたせかけた軍刀を腰間に下げて玄関口に出た。僕が君の武運長久を祈ると、君は僕の平安を祝して再び挙手して別れ去つた。後を見送つてゐると七八歩元気よく踏み出してから三度目に挙手したのはあたりにゐた富永氏（注、支局長）が君を見かけて礼を送つたのに答へたものらしかつた。

文中「二十八日」とあるのは佐藤氏の誤記であらう。氏自身も前の方で「たしか暮の二十九日であつたかとおぼえてゐる」といつてをり蓮田君が託した「懐中冊子」にも、あとで掲げるやうに「二十九日」と明記されてゐるからである。

さて、上記のやうな経緯で蓮田君が佐藤氏に託したものは、「をらびうた」（ママ）と題された草稿で、さきには「黒いクロス表紙」とあつたが、実は空色のクロス装の、縦一三・七センチ、横一〇・八センチの小冊子であつた。その背に「備忘　蓮田善明」と活字体の金文字が押されたもので、この種の手帳をかれは応召前から愛用してゐたが、訳をきくと熊本在住の製本を業とする旧友から贈られた手づくりの品だといふことだつた。『文芸文化』に載つた「おらびうた」は、この「をらびうた」の十一月二十五日までの詠草の中から抄写されたものである。抄出に際して、歌順を変へたり、辞句を訂正したりしてゐるほか、草稿に明記された月日や地名は、軍規を慮つてかすべてぼかされてゐる。

「をらびうた」には、「おらびうた」を送つた日の翌日から十二月二十九日までの詠草も含まれるわけで、総計すると長歌三十一首・短歌三百八十二首のほか、詩四篇を数へることができる。訂正加除の跡著しく、まさしく草稿の様相を呈してゐる。この遺稿「をらびうた」は、第一次応召時の「陣中日記」の続篇にも当る性格のもので、第二次応召で東京から熊本へ帰る途次や、南方に向ふ船内や上陸地での感懐を抒べた歌日記である。歌はことさら古体をまねびとつて、おのづから「みやび」の極致に輝く独自の格調をなしてゐる。「をらびうた」全文は、「陣中日記」のあとをうけて本誌に掲載させてもらふことになつてゐるが、ここには、佐藤氏にこの手帳を手渡す前に寸暇を得て詠んだと思はれる短歌二首とその前文、並びに迎年の歌一首を掲げるにとどめ、詳細は後日にゆづることにしたい。

二十九日、マランより帰り来て迎へたまへる佐藤春夫氏にあふ、この二年、年毎に年送る近き日にはおとづれしを、今年

今日は奇しくここに相会ひまつる、またなきふることびとと会ひてさき路へ行くに、思ふことは八汐路のしくしくに、また極まりては唯たのしさのほかいふべきもなし。今夜出でたゝば迎年は海上なるべきも、或は敵情にては年を迎へ得べきかも期しがたければ、この手帖を托して、ふる年のふるうた一度ここに終らんとす、

○

またと世になきうたびとといくさ路のさき路に今日し相会へるかも

紀の国の白良の浜の白つゝじかざして君はまさきくありませ

豫てよめる迎年のうた

あたらしき年のはじめに八汐路の汐にかづきてみそぎせむ我

（四四・七・一）

追憶

父の死をめぐつて

蓮田晶一

父の事を思い出すと全くたまらない気になるので、なるべく思い出さぬように押えてきた。しかし父の享年に近ついた今でも、何かにつけて父を思い出さぬわけにはいかない。戦後はまだ終らない、という言葉が一時流行ったが、私に限っていえば全くその通りで、これからも変りないだろう。

最後の応召の父を、東京駅で送った昭和十八年秋迄の思い出は、先にバルカノン第二十二輯、文芸文化特輯号にあらかた書き尽したので、今回は触れない。

終戦のかなり前頃から父の便りは跡絶えていたが、戦後暫くたつと、隣近所の留守宅へは外地からの便りがぼつぼつ届きだした。やがて我が家の向う三軒両隣りに限ってみても、左隣りの呉服屋はニューギニアから、右隣りの獣医は満洲から、右向いの肥料屋はマレーから、次々と復員してきた。そして真向いの、母の長兄で実に優しかった歯科医の伯父は、マニラで戦死の公報が届いてきた。

父を東京駅で送った時は、もう会えないという諦観に全身を縛られたような気になっていたのだが、次々と帰還してくる兵士たちをみると、やはり父も帰ってくるのではないかという期待と黄泉の国から冷い水を浴びせられるような不安とが、交互に重なり合って湧いてくるのだった。

その頃未帰還の兵士を待つ家庭で、巫女の予言を聞くことが流行った。朝晩、父の蔭膳を欠かさなかった母も、私の留守に巫女を迎えて。、父は達者と、お告げがあった旨を語った。しかし家中、何となく晴れない気持だった。

父と同じ方面に派遣されて帰還した人があると聞くと、母は早々に尋ねていった。しかし父の消息をはっきり話してくれる人はいなかった。当時、私達一家眷属を除いて、父の死は狭い町中に知れ渡っていたらしい。黙っていてくれた人達の心遣いを、私は今も有難く思っている。

そんな庇立はいつ迄も続かなかった。昭和二十一年六月、役場からです、との声で玄関に出ると、役場の人の影はなくて、上框の上にハトロン紙の封筒に入った公報が、そっと置いてあった。（ジョホールバールで昭和二十年八月二十日死亡）と記してあった。

公報の届いた翌々日、肩章を外した軍服の若い痩せた兵士が訪ねてみえた。昨日天草の実家に復員し、すぐその足でたずねてきたとのことで、父の当番兵をしていた方だった。父の死の前日、父のはめていた腕時計を貰ったのを、遺族の方にと思い届けにきたと、重い口で語られた。遺骨も嚢中深く忍ばせていたが、シンガポールで復員船への乗船まぎわに、敵兵に粗末にされそうになり、葬ってきたと、ぽつりぽつり話された。

父の死因については、何も語らず、遺骸は

部下一同で丁寧に茶毘にふしたとだけ語られた。夕暮近くまでかかってそれだけの事を語ると、来た時と同様に静かに帰っていった。全く寡黙な、父好みの素朴な人だった。その人に染みついた南方の野戦の匂いから、父の姿を思ひ、疲れた体で早速に訪ねて下さった好意をとても嬉しく思った。

父の死が自決だと教えられたのは、葬式から二た月たって、広島から父の心友清水文雄先生がみえた時だったと思う。

自決の時握りしめていた左の拳をふりほどいてみると、小さい紙片に、国に遺した妻子のことを思わぬでもないが、これが自分の行く道だから、という意味のことがしたためてあったと、その時耳にした。

斃れている父の姿が目にみえるようでたまらなかった。それ迄は父を射った敵が無性に憎かったが、自決と聞いてからはどうにも諦めのつかない胸の内になった。盲になっても犠になってもいいから、どうして帰還してくれなかったかと憾んだ。馬鹿なことをしてくれたなどと思った事は決してない。そんな批判がましい気持の余裕はなかった。帰ってきて欲しかった。そして、かねがね父は二度と帰ってはこないのではないかと恐れていた気持が、以心伝心に遠く父へ伝わり、ただでさえその気の父に拍車をかけたのではないかと後悔した。父がそのために殉じた日本帝国、死ぬ覚悟を培かった国文学に激しい憎悪を感じた。父の蔵書など棄てて終いたかった。当時を思い出すと、ぞっとすることばかりである。耻かしい日々があった。

その頃、何よりの私達の支えになってくれたのは、医師である母方の祖父だった。息子六人、娘四人のうち、長男と四男は戦死し、長女の婿（つまり私の父）と三女の婿を戦争のために失っていた。六十四才の老令なのに、野良仕事に出る前の早朝からつめかける患者を温く診て、その合間に一里も、二里も遠方まで自転車で往診にでかけていた。夕食を摂るのも、夜食と呼ぶのがふさわしい程、遅く独りでであった。私の父をはじめ、その兄弟が鋭角的で狷介な傾向があるのに反して、その祖父は柔和で、いい意味の合理性があり、足が地についていた。

この祖父の勤勉な態度と、美髯をたくわえ偉丈夫という表現にぴったりの六尺近い体軀には、父とは別の立派さ、逞しさがあり、私は心から敬愛していた。

昭和二十五年春、肋膜炎で臥していた私も含めて午前の診療を終り、居間に戻りかけた所で祖父は

「残念、残念」と二た言叫んで急逝した。

それから永い十年が経った。昭和三十五年に、沢山の方々の御蔭で西南の役の古戦場田原坂公園に父の歌碑が建てられた。

「ふるさとの駅に下り立ちながめたるかの薄紅葉忘らえなくに」という碑面には、単に父だけでなく、この地から出て異境で戦没された方々全ての望郷の念が籠っているのが感じられた。物言えない戦没者の声が、海を渡り、田原坂の下から、森の中から、歌碑のもとへ集まってくるのが聞えるようだった。

戦死はもとより、自決にせよひとえに戦争のために斃れたことに変りはない。家庭に帰る道を拒絶した父に拘泥していた心がとけ、父の不幸を素直に悼む気持で一杯になった。

その二年後、船でアラスカの近く迄行った。

八月初めであったが、千島列島が見えなくなる頃から、日増しに空は低く重くなり、海は冷くくろずみ、昼夜霧がたちこめるようになった。横浜を出て七日目の正午頃、船のサイレンがけたたましく霧を裂き、何事かと甲板に駆け上った。船は丁度アッツ島の沖合を過ぎる所だった。サイレンの音は、玉砕された英霊への奏鳴だった。黝い寒い海の、霧の中に浮んだアッツ島の寂寥さは、一度みたら決して忘れることのできない風景である。この沖を通るときサイレンを鳴らすきまりですと語った船長に、故国を離れて暮す人同士の温みを感じた。そしてアッツ島玉砕の翌朝、（忠誠心とみやび）という題でラジオから流れた、たかぶった父の声を思い出しながら、こんなに遠く迄故国を離れて眠られる方々に心から黙祷をささげた。

父の著「神韻の文学」の冒頭に明治神宮の菖蒲園を拝観した折りの一章がある。その際、小学生の私も伴ってくれた。戦争も慌しくなってきた頃だった。深い森に囲まれた蒼い池に、鮮かに散在する菖蒲の一莖、一莖を父は丹念に楽しげに眺めていた。

戦後、疏開いらい始めて上京した時、結婚したてに妻と上京した時、そして一昨年母を連れて上京した時、今は開放された菖蒲園に自然に足が向いた。花が開いていない時もあり、訪れる人も多かったが、神宮の森と、池と、あずまやは、父の愛したまゝの風景であり、心が和むものがあった。

風景に限らず、仏像でも、音楽でも、文学でも、父が好きだったのは、私も好きであり、又、和やかな日本人の好きなものであろうと思った。

＊　＊　＊

桜井忠温氏と蓮田善明

池田　勉

ジョホールバールにおける蓮田の壮烈な死の知らせを、ふかく悲しんでから、二年ばかりの歳月が経った後のことであっただろうか。私は、はしなくも、蓮田の戦地における死が、国家から戦死者としての取扱いを受けていない事実を伝え聞いて、知った。それは全く思ってもみないことだった。私はうかつだった。戦死者としての取扱いを受けえないということは、同時に、それは戦死者に対する国家の一時賜金や遺族に対する扶助料が全く無いことを現実に示すものであった。敗戦後の混乱した世情、物資窮乏のひどい折からであったから、三人の成長さかりの遺児を抱えて、蓮田夫人は、どうしてその日々を過しておられるか、生活上の苦慮を想いやるにあまりある、そういう今思っても、かなしい時期だった。私は蓮田の平常の志情と、その死の意義を思い、これを国家のための戦死者として扱われることの正当さを信じて疑わなかったので、むしょうに憤ろしかった。天皇の人間宣言がなかったならば、直訴したい思いだった。心静めて、私は当局に請願しようと、ひとり思い立った。調べてみると、こういう戦死者の遺族に関する事務の取扱いは、市ケ谷にある軍人遺族の援護局で行なっていることがわかった。私は市ケ谷の坂をのぼって援護局を訪ねていった。夏の陽ざしの烈しい日だった。市ケ谷の丘陵の上の焼け跡に、粗末な木造の建物に援護局の名札がかかっていた。所長に面会して、蓮田の生涯の閲歴を述べて、これを戦死者の扱いに改められることを、私は懇願した。所長はもと軍人であったらしかった。私の述べるところを聴いたのち、それでは、蓮田の人物や日常の性行を証明する文書を添えて、請願書をしたためて提出するように言ってくれた。私は、さっそく、蓮田のもと勤務していた成城高等学校の同僚や知人たち数名の方々に、蓮田の勤務、教育の誠実さ、人物の高潔であった事実を記述した文章を書いてもらって、それを一部の書類として、ふたたび援護局の所長を訪れた。所長は、こう答えた。蓮田の死の意義は、もと軍人であった自分にも、個人的には理解できるし、また国家のために戦った人であるから、戦死者としての扱いをしてあげるのが当然だとは思うけれども、なんといっても、戦地の原隊からの報告書には戦死者として扱ってない、この点が、この援護局の所長の権限では、変更する

ことができない、と云うのであった。そして所長は、さらに続けて云った。この敗戦時に当って、自殺した将士の数は何千人にも及んでいるが、これらの人々を戦死者として取扱うためには、国家の現在の法令の改正が必要である。しかも、その改正は、日清、日露の戦争の場合にも、その適用をさかのぼらせねばならぬことになるので、容易のことではないであろう。ところで、今の社会党内閣の政府では、そうした戦死者に関する法令の改正は、早急に実現が望めそうにもない。したがって、お気の毒ではあるが、現在の状況では、どうすることもできない。ざっと、こういう意味の、所長の返事だった。私は請願の達成の困難さというよりも、むしろそれが不可能に近い事態であることを思い知らされた。絶望のためいきを、つくほかはなかった。がっかりして、所長室を辞して帰ろうとしていると、事務室の一隅で机上の事務をとっていた一人の中年の婦人が、立ちあがって私をよびとめた。そして、ただ今、聞くともなくうかがっていると、蓮田という方は、もしや熊本の植木町の蓮田さんのことではないか、と尋ねた。その婦人は、やはり夫の戦死ののち、今はこの援護局に勤務しているが、蓮田夫人の敏子さんとは、女学校の同級であったと、なつかしそうに話された。私は奇縁ともいうべきこの遭遇に感動をおぼえて、いくらか元気をとりもどし、この件についての援助をもお願いして帰った。私は、私ひとりの微力では、この請願の達成がもはや力およばない状況にあることを思い知らされた。そのとき、私はふと、かつて蓮田を知って下さっていた桜井忠温氏のお力にすがって、御援助をお願いしてみるほかはあるまいと思いついた。というのは、かつて蓮田が第一回目の大陸征戦から帰還したのち、東京で結成されていた文化奉公会という、戦地から帰還した文化人たちの会に入っていて、その会長が桜井忠温であることを、私は蓮田から聞いていたのを思い出したからである。敗戦後のことであるから、桜井氏は成城町に、ひっそりと住んでおられた。古風な応接間に通されて、私の述べるところを聴きとったのちに、桜井氏は慨然とした面もちを表わして、朴訥な口調で、こう言われた。私の知っている蓮田さんは、国士ともいうべき立派な方でした。その蓮田さんの死は、国を思う至情から、その信ずる道に殉じたものとして、男子の本懐であったと云わねばならないでしょう。しかし、遺族の方には何のつみがあろうか、その遺族に国家の一時賜金も扶助料も出されないということは、国家のために戦った人に対する、国家の扱いとしては、道理が立たない。そんなことでは、国のためにと信じて、夫を戦地に送った遺族に対して、申し訳が立たない。まことにお気の毒に堪えない、自分が一つ出来るだけの努力をしてみましょう。桜井氏は、そう言って下さった。そのお言葉に私は大きな喜びと一縷の望みをいだいた。それから、すぐに桜井氏は夏の暑い日の中を歩いて二度ばかり市ケ谷の援護局へ出赴いて下さった。しかし、桜井氏の誠意こめての御努力にもかかわらず、請願の効は奏しえなかった。その後の報告に桜井氏は、わざわざ、私のいる成城高等学校まで来て下さった。そして憮然とした面もちで、こう言われた。所長と話し合ったが、どうしても、らちがあかないので、とうとう私も腹を立てて、こう言ってしまいました、どうしても戦死者の扱いにできない理由が、原隊の報告書にあると言うのならば、私が責任をとるから、その報告書の一枚を今私の目の前で破り取って削除せよと云ったのです、すると所長は、それはいかに閣下のお言葉であっても、職務の責任上、どうしても従うことはできませんと云って、承知しないのです、これ以上は、私の力では、どうにも、

できませんでした、遺族の方のことを思うとお気の毒で、残念ですが微力で、御期待に添えなくて、…桜井氏は言葉をつまらせて、まるでわびるように、面を伏せて話される、その御好意に私も言葉もなく、ただ心深く感謝の気持をかみしめるほかはなかった。帰ってゆかれる桜井氏を、私は見送りかたがた、その後から歩いていった。あの日露の旅順の戦闘で、戦傷をおわれた「肉弾」の著者は、その戦傷のための不自由な足をひきずるようにして、ステッキに身を托して、ゆるゆると歩かれた。歩きながらも、自分が微力で、という言葉をしばしば口にしては、責任のすべてが自分にあるかのように、わびつつ、やがて帰って行かれる後姿を、私は、あのお身体で二度までも市ケ谷に出かけて下さったのかと、手を合せておがむ気持であった。それから数日後、御好意のお礼までに、お邸を訪れたが、私はこの老将軍の人がらのゆかしさにひかれて、しばしばお話をうかがうようにもなった。さきに亡くなられた老夫人が、まだ病床におられる頃だった。その看護に心つくされている様子がうかがわれた。応援間の窓外の群竹をそよがす風の音を、言葉もなく聞きいっている一時もあった。老夫人の亡くなった後、東京を去って郷里の松山にひとりさびしく起居された後のことは、ここには割愛する。

このように桜井氏は、蓮田をりっぱな国士の志情をもつ人物として、尊敬をもって理解していて下さったばかりでなく、それゆえにまた、その歿後にまで遺族の上にお心をかけておられたことを、この桜井氏の御厚情を、今は天がける蓮田の英魂も悉知してくれていることであろう。そして今は、桜井氏の霊を天上に迎えて、ともに、かつての東京の文化奉公会のころの思い出話に、うち興じていることであろうか。老将軍の莞爾として、おだやかな面もちで訥々と語られる、あの朴訥な声に耳かたむけて、目じりに細いしわを作って話しあっている蓮田の、やさしい微笑の美しさが、しのばれる昨今である。

生き死にの文学

久保忠夫

岡崎義恵先生が仙台を去られたのは昭和三十年五月であった。そのとき、わたしは先生の蔵書の中から、「新日本」や「文芸世紀」など、朔太郎関係の雑誌をもらいうけた。そこには、「文芸文化」も何冊かあった。わたしが蓮田善明に関心をもつようになったのは、そのときの「文芸文化」を通してである。だから、おそまきといえば、随分おそまきであった。

それに、「文芸文化」をひらいて、蓮田の文章を読み、蓮田の存在を知ったのではなかった。蓮田にわたしをみちびいたものは、十四年九月号にのった、唐木順三氏の「山と川」と題する文章であった。唐木氏は、まず、「蓮田さんの文章は先月のも今月のも、実に美しいものだと思います。」と書き、「小石」という作品からうけた感動を、これまた美しい筆でかいていた。

そこには、第一線にたってゐる自分の中隊へ追ひつかうとして、夕方兵と一緒に澄みきった川のふちに出るところが書いてありますね。これは私には多少意外でした。戦線といへば、いつも泥濘膝を没する、といふことを考へたり、支那の川といへば、いつも赤土に濁った水を連想するのに、ここでは、五六百米の向ふには松林の丘があって、そして、川は「清冽無比」と言ひたい程の水だといふのです。そして更に驚くことには、浅い水底に色とりどりの指程の小石が、水中に花のやうに散乱してゐるといふのです。（下略）

戦争が終ってから、大陸における日本の軍

人の醜聞をいやというほどきかされて来たわたしに、この文章は救いと安堵とをもたらした。そうして、この美しい自然をとらえることの出来た、蓮田の澄んだ瞳と、清い魂とを思いみたのであった。

それからわたしは、蓮田の文章をよみあさった。その第一は、同じ号の「新風言」の欄にある「中支戦線」という文章であった。これはまた、強烈な印象をわたしの心にきざみつけた。敵の砲撃にさらされ、炎熱と雨とにさいなまれながら、詩に学問にはげんでいる姿がほうふつとしてうかんでくるのである。のちに、小高根さんの研究で、蓮田の「死もて文化を書く」ということばに出あったとき、この文章をただちに想起して、ことばの意味を、りょうしょうしたのであった。それからのち、『本居宣長』もよんだ、『鴎長明』も、『預言と回想』も、『鴎外の方法』もよんだ。そうして、わたしはふりかえって、蓮田善明とはいかなる人かと問うた。蓮田みずからも、「私も数多い国文学者の一員として数へられてゐるのであるが、私の仕事は国文学でないと評するものあると聞く。私自らも亦た所謂国文学の閑仕事でないと語ってもゐる。」と述べている。たしかに、蓮田は昭和十年代以前の国文学者ではない。万巻の書の中にシミと同居している国文学者ではない。弾雨と寒熱とに身をさらして、「生命といふものだけがとがってゐる」のを意識し、その生命をもって、芸術と学問とに、いや、すべておのが任務とするものにむかったのが、蓮田善明であると思う。だから、当然蓮田以上にそうあるべきものが、それとは裏はらの生命をもって大変に処しているのは、我慢のならぬことであったろう。小高根さんの「蓮田善明とその死」で、もっともわたしの感動したのは、蓮田が部隊長を射殺して、自決する場面であるが、蓮田の生き方からすれば、そうあるのが、もっとも自然であるように思えた。

「みかどべに死ぬべきいのちながらへて帰る旅路のいきどほろしも」との幕末の志士の感懐をみずからの感懐として「復員」したわたしではあるがそれから二十五年、果たして、蓮田のように、とがったいのちをもって今日生きているであろうか。蓮田の死はいつもわたしに、この反省をうながす。

亡友の備忘録

栗山理一

蓮田が世を去ってから、もはや二十五年忌を迎えることになる。恩師の斎藤清衛先生はめでたく喜寿を迎えられて、ついさきごろその賀宴が催されたばかりである。師弟の恩愛の情がこまやかであっただけに、宴席に蓮田の姿が見られなかったことは、やはり先生には胸の痛みであったろうと私には推察された。それかあらぬか、最後に挨拶に立たれた先生は、かならずしも長寿を喜ばれる風はなく、いかに死ぬるかということが念頭に去来して止まぬ由を縷々として語られた。蓮田の享年は先生に比べれば、その半ばをすこし越えるにすぎない。やはり短命とすべきであろうが、その生涯は短命を予知したような、きらめく光芒で貫かれた激しい生き方であったように思う。

蓮田とは大学の学生時代から一緒に仕事をしてきたが、同じ土地に住んだ期間はいくらもない。昭和七年、広島で学生生活を共にした約一年間と、それより十年後の昭和十七年夏、私が大阪から東京へ転任してからの約一年間だけである。東京ではすぐ近くに居を構えることになったものの、翌十八年秋に再度の出征で南方に赴き、そのまま帰らなかったからである。そんなわけで、蓮田のことはなんでも知っているつもりでも、実は知らないことも意外に多い。

年次についての記憶がだんだん曖昧になってきてしまったが、家族が熊本に引きあげられる時（疎開だったか）、蔵書だけを私が預かったことがある。戦後になって、その蔵書を熊本に送り届けることにしたが、凡てというのではなく、重要なものだけを選別し、残りは知り合いの古本屋に売却したように記憶している。私の家は幸い戦災を免れたので、預った蓮田の蔵書は一冊も焼失することはなかったが、戦時中、私の家族も疎開し、他人に家を貸したりしたため、家具その他の移動で多少の混乱が生じた。蓮田の蔵書を整理してから数年後になって書斎の一隅から蓮田の大小二冊のノートを発見した。いずれも黒の紙表紙で縦罫の入ったものであり大は縦横とも約十五センチの枡形本であり、小は縦十四・五センチ、横八・五センチの小本である。枡形本は背に「蓮田善明」と刻印されており、はじめの数葉に『文芸文化』の編集覚え書が記されているだけで、他はすべて余白であった。この覚え書もさして記念となる内容でもなかったので、遺族には無断ではあったが、私の覚え書として転用させてもらうことにした。ただし、扉にその旨を書きとどめて、亡友の諒承を求めている。

小本の方は約一九〇葉あまりで、数葉を除いては細字でメモがぎっしり書きこんである。洋服のポケットにも収まる程度の大きさであるから、あるいは日常携帯していたものかとも考えられる。表の表紙はすでにちぎれてなかった。内容は僅かの例外を除いては、論文や講演の草案・覚え書か、随時に思い浮かんだ研究余滴・感想といったふうなメモが大部分である。中ほどに「昭和十八年度後記」と題した短いメモがあり、これは『文芸文化』の編集後記と思われるので、この小本の記述は昭和十八年前後の数年間にわたるものと推定される。記事の内容をていねいに照合すれば、その記述年次も明らかになる部分が相当にあるが、いまはその暇がない。

ほとんどは走り書ふうの断片であり、書きさしたままのものもあるが、この小本に蓮田が丹念にメモを書きこんでいたと想像される数年間は、蓮田の文筆活動がもっとも旺盛であった時期という意味でも、この一冊の備忘録は蓮田を知る上では貴重な文献と考えられる。

そのころは、蓮田に限らず我々同人もひとしく古代から現代にかけて関心の目を向けていたが、この小本を開き見て、蓮田の関心の幅広さはやはり格別なものがあったことを思い知らされる。昭和十八年の秋、再度の出征で南溟に赴いてから、その不在中につぎ〳〵にその著書が出版された。『神韻の文学』は京都の一条書房刊で、蓮田が西下の途次、書店主の配慮で大急ぎで造本した一部を、京都駅で蓮田に手渡したものという。日付は十月五日発行とあり、伊東静雄が序を寄せている。『忠誠心とみやび』は日本放送出版協会刊のラジオ新書で、十九年六月二十日発行で、清水文雄が跋文を寄せている。つづいて『花のひもとき』が十九年十月二十日の日付で、河出書房から刊行され、私が跋文を書いている。これには蓮田の序があり、前年の十月三十一日、「熊本駅貨物掛室の机をかりて」これを記した由が述べられている。その外にも、講談社から出版する契約で纏めた一冊分の草稿があったが、時局の推移や用紙事情の悪化などを理由に私の許まで返却してきたので、そのまま大事に預っている。これらのおびただしい原稿はきわめて短い期間に書かれたものである。しかも、その内容は一人の作家、一つの作品の研究というのではなく、たとえば『花のひもとき』は古代から新古今時代にわたる三十章より成っている。『神韻の文学』にしても古代から近代の森鴎外や永井荷風に及んでいる。そのことはまさに小本の備忘録の内容に対応するものがある。

この備忘録のメモの多くはそれ〴〵やがて

公表された論文や著書にいっそう精錬された形で示されているが、中にはかなり自由に生な思考の段階で書き留められたと思われるものもないではない。その一、二を抄出してみよう。

○私はただ新しい思潮から思潮への交替、殊に理想と現実との相互交替といったやうな、そんなことでいはれる文学のあり方など一切無意味とみる。

○又さういふ思想の一つのあらはれとして文学界同人たちのこころみた「近代の超克」など、益々文学を滅亡へ陥れる穽としか思へない。

○私は明治以来文学を守った筋を、この意味でつねに考へてゐて、一葉―鴎外―荷風―春夫―伊東静雄と考へてゐる。

○鴎外が、一葉のいきどほりを違った形で蔵しつつ成しとげたのは、あの表面の大格（ママ）さである。それは、彼の国語審議会案などの切羽（せっぱ）つまった時に露出する議論を以て却って伺ひうる日本保守防衛である。彼の鎧（よろひ）固めた強づくりは、決して一葉の抒情的いきどほりを見下ろしたり、冷然とつき放したのでなく、鎧である。内なるものを殺すためでなく、外なる夷文学・夷精神を仆すための夷すがたである。

○鴎外にもいきどほりがある。許さぬ、と一人で守ったところがある。佐藤氏（注・春夫）がいふやうに、漱石には取巻きがある（似而非日本文化学者）。鴎外には「血族の異様な程深い愛慕」にとりかこまれ、（或は鴎外がひしとそれを抱いて）

○漱石は、そんなにまで守らねばならないことを知っていない。あんな日本復帰はきらひだ。うそだ。それで「東洋」に帰ったが「日本」に帰ってはゐない。

これは比較的にまとまった記述であるが、つぎの「恋」と題する短文は珍しい。蓮田らしいといえば、その通りだが、平素そんな話題を一度も交したことがないだけに、私には珍重に価する。

恋

いのちを恋ふ　ふみこみ方。
ただ男女の相対者でない。
相手をふみやぶっても、いのちを成熟させようとする、
その成熟のために男女があるのである。

手紙

（小高根二郎宛三通）

三島　由紀夫

昭和三十四年八月七日

（東京都大田区馬込東一の一三三三より池田市野町一六八小高根二郎宛〔はがき〕）

いつも「果樹園」を御恵投に与り感謝してをります。本号の蓮田善明氏の自決に関する御一文を読み、感慨に堪へず、一筆御礼を申し述べたくなりました。しかし小生としては、氏の思想がかかる行動に直結したことは、さして謎とは思へませぬ。それより、直結しなかったら、そのはうがふしきだと思ひます。伊東氏の「稲妻」の詩は何といふ美しさでせう！　戦後誰一人伊東氏に比肩する詩人を私は知りません。

＊

昭和四十二年三月十九日

（東京都大田区南馬込四丁目三二番八号より池田市石橋二丁目六の五小高根二郎宛〔はがき〕）

前略、いつも〈〈「果樹園」を御恵投になり、有難く拝読してをります。さて、「蓮田善明とその死」は、毎号、感動を以て拝読中、昨夏、熊本で蓮田未亡人にはじめてお目にかかる等、結縁の再生をひし〈〈と感じてをりました折柄、今月133号の御文章に接

し、昔を思ひ、今を思って、感慨深きものがありました。一つには小生が蓮田氏の年齢になって、はじめて蓮田氏の心事に触れえたといふこともありませう。かういふことは、時代と直接関係のない、もっと深い血脈に関するもののやうであります。しかし昔のアホな詩まで出て来て汗顔、汗顔。

＊

昭和四十三年十一月八日

（東京都大田区南馬込四―三二―八から池田市石橋二丁目六の五小高根二郎宛〔封書〕）

前略

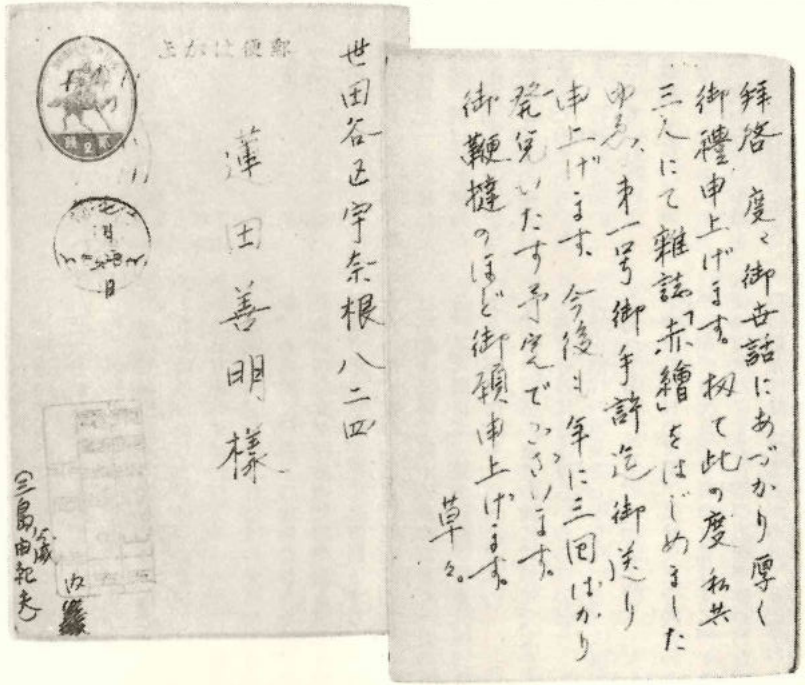
「蓮田善明とその死」感激と興奮を以て読み了へました。毎月、これを拝読するたびに魂を振起されるやうな気がいたしました。この御作品のおかげで、戦後二十数年を隔てて、蓮田氏と小生との結縁が確かめられ固められた気がいたしました。御文章を通じて蓮田氏の声が小生に語りかけて来ました。蓮田氏と同年にいたり、なほべんべんと生きてゐるのが恥かしくなりました。一体、少年の忘恩は、数十年後に我身に罪を報いて来るやうであります。今では小生は、嘘もかくしもなく、蓮田氏の立派な最期を羨むほかに、なす術を知りません。しかし蓮田氏も現在の小生と同じ、苦いものを胸中に蓄へて生きてゐたとは思ひたくありません。時代に憤ってゐても氏にはもう一つ、信すべき時代の像があったのでした。そしてその信すべき像のはうへのめり込んで行けたのでした。

五十五回に及ぶ御努力によって、かうした敍事詩的評伝をものされたことに対し、深い敬意と感謝を捧げるのみであります。

十一月八日

三島由紀夫

小高根二郎様



三島由紀夫少年（17才）の善明宛ハガキ　―昭和17年7月8日付

黙契

小高根二郎

「文芸文化」との交渉の深さからいえば、蓮田善明と取り組むのは、僕なんかより、富士正晴氏か林富士馬氏あたりがふさわしかったはずだ。もっとも両氏が善明に近付いたのは、彼らの発意というより、年少の友に対し妖術のような感化力をふるった、かの伊東静雄の影響だったかもしれん。「パルカノン」第22輯には「文芸文化」執筆者別索引がのっているが、それで、同人以外で執筆回数（号数）の多い人を拾ってみると次のようになる。

三島由紀夫（二十三回）、高藤武馬（十八回）、富士正晴（十五回）、丸山学（十四回）、保田与重郎（十一回）、田中克己（十一回）、本位田重美（九回）、伊東静雄（八回）、林富士馬（六回）。

この中で、善明を先輩と仰ぐ立場の人といえば、三島・富士・林の三氏である。

ところで、僕はたった一回きりであった。尋常なれば僕なんぞの出る幕ではなかったのである。しかし、この一回きりの執筆の機会に、当時宇治に住んでいた僕は、善明から二葉ハガキを貰っていた。

一回目は昭和十七年六月二十五日付である。

「拝復　小誌文芸文化八月号のため玉稿をお寄せヒ五忝く御礼申上候、

まことに二詩人、否臨時追加の三詩人への賜物たる御文により小誌もめでたく編集出来ると存じます。厚く御礼申上候　敬白」

この手紙には若干解説が必要だ。前掲の「文芸文化」八月号は、静雄の「夏花」と田中克己の「楊貴妃とクレオパトラ」が透谷賞を受賞した、その祝いの号であった。

同号に僕の執筆を求めてきたのは栗山理一氏だった。その手紙も現に残っているが、昭和十七年五月二十九日付である。彼とは、僕が大阪に住んでいた頃、静雄と一緒に尋ねたことのある顔馴染みだった。僕は「私信のかたちで」と題して、静雄と応徴中の克己宛と、別にこの十一日に亡くなったばかりの朔太郎先生宛に、三通の手紙を書いたのである。先の善明の手紙で、「二詩人、否臨時追加の三詩人」とは、そのことをいっているのだ。

ところが、この拙文を掲載した「文芸文化」はいっこう送ってこなかった。その催促を善明宛に出したらしく、彼から次の手紙を貰っていた。昭和十七年八月二十日付である。

「拝復　小誌八月号御送附遅延への段平におゆるし下さい。毎号栗山君からお送りしてゐるものとのみ思ひ込んでゐましたので安心してゐたのです。

早速お送りいたします。おかげ様でいい記念号が出来ましたので、ほんとにありがたく思ってゐます。

又折々お書きになるものお寄せ下さるやうお願ひいたします。

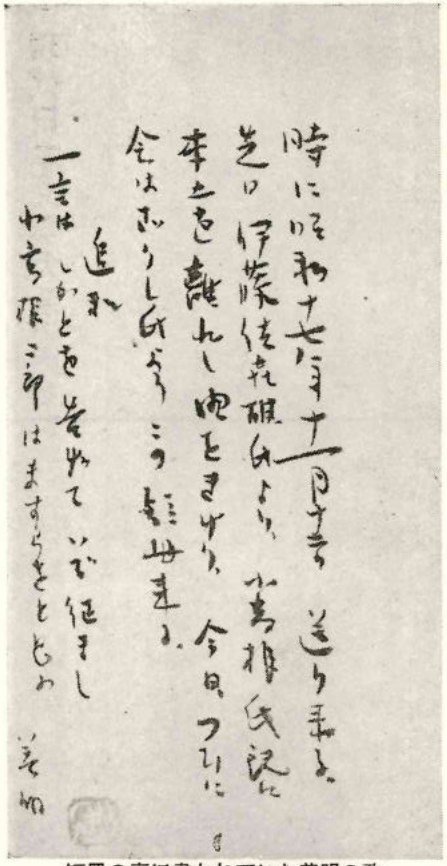
とりあへず御わび旁々　敬具」

善明とは、ただこれだけの交渉だった。いや、その前に、形とはならなかったが、かかりあいが一度だけあったのである。それは善明が、第一次の応召で急遽西下するときのことだった。彼の「応召日記」によると、それは昭和十三年十月十八日のことだったのである。「大阪にて、栗山 池田 伊東兄妹四氏に会ふ。別れたのちたいへん、淋しい」とあり、この善明の記述の前に、鉛筆で大きく、「おほきみにささげしいのち　いとう」と、静雄が餞けの言葉をしるしている。大阪駅頭の別れである。（参照、三頁写真）

実はこの日の夕刻、僕は天王寺のニュース映画館で戦況ニュースを立見してアパートに戻ってきた。すると置手紙を手渡された。留守に静雄の妹リツさんがやってきたのだ。「今晩蓮田善明さんが応召で大阪駅を通過されます。一緒に見送りませんかと、兄が申し

ています」と、しるしてあった。唐突な申し入れである。しかも、何時に大阪駅を通過するのか？　かんじんの時刻が書かれていない。それとも、これから堺の静雄の家まで来い…という意味だろうか？　僕は玄関から表通りに出直すと、堺の方角に通っている新墾の道路を見やった。駅まで歩き、電車に乗り、さらに相当な距離を歩かねばならない。砂利がゴロゴロした道のはたては、もうくやしい暮色で埋められていた。僕はあきらめた。

つまり、縁がなかったのである。その無縁さが、先の二葉の善明のハガキで有縁に転化したのだった。ところが、その二度目の手紙を貰ってから二ケ月後に、補充兵だった僕に赤紙がきた。丁度、僕の処女小説集「浜木綿の歌」が小学館から出るとこだった。四千部の検印紙に指をいためて押印してる最中だった。それが日の目を見ぬうちに、賜死の異域に入らねばならぬのである。いかにも残念だった。しかし、この日あることはすでに覚悟していた。「コギト」に「朱花サルビヤ」と題してすでに覚悟の短歌も発表していた。入営までに残された僅かな時間で、その短歌を急いで短冊に墨書した。そして、「浜木綿の歌」を贈呈者に送るさいには、必ずその短冊を一枚同封してほしい、と父に依頼をした。



短冊の裏に書かれていた善明の歌
——昭和17年11月12日——

これはつい最近のことである。蓮田敏子さんが前の家にあずかっていた荷物を整理された。三男の新夫君が昨秋結婚をして、やっと彼女の手があいたからである。その荷物の中から、「応召日記」「陣中日記」等のノートや、中学時代の同人誌「護謨樹」などの貴重な資料が多数あらわれた。その中に紛れて、前述した僕の短冊が一枚混っていたのである。

「與重郎語りあかせる家持の
　雄心のほか論なくもがな
　　小高根二郎」

稚拙な筆で、そう墨書してある。

すっかり忘れていたが、善明にも拙著を贈っていたのだ。僕はこの青春の形見がなつかしかった。賜死の時刻を待ちながら染筆した墨の色が、命のようにいじらしかった。僕はなんということなしに短冊を裏返えしてみた。その時、電光が僕の眼と心臓を射抜いた。そこには善明の次の歌が墨書されていたからである。

「時に昭和十七年十一月十二日　送り来る
先の伊藤佐喜雄氏より　小高根氏況に
本土を離れし由をきけり　今日つひに
会はむとしけるこう転出来る
追記
一言はしかとも　若かていで征ましし
わが高根二郎はますらをとともわ　善明」

現代日本文学大系 全九七巻

61　林　房雄・亀井勝一郎
　　保田與重郎・蓮田善明　集

すべてオーソドックス、すべて本物主義、みじんも妥協のない編集…そこまで、読者と作家の双方を引張ってゆけるのも、その古風な、いささか古武士のごとき、バックボーンによるのであろう。少年時代に指導を受けた蓮田善明の仕事が、この種の文学全集にはじめて復活して来たのも、私としては大きな喜びである。

三島由紀夫

¥720

〔善明〕本居宣長に於ける「おほやけ」の精神・詩と批評・日本知性の構想・預言と回想・鴨長明抄
〔付録〕蓮田善明とその死（七〇枚）
小高根二郎

東京都千代田区神田小川町二―八
筑摩書房

りし氏より　この短冊来る。

追和

一言は　しかとを告げて　いで征きし
小高根二郎はますらをと思ふ
はすだ善明」

これをしも、黙契といわずして、なんであろうか？

編集後記

本号は蓮田善明の二十五回忌特集号とした。五月末敏子夫人から、「妻子を思う事も一入深い人でしたのに今年はもう二十五回忌をむかえますので親戚集って供養したいと思っております」という便りをいたゞき、急に思い立ったのである。

いそぎ善明の生前の師友や死後の知友に執筆をお願いしたところ、一人の異存もなく快諾せられ、ご覧のように盛大な誌上追悼会を催すことができた。執筆の各位に心から感謝を申し上げます。

とりわけ感動をしたのは、過日喜寿を迎えられた斎藤清衛先生が、「半世紀前のことで記憶もうすれて居ますが…」と謙遜されながら、貴重な思い出を呼び戻して下さり、若き日の善明の面影に生気を与えて下さったことである。又、十二指腸潰瘍で療養中である由の桶谷秀昭氏は衰弱をものともせず執筆の労役を買って出て下さった。或いは、中大の学生部委員であるという塚本康彦氏は、紛争でキリキリ舞いをされながらも、戦闘中も文筆を折ることがなかった善明の勇気を回想して、稿を進めて下さった。同じく東北学院大の久保忠夫氏は監禁された学徒の救出に走せ向い、ガラスで裂傷を負い、鍵合の抜糸もまだ終えぬ身で脱稿をして下さったのである。稿を寄せられた各位の熱誠は、みなこのように仮初のものではなかったのである。殉国の善明との深い黙契と結縁の意識から、不遇な暇しえざる彼の魂に、鎮魂の照明を投げかける営為に参加して下さったのである。

又、私信の掲載を許された三島由紀夫氏にも感謝を申し上げる。この三通の手紙は、「蓮田善明とその死」の執筆途上に恵まれたのである。この時宜を得た勵ましの言葉は、非才のゆえに幾度か見舞われたわが迷妄を断ち、進め！という決意を与えてくれたのであった。まさに天才の息吹きということをえよう。

六月四日。おくられてきた『薔薇』一〇〇号を見てはッとした。村上新太郎追悼号となっていたからである。病名、急性肺炎。享年六八才とある。氏とは、前川佐美雄氏の「日本歌人」の会で、なんどか出会ったことがあった。勤め先が今橋にあった頃、昼食時にでかけた浮世小路で二三度ばたりと顔を合わせ、オヤ…といった黙礼を交したことがあった。時には同じソバ屋で同じうどんを食っていることがあった。しかし一言もお話を交したこともなく、黙礼をして別れた。僕は義足をぎこちなげに操って帰っていく氏を、そのつど心もとなげに見送ったものである。美しい言葉ばっかりを残して消えていける人は、幸福なのか、それとも不幸なのか？　彼を心もとなげに見送ったあの日の心は、実はこの思いであった。

六月十一日。昨十日阪本越郎氏が亡くなった由四季社から連絡があった。病名心筋こうそく、享年六三才である。氏に初めてお目にかかったのは一昨年の一月七日、丸の内ホテルの四季復刊同人会の席上だった。隣りの田中氏のすぐ向うに位置されたので時々お話をした。「果樹園」という同名の詩集をお持ちの由。平井俊夫氏が連載してるトラークルは昔抄訳を出したことがある由…等々。滋味のある声で話された。二度目にお会いしたのは八月四日ロイヤル・ホテルに於てであった。テレビの仕事で来阪されたとのことだった。実は、中央公論社の「日本の詩歌」の伊東静雄篇の解説を担当したので、不明の点を教えてほしい……との電話だった。さっそく僕は拙著「詩人、その生涯と運命」と「伊東静雄全集」を持参しておうかがいをした。九階のグリルの暗い燈下で僕は彼の質疑に答えた。学者の彼は大学生のようにまじめにメモを取った。帰りに玄関口まで僕を見送ってくださったことを思い出す。ご瞑福を祈る。

（O）

果樹園 第一六二号（毎月一回一日発行）
昭和四十四年八月一日発行
編集兼発行者　小高根二郎
大阪市東住吉区桑津町三の十八
印刷所　元市印刷株式会社
池田市石橋二丁目六ノ五
発行所　果樹園社
定価　一二〇円（〒共）

果樹園　一六三号　昭和四十四年九月一日発行（毎月一回一日発行）池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価四〇円　送料二〇円

果樹園

第163号

陣中日記（六）　蓮田善明
ロセッティ小曲（七）　森　亮
詩人蓮田善明　高藤武馬
日出野　吉本青司
伊東静雄研究（八）　小高根二郎
美しく晴れた夏の日の夕暮に　相浦美智子
花　火　美堂正義
太　郎（七）　浅田二三男
書　簡　伊東静雄
編集後記

陣中日記（六）

蓮田善明

五月十六日

蝶

地から蝶が湧き
荒れし野に
花の如
群れとべり

ぱた　ぱた　ぱた　ぱた

白い蝶は羽ばたき
地面をひくく匐ひ

草を爛り
寂しい風が立ってゐる

ぱた　ぱた　ぱた　ぱた

音のない運動
折れた羽翅
Rythmのない踊り
ちぎれた花辨……

ぱた　ぱた　ぱた　ぱた

何が索められよう
孵つた草は柔かい羽翅を刺す
空は何も無い重さで圧へる
もう一度孵らねばならない

ぱた　ぱた　ぱた　ぱた

五月の草は陽に焼ける
乾いた土が咳をする
峠を皆に見て
蝶は斃れる

ぱた　ぱた　ぱた　ぱた

五月九日

黎明

敵が黎明を却くと
跳弾に似た小鳥の音が聞え、
山鳩が、あ、丘から喚びかける

兵隊たちは腹を空かして
金平糖のやうに星を嚙り
残弾を抜いて空気をカチンと射つた

陣地のそばの胡瓜ばたけは花ざかり
火光のやうに黄花が閃めき
蜂が逞ましい血を沸らす

戦ひ利あらずと敵のために呟く際

有明の月に向つて
砲兵が追撃射撃を開始した。

病床日記

〇月〇日

今日はいやでも一日寝てゐようと心にきめて、ともかく顔を洗ひに起きた。体を起すと、昨夜からの続きの、腹を冷しこんだ時のやうな、いやにきり〳〵する下腹の苦痛と下痢の催しで、いそいで紙をつかんで裏畑の便所へ走る。戦さも何もないたゞこの不快にゆるんだ腹の中のものを排泄することだけが少くとも今の自分の全部だといふやうないらいらした気持になつてしまつてゐる。病気はいやなやつだと分りきつたことを今更にやゝ深刻めいて考えつつ、紐をときながら唐米袋の幕をひるがへして入る。これでいいといふやうな妙に大安堵を感じる。水のやうな下痢。何か癪にさへてくる。頭の青い屎蝿が顔にぶつつかりさうに舞ひ上つてくる。手洗ひをかねて洗面。腹力がなく、しかも珍らしく頭痛を加へて身体全体脂汗をかいたあとのやうにだるい。千人針を腹巻代りに巻き、シャツを重ねて、又蚊張に入る。いよ〳〵今日は一日寝て、絶食か大減食ときめる。自分は平生から、胃腸をこはすと、絶食一日か一日半やつて寝てゐて、すつかり排泄すると共に胃腸の休息と恢復をはかることにして癒してゐる。せいぜい「現の証拠」を煎じてのむ。それで今日一日寝てゐることは、すまない気がするが、結局は早く恢復するわけで、怠慢とのみはいへないと自ら弁解する。幸ひ昨日迄の監督で、一応陣地の工事も進捗して、今日は起きてゐても一寸顔を出す程度だし、昨日S中尉も復帰してきて陣地半分は担任してくれることになつてゐるので、中隊にも余り迷惑をかけない筈だ。

当番が来たので、今朝は米だけを、柔かく煮てくれとたのむ。日直下士が点呼報告にやつてくる。中隊長が何か洞羅声で注意を与へる。隣家の准尉が起きて、若さらしい小学唱歌「飯盛山の旗風になびくは雲かはた——か」、S中尉も起きて話し合つてゐる。中隊長が当番を呼ぶ。当番たちの朝食の炊事の物音。誰やらパタ〳〵と自分の部屋の前を通る。いつもは朝のすがすがしさだが、今朝は皆ずきずき全身に不快なひゞきを与へる。病気はいやだと又思ふ。起き上つて、枕の向きをかへる。夜のやうに頭を奥にしてゐると、窓(壁をこはして明けた)からの光が目にくるし、何か読まう(今日は読んでくらさねばならない)とすれば、光を負ふて、くらくてよめない。二枚つゞきになつてゐる敷布を逆に向けかへ、空気枕を十分ふくらませる。寝台が、私の註文により当番が頭の方を少し高くしてあるので、今度は逆に頭の方が低くなり、下敷の藁もその方がやゝぞんざいなのでこぼこが大きい。仕方がないので、そのまゝ寝る。白い新しい蚊帳(これは思ひがけぬいい物だ。うす紺に裾濃になつてゐる。)やはり朝蚊帳を吊つてねてゐるのは気になる。それに、何といつてもむし〳〵して息ぐるしい。

食事が出来てくる。起きてみる。又便通を催す。走つて行つてすまして(又ほんの少し水が出るだけ。)、膳につく。巻昆布の缶詰を入れた味噌汁。梅干。(白砂糖をかけてある。これは当番の御馳走してくれる親切のしるし也)、飯はうまい。みんなたべてしまひたいくらいである。

時々、「あ、戦地にゐた、軍人として」とおどろいたりした一日の日記を書き、夜襲の時、蚤のじつと沓ぬぎにとまりゐたるを書かんとくはだてたるも時間的に経過を書くのはくるしい。(書きつゞけ、くるし)

つづく

ロセッティ小曲(七)

森　亮

既昨のわれより消えし日々
いかなる状してあるらむか。
そは　熟れてのち踏まれては
粘土にめり込む麦の穂か。

或るは　濫費のとめどなき
金貨か。または　奈落なる
渇げる喉をあざむくと
夢に漏りくる垂水か。

失せにし日々は、かにかくに
わが手に扼殺し　われなれば、
来生にわれと　めぐり逢はば
「われこそ汝れよ、いかなれば
かく辛き目を見せつる」と
声をしぼらむ　くちぐちに。

「生の家」第八十六歌

詩人蓮田善明

高藤武馬

この春から本誌に連載されだした蓮田君の「陣中日記」を愛読している。戦場にあってはるかに家郷を思う情はいうまでもないことであるが、それにもまさつて、わたしは大陸の風物が実に的確にとらえられていることに感動をおぼえ、蓮田君の本質はやはり詩人であったとしみ〴〵思うのである。

わたしたちが昭和十一年の秋から翌年の十二月までに亘つて出していた同人雑誌「伝統」に、蓮田君はそのころ台湾の商業学校につとめていたが、毎号のように原稿を送ってよこしたいちばん熱心な同人であった。いま、合本に当ってみたら、

ふるさと　十一年十月号
八月卅一日　十一月号
雑詞　十二月号
母と子　十二年一月号
うす霧の夜　二月号
初雷の夜　四月号
阿里山　九月号

となっている。そのことごとくが詩篇である。さいごの「阿里山」は散文詩であるが、これがまた実にすばらしい。若い日の蓮田君の詩的エネルギーが山嶽の神秘に触れて一時に爆発したような迫力である。こんな雑誌はもうどこにもないだろうから、この機会に全文を紹介しておきたい。

汽車は、千七〇〇米の崖で、汽缶に故障を生じて、山をつつむ雨の水沫に呼吸づまり、閉めきった狭い車室では、さむい顔が、冷えた夕闇の暗さの中に、当惑々々してゐる。が、まだ午後二時を過ぎたばかりではないか……。

食慾に餌を嗅ぎ廻る、盲ひたる悪魔、白雲の團は、空間を罩めて、のたうち、ぶつかり、涌き上り、乗り超え、噛み合ひ、やがて、不気味な乳白一色に溶けて、いつさいの視界を遮つた。峯も、谷も、崖も見えない。ただ、咆吼する雷鳴が、もの憂く、見えざる山々に谺する。窓前に繁り立つた草木の青が水絵具のやうにぼけて行く。二本の逞ましい、枯れた巨木が、黒い影を残して呑まれてゆくのを、私はおののきつつ見送つた。その大きな枯木は、真つ直ぐに虚空にそそり立ち、嘗て其処らの同類を、日光から蔽ひ隠したことがあるが、今は自然死を遂げて、短くちぎれた腕のやうな数本の枝がつい

てゐるだけの高い幹であつた……。

急援の汽缶車が、それでも一時間余りの後、慎重に、しかし、けたたましく、下つて来た。そして、蟻に牽かれる虫のやうに、けれど、気短かに、車輪は軋りつつのぼり始めた。用意の冬着を重ねた子供らは、水蒸気で曇つた窓硝子に、人指指で、娯しく書いてゐる。トンネルを潜る時、かれらは自分の顔が映つて闇の中から、自分を見つめてゐるのを凝視する。幾つの暗闇を抜けたか。かれらはトンネルを数へることに倦んだ。

執拗な霧雨は、林中の草木を咽ばせ、斃れた大木は、濡れて、痛ましい。流れたまゝの樹液がこびりついたやうな、白い苔がその肌に叢がつてゐる。汽車は、性急に、千九〇〇米に上昇し、二千米を踏み越える。白魔よ、足下に却け！　狂ふやうに汽車は車輪で山肌をかき拐つて悲しげに、きい〳〵鳴る。

雲が、ふと、うすれた。はや、閑かに澄めるみどりの空は、高い梢の間から、見下ろしてゐる。幽い窪地で、芭蕉よりも広い歯朶が、ほつと息つくやうに、揺らぐ。雲は谷間に沈み、おのれを湧かせた風に、颯々と吹き払はれた。汽車は、又も、崖ふちに馳り出る。

お！前面、目眩めく遙かな嶺い谿、その彼方に、千尺の大絶壁が、雲を割つて、聳える。それは天をも囲むが如く、蒼穹を屏つて起つ。荒々しき肌、言葉なき巨人、肩のあたりに、枯木が、剛い毛のやうに生へ並び、全身黒く濡れた岩山の、その皺襞から皺襞を縫つて、ほそく、まつ白な滝が、幾百米の崖下へ、縷々と、したたり落ちてゐる。消え残つてうろついてゐる雲の幾切れかゞ、まつはりついてゐるその足元まで……。

わが汽車は、牡鹿のやうに、この巨人の前に甘えて、戯むれるやうに原始の林をくぐる。あゝ、空を摩すべにひ、たいわん擇、雷撃に裂けた広葉杉、大蛇のやうな藤葛に絡みつかれて髪ふり乱した楠、鬼樫、密生する蕗、怪鳥の翼なす大歯朶、蕃刀のやうな熊笹、焼け残つたまゝ斃れず直立してゐる杉、長葉椎、群小の樹々を押しつぶして倒れ臥した檜、その蔭にむらがるうつくしい菫に似た紫の小花、「山路来て何やらゆかし菫草」真夏の日光につや〳〵と露けく光る小歯朶……。

併し、谷向ふの岩山は、樹間に隠見しつつ、汽車と共に背のびをして、空へのし上つて行く。

ひたすらに昇ることを知つたわが汽車は、神々の呟きを、次第にはつきりと聴く。上昇し上昇する。理解しようとする処理しようとする雲間を突き抜けて、今は、形成する魔力に酔うて、このわざとらしいシリンダーも焼け切れんばかりである。

与えられた紙数も残り少ないが、これだけはこの機会に紹介しておきたかつたのである。

昭和十三年夏、「文芸文化」創刊に当つて高野山で日本文学講筵が開かれた。これは今日すが〳〵しい思い出となつて残つているが、講筵の最終日にわたしは一足先きに山を下つて西宮に北島叟江先生を訪ね、翌日は雨がふつていたが下山してくる蓮田君と加茂の駅で落ち合つて、恭仁の京の遺跡をみて共に砧村へ向つてきたのであつた。廃趾の雨にぬれながらいつまでも古瓦を拾つていた蓮田君の姿と、列車を待つている吾々のところへ出征する兄のために武運長久と書いてある日の

丸の旗をさし出してサインを求めにきた村の少年に、厳粛なおもゝちで「予備役歩兵少尉」と一字々々ていねいに書いていた蓮田君の姿が妙に忘れられないものとなつて残つている。その秋、蓮田君に第一回の召集がきて大陸へ出征していつた。

ブーゲンビル島の南のみいくさを想ひて

日出野

吉本青司

＜HIDENO／
夏の日のはじまったばかりの
運河ぞいのしずかな部落
ふるびた自転車は停められ
鉛筆と手帳が
胸ポケットからとりだされた
しんせつな茶店のかみさんが
近くの村に生まれ　この家に嫁いできたので
とことわりをいって話してくれた
＜日出野／
悲田院のあったというこの小さな部落は
ときおり走り去る車の音のほか　ひっそり
あれば朴の葉の散る
わが屋戸の朴の木の実のころ〳〵とこぼるゝ時に君は征でます
朴の木の落葉の中に吾在りとたのむ心を
君な笑ひそ
これは蓮田君の二度目の出征のときの拙歌であるが、やはり秋であった。朴といえば、
として
野良ではたらく農夫の姿もまばらだった
くずれた竈戸神社のちかく
年老いた男がひとり
製材所で　木を挽く音をひびかせていた
往昔
皇妃が造らせたという悲田院
その跡をたずねるすべもないが
でも　どこかに
ひとつの道が美しくつづいていそうな気がする
茶店のかみさんのやさしさが　ふと
今の世に無いものと似てるようで
しばらくこのまずしい部落を
たち去りがたい想いがするのだった
ホロホロト　イノチノアイニ
ナクトリヨ

そのころわたしの家の門のわきに一抱えもある朴の大木があって、わたしは大いにそれを自慢にしていたものであった。先年出版した随筆集に「朴の日記」という一編があるが、その一節を引用して蓮田君を偲ぶよすがとしたい。

昭和十六年五月十一日　晴　大山澄太上京し来る。酒。夜、池田勉、蓮田善明両君来る。酒。夜ふけて門前に出で、折から満月の煌々たる中に朴の木にのぼりて一枝を剪りて両君に呈す。風なく空気重厚、ために芳香馥郁たり。両君、月光の中に朴を蓋にして微吟しつゝ帰れり。

今朝、これを書くために蓮田君の旧居をなんとなく訪ねてみたら、西隣は二階建てのアパートになつていたが、むかしのまゝに残つていたので、ホットとした思いで一気に筆をとつた次第である。

（六月廿二日雨）

伊東静雄研究（八）

小高根二郎

映画「美しき朋輩達」の梗概は次のようなものである。

……

三吉はいつも暇さへあれば父の手伝ひをして煙突掃除に行つたが、ある日曜日、彼は級友稔の家へ仕事に行つたところ、恰も遊びに来てゐた英一とキャッチボールをしてゐた稔の球が外れて三吉の足は傷いた。その為め三吉はその儘稔の家で静養することとなつた。そして一週間後殆全快した頃、彼は見舞に来て呉れた親友の雄助と、稔や英一やゆり江などと仲よくお菓子を喰べてゐた。其処へ友成小父さんが面白い首振人形を持つて見舞に来た。友成小父さんといふのはある祭りの日、三吉と雄吉が神輿の人波にもまれてもがいてゐる内、ふと一人の盲目の少年が人波に押されて困つているのを見つけ助ける術もなく困つてゐるところを救つてくれた巡査なのであつた。それ以来三吉と雄吉はすつかり仲よしになつたが稔も英一もゆり江も小父さんが大好きになつて了つた。やがて三吉の傷も治り算術の試験の日が来た。彼は学校を休んだので稔と一緒に勉強したのであつたが試験問題は皆彼の知らないものばかりだつた。それを

美しく晴れた夏の日の夕暮に

相浦　美智子

セミのぬけがらが
三つも　四つも　木の枝につかまっている。
（湿った土の中の　長い穴から　這い上って、
夕暮の　枝々に　つかまって、
モックリは　セミになるのだ。）

真夏の　真昼に
いかにも　ふさわしい
黄色い　ひと群れの花は、
いまは　ウト〳〵と　風にそよいでいる。

さわやかな　香りを放って、
洗濯物が　ゆれ〳〵乾く。
わたしは、
汗もかかず、ねむくもなく、
背中に　こころよい　かすかな疲労感を背負って、

もはや　善良とばかりは
信じられなくなった自分のことを、
ひとごとのように
思っている。

夕暮の　木の　高い梢に、
いまだ　名の知れぬ白い花が
咲いている。

たかい渇き

八月の昼さがり、
どこからか　吹いていた風が
ハタリ……と静止した。

暑気と
せみの声のとき、
ロンド・カプリチォーソを口ずさむと、
尾っぽを失くした　あざやかな青トカゲが
鼠のような　可憐な眼をして
手すりから　顔を　出す。（だが、
その肌と　肌の　接触の　仮想が　いまわしいので
すぐに　追い　払われる。）

——今、もっとも　美しいものは、おまえ、
真白い雲！
——今、もっとも　自由なものは、おまえ、
豊かな雲！

雲よ、
もっとも　意図的でないもの
もっとも　無形にして　もっとも　有形の
　ものよ
夜空に　おまえと　とってかわる星座の
有機性と　衒学臭さにくらべて
ますます　天衣無縫の　おまえの無邪気（イノセンス）は
今、いちだんと輝いている！
無尽蔵の変形を
ほんの片手間の仕事のように
くりかえしながら　おまえは
ゆ、い、く、り、と　歩いてきた。
やはり　神が　おまえをお創りになったと
　すれば
その「創造」の日から。
……
あ、　たかい渇（かわ）き！

仔鹿

真冬の近江舞子の浜を
数人の女性が吟行した。
厳冬であった。

比良の山並みは　灰いろにけぶり
湖に注ぐ淀みの水は　あつく氷って
雪松の点在する　砂浜は
吹き曝された　人間（ひと）の顔のように
寒さむと　荒れて　白っぽかった。

——突然、
一頭の仔鹿が
どこからともなく
一本の矢のように
飛び出して来て、見る見る、
刃もののように　澄みきつた湖にとびこむと
憑かれたように　沖へ　沖へと
泳ぎはじめた。

その、小さな獣の必死の姿は
並いる人々の
眼からも、口からも、心からも
痛いような　悲鳴を　あげさせた。

それは、やはり「間違った匂」に導かれて
雪のキリマンジェロを　どこまでも　のぼ
　っていった
豹の姿であったろうか？

翌日、
ひとびとが　湖に　舟を出したとき、
冬の陽が　うすくてらす
湖のなかばに
仔鹿は　凍（こご）えて　浮かんでいた。

気の毒に思つた英一が紙片に答案を書いて三吉に渡さうとしたが折悪しく先生の目に入つた。先生はだまつてその紙片を拾ひ、図書庫の後ろへ来給へと英一に云つた。図書庫の後ろにはコスモスが一杯咲いてゐた。英一は先生に心から詫びた。先生は優しく「英一君、今日のこの花畠の事を一生忘れないでゐ給へ」と云つて許してくれた。心配してゐた三吉達は英一の許されたのを大層喜んだ、そしてその夜英一は夢を見た。果してどんな夢だつたろうか。

……

この梗概のどこが静雄のもので、どこが水島あやめのものであるか判定することはできない。ただ後半の主役である英一のその名は、静雄の長兄の実名そのままであって、彼は当選発表から二週間後の日に、三十五才の若さでこの世を去ったのだ。這松下の家で執筆をしていた夏休の静雄は、余命いくばくもない病臥中の英一の運命を知つて、せめてスクリーンの中ででも永世の生を与えたかったの

だ。その英一が終幕でみる夢とは、高尾光子が演じる「星の使」、藤田房子が扮する「夢の門の踊り子」が構成する天国であることはスチール写真で判るから、兄弟思いの静雄はすでに天国まで用意していたのである。ちなみに、劇中の少年たちの女友達として現れる「ゆり江」とは、百合子を記念するための考案であろうことは疑う余地がない。

2　童話「山科の馬場」二作

映画の梗概では原作の真価を偲ぶべくもないが、「美しき朋輩達」執筆からさして遠からぬ日にものされた「山科の馬場」が、宮本の友情によつて『同志社高商校友会誌』第六号（昭和三年十二月三十一日発行）に掲載されて後世に残されたことは、なんといつても静雄は友達冥加につきたものといわねばなるまい。伊東静雄では他校の学生だとすぐ判明する。伊東静雄を可憐草（いとしそお）ともじつた筆名にしてまで、敢て発表してくれたのである。しかも、当時の静雄をモデルにした宮本の作品「氷雨降る日」と一緒に掲載してくれたのだから、後世の史家・研究者のために、まことに貴重な資料を贈与してくれたものである。

……

山科の馬場

可憐草

尋常二年の秋のことでありました。かあさんにつれられて、私は京都の山科のをばさんのうちに、二三日がけで泊りに行つたことがありました。

夕方になると人数の少いをばさんの家内はさびしいもので、私は、もう電気が来さうなものだ、来さうなものだとおもひながら暗くなつた茶の間にひとり坐つて雑誌を読んでゐました。然しあまり暗くなつて来たので、私は読むのをやめて、台所の方に行つてみました。するとかあさんは風呂の前に坐つて火を焚いてゐました。をばさんと女中さんはこつこつと音をさせながら夕めしの支度をしてゐました。そして、をばさんは、私の顔をみると

さびしいの、氷ちやん、ごはん出来るまでおんもの方へでも行つてごらん

と言ひました。それで、私は門のそとまで出てみました。

郊外の、家のぽつつりぽつつりとしかないさびしいところで、とほる人とてもありません、私はぼんやりといつまでもそこに立つたままでゐました。すると、家のそばの原つぱの一ぱいみぞそばの生えた中から一匹の仔犬がちよこちよことあゆみ出て来て、やがて私の立つてゐる前をとほると、あつちの方に行つてしまひました。私は何の気なしにそれをみてゐましたが、急に犬の行つた方にあるいて行つてみようか知らといふ気になりました。

その犬の仔の姿はすぐ見えぬ様になりましたけれど、小さい道はぽつつりぽつつり立つてゐる家の横手や裏をとほつてつづいてゐました。私はもう仔犬のことはわすれて、みぞをわたつたり原中をとほつたりして、しづかにあるいてゆきますと、家の立つてゐる地面より一段低くなつた、一方は赤松の林がある一寸した広場のあるところに来ました。

そこにはさくがしてあつて、隅の方には小舎などがあるところをみると、すぐ馬場だと

谷崎潤一郎論考
三枝康高著
¥1,200
東京都千代田区神田錦町一ノ一六
振替口座（東京）四九九一番
明治書院

花火

美堂正義

暗い河の上を
一筋の花火が上つていく
水の上に赤い線を画きどこまでも
はてはひときわ明るくなつて
あとは星のない暗闇が一層深く
残されてゐる

夜闇に見たのは
花火ではなく
豊麗な青春の光芒
捉へどころのない日々は
いつも波に揺れてゐた

真直ぐに進んだ火の箭
瞼にはつきりと焼付けられた
紅の火の玉
失はれた杳かな日への
激しい悔恨

わかりました。私はひつそりと歩みよつて来て、そのさくのそばにたたずんでみました。すると、だいぶくれかかつた空気の中に、二人の人がまだ馬の調練をつづけてゐるのでありました。そして、馬の汗ばんだにほひがなんとも言へずなつかしく、しづかに、そこらにただようてゐました。みてゐると三匹の馬は一列になつてしづしづ、しづしづとあゆむのです。そして馬にのつてゐる人も、それをいつくしむ様に、馬のせの動きに、自分の身をまかせ切つて、遠くからみると、目さへつむつてゐるのではないかとみえます。

それなのに、馬達は自分達同志ではかつた様に、相変らずしづしづ、しづと一つの円をゑがいて廻りつづけるのです。然し、わたしはもう一人の人をみました。その人は、その円の中央に立つて手には長いむちを持つてゐました。そして時々思ひ出した様にとつ拍子もない様な声を出して号令をかけるのです。それが、怒つてゐるのではないかと思ふ様なひどい声でしたけれど、馬も馬の上の人も相変らず、しづしづ、しづしづとあゆみつづけるのです。そして、今の怒り声の様な号令をかけたその人自身も静かに長いむちを地にさげてひつそり立ちつづけるのです。

私はこんな光景をみてゐる内に、何とも言へぬ心持になりました。ひどく心細い様な、そのくせ、いつまでもここでかうして、じつとみてゐなければならないかの様な。

そして、自分が今此処で身動き一つしても、きつと、この馬も、号令をかける人もさくも何もかも皆なくなつてしまつて、私一人ぽつんと広い原中に取り残されるのに相違ない。そして、原中をあるいてどこをどう尋ねまはつても、をばさんの家は見つからぬのに相違ない。私はそんな風に次ぎ次ぎ思ひました。そして、じつとしてをれぬほど、さびしいおそろしいとりとめもない心が湧いて来ました。

それで私は馬の列があちらをむいて歩いてゐる時に思ひ切つてさくのところを離れるとすたすたと、もと来た道をかける様にしてあるき出しました。その途端、うしろでは、さつきの怒つた様な号令の声がして、そしてその声が消えるとしんと静まつて、私の心を一そうこはがらせるのでした。私はもう夢中で原中の道をかけてかへりました。そしてやつと、をばさんの家が見える様な処に出て来たのです。ああよかつたよかつたさう思つてゐると、ああああ、門のところにをばさんが立つて、私をさがしてゐる様でありました。私はうれしくなつて、一寸手をあげると、どんどんかけて行つて、をばさんと言ひながら、

その袖をにぎつてみました。

をばさんは

永ちゃん、どこに行つてたの、ごはんよ、もう。

と言ひました。私はさう言はれると、一種のわけのわからぬ涙が目のずつと奥の方でにじみさうでした。で、だまつて、あの馬場にあたる方を指でさしてみせました。すると

ああ、馬場だつたの、さう。

をばさんは何ともなくさう言つて、私の頭に手をのせられるのでありました。

—一九二八・一一・一—

……

「美しき朋輩達」当選が決定した翌月に書いた作品であるから、当選作の文章とか表現とか品位——つまり面影を、よく伝えている童話であると想像をしていいであろう。

この「山科の馬場」は明らかに「南日吉町の馬場」である。宮本との友情を記念するために、彼の所属する「銀鞍会」に取材したのである。静雄は酒井家へ連れだつてもらうために、乗馬の練習がすむまで木柵にもたれて、宮本を待つたことが幾度もあつたろう。そのとき汗ばんだ馬の甘酸つぱい臭いをふんだんにかがされたのだ。又、今まで冗談をいい交していた友が、いつたん鞍上の人となると、端然と沈黙の人となり、調練師の号令一下…しずしずと廻つたり、ギャロップになつたりして、まるで静雄一人が異世界に放り出されたような錯覚と恐怖に、見舞われたに相違ない。この馬場での見聞が、後年〈空腹で敏感になつたあいつの鼻面(はなつら)が、むなしく秣槽(まぐさおけ)の下で、いつまでも左右に揺れる。〉(「夏花」「決心」)や、〈馬のにほひは咽喉(のど)をくすぐり、愛撫求むる繁き足蹈(あしぶみ)〉(「夏花」「疾駆」)と結晶したのである。

静雄はこの「山科の馬場」を一年後に改作して、奉職先の大阪府立住吉中学校の校友会誌「耕人」第六号(昭和五年一月発行)にも掲載しているが、童話としてのよさは、むしろ前者にある。ただ後者の末尾に付けられた後記は、「山科の馬場」……いや、「南日吉町の馬場」にかかわる静雄の切ない感慨を伝るものとして、特記する必要がある。

「今にして私は、あの山科の馬場を単なる幼ない詩ではなかつたと考へてゐます。その証拠に今まで私は、その中に錬獄(ママ)を感じてゐますから。かの「人界喜劇」に読み耽りながら、然も猶ほ、この不安の中にあるのは、私が若いせいでせうか、それとも、私の理想的な血のためでせうか。然し、只、あの叔母さんは、今の私にはない。」

錬獄は煉獄の誤記か、ないし誤植であろう。静雄が馬場に煉獄を感じたのは、百合子の見えない生垣を、ああでもないこうでもないと徒らに猜疑を繰り返えして、ちりちりしながら宮本の練習がすむのを待つていた心境であろう。越えがたい因習の生垣。それを敢えて越さんとする彼の理想の血の苦悶ででもあつたろう。末尾で今はない……と歎いている叔母さんとは、フミではなく奥村家の人となることが決つた安代のことだろう。ともあれ、この後記を読まされた住中の教師仲間や生徒たちは、なにのことやらチンプンカンプンであつたことは間違いない。

この「山科の馬場」は赤彦の少年少女物語「萱草の花」に、いささか似ている点があるので、参考のために書いておきたい。

「萱草の花」の主人公幸吉は「山科の馬場」の永ちゃんより一二歳兄貴である。彼は十才のとき母を腹膜炎で失った。その死から十数日たったある夕、庭石に腰かけて空を見ていたら、学友が連れだってやってきた。そのうちの一人が幸吉に囁いた。お前のおっかあが死んだというのは嘘だ。上馬川(かんばがわ)と大川の合流地点にかかっている梁の中にいる……というのである。母はいつのまにか魚に生れ変

っていたのだ。「早く幸吉を呼んでくれ。早く来れば命が助かる。早く飛んでけ、早く飛んでけ!」と、母が呼んだところで目が覚めた。夢だったのだ。

翌日幸吉は教室で夢のことばかり考えていた。そこに山田先生の質問が飛んできて幸吉はトンチンカンな答えをして級友に嗤われる。隣席にいる仲良しの千代(山田先生の娘)に袖を引かれて注意された。放課後、幸吉は夢に誘われたように、上馬川の川辺をたどっている。農馬は耕作の暇には、その冷い水で脚をひやす習慣がある。岸辺には槻や桂が丈高くならんで聳えている。下へ下へ下つてゆくと滝に出る。山桑は真黒な実をたわわに付けた枝を水面すれすれまで撓めている。向う岸の白樺の根元には卯の花が雪のように咲いている。この滝には幸吉は母にまつわる思い出がある。

彼は母とイナゴを取りにいった帰り、ここに休んで木梨を食べたことがあった。その時滝壺に父の好物のウツギタケが群生しているのを母が発見した。器をとってくるまでここに待っててくれろ…と幸吉はいわれたが、彼が泣きだしそうな顔をしたので、母はやむなく彼を連れて帰り、後で一人で出直したことがあった。その日の夕餐の楽しかったこと……。

滝から雑木林を過ぎると視野が展ける。下河原田圃の一部が見える。岸近く栗の大木が沈欝な花をつけ、下の草原には萱草の花が一面に咲いている。母がいた梁がかかっている大川との合流地点はすぐそこだ。川の瀬音が母の声に聞えてきた。幸吉はうっとりとその声に聞き入っていた。「早く幸吉を呼んでくれ」といった、夢の中の声を聞いていた。そこにいきなり釣竿を持った男が現れて幸吉は吃驚した。よく見ると山田先生だった。後に魚籠を持った千代もついていた。先生の妻は胸が悪くて永らく病臥しているので、その栄養の資をえるために釣をしているのだ。先生は教室での幸吉の失態を責めず、母の死の悲しみに耐えよ……とやさしく励ましてくれた。幸吉はうなずくと、今まで堰いていた万感がワッ! という泣き声になって胸から溢れでて、瀬音と一緒に流れていった。仲良しの千代も幸吉に誘われて共に泣いてくれたのだった——。

この「萱草の花」のどこが、「山科の馬

太郎

浅田 二三男

(六)

近くの小学校から
子どもの声がとんでくる
田の草とりの日笠がみえ
干天つづきでほこりっぽい
太郎よ
もう六月も半分すぎた
お前はついに
野良になってしまったのか
ルンペン猫になったのか
ルンペンといえば
僕だとて人間のルンペンさん
死んだとしよりの仏さまをまつりながら
毎日こうしてお前のごはんを
一キロはなれた二階借の家へ運んでいる
太郎よ
早く姿をみせてくれ
あの丸っちい顔と
まんまるな大きな眼を
見せてくれ
ふとい前脚を
僕のひざへかけてくれ

果樹園　一六四号　昭和四十四年十月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価四〇円　送料二〇円

果樹園

第164号

陣中日記(七)　蓮田善明
山上記
伊東静雄研究(九)　小高根二郎
いたち　相浦美智子
帰国　沢田閏
太郎(八)　浅田二三男
運命　美堂正義
桂の浜　吉本青司
伊東静雄研究文献目録(一)　小川和佑編
ロセッティ小曲(八)　森亮

陣中日記(七)

蓮田善明

山上記

六月十一日

昨日より山上。哨線を見廻りて、この一週間の警備の間に為すことは、この草山の草を描くことだと思ふ。腹やはり快くなりきらぬ。血便なり。しかし元気出て身かるし

昨夜二中隊方面に敵襲。今朝来、敵はこの山への攻勢の体勢をとつてきて、いろいろさかんに射ちこむ。今夜この山はうんと射たれよう。山上に仰臥して空を見る。腹いたし。何度も下すうち粘液性血便なることを見定めたり。古今集恋二をよむ。備ふべき方法外も内も定まりたれば、暑日の下に天幕はりて仰臥す。腹いたし。山を守らんのみ。山に死すとも。草を描かんと思へど腹いたし。かんかん照る岩山に排泄して、火のやうな石をのせてきた。首すぢ夜も昼もねてゐると汗ながる。暑い日中は鳥も余りなかぬ。

秋風にかきなすことのこゑにさへはかなく人のこひしかるらん　たゞみね

この歌絶唱とすべし。声なき鳶のみ空をすべる。声なきも、人の声もて語らざるも、これ千載の彼方のかしこき人の知るといふことほど高邁な智があらうか。詩なり。智とはかかるものなり。高邁とはかゝるものなり。

もし明日（明日といふことはいかなる時もよし）死なば、我が妻を娶りてより満十一年目の日に於てなり。この日に永遠を誓ふもよきかな。人のちぎり、ちかひを永遠ならぬもの、といふ凡俗思想の滓よ！　かぎり得ぬちかひとする時、われらそのかぎり得ぬものを通じて永遠をつかみ、生きるなり。われ、妻と二子とが書き寄せし手紙を、ひしと持ち来り居れり。（幼き末子は字書けねば、彼が見まねて形なさぬもの点々と書きてわれに送るといふ）

中隊本部を昨日出る時、深切なるS中尉は、何か雑誌を持つて行つたらとすゝめくれたるも、荷多くなる故、とて謝辞したり。一週間退屈ですよと、いつてくれたり。我れ、素直なる気持にて山上の一週間を、俗雑にはなれて退屈せんと思へればなり。日本書紀（岩波文庫中巻）、古今和歌集、北村透谷選集、そして、今度こそぴつたりよめさうな心して、奥の細道をとり出して図嚢に詰めて来りぬ。

――臍下の腸いたし。下痢もよひの気もちわるさ。午後五時、日いくらか斜になりたるも、日本時間の五時ゆゑ暑し、体を起し棒にもたれ。風のみ山上よく吹く。昨夕は曇り、湿気多き烈しき風にて寒かりしほど。アンペラなど吹きとばすほど。

午後五時半。テントを直して日かげを広く

果樹園　一六三号　昭和四十四年九月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価四〇円　送料二〇円

蓮田善明とその死

小高根二郎

敗戦に臨んで神国日本の終焉を象徴したのは、「人間宣言」によって神国のきざはしを降り給うた今上天皇ではなく、逆にきざはしを昇って扉を閉さして雲隠れた、影山庄平翁やわが蓮田善明であった。

内容

第一部
「豪僧の父・慈善」～「『万葉末期の人』としての家持論」に至る十七章

第二部
「応召と陽死の『大津皇子論』」～「生還の惑いと『方丈記』」に至る十五章

第三部
「遁世の願いと阿蘇行」～「死・それから」に至る二十章

序・三島由紀夫
年譜・清水文雄

東京都千代田区神田小川町二―八
振替東京四一二三
筑摩書房

11月刊予定

書簡（蓮田善明宛一通）

伊東静雄

昭和十八年一月三日

（堺市北三国ケ丘町一丁目四〇より東京市世田谷区宇奈根八二四蓮田善明宛（はがき））

御原稿無事とどいてをります。十日迄に、臼井書房に、拙序文そへて廻送するつもりであります。一言聯絡まで

注・「神韻の文学」

編集後記

七月十日。大阪会館で宗弘容氏の著『地蔵頌歌』の出版記念会が催され、縁あって出席をした。地蔵写真家宗氏は、蓮田善明の中学時代の同期生である由、かねがね丸山学氏から聞き知っていたからである。それに、当日の記念講演に俳人大山澄太氏が来られる由広告で知ったので、前号にいたゞいた原稿のお礼を述べる絶好の好機でもあった。なつかしい地蔵尊の姿を求めて写真行脚をされる宗氏。放浪の俳人・山頭火の心友であった大山氏。ご両者の超俗の精神は、世塵にまみれ果てた僕の心を洗つてくださつた。

七月十三日。五月山の午前の散策から帰つてくると、本号所載の高藤武馬氏の「詩人蓮田善明」が届いていた。前号の特集に収録すべき原稿である。高藤氏からまつさきに執筆承諾の返事を頂戴していた。ところが、メ切になつて、氏を除く諸家の原稿は届いたのに、心待ちにしたこの原稿が届かなかつたのだ。消印はキヌタ局六月二十三日。東京・大阪間を丸々二十日間もかかつている。これだけの日数があれば、いつたい地球・月世界間を幾往復できるか！いかにも前時代的な全遅のサボタージュに痛憤を感じた。が、さきほど五月山麓の慈母観音像前の立樹で見上げた、みごとな合歓の花の思い出に、その憤りも和んだ。

七月二十五日。アポロ十一号が月に到着し、人間が初めて月面を歩いた。

尚、本号に初めて詩を発表した相浦美智子さんは、伊東静雄の詩の骨法を研究された新進である。（O）

果樹園 第一六三号（毎月一回一日発行）
昭和四十四年九月一日発行
編集兼発行者　池田市石橋二丁目六ノ五　小高根二郎
印刷所　大阪市東住吉区桑津町三の十八　元市印刷株式会社
発行所　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社
定価四〇円　送料二〇円

す。漸く暑さも変つてきた。二中隊方面攻撃初まり、銃砲声。迫撃砲相当うちつゞけ居る。鳶低く山肌に浮けり。日かげにゐたれど今日一日にて二の腕赤くやけたり。

排便、息めども、粘液のみ。屎蠅（山上屎蠅多し）を踏みころしつゝ。うんと飯でもくつて（食慾は大いにあるんだから）、強行通過をやるか。（これは冗談）。うしろから照りつける日、やきつけるやう。山下から炊事の用意して兵たち上り来る。急坂なれば大変なり。東方のすべて、カッキリと照明したやうに見える。とにかく、今度の腸はほんとにをかしい。こんな経験覚えない。腸の一部のみ、或は肛門に近き大腸の一部ならん、臍下のあたり重からぬ痛み。もう一週間にならうか。しかし青崗興に来てから急にわるくなつた。八日に聯隊長の巡視のころよりよくなく、昼食のビール後わるし。その夕食後はいけなかつたやうだ。その夜下痢さかん。九日は一日蚊帳の中でねてゐた。いろ〳〵本をよみ、あかずよみ、敏子と子供らの手紙、「文芸文化」五月つく。ことに晶一の手紙に「神様入レテオキマスカラセンソウヘモッテイッテクダサイ」云々に熱涙下り、敏子の感情に咽び、よろこびたるのち、又、岡本かの子の「丸の内草話」に感動したるも、病気の気はよからず、又、一人読書に耽りてある時、勤務の兵の号令、中隊長の声など、あゝ戦地にゐたな、おれもその一人だつたなと我にかへり、夕方は、起きて寝台の沓脱に腰かけてよみ、又、兵の進級のことを、分隊長らにはかるなどして、少し工合よかりし。絶食に近き減食と、げんのしようこ、その他の薬よかりしか。夜、九時ころより盛なる銃声、且つ、電線何の方面も断たれたりといふに、起きて用意せり。蛍その夜蚊帳をめぐりたるに、一匹沓脱の下にくつつきて光りたるまゝうごかず。そを見つゝ心しづかに用意せり。幸ひ、敵の同志射ちかと見て、電話も通じたれば、靴ばきのまま蚊帳に入りて眠る。蛍もとの如し。便所に何度も行きたり。夜の空気冷えて、ちゞみのしやつは寒き故、木綿を一枚かさねたり。妙に首すぢと肩に汗す。九日は起きて、元気を出し、なるべく起きてゐて詩集をよみ、コギトをよみ。正午より日直将校。明日より晏家大山と交代と、一日早すぎなれば具申せるも、きかれず。腸わるし、少しよし。十一時ころ又パン〳〵やりたれば起き見たるも、そのまま眠つてしまつた。中隊長が無暗（ママ）に細心なので——。

こんなに、思ひつき　〳〵　書いてゐると、何か書いてゐる。蒲に腹ばつたり、坐つた

京都

田中克己

五年ぶりに京都に行った
寺社見物のためでもなく
社用のためでもない
二十八年まへの教へ子たちが
子どもづれで同窓会をする
わたしの死ぬまへに会ひたいとのことだ
わたしはにこにこして会にをり
さ来年の還暦に文章をかいてくれ
題は「わたしと田中克己」ときめた
知らないわたしが出て来るだらう
わたしはにこにこして東京へ帰って来た

ロセッティ小曲(八)

森　亮

けふこそは太陽の祝祭よ、
あかねさす　この西空は
夕栄えて　祈りもぞする。
谷行きに　なづみしわれも

今にして　遅れて仰ぐ。
さはれ　けふ、昼さへ見しか、
矮林のふち金髪とかがやき
荘厳の陽の渡りしを。

山頂に立ちたる今は
くだり坂、小暗き道に
くれまどふ　足をはこばむ。

されど、しばし憩ふわが眼に
黄金ぞら　銀さびて、
鳥ひとつ　暮れて消えゆく。

「生の家」第七十歌

り。日がずつと傾いた。風が昨日と反対に夕刻より東へ吹く。

余りに鳥の多すぎる支那で、この山上に少きはよし。聞えても遠く幽か。鳶近くに浮いて、下りて何かもつて立つ。砲声つゞけり。夕食一人分たべ。うまし。分隊長を集め指示と命令。最前陣地を見る。太陽まんまるく洞庭湖に沈む。夕闇いそぎいたる。顔に汗の塩乾きつきてざら〳〵。腹工合よし。夕風まことに涼し。夕刻より敵の射撃パタリとやみ。星次第に光ます。野天にねころべる兵たち、星の話やら何やら。夜風露けくてうちしめる。掩蓋の中に入る。丸太の天床。岩石と板の壁。棚をつくり、アンペラを布き、蒲、天幕をしきたり。奥行三間、巾一間（寝て足がつかへる）、地面より入口は二尺、低からん。奥はもつと深かるべし。よく出来てゐる。

非常に静かなり。蚊二三匹とぶ。出入口からも星見ゆ。古今集をよみて寝む。正に十時。

六月十二日

本日は結婚十一年目の記念日なり。余りめでたい記念日といふやつをもたぬ自分のたのしい記念日なり。

昨夜十一時頃四中隊方面にチェッコ、迫撃砲一度きゝ、午前四時まで静か。迫撃砲聲に目をさまし、月明なり。便通を催して行く。下弦の細月。星明らか。湿気多き風つよく。兵は、露にうたれて蒲や蚊帳や夏外被を以て辛うじて露を蔽ひ、地面にころがりて寝ねたり。鉄兜夜露にびつしよりぬれたり。五時また迫撃砲とチェッコ烈しかりし上、この高地の尖端にとりつき居るやうなりとのことなりしも、応戦せず夜の白めるをよろこびつゝ展望哨へ前進せしに、敵なし。帰りて食事中日出でてしばらくすると風が次第に乾いてくる時の爽かさはいい。野砲射撃しくれて、見事命中。おどろく。真赤な東の空。洞庭湖も朝は涼しく見ゆ。次第に暑き晴空なり。又壕外にアンペラの屋根を張りてねころぶ。九時半。熱光やくやうにアンペラを照らし、この蔭もあつし。ひばり遠くにひとり歌へり。静かなり。風は涼しく爽かに吹く。銃声時々。

十時、糧秣来る。昨日中隊長当番と一小隊兵各一名軽傷と。二中隊は小隊長戦死とか、昨日電話できかれた。兵には云はずにおいた。

この山南北に龍の如く長く、南端新墻河に至る。この戦線最も高き陵線。朝は西方、夕は東方の低地方手にとるごとくはつきり見ゆ。西北は山岳のため岳州は見えされども、凡そ西方の水平線はすべて洞庭湖。その低地は緑の板をつみかさねて作つたやうな台地風の畑

いたち

相浦 美智子

かわいい いたちが三匹、
夕立が去った夕暮の 小さな庭で 遊んでいた。
人目に、悪びれもせず、はねまわっていた。
一坪ばかりの、気取らないお茶室の庭に
人間を おどろかさない 自然さで、突然に、
まるで 童話の本の頁(ページ)を めくったかのように
小さな獣たちは喜々としてとびはねた。
一面の螢草の中に 隠れたかと思うと
植木鉢を跳びこえ、あじさいのしげみに入り、
後足立って 小さな両手を胸にあげ、
鼠のような、リスのような、アナ熊にも似た
可憐な、ひょうきんな顔を その上にのせ、
じっと、われわれの方を見上げるのであった。
つがいかしら? という 鑑察に
二匹は フイ と姿を消し、そして また
人間を おどろかさない自然さで、突然に、
まるで童話の本の次の頁(ページ)をめくったかのように
古びた塀の下から、三匹のいたちが出現して
長い、しなやかな胴で
美しい弧を いくつも描いて、
長い しなやかな尾で
すでに草叢(くさむら)に 没した胴体の
名残りの弧を いくつか つくって、
キュッ! キュッ! と
嬉しげに
呼びかわしながら……。
夕空に ほそい眉の 三日月が欲しかった。

桃

夏葉が茂った 桃の木の下
熟する前に 落ちてしまった
あるいは
うす紅をさし すでに全い実であった 真
白なものが
いくつか ころがっていた。
自らが喰いうがった穴蔵に
喰うごとに すっぽり はまって
にぶい陶酔で 動けなくなった甲虫(かぶとむし)
重なりあい ぶつかりあい 押しあって
エメラルド、鋲朱、青銅色の互いの肢体が
犇めきつつ 溶融するこがね虫。
そのわずかな隙間を ぬからず 見つけて
するするッと 針のような 細い鮮黄色の
管(くだ)を
しなやかに さし入れて
蠱惑の翅(はね)を 開(ひら)けては 閉じながら
ソドムの蜜に酔いしれている 黒揚羽。
ただそれが 軟らかく 腐敗したものであ
るがゆえの
感触をだけ たのしんで
ぶきみに膨張(ふくと)ってゆく なめくじら。
酸えたこの欲情に 酔い呆けた者たちを
しり目に
右往左往 ただ生活にいそしむ 例外の蟻
たち——。
真夏の陽ざしの下、
目のくらむ、この食慾と 情慾と 陶酔の
力で
次第に蝕まれ 犯され うがたれていくも
のは
たまりかねて ひと時
グラリ……と 揺れた。

地相つゞき部落も多し。(風涼しさいはん方なし、東南より吹く)、南方は長蛇の如くくねり流るゝ新墻河を隔ゝて敵陣。川所々分岐し又合流し、クリーク点々と光る。敵は河の右岸に進出し居れり。東方は低き松林の長い陵線幾筋。三中隊と二中隊の境界あたりより地形錯雑甚し。又赤はげあり、緑草の美しきあり、松の茂れるあり、長きあり、とがれるあり。ここより中隊本部まで約一里。松山をこえて来るなり。敵方は向ふ上りの平地から丘陵地となり、漠々とひろし。

白きうす雲点々。よけい暑いやうなり。アンペラから洩れる光の丸い点々の斑点、わが仰臥せる全身に出来て面白し。風かるくうなりてアンペラをゆすりつゝ下をくゞりぬけて行く。東枕なれば皆に洞庭湖を望む。この山緑に燃ゆるごとし。かゞやきあつげなり。黒い蝶室をかすめてとべり。下弦の月紙のやうに白くかすかに左中天にあり。

遂に一発も放たず無言の威力を示し、しかもいきなり、図に乗つた敵の真向から野砲弾を打込んで、又山は沈黙をつゞけてゐるので、敵もその後沈黙してしまつた。自分はまだ刃向ふといふほどの敵に合はずじまひといふ不思議な縁をもつ。兵に言ひて笑ひつ。敏子よ、よき日なり。

十二時。日、中天に近く、アンペラの下かつかつする。昼食平げたり。青胡瓜を一昨日より食ひつゞく。甘みあり。醤油をかける。自分は梅干(梅干半樽ほど申受けありたれば)をくふ。当番之に白砂糖をかけたるがうまし。胡瓜を梅干の汁にひたして食ふことあり。一汁は味噌又は醤油に、冷凍鰯の焼いたのの煮つけ、中隊からも当番が携へて来たが、ここにも二匹おいてあつたので御馳走が昨日夜までつゞいた。外に、あらめ。缶詰の昆布、にんじん。今の昼食にはあらめと乾野菜としての大根の切干の汁。これに例の旅行用の粉かつをゴマなどの混合ものをふりかけ。熱い茶。

さつき糧秣五日分と乾野菜。缶詰運搬し来り、兵之を運び上る。十一時五十分より斡候有資格者、下候志願者七名山を下る。一、精神態度服装行動すべて帝国軍人たらんにあり。二、先任上級者への言語態度について訓示して出発せしむ。

鳶又悠々と浮みめぐる。熱風の上に。

内地は今日より入梅なり。

暑き日中日(ひる)中になくは郭公。

午後二時、快い山頂の夢よりさむ。まだ太陽は中天にあり、この二時間少しも動かないやうな気がする。枕を直して又寝たが眠りは足りたのだ。岩くづの上の荒莚の上に仰臥するのだが、実にそのごつ〳〵した感じがよい。湿しき衾なり。しんと山背の緑がもえる。虻、蠅の羽音。暑い空気をすばらしい速度で切つて往き廻つてゐる羽音はいい。室も焼けて白く燻つてゐるかと思ふほどの白いうす雲が東北の空の一部に刷かれてゐる。もう夕方と明日の水汲の用意に兵たちが三々五々銃をもつて、天秤、バケツ、桶、飯盒など携へて下りて行つた。が、そのざはめきさへ聞えぬかと思ふほど、しんと焼けつゝある。日蔭の自分からはなれぬ蠅がある。風は吹きやまぬ。涼しい。アンペラがかさ〳〵ゆれ、枕下近い所

の日章旗のはためきもきこえる。敵も黙してゐる。腹のいたみ今朝の便通後はよし。行けばまた粘液だらうが、下痢どめの薬がきゝすぎて通ぜぬので、きづ所にふれぬか。しかし、そろ〳〵催してきた。目がさめるといけない。いたみ出してきた。一ついつて来よう。急勾配を下りて、いつものやうに岩を起し、その穴に排便す。かたまりのやゝ大きなるを例の如く灰黄色の粘液多くともに出づ。血まじれり。蠅たちまち集りてうるさけれど、敏速なるに、余り敏速なる、目的求追のはげしさ、愉快にも思はる。蠅ごと焼石にて叩き埋め、靴さきにて岩土少し蹴かけたり。ついでに腹を太陽に五分照らす。われを見てか遠くよりこちらへ銃声一発。とにかく、よく〳〵射つ奴等なり。アンペラ小屋を西に傾く。日蔭を多く取らんためなり。これで夕方まで大丈夫。鳶。蠅。太陽中天をすこし動けるか。三時すぎ、兵ら鉄条網の増張をはじむ。丸太をとがらす鉈の音が北の登り口のところ。協力して打ち込む音が南の陣地の方。——と思つたが、起き上つてみたら、やはり上り口の方なり。風。かけ声、素朴に力みちたり。あゝ岩層の山肌にうちこむ地ひゞきの快さ。

智慧（昨日作れる）

翁の空を翔んでゐた鳶がながれ寄つて
山の背に浮かんだ　私は岩の上で
翼のみ翔つて　物言はぬ鳶に
私の視線をなげかける
ああ　ここはうるさき小鳥たちの
寄辺なき岩肌の草山
荒れた草かげに巣営れる雲雀さへ
歌ふ時は山からはるけく飛び立つて歌つた
私は此の龍の背の如き山を視巡ぐり
道なき足もとの草々踏み行きながら
勤務の七日まり警備の暇々
これら山の草々どもを　絵描き暮さんと
ふとも堅くちかつた
第二日朝展望哨所より視察するに
敵は我に姿露しつゝ麓の村々へ兵をくり
出してとりつゝみつゝ
迫撃砲、小・機銃鳴りはためかして
遮二無二と山を射ち来つた
私は兵に一発だも応射せざらんやう厳命し
兵は陣地に堅く警戒のみ怠らなかつた
私は山頂の一角なる　私の位置に帰り
岩片所狭く散らばれる山肌に背骨いたく

中国古典文学大系17
唐代詩集上
田中克己・小野忍・小山正孝
編訳

中国詩史上の最高峰たる李白・杜甫の二詩人を、とくに唐代詩集上巻として一巻にまとめ、その代表作を網羅した。苦難に満ちた一生を、李白は人間的に杜甫は社会的に詠いあげて、われわれの胸にせまる。その高い香気を失うことなく、現代詩人の新しい感覚による口語訳を完成した。嘗て『海潮音』『珊瑚集』のあらわれた感激を、ここに再現するであろう。

￥1,400

東京都千代田区四番町ノ四番地
振替・東京　二九六三九
平凡社

仰臥して
唯碧落を漠々とながむれば
日は荘厳なる沈黙もてうつり行き　星づく夜将たひろごるを知つた
なべて言語らざるも　千載の彼方に
沈黙の言葉は賢き人の知るといふこと

帰国

沢田閏

ヨーロッパはどんなにいいところか知らないけれども
妻よ
もうおれはおまえのもとに帰ろう
パリはとてもすばらしいところだけれども
子供たちよ
おれは　おまえたちのいるところに帰ろう
おまえたちのところにもどって
おまえたちを一生けんめい育てよう
日本でまた　コマねずみのように走りまわって仕事をしなければなるまい
子供たちが大学を出るまでは
死なずにいて

反歌（古今和歌集巻第十一、恋二）

高遠なるかな——と感に堪へざりき
敵は宵からふとしも鳴りをひそめ
一夜山は深い眠りに足りて静かな朝を迎へた

一生けんめいに働こう
毎日　一生けんめい日本あての荷物を作っている
一〇キロずつの小包を毎日ひとつずつ作っては
近くの鉄道小荷物扱い所に運びこむ
妻や弟や　いつもおれと腕を組むようにしておれを助けてくれた君たちが　いまは身近にいないから
おれはいま　時々は　アルマニャックやブドウ酒など　酒の力に勢いをかりて
濃紺のジュータンの上をはいまわるようにして荷物と格闘している
自分で自分に　思わず「エイエイエイ」と大きな声でかけ声をかけている
おれはいま
よほどきつい顔をしているらしい

あさぢふのをののしのはら忍とも人しるらめやいふ人なしに
吉野川いはきりとおし行水のをとには立てじこひはしぬとも

よみ人しらず

行きつけのレストランに行っても
なじみのギャルソンたちは　遠く退いておれに声もかけない
足のすんなりと白く伸びたパリの少女たち
胸が丸く高く突きでたパリの少女たち
ミリタリー・ルック
パンタロン・スーツ
そして金具のいっぱいついたショルダー型の皮製のハンドバッグ
つまりは固い服装のなかにやわらかい裸身をむきだしに包むことを好むパリの女たち
しかしもう　おれは君たちとは無縁の存在だ
おれは日本へ帰る
帰ることの用意にいそがしい
エイ　エイ　エイ

伊東静雄研究(九)

小高根 二郎

3 卒論に秘められた運命

静雄が卒業論文で正岡子規と取り組むことになったのは、これまた故里の負い目の一つの、余波のようなものであった。というのは、故里出身の薄幸な先達・野口寧斉がすでに子規と取り組んでいたからである。

もともと寧斉も子規も慶応三年の生れで、ともに当時にあっては不治の病の床にあって、母と妹に看護されつつ文学に執念した運命も同じであった。しかも、その文学の内容も、互いに相似 対比される種類のものであった。

「試みに、俳人乃至は歌人としての子規を漢詩人としての寧斉に対墨せしめ、子規の俳話を寧斉の詩話に比し、小説をも含めた子規の文芸評論を寧斉のそれに比し、子規の評林休の俳句を寧斉の『韵語陽秋』に比し、余技としての子規の漢詩を寧斉の聯珠・短歌に比し、『春色秋光』・『俳句と漢詩』・『水滸伝と八犬伝』等に窺われる比較文学者としての子規を媒体として数多くの仕事を遺した寧斉に比し、俳句・短歌革新の指導者としての子規を撰者として漢詩の普及に努めた寧斉に対比させて見るならば、両者余りにも酷似し、その内容に於ては一長一短、相頡頏して譲らぬものがあることに、更めて驚くであろう。」(昭和四十年一「文学」十月号、中村忠行「正岡子規と野口寧斉」)

この相似た両者が論戦をするにいたったのは、子規の挑戦によるのであった。つまり、「松蘿玉液」中で、彼と同じく新聞『日本』に拠った漢詩人本田種竹の「月瀬看梅」と題する詩に関連して、「余未だ曽て其梅花の精神を見るに驚かずんばあらず。余は大胆にも左の断定を下さん、曰く古来(我邦と支那とを問はず)梅花を詠ずる者終に種竹の右に出づる者なしと。此点に於て青厓湖村も種竹に及ばざる遠し。況して槐南寧斉の如き人情人事に偏する者恐らくは良工苦心の処を知らざるべし」(明治二十九年四月二十七日)と、やったからである。子規・種竹は同じ新聞に拠り、同じ根岸在であり、同じく写実を詩精神としているのであるから、いさゝか馴れ合いの感情が動くのは当然だが、日本中国を通じて梅を歌わせたら一番……という子規の表現は明らかに過褒である。例の蕪村過褒の表現に似ている。それに森槐南をやつつけたのはいいとして、弟子の寧斉まで引き合いに出すまでもなかったのだ。特に攻撃理由である「人情人事に偏す」というのであれば、当の子規・種竹の馴れ合いもそれに当る。ただ槐南が勢力扶植のため「幇間的に大臣長者を取り込」んだり、「悪詩に諛評を呈」したことも時にはあったであろう。現に寧斉なども、自ら撰者であった『百花欄』には、元帥・山県有朋に寄せた「奉天詞」を掲げたり、元城主の裔である男爵・諫早家崇の悪詩なんども掲載している。しかし、これしきの人情人事は詩界の常套に類する。

当然のことながら寧斉は子規の挑戦に対して応戦をした。種竹を擁護する家庭事情は許されるとして、「古来…種竹の右に出づる者なし」という過褒は滑稽であるからいいとして、許しがたいのは「槐南寧斉の如き云々」の放言であると、『読売新聞』で応酬した。その後も二三次の論戦があったが、調停者がでたので、大人気ないとみて寧斉は筆をおさめた。当時にあっては寧斉の盛名に対し、売出し中の子規の知名度は遠く及ばなかったからである。

子規は晩年…寧斉も彼と同じく病臥の身である事実を知って、過般の若気のいたりをいたく恥じた。人を介して詫びを入れた。「老兄近時御臥褥の由、文人第一の不幸御心中御察申上候。僕曽て老兄を評するの言、其後老兄の作を見て後悔不少候。老兄の技倆に付ては、到底僕等門外漢の測り得る所にては無之…」と懺悔したのである(明治三十四年十二月)。この詫びを入れた子規は九ケ月して没するが、彼の死を知った寧斉は「文壇第一の不幸ぞと我等に同情を寄せられたる子規子は逝かれ候。……屍骨は古寺の中に朽つる時あるも、其姓名は其事業と与に永く天地の間に留まるべきこと、固より我等の贅説するを待たず候」と敬弔の意を表したのであった。

中村忠行論ずるところの、この子規と寧斉の因縁は恐らく静雄は知らなかったであろう。因縁は知らなかったであろうが、寧斉が種竹過褒で子規を攻撃したのと全く同じく、静雄は蕪村過褒の反論で卒論「子規の俳論」の発想を得ていることは、なんとも不思議な運命である。

即ち、静雄は有名な子規の芭蕉酷評と蕪村過褒に主題を置いているのである。その酷評と過褒の接点の裂け目から、子規の魂胆をえぐり出そうというのである。「芭蕉の俳句は過半悪句駄句を以て埋められ、上乗と称すべき者はその何十分の一たる小数に過ぎず、否僅かに可なる者を求むるも寥々星辰の如し」

芸術選奨受賞記念出版

京は人を賤うす

中谷孝雄

「若き日の詩人」にみられる不羈にして清冽な青春性、「才女の運命」にみられる女心の匂い立つ艶麗さ――それらの忘れ難い作品のいくつかが、ここに一本にまとめられたことは、私自身の喜びでもある。作中の人物の人間感情が、これほど馥郁と湧出してくる歴史小説は他にない。私たちがこれらの作品に深い酔いを覚えるのは、一に作者自身の、人間と文学の清韻によるものだろう。従って読者に甘美な浄化作用をもたらすのである。

伊藤桂一

¥740

目次

京は人を賤うす　敗者の歌
才女の運命　妄執　若き日の詩人

東京都千代田区神田神保町二ノ二一
振替・東京一四八〇二二番

皆美社

太郎

浅田 二三男

(七)

青カビ白カビ
黄カビ赤カビ
いろんなカビがいちめんに生え
重い雨が一日中ふり続く梅雨になった
田の草とりに追われて
ごはんを持ってこなかったが
今日きてみると
カビがいっぱい生えている
太郎よ
見捨てたのは僕だと思っているだろうが
僕はお前に見捨てられた人間だ
言葉の通じない世界では
愛情も通じないのか
そのくせ僕は
言葉の通じない人たちのなかで
愛情もなくくらしている

いえば、蕪村は子規を包容する詩人であって、子規が見ただけの詩人ではないということである。ともあれ子規は、蕪村から悟入したこの取材の広さ、取材の視覚的明瞭な精細複雑な描写を、彼が率いる新派俳壇の指導原理にしたのである。が、この指導原理は、俳句の本質に触れたというよりも、むしろ俳壇革新という啓蒙的、歴史的な意義を持つものである。

これを要するに、四百字詰原稿用紙で五十枚の卒論を、静雄は次のように結論している。

「当時の月並俳壇は子規の言ふ如く『理想の弊害』に満ちみちてゐるものであった。古今集序以来の心を種として物につけてそれを言ひ出すといふ一種の精神主義、主観主義は、日本文学思想の根本をなすものであつたことは前にも述べた。しかして天保以後の俗俳諧師達は全くこの主観主義の愚なる誤れる継承者であつた。彼等に於ける主観の表現といふことは、芸術的直観の象徴的表現の意味ではなくして、低級鄙俗なる世話的な目を以て人事自然をみ、その穿ち、譬喩、教訓さもなくばそれに対する感情の概念的抽象的な曝露にすぎなかつた。従つて、子規に於てはまづこの芸術的主観の真の意味を鮮明にすることが俳壇革新の第一着手でなければならなかつた。彼は主観に就てかく言つてゐる。

〔主観的なものに二種あり、一を感情的のもの、一を知識的のものとす。前者は文学に属すれども、後者は文学に属せず〕（『松蘿玉液』）

この言は正しい。芸術的主観の真の意味は、ある物象を知識によつて抽象し、『有機的な統一を無機的にかへ』部分々々を概念的に整理することではなく、それは即ち一つの物象の全体から『ある概念の殆んど言明されない様な、縹渺たる象徴的具体的な観念（イデア）』（『詩の原理』）を感じとることである。」（同前）

ここで注目すべきは、静雄はすでにこの日、七年後に「歪みたる島崎藤村」という絶大な讃辞を贈ってくれる萩原朔太郎と、無意識的に結縁していることである。即ち、『詩の原理』第四章「抽象観念と具象観念」から、「芸術的主観」の解説として、前掲の「ある概念の殆んど言明されない様な、縹渺たる象徴的具体的観念」を起用したからである。この著は昭和三年十二月に初版が出たのであるから、静雄は新本屋の店頭から買い求めると印刷インキのプンプンする頁から、前掲の文章を拾ったのだ。前述した長与善郎の「芸術の二道」などは大正十一年三月の作で、これを収録した随想集『一人旅する者』（昭和四年六月武蔵野書院刊）は静雄の卒業直後の出版であるから、わざわざ原本を古本屋から需めたのである。郷土の先輩という意識が特別に働いた証拠になる。それにしても、卒論「子規の俳論」を介して、寧斉・善郎・朔太郎と、過去・現在・未来の三界にわたる、意識的あるいは無意識的な結縁の仕方には、なにか異常なものが感じられる。それは選ばれた天才者だけに与えられた運命か、それとも予兆である何かであると言えば、過言であるだろうか？

伊東静雄研究文献目録

(一)　小川和佑編

凡例

一、本稿は伊東静雄に関する研究文献を詩人論・詩人研究・雑誌特集号を中心に作製したものであり、それらを「一　単行本」「二　雑誌特集号」「三　鑑賞・講座論文」「四　単行本所収論文」「五　雑誌所載論文」「六　書誌、その他」の諸項に分類した。

二、表記に当って『』は図書、「」は雑誌であり、単行本所収論文では表題は「」を用い（『　』）で書名・発行所名・発行年月日を明記した。巻号数、発行年月日等は数字をもって示してある。

三、本稿では「事典」類、「娯楽雑誌」「学習参考書」様のものは記載しなかった。

四、紙数の関係で割愛せざるを得なかった論文も多い。御諒承あれば幸いである。

五、本稿作製に当っては拙稿「伊東静雄研究文献考」「伊東静雄　その書誌的研究―」を基本とし、杉本秀雄編「伊東静雄研究文献」小高根二郎編「伊東静雄文献」を参照した。付記して、杉本、小高根両氏の学恩に謝意を表したい。

一　単行本

小高根二郎「詩人、その生涯と運命」（新潮社・昭四〇・五）

二　雑誌特集号

「コギト」第四四号一月号〈『わがひとに与ふる哀歌』出版記念号〉（昭一一・一）

萩原朔太郎「『わがひとに与ふる哀歌』―伊東静雄君の詩について―」

中谷孝雄「お礼にかへて」

青木敬麿「哀歌に」

中島栄次郎「感想」

神保光太郎「美はしき贋貨」

山村酉之介「小見」

保田与重郎「伊東静雄の詩のこと」

百田宗治「人間」

「文芸文化」第二四号六月号〈『夏花』出版

桂の浜

吉本青司

嵐の海を見たいと思うことがある
なぜだか知らないが
そんな時　一人ぶらりとバスに乗り
龍王岬の突鼻に立つ
波しぶきを浴びて
巌上の松の木の下にたたずむ
濃藍の衣服を脱いで　褐色の膚もあらわに
海は　陸を目ざして押し寄せる
雷神の轟とともに
白く牙を剝いて巨巌をのむ
ハープのように松風が心音をかなでる
この世のすべての些事は
この一瞬に生気を失い
荒々しく降りかかる驟雨に
こころの汚濁は洗い落される
陽のこぼれ散る展望台に立つのは
ジーパンを穿いた若者たち
激越な海のことばを通釈しようとして
彼らは　早くも絶句してしまう
茫洋の潮にゆめを寄せ　ひとは幾度か
悲悼する波露に重い骨を埋めた
帰る波
行く波
送られる波
迎えられる波
垂れこめた暗雲の下に
波は千変万化して
須臾も休息することはなかった
ジーパンを穿いた　オトコ　オンナ
時代の青春たちは
荒ぶ賓客の前に
冒険を競うことを打ち忘れ
敬虔に今夜の泊をもとめる
はげしい形象の海に　ふしぎな均衡と安ら
　ぎを垣間みたとき
若者たちは　精霊となる
カツラの浜
そして　勝浦の浜が
桂の浜となった時
ひとはここを月の名所と呼んだ

記念号〉（昭一五・六）
保田与重郎「詩集『夏花』のこと」
山岸外史「夏花集に贈る歌」
田中克己「技群の詩集」
池田　勉「伊東さんの詩」
「文芸文化」第五〇号八月号〈伊東静雄・田中克己透谷賞受賞記念号〉（昭一七・八）
清水文雄「祝詞にかへて伊東静雄氏へ―」
栗山理一「透谷賞の詩人たち」
池田　勉「詩人伊東静雄」
「河」六月号〈伊東静雄追悼号〉（昭二八・六）
小高根二郎「伊東静雄と望郷」
市川一郎「伊東さん」
酒井小太郎「伊東静雄君に就いて」
「詩学」六月号〈伊東静雄追悼号〉（昭二八・六）
庄野潤三「伊東静雄先生のこと」
長江道太郎「いまは遠い反響からも還ってこない―伊東静雄氏のおもひでに―」
蒲池歓一「旧友伊東静雄」
「祖国」七月号〈伊東静雄追悼号〉（昭二八・七）
佐藤春夫「悲しみは憤に似て」
清水文雄「挽歌」
池田勉「伊東静雄さんのことども」
百田宗治「古い『伊東静雄論』」
伊藤佐喜雄「あの日の詩人」
永瀬清子「哀悼」
前川佐美雄「伊東静雄を憶ふ」
三島由紀夫「伊東静雄氏を憶ふ」
富士正晴「伊東静雄のこと」
林富士馬「思ひ出」
庄野潤三「『反響』のころ」
西垣脩「朝顔」
牧野径太郎「悼み」
石森拓雄「伊東先生の思ひ出」
池沢茂「詩人とサラリーマン」
上村肇「伊東静雄の故郷と手紙」
谷口卓男「ノート」
栗山理一「断片一束」
長尾良「『わがひとに与ふる哀歌』のころに」
保田与重郎「伊東静雄を哭す」
伊東花子「病床記」
小高根二郎「霊信、伊東静雄へ」
「詩と真実」九月号〈伊東静雄追悼号〉（昭二八・九）
富士正晴「伊東静雄との交友」
杉山平一「伊東静雄氏を思ふ」
飛鳥敬「墓辺に―伊東さんのこと―」
田中克己「最後の一言」
港野喜代子「わが家はいよいよ小さし」
「果樹園」第三号〈伊東静雄追悼号〉（昭三一・三月）
池沢茂「テニスをする詩人」
西垣脩「教室における伊東先生」
森亮「ある夏の思ひ出」
田中克己「恋愛論その他」
福地邦樹「最後の伊東先生」
上村肇「伊東静雄詩碑」
「果樹園」第三八号〈伊東静雄七周忌記念号〉（昭三四・三）
栗山理一「追想」
清水文雄「詩人と口笛」
美堂正義「奇縁」
堀之内歴「覚束ない追憶」
田中克己「その一言」
池田勉「薄情」
庄野潤三「思ひ出」
島尾敏雄「伊東さんのこと」
森亮「早春」
大東幸子「美しく大きな魂」
池沢茂「日のあたるグランド」
福地邦樹「療養中の伊東先生」
「果樹園」第五六号〈伊東静雄全集上梓記念号〉（昭三五・一〇）
井上靖「伊東静雄について」

三好達治「伊東静雄君」
三島由紀夫「伊東静雄全集推薦の辞」
江藤淳「伊東静雄全集を推す」
「人間」第八号〈伊東静雄研究特集号一〉（昭三六・七）
「CATHEDRAL　伊東静雄について」（藤村青一・平賀利之、三沢浩二、槇皓志、松田幸雄、和田徹三、古川清彦、中島可一郎、安永稔和、馬淵美意子、中野嘉一、吉村英夫、古川礼子）
小高根二郎「哀歌の傍証」
小島信一「伊東静雄」
港野喜代子「記憶の断片から」
中村光行「伊東静雄研究ノート(一)」
「人間」第八号〈伊東静雄研究特集号(二)〉（昭三六・一二）
鳥巣郁美「水脈に棲む葦」
坂本定子「伊東静雄の詩」
永瀬清子「伊東静雄を仰きみつつ」
中村光行「伊東静雄研究ノート(二)」
中村光行・山田博之・鳥巣郁美・富士正晴「座談会・伊東静雄の断面」
「果樹園」第一〇〇号〈伊東静雄特輯〉（昭三九・六）
野間光辰「西鶴臨講会と伊東」
堀内薫「学生時代の伊東」
織田喜久子「倦んだ病人」
福地邦樹「伊東静雄の晩年の詩想」
浅野楢英「詩人、伊東静雄の『全集』が示すもの」
飛鳥節「伊東静雄とリルケ」
「本」第八号〈特集・伊東静雄〉（昭三九・八）
小高根二郎「伊東静雄の悲恋と実証」
鈴木亨「伊東静雄三題」
那珂太郎「朔太郎と静雄」
川副国基「小高根二郎の静雄論」
西垣脩「朝顔」（再録）
保田与重郎「伊東静雄の詩のこと」（右仝）
頴原退蔵「伊東静雄君と詩集夏花」（右仝）
堀内達夫編「伊東静雄書誌」
「果樹園」第一〇九号〈伊東静雄特輯〉（昭四〇・三）
米田一彦「同僚としての伊東静雄」
原田良祐「同病相憐れむの記」
中西靖忠「同僚としての伊東静雄」
中川邦夫「乞食のノボリ」
石浜恒夫「ある伊東静雄」
臼井喜之介「伊東静雄先生のこと」
中石孝「伊東先生のこと」
「果樹園」第一一九号〈伊東静雄新資料〉（昭四一・一）
「日記」「沙弥満誓の歌」
「虎に騎る」「蓮田善明宛書簡」
「バルカノン」へ特輯・雑誌「文芸文化」（昭四二・二）
保田与重郎「回顧と感謝」
斉藤清衛「三十年前の思い出」
栗山理一「『文芸文化』創刊まで」
池田勉「その頃のこと二つ三つ」
南蛮寺万造「『文芸文化』の創刊のころ」
田中克己「『文芸文化』とわたし」
松尾聡「『文芸文化』と私」
富士正晴「『文芸文化』とわたし」
坂本浩「『文芸文化』と私」
林富士馬「『文芸文化』の思い出」
丸山学「『文芸文化』のこころ」
野地潤家「恩頼と学縁」
浅野晃「蓮田氏の思い出」
荒木精之「蓮田善明のこと」
小高根二郎「蓮田善明の死因」
蓮田晶一「父・蓮田善明」
塚本康彦「蓮田善明『鴨長明』頌」
神谷忠孝「蓮田善明『予言と回想』」
古田博保「文芸文化と三島由紀夫氏」
六百田幸夫「文学は対話である」
美堂正義「『大陸遠望』の回顧」
末田タカヱ「回想」

果樹園　一六五号　昭和四十四年十一月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価四〇円　送料二〇円

果樹園

第165号

陣中日記（八）　蓮田善明
ピアニストのマドモアゼル・マイア　沢田閏
ロセッティ小曲（九）　森亮
伊東静雄研究（十）　小高根二郎
なかの橋　浅野晃
かまきりと蟬　相浦美智子
太郎（九）　浅田二三男
スマトラ記（九）　田中克己
愛の言葉　福地邦樹
朝夕　吉本青司
英訳「百千の…」　伊東静雄　宮城賢
伊東静雄研究文献目録（二）　小川和佑編

陣中日記（八）

蓮田善明

四中隊より鉄線受領に来た下士より炎天にて情況話し合ふ。四時四十分。かん〳〵照つてゐる。日もずつと高い。

小さな虫、よく俯ひつく。目にとび入らうとするのもあり、刺さうとするのもあり、ただとまつてみるといふのもあり、日かげもとめてくるのもあり、汗くさい肌のにほひに恋ひよるもあり。

五時、東方はるかな山の方に郭公なく。暑さ落ち涼しき夕の扉ひらけたりと告ぐるものの如し。

風西、西南より吹く。

八時、日雲の彼方ながら、全く湖水に没す。うすぐもり。風南より陵線をこえて来る。涼し。つよし。

夕食前、中隊本部より下給品の卵、タバコ、酒、豆腐を兵持ち帰り、糧秣とともに分配せられ、夕食には早速、豆腐と野菜の汁、微発の山羊の煮つけ、胡瓜、梅干に漬けし胡瓜、それに当番の買ひ来し支那酒。熱い茶、めし（めしもうまい料理の一つなり）。うましうまし。支那酒は少しにごつて上等品ではないが、あの味はやめられぬ。当番は尚青あづきを拾ひ来り居れり。明日のたのしみとす。

ああ一人暮れ終らんとす。山上、各分隊夕食後思ひ〳〵にくつろげり。今夜は事無きか。谷も山もひとしく暮靄の中に息静まれり。風つよく涼し。ペンの字も薄明の中に辿る。

夜星明かならず、陣地一巡す。今日は殆ど一日中寝てゐたのである。夜風に涼み、眠気しきり。気づいて掩蓋に入りて就寝。速射砲小隊長の見習士官酒に酔ひてくるしげなり。とび出して吐いたりしてゐたやうである。蚊一二匹刺す。蠅が天井を羽をこすり合せつゝ歩き廻るのが気になる。衛生兵の生一等兵ゴソ〳〵やり、（この胃腸が実によく鳴る。気持わるいくらい。）蚤がゐたとて又ゴソ〳〵、何やらゴソ〳〵やつて、松野軍曹に叱らる。当番の佐藤も少し酔ひたるごとし。夜中に寝ぐるしげにバタ〳〵と暴れる。床やゝしめり気なり。十一時、生の電話声に目をさませば、三中隊よりの電話にて異常をきゝ合はすなり。余取りつきたるに、A軍曹なり。なるほど銃声きこゆ。しかしかすかにて方角も思ひあやまり、四中隊の方だらうと答へて心配するな、と寝ようとすると、志垣上等兵が分隊員をつれて来ましたといふ。何だといへば、銃声がしたら予備隊として来いと命ぜられてゐたからといふ。アンペラの簾をあげて出ると、なるほど、この正面だ。なんだこゝだつたのかとをかしくなる。大したことでもなささうだが、兵の手前、とにかく武装をととのへるところへ松野軍曹（いつのまにか起きて出て第一分哨へ出てゐた）が帰つてきて、こちら

果樹園　一六四号　昭和四十四年十月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価四〇円　送料二〇円

蓮田善明とその死

小高根二郎

敗戦に臨んで神国日本の終焉を象徴したのは、「人間宣言」によって神国のきざはしを降り給うた今上天皇ではなく、逆にきざはしを昇って扉を閉ざして雲隠れた、影山庄平翁やわが蓮田善明であった。

内容

第一部
「豪僧の父・慈善」〜「『万葉末期の人』としての家持論」に至る十七章

第二部
「応召と賜死の『大津皇子論』」〜「生還の惑いと『方丈記』」に至る十五章

第三部
「遠世の願いと阿蘇行」〜「死・それから」に至る二十章

序・三島由紀夫
年譜・清水文雄

11月刊予定

東京都千代田区神田小川町二一八
振替東京四一二三
筑摩書房

山川京子「花しづめ」（長歌）
アンケート（三枝康高、長谷川泉、磯田光一、杉浦明平、荒正人、大久保典夫、西田勝、竹内好、江頭彦造、高田瑞穂、山岸外史、保昌正夫、嘉納とわ、大塚雅彦）
清水文雄「恩頼記」
隠岐国彦編「文芸文化・資料」（文芸文化叢書解題・文芸文化関係年表・「新文庫」刊行書目・「国文学試論・同批評篇」総目次・「文芸文化」総目次）
「果樹園」第一三三号〈一五回菜花忌記念〉（昭四二・三）
伊東静雄「新資料、感想・蓮田善明宛書簡四通・ざれ歌（詩）、句」
「果樹園」第一四五号〈伊東静雄一六回忌特集〉（昭四三・三）
石川勝之「伊東静雄（一）」
内田健一「思い出」
宮城賢英訳「曠野の歌」
「果樹園」第一五七号〈静雄一七回忌特集〉（昭四四・三）
伊東静雄「蒲池歓一他宛書簡一二通」
小高根二郎「伊東静雄研究（三）」
宮城賢英訳「夜の章」

編集後記

八月十七日。北根津さいはての電坊温泉にいってみた。ここまでくるとさすがに緑が違う。まだ青春の色が残っている感懐だ。紫のクツの花影がなんともいえず懐しかった。

十九日。熊本の水前寺共済会館で、丸山学氏のきもいりで催された蓮田善明二十五回忌追悼会に出席した。けなげに遺志を果した敏子夫人。立派に成人した三子——小児外科医・医博の晶一君。土木技師の新夫君…。この遺族へ、黄菊白菊に囲まれた善明の写真は微笑みかけているようだった。中学時代の「ゴムノキ」同人の板井一明氏、高師時代の「空」同人薄池正紀・正夫兄弟、山崎貞士氏。第二次応召時の大隊長・秋岡降神氏、連隊副官・鳥越春時氏。遙々と東京から駆けつけた今井信雄氏。広島の清水文雄氏。これらの諸氏の懐旧談はまたとない参考になった。三島由紀夫氏からは菊と百合の大きな花篭がそなえられた。その百合の花容に鼻を近付けた僕はおもわずその隠情の志にむせた。会が果てゝから太二君の運転で神風道に関係の深い鎧田の祚築神社と、山須火因縁の看取観音に参った。二日の帯在だったが、蓮田家からいたゞいたかずかずの厚意に感謝申し上げる。

二十日。帰阪した夕に、十月一日から東京へ転勤する内示をうけた。五月山の山陵が眺めやられるこの書斎に当分別れを告げねばならぬことはつらいが、静雄・善明の頑影にはまたとない好機であろう。発行所は現在のままだが、編集所を左記に変える。（O）

果樹園　第一六四号（毎月一回一日発行）
昭和四十四年十月一日発行
印刷所　大阪市東住吉区桑津町三の十八　元市印刷株式会社
編集所　東京都中央区八重洲三ノ三　八重洲口会館ビル内　ユニチカK・K・気付　小高根二郎
発行所　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社
定価　四〇円　送料　二〇円

を射つてゐるのでなく、横射ちのやうだと報告する。さうだ、銃声もさうきけばこちら向きではない。とにかく第一の方へ行つてみると小崎伍長が、同じこといふ。暫くゐてすぐ帰る。例の如く臆病支那兵の暗鉄砲からの同志射ちと覚ゆ。志垣の分隊も宿所へ帰らせて寝る。中隊よりうるさく電話くる。松野に「敵の弾より、中隊からの電話の方がうるさくて眠れませんと言へ」と言はせようと思つたが、うつら〳〵寝た。佐藤の眼鏡外した寝顔がどうも見覚えなく感じた。生は又苦情いはれて外に出た様子。暑いムッとするので、垂をあけさせ、編円扇を使ひ、蠟燭を消して寝る

六月十三日

目がさめると五時半。すでに外仄明し。思ひ出してすぐ起きて出る。見習士官が一寸目をさましたが、他は眠り入つてゐる。出てみると、石崎上等兵ノ分隊がもう武装してこちらへ上つてくる所。いそぎ用意して先に立つ。国旗をもつて行く。展望哨はもう暗いうちに先へ出てゐる。傾斜面を散開して左へ下つて、松のかげをこの山の脚の一つなる陣地につき、藁人形を作らせ、偵察をして人形を立てたりして下り、清流（?）で顔を洗ひ、前の橋まで出てみて返る。兵ら、大きな胡瓜を三四十本見つける。生胡瓜を食はせて帰る。甘味品欲しといふ。八時「山下の一本は山上で五本の値うちあり。皆の御苦労、経験が皆の値打となる。今日の任務は十分満足に果した。終り」廠所に帰り、もう一べん洗面。体をふき、シャツを洗ひ、洗面器の水土色ににごる。朝食。胡瓜の梅干漬。卵。干野菜の味噌汁。やゝぬるくなつた茶。小粒あづきの飯。食後当番は天幕を二つつゞけて日蔽をこしらへてくれた。昨日のアンペラでは風がつよく昨夜吹き倒れたまゝ、今朝の風では、煽り倒してしまふ。今日のテントの日蔽はよく出来、東方にアンペラの小さいのを立てたので、日蔭が三間位の長さに出来、下もいい工合に石ころ少く、見習士官を呼んで二人で涼む。カンカン照りつける日。当番と生は今日は早く下りて行つた。風呂をわかすといつたが、下りて入りに行くのが大変だからととめてはおいたが。今朝の胡瓜、石坂分隊から大きいのを数本当番に分けてくれた。九時には勤務と廠所を交代し終つた。暑くなるばかり。今日は速射砲も鉄條網を少しやつてくれてゐる。棒ぐゐを削るにぶい音。日蔭の周囲からの照り返し、かつ〳〵する。

蠅と虻の走る羽音。のど乾く。腹工合次第によし。しかし行くとやはり粘液。雲、かすかに小片の刷くがごときのみ。時折、例の如く敵の機銃小銃音。顎下の汗。兵たち、どこでも蚊帳（四本棒に吊り、昼は上に裾をまくり上げて日覆とす）の下にぴつたりと寝てゐる。

すつかり眠つて、戦地の夢から、敏子の夢をみた。敏子に何かその時の状況を話してゐるうちに、戦地だつた、夢だつたと目がさめた。よく眠つたと思つてゐるところへ足音がして、下に下りてゐた兵たちが上つてきた。暑い真盛りで、燃える日光直射の下に、焼け燻ゆるかと思ふやうに照りつけられつゝ、チョコレート色の顔に汗と、重荷に堪へた力みで燃えるやうに上つてきた。敏子がお白粉をへんに厚くつけてゐた。しかし変らぬ心あふれた顔だつた。何か植木方面で演習みたいな戦争をやつてゐた夢らしかつた。見れば十二時前五六分。よく眠た。天幕の下さへ空気が湯のやうだ。

さすがの当番の佐藤もシャツを頭から被つて中食の準備してゐる。昼食、生タマゴ、干キャベツとあらめの味噌汁、干キャベツと胡瓜の醋物、支那酒一杯。佐藤が焼けどでもしさうな風で今日ばかりは堪らないといふ風であつ〳〵して日の下で大急ぎ、食後アンペラを張り増してその下に生と横になる。熱いので佐藤は蓆さがしもやめて、唐米袋の切れに寝ようとするのを、大島育ちの生が、米かますを切つて蓆として布く。それから、冗談をいつたり、アイスケーキの話、歌。松野軍曹はむれるやうな壕の中で雪話についてゐる。御苦労なり。ここからみると洞庭湖、新

ピアニストのマドモアゼル・マイア

沢田　閏

初めて君に紹介された日
君はとても小粋だった
ソルボンヌ大学近くのサン・ジャック通り
　の中法楽園という中華料理の店

君の名前を
ぼくは初めコメタニと読むのかと思った
おかしな少女　マドモアゼル・米谷

きょうはパンシオンの冷蔵庫になんにも買
　いおきがないからひとりでゼイタクして
　いるのよ、とおまえは笑った
おまえは首にいともむぞうさに黒いネッカ
　チーフをまきつけていて
だからおまえは少しくずれた女のようにみ
　えた

けれども　おまえははたち
毎日毎日ピアノをたたいていて
恋人にも友だちにもわざと会わないでいたと
　いう
顔にふりかかるおかつぱの髪をふりはらいな
　がら
ひと月一〇〇フランで借りたピアノを　自分
　の部屋でひとりその鍵盤をたたきつづけて
おまえはじっと自分をたたかってきたのだ

おまえは煙草をふかす
その白い指でつぎからつぎと煙草に火をつけ
　る
そんなにふかすな、とどなってやりたいくら
　いおまえは煙草をふかす
けれども煙草をふかすよりほかに仕様がなか
　ったのよ、とおまえは言う

三年もパリにいるというのに
おまえはパリのことをなんにも知らない
おまえは　おまえの乳房が大きくなるひまも
　もたなかったのか
しかしやっぱり　おまえは日本の女

小さな体でしょっちゅう笑う
「君の恋人はどうしてる?」
「恋人さん?　別れちゃったの」
小柄な体を小さくゆすって笑う
そう言いながら
フランスを離れる日をあさってにひかえて
　おまえは少うし悲しそうだ
「なにもかもうまくいかなかったわ」

けれどもコンクールに入賞した日
東京のちちははに電話をかけ（それも、ち
　ゃんとむこう払いにしたのよ、とおまえ
　は笑った）
そのことを　かそけく応答するはるかな父
　と母とに告げながら
おまえは電話口でポロポロ涙をながしたと
　いうじゃないか

おまえの名前はマドモアゼル・マイア
マイアーリングのマイア
かわいい少女
よく笑う小さなピアニストのおまえ　エリ
　コ・マイア

墻河も水が減つてきたやうだ。二中隊方面では銃声、迫撃砲声。この暑いのに、好きだなあ。山に赤い土煙があがる。十二時——一時——二時、太陽中天にあり。天幕の目のつんだ布をチラ〳〵透して太陽の位置が見える。鳶浮べる。風も強くなくなつた。虻、蠅も余りとばなくなつた。蝶一つころげるやうに谷へ下りてゆく。この山はかげろふでギラ〳〵光つてゐる。山下は日光で紫にけぶつてゐる。風の方向が今変りつゝある。南から吹くかと思ふと北からそつとくる。自分も裸なり。とんぼが膝にとまる。

三時近し、太陽殆ど動かず。「奥の細道」のうち「甲子紀行」をよむ。本の紙バラ〳〵に乾き、火にあぶつたやうに反り、まがる。日蔽の外にとりはずし置きすてられた白い蚊張が雪のやうに乾き光つてゐる。

顎の下にあてがつておく手拭がいつかしつとりぬれてゐる。乾いた部分とりかへてあてがふ。風がとまると、すぐむれ上る地の熱い気が左右から迫つて顔も目もあけてゐられないやうな気がする。

体を起すと、蓆が黄色くぬれてゐる。皆ねてゐる。

あゝ服もこのノートも何もかも、——くつしたも、から〳〵に乾いてゐる。

籐椅子をテントの下に運び入れる。

芭蕉は説明を要せぬ言葉をもつて語つてゐる。所謂完全といふべきでない。最も不完全といひつべし。最も不完全なるものの意味を知れゝばこそ、かくも語り捨ておきたるなり。

われらの道又然らん。たゞ我行くことのみによりてこの支那の僻地文化なり。

まつぱだかになる。洞庭湖は湖と見えず、湖面は黄塵の立てる如く赭く曇りて水平線は見えず。三時をすぐ、北半の空うす雲一面に紗の如くかゝり平地くろく沈み、日照りつゝある洞庭湖は獅子のその赤毛振り立てゝ怒り駈けるごとく見ゆ。ふと、小さき微塵の如き白き羽虫テントの下に群り飛び交ひ、羽音一団となりて烈し。いつも夕ぐれに出る虫なり。とにかく今日は風が少い。兵たちそろ〳〵夕食の支度にうごきゆく。ひるねよりそろそろさめる。

四時近く、日尚中天なり。空の雲うすくなりて下界又明く照らす。風西に転ず。しかし昨日までの如く強からず、戦線も音殆どなし。又晴れて山下日光に曝されたるも、山の上に日のかげりあらはる。日四十度傾く。——四時半。虻蠅出で始む。東方遠く砲声、殷々遠雷の如くとゞろく。銃声。鳥の声も。自然の虐威やゝ衰ふるとするや、生けるもの動きは

教養文庫657

名歌鑑賞

—古典の四季—

前川佐美雄著

短歌が永く日本の詩歌の中心となり得たのは、日本人の感動を表現するのに最も適した形であつたからだ。本書は、古くは記紀・万葉・新古今から近世までの秀歌を選び、春夏秋冬に分けた絶好な鑑賞読本。

¥280

東京都千代田区神田駿河台三—五

社会思想社

ロセッティ小曲(九)

森　亮

今日に飲み今日に食らへ、
あすの命　測りえざれば。
産土神は　さかしきものか
益なしと　われにつれなし。

汝が指　黄金色さすまで
よきひとよ　汝がさかづきに
美酒を注ぎ参らせむ。
噴水の　懸かれる空に

汝が歌は　きそひて響き、
われら酔ひ、時は移らむ。
わが脣に　ながくちたまへ

よきひとよ、世の痴人は
その間にも　財を積めど、
彼のくちを　待つは墓つち。

「生の家」第七十一歌

じむるなり。われ眠気を催し来る。

「芳野紀行」よみ初め、よみ来りて眠をわする。暑い石の上を小さなばつたとび行く、愛らし。時々止まりて、後足をちゞめ伸ばし伸ばして、爪を切るやうな怪いチヨキチヨキといふ音を立てゝゐる。日傾きて更に又暑し。さへぎるものなく斜より海の如く光を地層面に満し、海水を透してみるやうに万象にぶく澄めり。すでに五時十五分。風北に転ず。しかし太陽も時のうつるを如何とするも得じ。あゝ「時」よ、おまへをいかなる言葉もておどろくべきやを知らず。たゞ驚異す。

今日下痢気分殆どなし。しかし逆にひけつの様子なり。四十分、かつこう例のごとく夕ぐれをなきそむ。雉子の声。衛生兵生、下より水くみてくる。一杯もらふ。腹にみちる。よき水、ありがたい水。石油空缶の水桶を天秤で荷ひ、水筒ももちて幾つかにくみ来るなり。山への坂すこぶる急なれば、毎日の苦労大変なり。郭公、かつこう、かつこう、かつこう、……。万物の陰翳濃くなり始む。遠く砲声大気をゆるがす。

六時、湖水は傾きかゝる日のために反照して一部銀盤の如し。日すでに光よはく、風少きも涼しき影にあり。山下紫となる。まだ服を着る気にならぬ。　(つづく)

伊東静雄研究(十)

小高根二郎

4　卒論は首席、綜合成績で三番

卒論「子規の俳論」には、審査の結果……当時としては最高点の八十二点が与えられた。この評点には、「時の主任教授の国語学の吉沢義則先生の判定であるが、それには立合の頴原講師の意見も十分加味せられてゐたに相違ない」というのが、京大で静雄の一年後輩である野間光辰の意見である。(昭和三十九年「果物園」一六月号—「西鶴臨諧会と伊東」)

ところで卒論試問に際しての頴原退蔵の次の思い出は興味がある。

「私が伊東君を初めて知つたのは、君の卒業論文の審査に当つた時である。勿論それまでにも教室で君の顔は見覚えてゐたにちがひない。だが君の名が特に私の注意を惹き、その名に当る顔がどれであるかをはつきりおぼえたのは、確かに論文審査の時からである。

論文の題目は正岡子規論であつた。その論文の出来ばえや、学問的価値の如何などについては今ここで言ふ必要はない。ただ

私は君の子規論が、一般の所謂研究といふものとして、あまりにも激しい情熱を湛へてゐる事に驚いた。しかもそれは奔放な主観に任せた煽情的な論議ではない。非常に手堅い思索の底から、抑へ切れないで湧き出す泉のやうなものであつた。」（昭和十五年七月号、顕原退蔵―伊東静雄君と詩集夏花―「コギト」）

顕原講師は、懸賞脚本で一千円をせしめて学生間で評判だった静雄を、卒論試問の日まで知らなかったのだ。それは退蔵が京都府立医大予科教授から転任してきてからやっと一年…学生たちに馴染んでいなかったせいもあるが、もともと静雄に、研究室へ近寄って、名と顔を先生に覚えてもらおうという殊勝さがなかったからだ。…にもかかわらず退蔵は静雄を卒論の首席に推輓したのである。身なりも体格もみすぼらしい書生ッぽ。初めて見る静雄が抱懐している「研究といふものとして、あまりにも激しい情熱」「思索の底から抑へ切れないで湧き出す泉のやうなもの」に打たれたからである。つまり、退蔵を打ったのは、前述した寧斉・善郎・朔太郎に無意識あるいは意識的につらなっている静雄の情熱だったのだ。沈潜しているが激しく湧き出ている異常な何かだったのだ。その何かが、学匠というより、芸術家かたぎであった退蔵の胸に響いたのである。又、静雄が引用した善郎の文章は、退蔵になにらかの反応を起させたことは確かである。というのは、退蔵も長崎県（五島）の出身者であったから、大村出身の善郎が赤の他人ではあり得なかったからだ。しかし、善郎を引用している静雄が同じ長崎県人であるとは、退蔵の夢想だにすることではなかった。ここでも静雄は運命というにふさわしい因縁を、奇しくも退蔵と結んでいるわけである。静雄と退蔵との師弟関係は、在学中よりむしろ卒業後に緊密になったということも、希有な例というべきであろう。

静雄は卒論で首席となったが、その他の科目の得点を合せ平均しても七十七点七分で、二十九人中に三番の優秀な成績をおさめた。小・中・高等・学校時代を通じて、これほどいい成績をとったことはなかった。大学で席を隣合せた学友・堀内薫の述懐も、かつての学友たちのどの静雄評価よりも高くなっている。

「大学三年になると、私は大半旅で過したので伊東と会う機会が少かった。…中略…そして、二月か三月か大学最後の授業の日に顔を出した。苦労の中に育つた伊東は、私の気ずい気ままな生き方を賛美してくれた。卒業論文は伊豆の旅の途中で書いた。一冊の参考書もなく書きつづった。芸阿弥、能阿弥の年代を間違えてあつて、この杜撰さを、審査教官の顕原退蔵先生から一つ一つ指摘して叱られた。もう一人の新村出先生は、文献寄せ集めの他の卒論と違つて独創的であるとほめてもらい穴へはいる思いがした。ところが伊東はさにあらず。貧窮の中から大金を出して子規全集を買い、その他多くの文献を渉猟し、『子規の俳論』を作製した。子規が今までの小主観俳句の月並性を排して客観写生に立つたのは俳句革新の第一段階としては正しくもあり、また効果的でもあつた。しかし、真の改革は、写生より更に進んで、直観により、自然と自己とが合一した主観的象徴俳句を樹立するにありとした。これは今日では常識的な見解であるが、当時としては卓見で、学生にして、かかる芸術の深奥にメスを入れたことは破天荒のことであつた。担当の顕原退蔵先先が激賞し卒論第一位としたのも当然のことである。」（同前）

参考までに静雄の成績カードを紹介する。

	普通	特殊	演習	論文	副科目	
文学概論	85				独乙語	77.7
国語学	72.3	70.2	65		教育学	78
国文学	82.6	79.2	70	82		
支那文学	79					
独乙文学	71					
言語学	80				平均	77.7

（注）国語学―普通講義・吉沢教授「和歌の用語」（大正十五年度）、特殊講義・吉沢教授「片仮名の研究」、沢潟助教授「万葉集に就いて」（昭和二年度）、演習・吉沢教授「日本文法」（昭和三年度）。国文学―普通講義・藤井教授「近世国文学史」（大正十五年度、特殊講義・藤井教授「袋草炭俵の研究」、沢潟助教授「古事記に就いて」、（昭和二年度）。演習・藤井教授「源氏物語」（浮舟）」（昭和三年度）。

四、乞食という渾名の教師

1 「乞食」から「虎児気」まで

静雄は昭和四年四月に大阪府立住吉中学校に着任早々「乞食」という渾名を生徒たちにつけられた。その責任は、やんちゃ盛りの中学生側にあるというより、静雄自身にあったのである。静雄は赴任に先だち、「狸」という渾名の元田崖佐校長から、「その頭だけはなんとかしなさい」と蓬髪を注意されていたからである。一説には、元田校長は静雄の例のよれよれの久留米ガスリ・袴姿をみつけると、銭のあるなしを質し、ない……との静雄の返事なので、「これで上本町でぶらさがりを買いなさい」となにがしかの銭を恵んだともいわれている。当時は背広を新調しても四十円もだせば充分だった。既製服ぐらい購う賞金の残りが、静雄の財布になかったとは信じられない。ところが静雄は酒井小太郎の古い黒背広を拝領に及んだのである。郷土の大先輩の余徳にあずかろうという根胆があった……と見ていいだろう。小太郎は東大卒業に際し小泉八雲のおぼえめでたく、シェンキヴイッチ全集を賞として貰っていた。静雄も賞こそ貰わなかったが、顕原退蔵のおぼえめで

ゐなかの橋

浅野　晃

川の流れは緩くなつたり速くなつたり
そしてきらきらかがやく
いまトラックの帰つてゆく道は
君らが毎日のやうに見てゐた道だ
おつ母さんが君ら兄弟をおんぶしたり手を
　引いて急いだのも
あの道だ
君はおつ母さんを想ひ弟を想ひ妹を想ひ
生から死を想ひ
死後を想ひ永訣の日と再会の時を想ふ
君は彼等とまた会へると考へてゐるのかね
彼等はもとのままでそこにくらしてゐると
　考へてゐるのかね
あの道はずつと先の川下で　覚えてゐるだ
　らう
広くなつた川幅にわたした橋を
しづかに渡るのだ
すでに幾たびとなくなきがらをのせた車を
　渡した橋だ
自分のつとめを知つてゐるから
だまつて歳月に堪へてゐる
夕映が空を燃え上らせる　やがてその色も
　褪せる
赤松のくらい丘をめぐつて
虫が鳴く
さつきの道をさまよひながら遠ざかる灯火
影ともつれあふ聖なるものの眉目
川の流れは緩くなつたり速くなつたり
そして逝いて帰らないが
瀬音は帰つてくる
いくたびもいくたびもくり返し帰つてくる。

たく卒論は首席だった。いや、賞なら昨秋すでに童話で貰いずみだ。背広についで、今度は令嬢百合子を拝領の段取りだ。はたしてこの俺にその資格がないであろうか？　そう自問自答しつつ彼は古背広の袖に手を通したことだろう。ところが、長身の小太郎の服は丈がだぶだぶだった。特に袖は長くて手の甲まで被った。あれこれ工夫した末、背広としては類例のない肩上げをほどこしたのであった。そのいわくつきの姿で静雄は初登校したのである。

「まず校長先生が壇のうえにあがつて、それこそ円満らしい、まんまるい、にこ〳〵した顔で『こんど来てくださつた先生は、京都帝大の国文科を出てこられた秀才で、なか〳〵深い研究をし、すぐれた教養を身につけていられる。はじめのうちは、いろ〳〵なれない点もあるだろうけれど、いちにちも早く先生にしたしみ、おしえをよくきいて、しつかり勉強するように……』と、たしかに、いつもより力のこもつた、しんせつな紹介のことばをのべた。それから、したにひかえていた伊東さんを呼びあげ、肩をならべて立つてから、さきに、壇からおりた。すると、伊東さんは、なにか、とつぜん、かんだかいこえで、さけんだ。生徒たちは耳をそばだてて聞こうとした。が、なんだか、のどにからんでどもつたみたいな、へんにかんだかい、あんまりみじかいことばだつたので、ほとんど、わからなかつた。しかも伊東さんは、したのほうの生徒たちは見ずに、うえのほうの空を、まるきり怒つたみたいな眼つきで、じつと見あげている。顔はまつさおになつている。よわそうな、小さな、やせた体をしているのに、かみの毛は、もじや〳〵と、ながくて、ひたいのうえにまで、たれかゝつている。生徒たちは、つぎのことばを待つた。が、伊東さんはやがて、ひたいのかみの毛をぐいと、あらつぽく、かきあげるようにすると、まつかな顔になつて、そのまゝ、そゝくさと、壇からおりてしまつた。…中略…伊東さんは、この日のうちに『こじき』というあだ名をつけられ、そのあだ名は、たちまちのうちに、全校生にゆきわたつた。」（昭和二十八年『祖国』七月号、池沢茂―詩人とサクリーマン）

静雄は想いがけなかった「こじき」という渾名の盛んな伝播に当初はかなり面喰ったようである。その月末恩師・退蔵に送った手紙に「学校にもだいぶ慣れまして、生徒達が何とかかとか言つてはやし立てます」（昭和四年四月二十三日付）と訴えている。しかし、一年もすると静雄はその渾名を自分に恰好な代名詞と認めざるをえなかったようである。

「学校と生徒の家庭との連絡も密接で、そのような家庭に出入する教師も多かつたから、一般に同僚の身嗜みはよかつた。その中にあつて伊東さんだけは、無精髭を生やし洋服もたいていよれよれであつた。『コジキ（乞食）』という渾名の生れたゆえんである。伊東さんは住吉中学の初代校長

中国古典文学大系17
唐代詩集上
田中克己・小野忍・小山正孝 編訳
中国詩史上の最高峰たる李白・杜甫の二詩人を、とくに唐代詩集上巻として一巻にまとめ、その代表作を網羅した。
嘗て『海潮音』『珊瑚集』のあらわれた感激をここに再現。
￥1,400
東京都千代田区四番町ノ四番地
振替・東京 二九六三九
平凡社

元田龍佐氏を懐かしがつておられた。（伊東さんは昭和四年三月に赴任したが、元田校長は昭和五年四月に退任した。）温かい思いやりのある、とても立派な方であつたらしい。元田氏は山羊のような白い髭を蓄えていた。「宴会の時、元田さんが、〝おお、ベッガー（beggar）〟といつて酒を注いでくれるんですよ。僕は〝おお、ゴウト（goat）〟といつて校長さんの山羊髭を撫でるんですよ」と、左手の指を丸めて、山羊髭を撫でる真似をされた。」（昭和四十年『詩帖』第十一号、家森長治郎―伊東静雄さんの思い出）

かまきりと蟬

相浦 美智子

なんという　優雅さで　彼は
パートナーを抱いていたことか！
晩夏の梅の樹の幹で
そこだけが　一時　涼しげだった。
彼の　すきとおった　若みどりの
のびやかな　肢体は
たくましい古木から　逆さに　宙に浮いて
ゆる〳〵と　エレガントに　伸ばした腕で
なんと　愛しげに、やさしく、彼は
その捕われの女を　抱き直したことか！
いまだ　微かにふるえている彼女を
頭から喰い散らすために……。

演出

新婚の友の家庭を
訪ねる日、
私は　できるだけ
少女めいた装いをする。
結婚した友にも
まだ　独身でいる私にも
後めたい思いをさせないために。

そして、風月堂で
〝モンブラン〟を買いもとめる。
かつて　彼女が　とても　好んでいたから、
そうして　今でも　私は
疲れて　かなしいような日には
ひとり　その甘さに
慰められることも　あるのだから。

そうして
ガラガラに空いた　昼間の電車に乗って、
かつて、彼女自身は
時として　詩に似ていたけれども
詩などは　読まない　友と
どんな会話をしようかと
車内を吹きぬける風に　吹かれながら
私は　考えてみる。

母

いとわしい　相似形。

円錘体を　上からのぞくと
その　つぼまった　いっとう奥の一点に
どうしても　ある
なつかしみと　おんなじ　哀れみ――。

ながい旅路を　共に　歩んで
もっとも多く　ゆるして
裏切ることをしなかった
たった　ひとりの友。

静雄が後輩教師・家森に語ったこの話には、いささかフィクションも混っているようである。先の池沢の話によると、元田校長の渾名は「山羊」ではなく「狸」だったからだ。まさか渾名を二つも持ってはいまい。ともあれ、静雄が「ベッガー」「コジキ」という渾名を自ら容認した証拠にはなる。

その後ベテラン教師になった静雄は、「乞食」から「こッちやん」に昇格した。講義の中で「乞食」の古語は「こつじき」であると解説したからである。その日以後もっぱら「こッちやん」と愛称されたが、やがて音便で「こーちやん」と改められ、それが通り名となった。

これはベテランを越えて古狸になってからであるが、学徒動員のお蔭で、原名の「乞食」が「虎児気」に栄進する光栄に浴した。

「住中名物デカンショ節は校長以下の全職員の特長を歌ってあつたが、先生も〈乞食文士のそのくせに……〉云々と歌われていた。…中略…教室でときたま授業料やその他の金を集めることがあった。先生は最前列の生徒の学帽をとると、それを持って、金を集めて廻られた。そのスタイルなぞ、まさにアダナの正当性を示すような恰好であった。…中略…

太郎

浅田 二三男

(八)

犬も通らない
みどりにぬりこめられた
小さな家の二階の
ひいやりとした畳の上へ
ねころんで
お前のことを思ってみる
お前はふとい前脚で
べっとり繁った夏草をかきわけ
どこかを歩いているか

そうこうするうちに学徒動員もはげしくなった。四年三組（組主任伊東先生）からも、予科練、陸士、海兵、その他の軍関係学校に入校する者がふえだした。大阪駅頭はそれらの歓送で混雑をきわめた。送る者送られる者が円陣をつくり、どら声の激励の辞。、力一杯の答辞、ついで万歳、万々才の餞波……自印のノボリがなくては、よその壮行円陣にまぎれこむ心配があった。四年三組もさっそくノボリを作ることになった。

まるで乞食のように
よその谷の土間で
食をねだっているのではないか
それとも
さっとかすめ盗った
新しいアジなどを
人の来ないところで
バリバリとむさぼって
たくましく生きているのか
お前のキバは片方しかないので
バリバリというふうにはいくまい
太郎よ
まだ会えるときがあるような気がする

織維品がふっていしているときではあり、各自小裂（こぎれ）を持ち寄ることになった。その小裂を工場動員で覚えたあぶなっかしい手つきで、乞食つぎに縫い合せて、幅六十糎、長さ約二米余の大ノボリを作ったのである。できあがって一同は吃驚すると同時に狂喜した。白・赤・黒・紫・青、その他てんでの色の小裂が綴りだした、文字どおり「乞食」組の大ノボリとなったからである。そこで伊東先生に住中二十期と書いていたゞいた。ついで虎児気組と書いてくださいとお願いすると、そればかりは勘弁してくれと哀願されるので、その方は組の生徒がひきうけることになった。各自が一点一角づつ寄せ書きをした。爾来このノボリを大阪駅頭その他におし立てゝ僕らは気焔をあげた。」（昭和四十年「果樹園」三月号、中川邦夫―乞食のノボリ）

これが静雄の渾名十五年の閲歴だ。「乞食」という揶揄から「虎児気」という意気昂揚の言葉にまで、変りに変ったものである。

愛の言葉

福地 邦樹

むかし南スラブの少女たちは
好きな若者の足跡の土をとってきて鉢に入れ
いつまでも涸むことがないという金盞花を植える
それが金色の花を咲かすと
恋の花も開くのである
わが国の古代の人々は
恋しい人の夢を見るために
夜着を裏がえしにきて寝たという
僕らにはもう
恋の呪術は何も残っていない
恋の歌も無力だし
僕らはまずしい言葉で
恥ずかしげもなく
愛の告白をしなければならぬのか
それで僕は困惑して
いまだかつて
昔の恋人へも妻に対しても
愛の言葉など一度も言ったことがない

スマトラ記 (九)

田中 克己

わたしはまたメダンに帰って来た。シンガポール（昭南市）の宣伝本部から映画が来て公園で映写されたのは七月の初めだったらうか。二本あって一本は東京の風景だった。銀座や丸ノ内の風景が映されてゐて、わたしたちはなつかしがって見てゐたが、現地人の華僑やインドネシア人は感心した時にやる舌打ちをして東京の近代都市としての姿を見てゐた。この日以後、「東京とメダンとはどちらが大きいか」といふたぐいの愚問には悩まされなくなったから宣伝効果は十分あったが、もっとうれしいのは、内地からの手紙類が回送されて来たことだった。妻からのたよりも来てゐて、萩原朔太郎先生のお葬式に参ったとのことも書いてあった。伊東静雄さんの令弟が来てとっていたゞいたといふ写真も同封してあったと思ふ。悲しみにたへなかったのは、シンガポールを立つまへ、毎日新聞支局で見て知ってゐた故朔太郎先生のおはがきが、今ごろになって着いたことであった。文面は簡単で、家内がお好きな酒をもって参ったお礼と「近況お察しして羨しく存じます」とのおことばとがあった。万事不自由な内地にこのスマトラの果物や酒をお届けするにもう幽冥界を異にしてゐるので、何ともいたしかたないと残念でならなかった。ちやうどいただいた丸山薫氏への便りに、わたしは朔太郎先生の訃報きいたとして、

わが来しはふるさとの人つつがなくまさきくあれと念じつつ来し

との歌を記した。小高根太郎・二郎の両氏ならびに伊東静雄氏のたよりも同時に来たが、

伊東氏には

わが書棚にルバイヤットのある故に君が詩集を思ふことあり

のほか二首を記した。子文書房発行の「詩集夏花」の扉に森亮氏訳のルバイヤットの一節を記してあるのは、伊東さんの詩集を秘蔵してゐるひとならよく知ってゐることである。この詩集と大山澄太氏の「日本の味」とわたしの文集「楊貴妃のクレオパトラ」とが第五回の透谷賞（この賞はこれが最後である）を受けたのはこの五月のことであって、わたしは帰国後はじめてそれを知ったが、伊東さん大山さんと違ってわたしは従軍賞が加味されてゐると直感し、恥かしくてならなかった。陶製の賞牌に附せられた推薦者には佐藤春夫・中河與一二先生のほか朔太郎の名も列記されてゐたかとおぼえてゐる。まことにありがたいことである。

出発前にとりまとめて肥下恒夫君に託した詩は「神軍」といふ題で、保田與重郎君の跋がつき天理時報社からやはりこの五月に出版され、スマトラへも十冊送られて来た。受け取った日は記してないが、多分、八月頃だったらうと思ふ。

そのころのノートに

「七月八日、この頃メダンに憤る。チップトップ閉店。ホテル・ド・プール、偕行社、ホテル・グランド、アジアレストラン等あり。友に張世良、ノール、タリブ、阿美。南十字星、宵早くすでに傾く」としるしてゐる。

チップ・トップは喫茶店で、軍指定でないので来客はわたしだけといふので閉店したのである。ホテル・ド・プールは前にも記したメダン随一のホテル。「グランド」や「アジア」などいふ名のホテルやレストランはもうわたしの記憶から消えてゐる。張世良は前に述べた煎三等をもってゐるメダンの華僑の代表者張歩善の長男で、旧暦五月五日にはわたしにチマキを食べさしてくれた。そのあと彼がインドネシア人の愛人を連れて紹介したので、二度びっくりした。よく肥った英語を話す好青年であったが、今どうしてゐることだらう。

ノールとタリブはともに同盟通信に雇はれてゐるインドネシア人で、わたしのインドネシア語はみるみる上達した。市中を背広で歩き、喫茶店で同店の客と自在に話しあへるやうになったのである。同盟通信支局にはも一人華僑がゐて、その家へ遊びに行ったおぼえがあるが名は忘れた。英語で話して「年はいくつ」と聞き、「ビッグの年だ」といふので一驚した。わたしと同じく猪の年（一九一一）生れだったのである。

今なほ毎日新聞に重役としておいでの枝松茂之氏が為井さんといふ記者とシンガポールから来られ、篠原支局長と三人でさそって下さり、ブラスタギといふ一千メートルの高原へつれて行っていたゞいたのは七月五日で、その夜は久しぶりに涼しいめにあった。この高原をとりまく峯のうち、シバヤク山は活火山で、軽井沢を思はす土地だが、咲きみだれるコスモスや百日草は戦前こゝにゐた日本人の花屋さんから種子を買った由である。

わたしはホテルの庭に造ってあるゴルフ・コースでクラブをふってゐて、近づいて来た日本人におどろかされた。よくおどろく男である。

稲垣足穂

ヴァニラとマニラ

―A感覚小説群―

★目次★

臀見鬼人／緑の蔭／ヴァニラとマニラ／Prostata～Pectum 機械学

エイナス感覚は根源的遠遠に置かれていると共に、遠い未来からの牽引でもある。それは常に根源に向つて問いかけながら、それ自ら感覚的超越として諸可能性の中に飛躍して行くところの遠く遙かなる感覚である

（本文より）

¥1,500

東京都千代田区西神田311 広瀬ビル

仮面社

朝夕

吉本青司

福井の山斎園に
万葉植物を植えたとき
大学の学長さんから分けてもらった萩が
美しく咲いた

花は先端から咲きはじめ
枝ぜんたいにひろがった
散りこぼれたはなびらさへ　庭に
きれいな文様を作った

＜文学とは何だろう＞

ほのかな円光のなか
なかば閉じられた目から
小さなことばが生れ
花に白い翅をそめて飛んだ

すべてそれらは
信じられてよいことだった

福井の山斎園で
学長さんから分けてもらった萩が
美しく咲いた

伊東静雄研究文献目録

(二)

小川和佑編

三　鑑賞・講座論文

蔵原伸二郎「伊東静雄」（『現代詩の解説と味い方』瑞穂出版・昭二六・六）

三好達治「伊東静雄」（『詩を読む人のために』至文堂・昭二七・六）

伊藤信吉「伊東静雄」（『現代詩の鑑賞・下』新潮文庫・昭二九・四）

北川冬彦「伊東静雄」（『現代詩Ⅱ』角川新書・昭三一・五）

小高根二郎「伊東静雄」（『人と作品現代文学講座・第九巻』明治書院・昭三七・四）

村野四郎「伊東静雄」（『鑑賞現代詩Ⅲ・昭和期』筑摩書房・昭三七・五）

江頭彦造「伊東静雄」（『鑑賞と研究現代日本文学講座・詩』三省堂・昭三七・一二）

伊藤信吉「詩のふるさと・伊東静雄」（『詩のふるさと』新潮社・昭四一・一二）

小海永二「伊東静雄」（『国語教材講座高等学校現代国語・第二巻』有精堂・昭四二・九）

島崎敏雄「伊東静雄―私の内部に残る断片―」（『詩の本・Ⅲ』筑摩書房・昭四二・一二）

西垣脩「伊東静雄」（『読解講座現代詩の鑑賞・第三巻・』明治書院昭四三・五）

関良一「伊東静雄」（『近代詩の教え方』右文書院・昭四三・一一）

西垣脩「伊東静雄」（『現代詩鑑賞講座・第一〇巻』角川書店・昭四四・一）

四　単行本所収論文

大山定一「訳詩の問題をめぐって―伊東静雄への手紙―」（『文学ノート』秋田屋・昭二五・一〇）
桑原武夫「伊東静雄詩集」（『フランス的ということ』岩波書店・昭三二・二）
三枝康高「伊東静雄の抒情について」（『日本浪曼派の運動』現代社・昭三四・二）
橋川文三「日本ロマン派と戦争」（『日本浪曼派批判序説』未来社・昭三五・二）
三好達治「草上記・四」（『草上記』新潮社・昭三八・八）
寺田透「伊東静雄全集」（『近代日本のことばと詩』思潮社・昭四〇・一〇）
北川透「伊東静雄の位置」（現代詩の思想と自立』思潮社・昭四二・三）
桶谷秀昭「伊東静雄論・―庶民的実存と戦争―島木健作と伊東静雄」（『土着と情況』南北社・昭四二・三）
唐川富夫「『四季』批判・伊東静雄論」（『抒情詩の運命』地球社・昭四三・七）
大岡信「抒情の行方―達治と静雄―」（『蕩児の家系』思潮社・昭四四・二）
江藤淳「伊東静雄の詩業について・伊東静雄」（『崩壊からの創造』頸草書房・昭四四・五）

五　雑誌所載論文

富士正晴「伊東静雄」（「三人」五月号・昭一一・五）
富士正晴「伊東静雄論序説」（「三人」九月号～二月号・昭一四・九～一五・二）
富士正晴「詩集『夏花』をめぐって―伊東静雄論―」（「文芸文化」第一九号～第二一号・昭一五・一～三）
小高根二郎「伊東静雄―『夏花』の理解のために―」（「コギト」第九六号・昭一五・六）
鈴木亨「春のいそぎ」（「四季」第八一号終刊号・昭一九・六）
檀一雄「伊東さんのこと」（「舞踏」一一月号・昭二五・一一）
庄野潤三「伊東先生の手紙」（「プシケ」六月号・昭二八・六）
三島由紀夫「伊東静雄氏のこと」（「プシケ」七月号・昭二八・七）
富士正晴「伊東静雄について」（「近代文学」一二月号・昭二八・一二）
小高根二郎「伊東静雄と日本浪曼派」（「バルカノン」八月号・昭三三・八）
小高根二郎「『わがひとに与ふる哀歌』のわがひと」（「詩学」一〇月号・昭三三・一〇）
井上靖「作家ノート」（「新潮」一〇月号・昭三三・一〇）
杉本秀太郎「伊東静雄の詩」（「視界」創刊号・昭三五・六）
小高根二郎「伊東静雄と批把」（「大阪文化」一〇月号・昭三六・一〇）
小高根二郎「阿呆陀羅庵と寒批庵」（「果樹園」第七三号・昭三七・三）
菅野昭正「瓢野の歌」（「現代詩手帖」一月号～二月号・昭三九・一～二）
川副国基「伊東静雄の故郷」（「文芸論叢」創刊号・昭三九・一二）
磯田光一「伊東静雄」（「批評」復刊一号・昭四〇・春季）
小野十三郎・斎田昭吉・富士正晴・中石孝「座談会・伊東静雄―人と文学―」（「日本浪曼派研究」創刊号・昭四一・一一）
小高根二郎「静雄と達治」（「三田文学」第五四巻第四号・昭四二・四）
三島由紀夫「伊東静雄の詩」（「新潮」一一月号・昭四一・一一）
井上靖「言葉の話―小説家の立場から―」（「図書」二月号・昭四二・二）
饗庭孝男「伊東静雄論」（「日本浪曼派研究」第二号・昭四二・七）
小高根二郎「伊東静雄の抒情の詰屈」（「南北」一二号・昭四二・一二）
島尾敏雄「伊東静雄との友交」（「季刊芸術」春季号・昭四三・四）
小高根二郎「私の愛する人生詩―春を呼ぶ歌―」（「PHP」三月号・昭四三・三）
安藤康彦「朔太郎から静雄へ」（「日本近代文学」第六集・昭四三・五）
庄野潤三「前途」（「群像」八月号・昭四三・八）
小川和佑「日本浪曼派ノート」（「南北」一〇月号・昭四三・一〇）
小高根二郎「伊東静雄研究」（「果樹園」第一五五号～・昭四四・一～）
川口朗「伊東静雄論―「小さい手帖から」をめぐって―」（日本近代文学」第一〇集・昭四四・五）
小川和佑「伊東静雄『わがひとに与ふる哀歌』」（「解釈」八月号・昭四四・八）
小川和佑「伊東静雄―その書誌的研究―」（日本浪曼派研究」第四号・昭四四・九）

六　書誌・その他

三枝康高編「日本浪曼派・細目」（『日本浪曼派の運動』現代社・昭三四・二）
杉本秀太郎編「伊東静雄参考文献」（「伊東静雄全集ノート」人文書院・昭三六・二）

Hundreds ,Thousands of . . .

Shizuo Itoh

Hundreds, thousands of grass leaves tinged,
Strong harps of field now begin to sound.

The way
Sorrow grows ripe
Will be like
Sour fruit gets mellowed and shines.

I thank the sun of autumn.

(Anonymous)

Retreating into deep mountain forests,
Getting together with many an old autumn,
The autumn of this year
Is hard to recognize.

Translated by Ken Miyagi

果樹園　一六六号　昭和四十四年十二月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価四〇円　送料二〇円

果樹園

第166号

伊東静雄研究（十）　小高根二郎
露骨な生活の間を　伊東静雄
宮城賢
再会　相浦美智子
陣中日記（九）　蓮田善明
ロセッティ小曲（十）　森亮
山荘詩抄　吉本青司
編集後記

伊東静雄研究（十）

小高根二郎

それにしても、郷土の大先輩の余徳にあずかろうとした、当初の静雄の根胆は大変な当て違いに遭遇したものである。童話の受賞。卒論首席の栄光。それに次いで偲恩の背広。これで百合子の心に植えられた生垣は取り払われると期待したに相違ない。しかし、百合子の生垣はそのままで、枝折戸は黒の古背広へではなく、紺の新調の背広に向って開かれていた……と想像されるからである。というのは、この春静雄と仲良く学校を卒業し、再製樟脳株式会社に就職した宮本へ、「背広にお目にかゝれず惜しいことしました」と、百合子は書き送っているからだ。

「お便りありがたうございました。待つてゐました。とにかく就職出来て安心しました。背広にお目にかゝれず惜しいことしました。母はあちこちお寄りになるところが多かったんだらうと云ってゐます。もう銀鞍会にも同志社騒動にも無関係になってしまひました。…中略…

廿二日、家がこゝに引越した日です。母は赤御飯でも――といつてゐます。

では今度はお寄り下さい。又後で」（昭和四年五月二十二日付宮本新治宛書簡）

この百合子の手紙は、無事に就職できたという宮本のしらせに対する返事である。「待ってゐました」という冒頭の言葉には、ある期待と喜びとが溢れている。「背広にお目にかゝれず惜しいことしました」には、慕情とはいかないまでも明らかな好意が感じられる。「どうして宮本さんはおいでにならなかったのかしら？」という百合子の失望に対して、「あちこちお寄りになるとこが多かったんだろうヨ」という母親フミの慰めの言葉にも、宮本の社交的なたのもしさに寄せる好意が感じられる。書簡の末尾で、「母は赤御飯でも――といってゐます」とあるのは、今度宮本が来訪する時に対する好意の予約であるが、この母の提言に異議なく百合子は同調して、「今度はお寄り下さい」という招待の意志を表明している。よくよく静雄は運がなかった……といわねばなるまい。

2　社会主義的な情熱

「乞食」という渾名を付けられた貧乏教師の静雄が、社会主義的な情熱を勃然として抱いたとしても、別に不思議ではない。すでに京大一回生の時にも、社会主義運動に対して、いささか魅力を感じていたからである。それはできたばかりの治安維持法が適用されて、京大の河上肇や同志社大の山本宣治その他が家宅捜査をうけたり拘引されたりして、京大生からも二十名の起訴者がでて、ために京大荒木総長らも譴責をされたという事件であっ

果樹園　一六五号　昭和四十四年十一月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価四〇円　送料二〇円

蓮田善明とその死

小高根二郎

敗戦に臨んで神国日本の終焉を象徴したのは、「人間宣言」によって神国のきざはしを降り給うた今上天皇ではなく、逆にきざはしを昇って扉を閉ざして雲隠れた、影山庄平翁やわが蓮田善明であった。

内容

第一部
「豪僧の父・慈善」～「『万葉末期の人』としての家持論」に至る十七章

第二部
「応召と賜死の『大津皇子論』」～「生還の惑いと『方丈記』」に至る十五章

第三部
「遁世の願いと阿蘇行」～「死・それから」に至る二十章

序・三島由紀夫
年譜・清水文雄

11月刊予定

東京都千代田区神田小川町二―八
振替東京四一二三
筑摩書房

堀内達夫編「伊東静雄書誌」（「本」第八号・昭三九・二）
小高根二郎編「伊東静雄文献」（「増補改訂伊東静雄全集ノート」人文書院・昭四一・八）
小川和佑「伊東静雄研究文献考」（「果樹園」第一二二号～一二四号・昭四一・四～六）
小川和佑編「『四季』・年表」（「地球」再刊一号・第四二号・昭四一・一〇）
高橋春雄編「『コギト』総目録」（「日本浪曼派研究」第一～二号・昭四一・一一～四二・二）
隠岐国彦編「『文芸文化』総目次」（「バルカノン」第二二号・昭四二・二）
小田切進編「『四季』細目」（「復刊版『四季』別冊」日本近代文学館・昭四二・一一）

注・「伊東静雄文献総目録」については小高根二郎編「伊東静雄文献」（「増補改訂伊東静雄全集ノート」人文書院・昭四一・八）もしくは拙稿「伊東静雄―その書誌的研究―」（「日本浪曼派研究」第四号・昭四四・九）を参照されたい。

編集後記

九月九日東京八重洲口で筑摩書房の東博・小宮正弘両氏と拙著の進行打合せ会をした。現代日本文学大系の仕事で多忙な東氏は、拙著の割りつけをするために、わざわざ数日宿屋にまでこもって下った由であった。九ポ組菊版六五〇頁ほどで、初版の部数はあまり多くないので、かなり高価になる模様である。とりわけ有難く感じたのは、東氏は拙著を一読すると、ドウコクとはいかないまでも、善明の運命の切なさに泣いてしまった……とのことであった。まことに有難いことであった。

九月十五日・「日本読売新聞」で拙著の刊行予告を、「日本近代の空洞を衝く」と題して書いてくださった。感謝申し上げる。

九月二十八日。仮面社の西岡武良氏が来訪し、伏見養斉なる稲垣足穂大人を訪れるというので、お供をした。大人の著「ヴァニラとマニラ」は西岡氏の初仕事である。彼は学生時代に伊東静雄資料を東京の図書館からいろいろ渉猟してくれたことがあった。又、大人には、僕の宇治時代に平等院の川向いの恵心院の離れを、寓居としてお世話したことがあった。新築の明るい家で見る大人は昔と少しも変っていなかった。アポロの勇士たちに、月から見た地球のことばかり尋ねて、月から星はどう見えたかを、一人として訊れた者のない無智ぶりを慨嘆された。さすがに「星を売る店」の作者である。紫代夫人は九州に帰られたとかで不在だった。女子大生だった都ちゃんは二人の子のお母さんになっていた。数えてみると十五年ぶりだった。

十月二日。上京すると八重洲口のユニチカ宛に四枚の手紙が届いていた。その一つ宮城賢氏の手紙には、「相浦美智子さんの作品、前号も本号も感心いたしました。いつトで、しかも忘のある詩で、ちかごろ珍重すべき作風と思考いたします」と。

住所が定ったので編集所を左記に変更します。送金・送稿・送本は池田の発行所でなく、ここ宛にせられたい。（O）

果樹園　第一六五号（毎月一回一日発行）
昭和四十四年十一月一日発行
大阪市東住吉区桑津町三の十八
印刷所　元市印刷株式会社
東京都世田谷区代沢二ノ一ノ十一
ユニチカ世田谷寮
（電話　四一四・六八一一八）
編集所　小高根二郎
池田市石橋二丁目六ノ五
発行所　果樹園社
定価　四〇円　送料　二〇円

た。「あんな学生達の社会運動などにも相当の魅力を私は感じますけれども、あんな運動には少なくとも根底に、相争ふ二つの階級の各々に、『理解とそれから生ずる愛』が飲けてゐる様に思はれます」と、酒井姉妹に書き送っていた(大正十五年九月八日付)。非常に穏健な見解である。尋常であれば彼の生い立ちとか、自らいう「ミゼラブルな私の学校生活」という環境から、社会主義的な思想に傾くのを当然とする。その危機を、静雄は酒井姉妹の理解とそれから生ずる愛を獲得することに夢中になって、たまたま回避できたという感が強い。その彼の就職が決った三月に山本宣治が七生義団員に刺殺された。乞食教師になった四月には全国的な共産党員の検挙があって、三三九名も起訴された。学卒者の就職率は五〇%に低下し、いわゆる「大学は出たけれど……」の失業が常態化しだした。労働争議は一四〇〇件を越えて経済不況は底なしの不安を呈していた。(青木文庫、高桑末秀「日本学生社会運動史」)

こんな社会的に不安な日に、「乞食」と渾名されている静雄が、全日無産者芸術団体協議会の組織であるナップの機関誌『戦旗』を購読していたとしても、別に不思議ではない。(昭和四年六月七日付宮本新治宛書簡)。但し、官憲の家宅捜査があった場合、蔵書から『戦旗』が発見されただけで、シンパの烙印が押されて検挙の理由とされた時代であることを思うと、静雄も相当な覚悟をした上……と見ねばなるまい。宮本が語ったところによると、当時の静雄の社会主義の知識は、すでに凡庸な共産党員など遠く及ばなかったほど豊富だった由である。これ！ と思ったらトコトン読破する彼の性格であるから、マルクスの「ドイツ・イディオロギー」に始まり、「共産党宣言」を経て、「資本論」の剰余価値学説まで探求したであろうことは間違いない。現に宮本宛に「朝に夕にマルクス、マルクスと考へてゐる」(昭和四年九月十二日付書簡)と書信している。

この社会主義的な情熱で心を火照らしていた静雄は、恩師退蔵に次のように訴えている。

「近頃は私の内の芥川的傾向を克服するためにと存じまして、全集などもとめて芥川氏研究に少しづつ時間を費してゐることでございます。私は同氏を読みながら、自分の過去の教養——自然主義的な個人主義の根強さに驚いてゐるのでございます。今更、そして、我共年輩の者が皆さうであります様に、新しく開けさうに見える、今迄の私共の教養があまり役に立たない、ばかりでなく邪魔になりさうな世界に当面した様な気が致しまして、危惧し、顧望してゐるのでございます。そして、こんな時代に学問を志すものはどんな態度をとればいいことであらうかと苦しんでゐるのでございます。」(昭和四年十月二十三日付頼原退蔵宛書簡)

この静雄の苦悩を饗庭孝男は次のように明快に解説する。「それは、インテリゲンチャである青年が、自己の内部を凝視した時、時代の要請と社会主義運動のまがうことのない純粋性を肯定し、実践を求めようとする気持と、頭ではその歴史的必然性を理解しながら、大正的教養主義の個人主義的傾向の残滓と性来のニヒリスト的な性向の故に、ともすればアウトサイダーたらざるを得ない自己疎外との落差が、茶川を読むことによって不可避的に触発させられるところの苦しみなのである。(昭和四十二年「日本浪曼派研究」2・饗庭孝男—伊東静雄)」

又、静雄自らもこの苦悩を分析して、次のように宮本に書き送っている。

「インテリゲンチアの悩みは、唯物史観そのものの中に理論的矛盾を発見することによっておこるのではなく、頭は唯物史観を肯定しながらもヘルツ(ハート)が云ふことをきかない憂欝なんですね。唯物史観はそれ自身一つの革命理論なんですね。唯物といふ言葉は昔から革命的意味を持つてゐた言葉ださうですね。然もそれが、我々に

再　会

その一

相浦　美智子

なんにも　なかったかのように
わたしたちは　歩き始めた。
夕暮の御堂筋を　方向も定めないで。
すると　以前のように
充ち溢れると　倦怠に　変貌る
あの親密さの　沈黙が
ふたりを　とりまいた。
小さな断絶の期間に　わたしたちは
なにを学んだ？　(どちらからも　そのこ
　とを
言葉で　言おうとはしなかったけれど)
めぐりあった　たったひとりの　恋人
それとも　ただ　身のまわりを
花やかにしておきたい　願い？

——この並木には　やっぱり　雀がいるわ
　ね。
おずおずと　手をさし伸べるように
再び会った　わたしたちは
許容の　やさしさを　探り合っていた。

その二

一つお皿に載ったビッツァと
二つのコップのビイル

〝こうしているときが　最高……〟
と　自然に　彼女は　そう言った。
そして　やはり　私は
ひとつ　後れて
みじかい　肯定の語と共に
頷いただけだった。(どうして
いつも　頷いてだけいるのだろう！)
その帰路の夜のアスファルトに
欠けはじめた月光に　向かって
小さな蝮が　首をコの字に曲げて
祈るマホメットのように
靴音の威嚇にも
かたくなに　動かなかった。

驕　り

私には　だんだんと
私が　美しくなっていくような気がする。

しだいに　きれいになり
ふだんより　寡黙になり
やさしくなっていく　私に

いちばん身近な同性である
母と　猫は　すこし
意地のわるい　よそよそしい態度をとる。

年下の少年は
私に　叱られたり
世話を焼かれたり　したがる。

私は——夜
神には　祈らないが
冷たく　すんだ空を見上げると
時々　合掌する。

愛の秘密を　説いた書物を　手に
そんなものを　読んでいる　私が
われからに　愛しくって
私は　よけいに　黙ってしまう。

は、革命的熱情を持てぬ我々には頭でだけ肯定される。そして熱情的な革命理論が、熱情なしに理解される時、それが虚無的色彩を、然も破かいされたあとに茫然とたちすくんで、過ぎゆく白雲をながめる様な虚無を我々に感ぜしむるのですね。私は有島氏の「宣言一つ」そのものには肯定出来ないが、然し、あれを云はずにはをられなかった有島氏の悩みには同感出来ますねえ。然し小説に関する有島氏の言葉は正しい所もありますねえ。今のプロレタリヤ小説はプロレタリヤ小説では断じてない。インテリゲンチアの断末魔的努力にすぎない。」

（昭和四年十二月二十一日付宮本新治宛書簡）

静雄はここに社会主義的な意向から龍之介と武郎とを批判している。武郎が波多野秋子と心中をしたのは、静雄が佐賀高校一年の一学期のことであった。龍之介が自殺したのは京大二回生の夏休であった。静雄が龍之介と取組んだのはその死から数ケ月経った日で、「芥川さんに感必したり妙に窮くつに感じた」旨、宮本に書信していた。この学生時代に感じた「感心」と「窮くつ」とが、教師となった今は、超克さるべきものに変ったのである。その根深い自然主義的な個人主義からの解脱を、来るべき時代の予想から希求しているのである。彼は龍之介が死の直前にものした「続西方の人—3共産主義者」で、クリストを共産主義者と対照して論じなければならなかった窮地を感じたろう。「クリストはあらゆるクリストたちのやうに共産主義的精神を持つてゐる。若し共産主義者の目から見るとすれば、クリストの言葉は悉く共産主義的宣言に変るであろう。彼に先立つたヨハネさへ『二つの衣服（うはぎ）を持てる者は持たぬ者に分け与へよ』と呼んでゐる。しかしクリストは無政府主義者ではない。…中略…しかしクリストの中にあつた共産主義者を論ずることはスキツルに遠い日本では少くとも不便を伴つてゐる」。なぜ竜之介は救世主クリストと共産主義者（実はマルクスと明言したかったのだろう）とを対等に掲げねばならなかったか？それは共産主義者が来るべき世界の救世主になる可能性を危惧したからにほかなるまい。その世界が遠からず近付くであろうという恐怖が、遺書（「或旧友へ送る手記」）に見る自殺原因——「将来に対する唯ぼんやりした不安」——であったのだろう。その窮地から遁走するために、彼はスキツルよりも中立中正と予想される天国へ高飛びを敢行したのだ。あくまでも個人主義に徹した遁走だった。

ところで静雄は武郎の方を超克すべき対象と見なしていない。彼は遁走をしたのではなく、いちおうは実践をし、その上で停止したのだからである。少くともその限りでは卑怯ではない。かつて北海道の農場を小作人に解放したり、或いは財産放棄を宣言、邸を譲って自らは借地人になったりしたが、その人道主義は社会的な効果と反響では全く空無にひとしかった。その帰結として「宣言一つ」の爆弾声明となったのである。労働階級にとつては掌にタコのないクロポトキンやマルクスなんて不用だというのである。彼等はタコのある掌で自ら明日の世界を拓くだろうという環境限界説である。「世に労働文芸といふやうなものが主張されてゐる。又それを辯護し、力説する評論家がある。彼等は第四階級以外の階級者が発明した文学と、構想と、表現とを以つて、漠然と労働者の生活なるものを描く。彼等は第四階級以外の階級者が発明した論理と、思想と、検察法とを以つて、文芸的作品に臨み、労働文芸と然らざるものとを選り分ける。私はさうした態度を採ることは断じて出来ない」。武郎はこの声明を放ってから一年後、人妻と手に手をとって天国へ遁走してしまったのである。静雄はこの環境限界説を思想的には否定し、感情的には肯定して

Through the Bare Life

Shizuo Itoh

Every evening, from an eastern village
A family of three peddlers passes this village
Towards the railroad station.
A mother and a girl of twelve or thirteen and
A boy still looking younger than ten years,
Each loaded to the utmost,
Walking along with their bodies flexing.
Along the lane through fields darkening fast,
Often they go singing low in chorus.
The tender and light children's song they sing
Nurses the youngest son,
Also encourages them all,
And the chorus low-voiced and whole-hearted
Is heard from a high heap of loads.

It threads straight through my heart
Like a thin, pure silver thread
Passing through the bare life.

(What New Year Day has come to them now?)

Translated by Ken Miyagi

いる。そういわざるをえなかった武郎の悩みに共感したからである。しかし結果的には、武郎も竜之介と同じく個人主義を限界とした既往の人であった。

若い静雄はこの二人の先輩が脱却できなかった個人主義の限界を、なんとかして突き抜けようとして焦っているのは事実である。そんな心境にある静雄は、たまたま改造文庫「チェーホフ書簡集」（昭和四年八月刊内山賢次訳）の巻末附録でマキシム・ゴーリキーの「アントン・チェホフ―追憶の断片―」を読んで無上の感動をしたのであった。

「私は今夜は心が暖い。チェーホフの『書簡集』をよんだからです。その後につけてあるゴーリキーの『チェーホフの印象』は偉大な霊魂が、他の偉大な精神を理解することの深さに、私は涙を催すほどでした。私はしばらく芥川をよして、チェーホフの研究をつづけたいと思ひます。そして、面白いことにはチェーホフはこよなく我々学校教師のみじめさに同情してゐる！ 私はひとりほほゑんで住中の教師によませたいと思ひました。」（昭和四年十二月十一日付 宮本新治宛書簡）

ゴーリキーは一九〇〇年頃ヤルタの別荘に病を養うチェーホフを訪れた。その時チェーホフが語ったところをゴーリキーが追憶としてまとめたものが前記の文章である。その冒頭がチェーホフの教師同情論なのである。

「ロシヤでは教師といふものに取り別け善い待遇を与へなければいけませんよ。それも出来るだけ早くしなければいけませんよ。国民に広く教育を授けなければ、ロシヤは、恰度焼きの悪い煉瓦で建てた家みたいに、崩れちまひますよ。教師といふものは、自分の天職を愛する芸術家でなくちやなりませんよ。所がロシヤでは、教師といふものは碌な教育を受けてゐない旅の鳥で、まるで流刑地へでも行くやうに、村から村へと子供を教へて行くのです。彼は飢ゑて、へし潰されて、その日の糧を失ふかといふ恐れでびくびくものでゐるのです。…中略…私たち皆ながやるやうに、本当に誰も教師を怒鳴りつけたり、直接恥ぢをかゝせたりしてはなりませんよ――村の巡査だって、金持の商人だって、牧師だって、学校の保護者だって、評議会員だって、あの視学官といふ称号は頂戴してゐるが、教育の改善なんて事はてんから問題にしないで、たゞ長官の廻章の実施されたことだけしか見て歩かないお役人だって……人間を教育しようといふ人にちよつぴりばかりの給料を払つて置くといふのは可笑しなことです。」

まさに静雄がいいたいこと全部をチェーホフは代辯してくれてるわけである。失業者の氾濫、労働争議の瀕発……。このままいけば、悪い煉瓦どころではない、木と土とで建てられてる日本は、革命の嵐の前にひとたまりもない。よろしく教師を厚遇すべし。ただし教師たるものは芸術家たるべし。静雄は「アントン・チェーホフ――追憶の断片」をさっそく職員室中に回章したい……と願ったほど、満悦したのだ。この静雄のチェーホフに寄せる満悦と同感は、その日から五年後、「チェーホフ書簡集」中の一書簡――プレスチェーイェフ宛の文章に取材して、「秧鶏は飛ばずに全路を歩いて来る」に結晶をするので、特に記憶に留めておく必要がある。

陣中日記 (九)

蓮田善明

六月十四日

目さめる。もう東の山からはなれた太陽が、壕の入口から射しこんで、奥の壁にくつきりと映つてゐる。その光が壕内を通る時、壕内のいろいろの物に触れる限り、あのよく熟れたオレンジ色の光で染めて行く。壕内は、暗く不快な壕内は、朝の新しい光のために何か幸福な呼吸を心一杯に息づいてゐるやうだ。

ロセッティ小曲 (十)

森亮

后にも　相応へる雅び、
森の子の　直ぐなるこころ。
眼差しは　澄みたる苔穹を
うつす水。頬のしろさは
冴えさえて魂をも蕩らす。
情熱の洩りくる唇は
沈黙さへ　妙なる調べ。
いみじき　黄金のみ髪。

円柱　太しき頸は
すがるべし、聖域に到ると。
恋の神　くだされし手か
はた足か、真面目に優しき。
かの淑女を　かく讃へつつ
そのみ名は　伏せてもらさじ。

「生の家」第三十一歌

――朝は新しい。もう一夜があけて、太陽は地球の下を一めぐりして来たのか、あの長い長い暑熱の昼にくらべて、夜は太陽は、あの芝居の地下道を駈けて早変りを演ずる役者のやうに足を早めてめぐつたのではあるまいか。しかし、たとひそれにしたところで、今、太陽は全く新しい呼吸をもつて――すつかり夜の間にすべてに十分の休息と生気の恢復を与へて、新しくし、その新しくなつたことをたのしい告げ知らせで触れるかの如く、――東の空から新しい光を、しかし烈しくなく、やさしく、しかもまだ去り果てぬ闇が残つて暗さは地上にも空にもあつたにしたところで、このやさしい、未だ十分にその光耀を発揮しない太陽の新しい光は、世界に最も完全な信頼を以て明るさを約束してゐる。明るい――何ものが遮ぎらうとも、絶対の明るさを力づよく印象させる。

この新しい光にあふと、どんな無生物でも、今までぐつすりと休息の眠りをとつてゐた。そして今すつかり新しい生命の活動を恢復して静かに生きゝ〳〵と胸ふくらませて新しい目ざめの呼吸をはじめたといふ感を与へる。見よ、この壕内に我々と共に詰めこんである我々の革製や、布製、鉄製の種々の装具、壁の土嚢、赤い岩、丸太の屋根、屋根の間からぶら下つてゐる藁くづ――その藁くづは、冷たく冷えた風にゆらゆら揺れてゐる。

さうだ、朝は又この冷たい、快く人をめざめさせる。しんから冷えた風を送つてくれる。昨日はあんなに風が少かつたのに、風も疲れを休めて子供のやうに元気をとり戻したのか、あんなに強い活動力で動き廻つてゐる。もう夜明けずつと前に早くも目ざめたこのいたづらつ児の風は、いち早くもまだ眠りつゞけてゐるものの上をかけ廻つて、疲労の最後の滓を拭ひとり、新しい発剌とした生気の目ざめを促して、余りに眠りつゞけて休息に人がだらしなく甘えてしまふのをいましめるかのやうにあたゝかい暁方の夢に、そつと冷たい唇をふれて行く。さつきから私の目には、壕外の、あの日中に日覆をつくるために立てたありあはせの竹や握り太の木を倒れぬやうに地面へつなぎとめてゐる綱や藁縄が風にはげしくをのゝき、弾んでふるへてゐるのが見えてゐる。それから昨夜外で寝たらしい佐藤と生（昨夜十二時頃、暑くて堪らんと外に出て蚊帳を頭から着てねてゐた）が目をさまして起し合つてゐるのがきこえる。彼らは日中日光の直射をうけてゐるので、身内からほてつて、夜中まで「あつくて眠れ」ないのである。彼らは、もう冷えすぎる深夜の空

の下でやつとその暑さを忘れることができたのである。そこではもう夜露が岩にも草にも、蓆の上にもおき、空気――風の中にも含んで彼らを気持わるくぬらすので、蚊帳を被るのである。彼らの若い逞ましい体の烈しい疲れは、かういふ不具合な眠りによつても恢復される。そして実は彼らは今朝少し寝過してしまつたのだが、しかしやはりこの朝のふしぎな、すべてを新しく目ざめさせる霊力は、遂にこの若者たちを目ざめさせ、朝の仕度に元気よく起き上らせたのである。

どこか銃声が烈しくつゞいてゐる。非常に遠くやつとききとれる位にきこえるが、この壕内では遠近の見定めはさつぱりつかない。松野軍曹が目をさまして、手を伸して受話器を把つた。呼び出しが、さつきからきこえてゐたのである。「昨夜異常ありません……今日診断患者が一名行きます。附添はつけてやります。」。それから色々ちがつた呼出しが鳴つてゐる。全線が動き出し、朝の連絡が始まつた。診断に行くS一等兵が届けに来て、壕外から呼び、敬礼してからかごんで又へんてこな格好で敬礼して、告げる。若い初年兵である。平生仲々達者で働き者だが、この二三日下痢をはじめて止まらぬし食欲が無いのである。中隊に行つてからの注意や処置を言ひきかせ、又、中隊への言伝てを寸る。暫くすると、附添ひのT上等兵がくる。これにも別の指示を与へ、別の言伝てをする。「今日も暑いのに、遠く御苦労だ、あいつまだ馴れぬから、世話をみてやつてくれ」「は、行つてまゐります」。思ひやりがあり、しつかりものの彼なら安心して世話がたのめるし、途中も心配がいらない。その間に、見習士官は起き出でて行つた。すばらしく用意の速い当番が「小隊長殿御飯を食べて下さい」と呼ぶ。

今朝は昨日に打つて変つて涼しく、そして食事をしてゐる間に空はすつかり曇つてしまつた。太陽もすばやく昇つたが、雲が早かつた。地上は暑気から全く遮ぎられた。東南の空でほんの一部青空が見える。何だが風景が急に老い込んだやうに沈んでみえる。風は、蓆囲ひ（昨夜ここに寝た二人がつくつてゐた）や天幕を煽つて、ひゆつ、ひゆつ、ぱたぱたと唸る。しかし照りつける熱さよりもこの方が助かる。たゞ雨にならぬことを祈る。大体から言へばもう雨期で、湖水も川も増水期に入るのだが、瞰下すと湖も川も、皮がしなびて骨を露はして来たやうに、黄色い州を日毎露出して来つゝある。川が増水すれば、敵も今のやうにうるさく渡つて来れないし、逆に、こちらから押しつめられて退き難くなるために、或は殆ど全く自然に対岸へ退いてしまふかもしれぬ。これは一等手のかゝらぬ撃退法である。どうせこゝで相当永く対陣するのなら、始終小面倒な射ち合ひなどするよりも、この方が安気でいい。しかし雨に降られると、勤務の者はもとより、――直接この山で言つても雨水が壕にしみ出、流れこみ、弾薬糧食を完全に囲ふことも仲々困難であるしかし、――かれら、兵隊は、いかなる時も実に巧い智慧を出し、おどろくべく立派な処置をし、石のやうに忍耐づよくやつてのける。たしかに今日は降るかもしれぬ、雲のやうすが見え出した。一面に張りつめた雲が今度は一部分づつ、どろ〳〵に糊がまだらに融けたやうになり、ぼけてくる。その空を今、五機編隊の軽爆が北から南へ高く進んで行つた。各分隊長も勤務の交代の申告を終つて今日の任務についた。雲間を又飛行機が行く音がする。ずつと西寄りで、機影は見えない。

今朝々食の時、（今朝は、昨夕中隊から受領してきた豆腐と干キャベツの味噌汁、煮豆腐に醋味噌かけ、胡瓜とキャベツの醋漬け、少しぬるい茶）、まあこんなに野菜だけでも、生の野菜が食へるのはいいぞ、上海から

南京、九江をやつてきた時は、生のものは何もなく、果物さへ口に入らなかつた。下庄（武寧攻略後の警備地）に着くと、筍、野蒜があつて、とにかくうれしかつた――と言ひ出したら、「いやあの時の筍にはうんざりした。毎日毎日筍のほかに何もないんだもの」「さうだ、俺は二三日ゐたきりでも、その間に腹の中に物干竿がつつぱつてゐるやうな気がしたからな、」「それで、山の下のクリークに支那軍の手榴弾を投げこんで魚をとりましたよ、鯉が二尺以上のを何尾も――それから川に入つて、両側に抱いて泳いでくるんですが、泳ぎながらなので、何べんもとりにがして、とうとう一匹とり落してしまひました」「大きいやつがゐるんですよ。鯉なんか、巾がこの板くらい（註一尺以上）あります。大きくなつて腹なんか平たくなつて鯉の形をしてゐません。」「なまづの五尺五寸といふのを揚子江からとつたことがあります。とても大きいのでどちらが大きいか寝て見いと言はれて、並んでねてみましたが、佐藤よりまだ少し大きかつたんです」「大きいやつ、お話になりませんよ」、「あんなの、刺身にできるんですがね」「石坂上等兵殿が言つて居られましたが、歩哨についてゐる時、馬のやうに対岸へ泳いで行つたのを見たといつて居られましたよ」。「馬のやうに泳いで行つた魚――自分も愉快に笑つてしまつた。目に見えるやうだつた。とにかくこちらのクリークにでも尺二尺のなまづなら、ふんだんにゐるし、たしかに泥鰌の巨きいやつで泥にもぐり込んでゐるので、二尺以上のを交ぜて、大きくもないクリークを乾して一度に三十尾以上をとつたのを実見したことがある。「それから揚子江にはラッコみたいなのがゐますよ、水の中から、あの丸い頭をざぶりと出して――、あの長い鬚を生やしてゐますよ――こちらを見て、すつと水の中に姿を消します。それから夜などパシャリと大きな音を立てゝ敵が来たのではないかと、びつくりさせられることがありますよ」「大きななまづは割つてみると、豚の肉そつくりですよ、沖縄でも捕つたことがあります」と生がいふ、「揚子江から流れて沖縄にひつかゝつたんだらう」とちやかす。「とにかく支那は何でも大きいですよ、内地の人にあの大きな魚のこと話しても信じないでせう」「とにかく大きいね、揚子江なんてやつも、あの赤く濁つた河、すごいんだね。」「大きかつたなあ、あのなまづ、五尺五寸で佐藤が並んで寝ても少し足りない位だつたからなあ」と思ひ〳〵に自分の実見したことを、誰へといふことなく繰返し話しあつた。何度くり返しても、彼らの話はその話しぶりと顔つき、大きさを示す手ぶり、がいかにも、この不思議に大きい魚や大陸や大江のおもかげを髣髴させて、おもしろかつた。食事あと、「あ、大きな燕！」と呼んだものがある。皆ふり返ると、この山頂を掠めてとぶ一羽の鳥が、その背と翼を平に広げたまゝですうつと谷の方へ素早くかくれたそのとびぶりは、たしかに燕だが、その体は鳶色で、大きさも鳩くらいあつて、どういつてもこれは燕とは受けとれなかつた。又、今迄そんな途方もない燕は誰も一度も見たことがなかつた。「支那には燕も大きいやつがゐるんだなあ」と見つけた者がいふのに押つかぶせて松野軍曹が「何ぼ支那でも、あれが燕なもんか」「鳶の子だらう」と自分は一寸自信を以て言つた。「鳶の子か――」、皆笑つた。しかし、皆の目には形だけなら全く燕のやうな格好で、幅広い尾翼もいくらか燕に似て裂けて、すばやく谷へ下つて行つた後姿が、ほんとに燕らしい記憶を残していつた。

* * *

山荘詩評

吉本青司

テレビでマンガの話を聞いていて、尖鋭的な学生たちが、人間喪失の現代に、エレメンタルな「感覚」を考え、それが過激な行動に結びついていることを知って興味があった。若者たちの、まるで触覚的な無謀の出どこもわかったし、直感と情操とそして敬虔の欠除ということについても考えさせられた。

焦燥感と彼らなりの使命観に献身しようとする気持は理解されるが、残念ながら彼らは古典の教養が乏しく、マンガ的な革命の虚像に魅せられているように見える。

こんなとき、詩人は、もっとも対蹠的に、イントンの宇宙を持つべきではなかろうか。

この世ならぬ想いや嘆きを体験することなく、詩人が現代に存在する意義は無いと思う。それは、まことの存在とは何か、みずからと、そして他者に向つて問うことであろう。

私たちの詩を、いつ誰が読んでくれるのか考えてみると、まことに、はかなさを感ずる。でも、私たちの貧しい詩集が、むしろ古本屋で購われるという、滑稽な現象は、ひよっとしたら百年の後に、一人の知己がいるかも知れないという、ひそかな感動を、味わわせてくれぬでもない。これは決して皮肉で言うのではない。

「一期一会」ということは、今日では通俗化した趣きがある。この庶民的なことばにひそむ哀歓は、詩のこころにも通じている。詩の呪術とは、本来そのようなものである。

さて、「山の樹」（東京都）第三一号　村中測太郎追悼号である。四季派の詩人村中の「敗走記（抄）」は、敗惨の曠野に投げだされた詩人の小さくかなしい正義の像である。「杳い日の歌（抄）」の素直さもいい。

「天秤」（宝塚市）28　足立巻一の「やちまた」は、本居春庭の研究だが、詩人の仕事らしく随筆的な面白さがある。

「人間」（大阪府）四五号　小島信一の「アシュラ――ある光明皇后像」は、アシュラに重なる光明皇后のイメージが、秋の光と影のように綾を織っている。薄明の中に、永遠のアシュラの面ざしを書きとめている。

一対は世界の重みをささえ
一対は剣をかざし
一対は合掌

歴史とは。そして文化とは何か。と改めて考えさせられる。そんな詩である。

「地虫」（奈良県）一六八　この一葉の詩誌は、地虫のように勤勉だ。庶民的な日常を、飽かず衒わず書きつづける執念が、いつまでも素純な志操を忘れないよう願う。

「風祭」（東京都）第七号　岡崎澄衛の「菜花忌あとさき」は、伊東静雄をとりまく、上村肇そのほかの詩人の交歓が、なつかしく語られている。

宮地佐一郎の「跫音」「場所」は貴品のある詩である。直木賞候補作家宮地は、詩から出発したが、詩と離れていた日々を埋めるに十分なエスプリを持ち得たことをよろこぶ。

「地球」（浦和市）47　片岡文雄の「風」はいい。それが何であっても、人のこころを打つということは、近頃大そう困難な仕事であるが、モラリスト片岡の詩に年輪の加わったことを示す作品である。

牧野芳子の「たまきはる」は、原初的な実存をたずねて意外と新しさを感じさせる。素材の古さとかかわりなく、詩は言語の流れの中でたえず「更新」されるものであろうか。

小川和佑編「戦後詩年表」は労作だ。

「ＢＬＡＣＫＰＡＮ」（橿原市）49　香山雅代作品特集。コトバに余るものを持つか持たぬか。それは大切な問題である。この人は、そんなものに支えられて仕事をしようと

する人のように思われる。

「桃」（東京都）四月号

たたかひに身は挺しつつ神々の杳かなる
代にありし人かな

「古事記」と題する十三首の中の一つ。戦場に逝った人を思うほかに、もう何も無いような女性が、だんだん少なくなっていく時、この人は、このように貴品をもって訴えつづけている。

「日本談義」（熊本市）227　清水文雄の「かたくなにみやびたるひと」は、さる八月、熊本で行われた、蓮田善明二十五回忌に臨んでの感懐である。読みながら、つい息づかいが激し、目がにじむのを堪えた。「果樹園」に、父善明への「心の状況」の変化を述べた、長男晶一君の文章は、ここによい解説者を得た感がある。主情するものを持たないまま、ただはげしく無鉄砲に憂国する、現今の若者たちの未来に、勧告し予言する一つの生き方を考えさせられるような、雄心が読みとられる。

「鬼」（長浜市）五十四号　八人の詩の鬼たちが、十篇の詩を書いている。力量ある鬼たちの風貌からそれぞれ、詩の実験室とは無縁な、執念とかバイタリティーのようなものを感じさせる。

「知己」（東京都）第12号　比留間一成の「薩南紀行」は乾いた表現。特に、西郷南州終焉の地を読んだ「ばくちくの花」は、現代詩にめずらしいモチーフを取りあげて、しかも堂々と書きあげている。

「詩宴」（岐阜市）67　平光善久の「一パイサ硬貨」　ベンガルの平原に投げた「一瞬キラリと光った硬貨」の姿が印象的である。

「詩宴」68　今紀子の「恋」の清澄な空気のような詩情は、少女的な趣味に陥る危険を持ちながら、確かなものを感じさせる。

「詩宴」69　平光美津子の「くつとわらじのはなし」は民俗童話の世界である。表現にこなれがあればと思う。

殿岡辰雄の「作品ＵＶＷ」の「蚊帳」

蚊帳のなかへもぐることは
ぼくにとっては
日本の古典の螢になることだ

という章が面白い。

「歴程」（東京都）No.131　小野十三郎の「菊科の雑草」　風喩の才に富む詩人が、詩句の後尾にアクセントを置いた重いリズムで、現代を超脱した「もう一人」の自分を語るミュトスである。

「歴程」No.132　岡崎清一郎の「暮春」の村々の永遠。かなしみ。こんな詩を読むと、詩の年季ということを考えさせる。東洋の詩人というにふさわしい人である。

「かいえ」（大阪市）No.3　日岡悦子の「少年」は、ずいぶんと盛沢山なギリシャ風素材をぶちまけて、それで案外嫌味を感じさせない。

「ＶＩＫＩＮＧ」（芦屋市）223　杉本秀太郎の「新入生に与う」は、京都女子大学での講演速記であるが、面白さについ引きつけられて読了した。現代仏教の批評にもなっている。

「私たち日本人が自然を愛する国民であるということは、どうやら真赤なうそのようであります」ということは、現代の虚像をあばく痛い評言である。

「ＶＩＫＩＮＧ」225　富士正晴は「竹内勝太郎の詩」で、「平野をゆっくり歩き、山にとりつき、どこまでも高い山を登って行き、するどい絶頂でその姿が消えて行ったというのが、竹内勝太郎の詩であり、生涯であった」と言っているよい理解者のことばである。

「日本文芸学」第四号の抜刷　明珍昇が「詩誌『亜』の世界とその位置」で、安西冬衛の詩誌「亜」の運動は「詩と詩論」などのアヴァンギャルド運動の先駆であったと言っている。また「東洋思想の系譜を受けつぎな

蓮田善明とその死

小高根二郎

敗戦に臨んで神国日本の終焉を象徴したのは、「人間宣言」によって神国のきざはしを降り給うた今上天皇ではなく、逆にきざはしを昇って扉を閉ざして雲隠れた、影山庄平翁やわが蓮田善明であった。

内容

第一部
「豪僧の父・慈善」～「「万葉末期の人」としての家持論」に至る十七章

第二部
「応召と賜死の「大津皇子論」」～「生還の惑いと「方丈記」」に至る十五章

第三部
「道世の嘯いと阿蘇行」～「死・それから」に至る二十章

序・三島由紀夫
年譜・清水文雄

12月刊予定

東京都千代田区神田小川町二一八
振替東京四一二三
筑摩書房

がら、詩の純化を守ろうとした」と安西の業績を位置づけている。概観的だが真摯な研究である。

※

贈られた詩誌の数が多く、あと数誌を次号に残さなければならない。

混沌とした世界に、詩人の良心がうずくことは当然であろう。この文の始めに「イントン「という言葉を提示したが、決してこれは思いつきではない。亡命のソ連作家クズネツオフが、書簡の中で「才能と良心の命ずるまに、真実を書くこと云々」と述べたが、これを読んで私は、革命に参加し、革命を見ながら自殺した、エセーニンとマヤコフスキーを想った。

愛するひとよ　おまえは　わたしの　むねのなかに

と血書したエセーニンの死を、人がどのように弁護しようと、彼が疎外された真実のために死んだのだという事実を打ち消すことは出来まい。

詩人がポリティカルな革命に安住することは、とても出来ない相談である。明治維新に、野に下って酒色三昧に身をくずした詩人、山内容堂を思うのも興味があろう。西郷南洲は、また別の生き方を考えて、ついに自殺の道を選んだが。

編集後記

十月十二日。月初から東京、大阪間を往復するあわただしい日が続いたが、荷物が届いてやっと落ちついた。佐藤栄作私邸と隣組の近さなので、家の角には箱を持った警官が厳宵警固している。その上、警備車も配備されている異常さは、おそらく戦前戦中にもなかった風景だろう。こんな異常の日に、物騒な東京に、しかも記念すべき土地に居を定めた運命をかりそめならず思う。

二十一日。国際反戦デーだった由である。僕が毎日出勤する事務室は八重洲北口の真ん前のビルの八階なので、火炎ビンを投擲して騒じようした学生ゲリラの暴行をつぶさに観察できた。女子事務員は正午に帰宅させ、男子従業員は午後三時半に帰宅させざるをえなかった。

二十五日。篠つく雨の中、荻窪の普茶料理桃山で蓮田善明二十五回忌を記念する会が開かれた。折から滞阪中であつた敏子未亡人も駆けつけ、斎藤清衛先生、中河与一氏、多忙な中を三島由紀夫氏、それに浅野晃、田中克己、高藤武馬、林富士馬の各氏、成城での同僚であった栗山理一、池田勉、臼井毅諸氏、その他諏訪中学での教え子だった今井信雄、中川英夫、立川義明。原親夫諸氏。その上、死後有縁となった神谷忠孝、内海琢巳、山川京子氏、それに筑摩書房の東博氏らが参加して盛会であった。そもそも僕に東京転勤の内命がでたのは八月の熊木追悼会の夜であった。まさに善明の霊の導きといっていい。（O）

果樹園 第一六六号（毎月一回一日発行）
昭和四十四年十二月一日発行
大阪市東住吉区桑津町三の十八
印刷所　元市印刷株式会社
東京都世田谷区代沢二ノ一ノ十一
ユニチカ世田谷寮
（電話　四一四・六八一一八）
編集所　小高根二郎
池田市石橋二丁目六ノ五
発行所　果樹園社
定価　四〇円　送料　二〇円

果樹園　一六六号　昭和四十四年十二月一日発行　（毎月一回一日発行）　池田市石橋二丁目六ノ五　果樹園社発行　印刷所　元市印刷株式会社　定価四〇円　送料二〇円